即興詩人

IMPROVISATOREN

ハンス・クリスチアン・アンデルセン　Hans Christian Andersen

青空文庫

初版例言

一、即興詩人は※馬(デンマルク)の HANS《ハンス》CHRISTIAN《クリスチアン》ANDERSEN《アンデルセン》（1805—1875）の作にして、原本の初板は千八百三十四年に世に公にせられぬ。

二、此譯は明治二十五年九月十日稿を起し、三十四年一月十五日完成す。殆ど九星霜を經たり。然れども軍職の身に在るを以て、稿を屬するは、大抵夜間、若くは大祭日日曜日にして家に在り客に接せざる際に於いてす。予は既に、歳月の久しき、嗜好の屢※(しばしば)變じ、文致の晝一なり難きを憾み、又筆を擱(お)くことの頻にして、興に乘じて揮瀉すること能はざるを惜みたりき。世或は予其職を曠(むな)しくして、縦(ほしいまま)に述作に耽ると謂ふ。寃(えん)も亦甚しきかな。

三、文中加特力(カトリック)教の語多し。印刷成れる後、我國公教會の定譯あるを知りぬ。而れども遂に改刪(かいさん)すること能はず。

四、此書は印するに四號活字を以てせり。予の母の、年老い目力衰へて、毎(つね)に予の著作を讀むことを嗜(たしな)めるは、此書に字形の大なるを選みし所以の一なり。夫れ字形は大なり。然れども紙面殆ど餘白を留めず、段落猶且連續して書し、以て紙數をして太(はなは)だ加はらざらしむることを得たり。

明治三十五年七月七日下志津陣營に於いて

譯者識す

第十三版題言

是れ予が壯時の筆に成れる IMPROVISATOREN《イムプロヰザトオレン》の譯本なり。國語と漢文とを調和し、雅言と俚辭とを融合せむと欲せし、放膽にして無謀なる嘗試は、今新に其得失を論ずることを須(もち)ゐざるべし。初めこれを縮刷に付するに臨み、予は大いに字句を削正せむことを期せしに、會(たまく)※歐洲大戰の起るありて、我國も亦其旋渦中に投ずるに至りぬ。羽檄旁午(うげきぼうご)の間、予は僅に假刷紙を一閲することを得しのみ。

大正三年八月三十一日觀潮樓に於いて

譯者又識す

わが最初の境界

羅馬(ロオマ)に往きしことある人はピアツツア、バルベリイニを知りたるべし。こは貝殻持てるトリイトンの神の像に造り做(な)したる、美しき噴井(ふんせい)ある、大なる廣こうぢの名なり。貝殻よりは水湧き出でゝその高さ數尺に及べり。羅馬に往きしことなき人もかの廣こうぢのさまをば銅板畫にて見つることあらむ。かゝる畫には丗ア、フエリチエの角なる家の見えぬこそ恨なれ。わがいふ家の石垣よりのぞきたる三條の樋(ひ)の口は水を吐きて石盤に入らしむ。この家はわがためには尋常(よのつね)ならぬおもしろ味あり。そをいかにといふにわれはこの家にて生れぬ。首(かうべ)を回(めぐら)してわが穉(をさな)かりける程の事をおもへば、目もくるめくばかりいろ〳〵なる記念の多きことよ。我はいづこより語り始めむかと心迷ひて爲(せ)むすべを知らず。又我世の傳奇(ドラマ)の全局を見わたせば、われはいよ〳〵これを寫す手段に苦(くるし)めり。いかなる事をか緊要

ならずとして棄て置くべき。いかなる事をか全畫圖をおもひ浮べしめむために殊更に數へ擧ぐべき。わがためには面白きことも外人のためには何の興もなきものあらむ。われは我世のおほいなる穉物語をありのまゝに僞り飾ることなくして語らむとす。されどわれは人の意を迎へて自ら喜ぶ性のこゝにもまぎれ入らむことを恐る。この性は早くもわが穉き時に、畠の中なる雜草の如く萌え出でゝ、やうやく聖經に見えたる芥子の如く高く空に向ひて長じ、つひには一株の大木となりて、そが枝の間にわが七情は巢食ひたり。わが最初の記念の一つは既にその芽生を見せたり。おもふにわれは最早六つになりし時の事ならむ。われはおのれより穉き子供二三人と向ひなる尖帽僧の寺の前にて遊びき。寺の扉には小き眞鍮の十字架を打ち付けたりき。その處はおほよそ扉の中程にてわれは僅に手をさし伸べてこれに達することを得き。母上は我を伴ひてかの扉の前を過ぐるごとに、必ずわれを掻き抱きてかの十字架に接吻せしめ給ひき。あるときわれ又子供と遊びたりしに、甚だ穉き一人がいふやう。いかなれば耶蘇の穉子は一たびもこの群に來て、われ等と共に遊ばざるといひき。われさかしく答ふるやう。むべなり、耶蘇の穉子は十字架にかゝりたればといひき。さてわれ等は十字架の下にゆきぬ。かしこには何物も見えざりしかど、われ等は猶母に教へられし如く耶蘇に接吻せむとおもひき。さるを我等が口はかしこに屆くべきならねば、我等はかはる〳〵抱き上げて接吻せしめき。一人の子のさし上げられて僅に唇を尖らせたるを、抱いたる子力足らねば落しつ。この時母上通りかゝり給へり。この遊のさまを見て立ち住まり、指組みあはせて宣ふやう。汝等はまことの天使なり。さて汝はといひさして、母上はわれに接吻し給ひ、汝はわが天使なりといひ給ひき。

母上は隣家の女子の前にて、わがいかに罪なき子なるかを繰り返して語り給ひぬ。われはこれを聞きしが、この物語はいたくわが心に協ひたり。わが罪なきことは固よりこれがために前には及ばずなりぬ。人の意を迎へて自ら喜ぶ性の種は、この時始めて日光を吸ひ込みたりしなり。造化は我におとなしく軟なる心を授けたりき。さるを母上はつねに我がこゝろのおとなしきを我に告げ、わがまことに持てる長處と母上のわが持てりと思ひ給へる長處とを我にさし示して、小兒の罪なさはかの醜き「バジリスコ」の獸におなじきをおもひ給はざりき。かれもこれもおのが姿を見るときは死なでかなはぬ者なるを。

彼尖帽宗の寺の僧にフラア・マルチノといへるあり。こは母上の懺悔を聞く人なりき。かの僧に母上はわがおとなしさを告げ給ひき。祈のこゝろをばわれ知らざりしかど、祈の詞をばわれ善く諳じて洩らすことなかりき。僧は我をかはゆきものにおもひて、あるとき我に一枚の圖をおくりしことあり。圖の中なる聖母のこぼし給ふおほいなる涙の露は地獄の※の上におちかかれり。亡者は爭ひてかの露の滴りおつるを承けむとせり。僧は又一たびわれを伴ひてその僧舍にかへりぬ。當時わが目にとまりしは、方なる形に作りたる圓柱の廊なりき。廊に圍まれたるは小き馬鈴薯圃にて、そこにはいとすぎ（チプレツソオ）の木二株、檸檬の木一株立てりき。開け放ちたる廊には世を逝りし僧どもの像をならべ懸けたり。部屋といふ部屋の戸には獻身者の傳記より撰び出したる畫圖を貼り付けたり。當時わがこの圖を觀し心は、後になりてラフアエロ、アンドレア・デル・サルトオが作を觀る心におなじかりき。

僧はそちは心猛き童なり、いで死人を見せむといひて、小き戸を開きつ。こゝは廊より二三級低きところなりき。われは延かれて級を降りて見しに、こゝも小き廊にて、四圍悉く髑髏なりき。髑髏は髑髏と接して壁を成し、壁はその並びざまにて許多の小龕に分れたり。おほいなる龕には頭のみならで、胴をも手足をも具へたる骨あり。こは高位の僧のみまかりたるなり。かゝる骨には褐色の尖帽を被せて、腹に繩を結び、手には一卷の經文若くは枯れたる花束を持たせたり。贅卓、花形の燭臺、そのほかの飾をば肩胛、脊椎などにて細工したり。人骨の浮彫あり。これのみならず忌まはしくも、又趣なきはこゝの拵へざまの全體なるべし。僧は祈の詞を唱へつゝ行くに、われはひたと寄り添ひて從へり。僧は唱へ畢りていふやう。われも早晩こゝに眠らむ。その時汝はわれを見舞ふべきかといふ。われは一語をも出すこと能はずして、僧と僧のめぐりなる氣味わるきものとを驚き※たり。まことに我が如き穉子をかゝるところに伴ひ入りしは、いとおろかなる業なりき。われはかしこにて見しものに心を動かさるゝこと甚しかりければ、歸りて僧の小房に入りしとき纔に生き返りたるやうなりき。この小房の窓には黄金色なる柑子のいと美しきありて、殆ど一間の中に垂れむとす。又聖母の畫あり。その姿は天使に擔ひ上げられて日光明なるところに浮び出でたり。下には聖母の息ひたまひし墓穴ありて、もゝいろちいろの花これを掩ひたり。われはかの柑子を見、この畫を見るに及びて、わづかに我にかへりしなり。

この始めて僧房をたづねし時の事は、久しき間わが空想に好き材料を與へき。今もかの時の事をおもへば、めづらしくあざやかに目の前に浮び出でむとす。わが當時の心にては、僧といふ者は全く我等の知りたる常の人とは殊なるやうなりき。かの僧が褐色の衣を着たる死人の殆どおのれとおなじさまなると共に棲めること、かの僧があまたの尊き人の上を語り、あまたの不思議の蹟を話すこと、かの僧の尊さをば我母のいたく敬ひ給ふことなどを思ひ合する程に、われも人と生れたる甲斐にかゝる人にならばやと折々おもふことありき。

母上は未亡人なりき。活計を立つるには、鍼仕事して得給ふ錢と、むかし我等が住みたりしおほいなる部屋を人に借して得給ふ價とあるのみなりき。われ等は屋根裏の小部屋に住めり。かのおほいなる部屋に引き移りたるはフエデリゴといふ年少き畫工なりき。フエデリゴは心敏く世をおもしろく暮らす少年なりき。かれはいともく遠きところより來ぬといふ。母上の物語り給ふを聞けば、かれが故郷にては聖母をも耶蘇の穉子をも知らずとぞ。その國の名をば※デンマルク馬といへり。當時われは世の中にいろ〳〵の國語ありといふことを解せねば、畫工が我が言ふことを曉らぬを耳とほきがためならむとおもひ、おなじ詞を繰り返して聲の限り高くいふに、かれはわれを可笑しきものにおもひて、をり〳〵果をわれに取らせ、又わがために兵卒、馬、家などの形を烏がきあたへしことあり。われと畫工とは幾時も立たぬに中善くなりぬ。われは畫工を愛しき。母上もをり〳〵かれは善き人なりと宣ひき。さるほどにわれはとある夕母上とフラア・マルチノとの話を聞きしが、これを聞きてよりわがかの技藝家の少年の上をおもふ心あやしく動かされぬ。かの異國人は地獄に墜ちて永く浮ぶ瀬あらざるべきかと母上問ひ給ひぬ。そはひとりかの男の上のみにはあらじ。異國人のうちにはかの男の如く惡しき事をば一たびもせざるもの多し。かの輩は貧き人に逢ふときは物

取らせて吝むことなし。かの輩は債あるときは期を愆たず額をたがへずして拂ふなり。然のみならず、かの輩は吾邦人のうちなる多人數の作る如き罪をば作らざるやうにおもはる。母上の問はおほよそ此の如くなりき。

フラア・マルチノの答へけるやう。さなり。まことにいはるゝ如き事あり。かの輩のうちには善き人少からず。されどおん身は何故に然るかを知り給ふか。見給へ。世中をめぐりありく惡魔は、邪宗の人の所詮おのが手に落つべきを知りたるゆゑ、強ひてこれを誘はむとすることなし。このゆゑに彼輩は何の苦もなく善行をなし、罪惡をのがる。善き加特力教徒はこれと殊にて神の愛子なり、これを陷れむには惡魔はさま／〃＼の手立を用ゐざること能はず。惡魔はわれ等を誘ふなり。われ等は弱きものなればその手の中に落つること多し。されど邪宗の人は肉體にも惡魔にも誘はるゝことなしと答へき。

母上はこれを聞きて復た言ふべきこともあらねば、便なき少年の上をおもひて大息つき給ひぬ。かたへ聞せしわれは泣き出しつ。こはかの人の永く地獄にありて　に苦められむつらさをおもひければなり。かの人は善き人なるに、わがために美しき畫をかく人なるに。

わが穉きころ、わがためにおほいなる意味ありと覺え第三の人はペツポのをぢなりき。惡人ペツポといふも西班牙磴の王といふも皆その人の綽號なりき。此王は日ごとに西班牙磴の上に出御ましましき。（西班牙廣こうぢよりモンテ、ピンチヨオの上なる街に登るには高く廣き石級あり。この石級は羅馬の乞兒の集まるところなり。西班牙廣こうぢより登るところなればかく名づけられしなり。）ペツポのをぢは生れつき兩の足痿えたる人なり。當時そを十字に組みて折り敷き居たり。されど穉きときよりの熟錬にて、をぢは兩手もて歩くことゝいと巧なり。其手には革紐を結びて、これに板を掛けたるが、をぢがこの道具にて歩む速さは健かなる脚もて行く人に劣らず。をぢは日ごとに上にもいへるが如く西班牙磴の上に坐したり。さりとて外の乞兒の如く憐を乞ふにもあらず。唯だおのが前を過ぐる人あるごとに、詐ありげに面をしかめて「ボン、ジヨオルノオ」（我俗の今日はといふ如し）と呼べり。日は既に入りたる後もその呼ぶ詞はかはらざりき。母上はこのをぢを敬ひ給ふことさまでならざりき。あらず。親族にかゝる人あるをば心のうちに恥ぢ給へり。されど母上はしば〳〵我に向ひて、そなたのためならば、彼につきあひおくとのたまひき。餘所の人の此世にありて求むるものをば、かの人筐の底に藏めて持ちたり。若し臨終に、寺に納めだにせずば、そを譲り受くべき人、わが外にはあらぬを、母上は恃みたまひき。をぢも我に親むやうなるところありしが、我は其側にあるごとに、まことに喜ばしくおもふこと絶てなかりき。或る時、我はをぢの振舞を見て、心に怖を懷きはじめき。こは、をぢの本性をも見るに足りぬべき事なりき。例の石級の下に老いたる盲の乞兒ありて、往きかふ人の「バヨツコ」（我二錢許に當る銅貨）一つ投げ入れむを願ひて、薄葉鐵の小筒をさら〳〵と鳴らし居たり。我がをぢは、面にやさしげなる色を見せて、帽を揮り動しなどすれど、人々その前をばいたづらに過ぎゆきて、かの盲人の何の會釋もせざるに、錢を與へき。三人かく過ぐるまでは、をぢ傍より見居たりしが、四人めの客かの盲人に小貨幣二つ三つ與へしとき、をぢは毒蛇の身をひねりて行く如く、石級を下りて、盲の乞兒の面を打ちしに、盲の乞兒は錢をも杖をも取りおとしつ。ペツポの叫びけるやう。うぬは盜人な

り。我錢を竊む奴なり。立派に廢人といはるべき身にもあらで、たゞ目の見えぬを手柄顔に、わが口に入らむとする「パン」を奪ふこそ心得られねといひき。われはこゝまでは聞きつれど、こゝまでは見てありつれど、この時買ひに出でたる、一「フオリエツタ」（一匁）の酒をひさげて、急ぎて家にかへりぬ。

大祭日には、母につきてをぢがり祝にゆきぬ。その折には萄苴もてゆくことなるが、そはをぢが嗜めるおほ房の葡萄二つ三つか、さらずば砂糖につけたる林檎なんどなりき。われはをぢ御と呼びかけて、その手に接吻しき。をぢはあやしげに笑ひて、われに半「バヨツコ」を與へ、果子をな買ひそ、果子は食ひ畢りたるとき、迹かたもなくなるものなれど、この錢はいつまでも貯へらるゝものぞと教へき。

をぢが住めるところは、暗くして見苦しかりき。一間には窓といふものなく、また一間には壁の上の端に、破硝子を紙もて補ひたる小窓ありき。臥床の用をもなしたる大箱と、衣を藏むる小桶二つとの外には、家具といふものなし。をぢがり往け、といはるゝときは、われ必ず泣きぬ。これも無理ならず。母上はをぢにやさしくせよ、と我にをしへながら、我を嚇さむとおもふときは、必ずをぢを案山子に使ひ給ひき。母上の宣たまひけるやう。かく惡劇せば、好きをぢ御の許にやるべし。さらば汝も磴の上に坐して、をぢと共に袖乞するならむ、歌をうたひて「バヨツコ」をめぐまるゝを待つならむとのたまふ。われはこの詞を聞きても、あながち恐るゝことなかりき。母上は我をいつくしみ給ふこと、目の球にも優れるを知りたれば。

向ひの家の壁には、小龕をしつらひて、それに聖母の像を据ゑ、その前にはいつも燈を燃やしたり。「アヱ、マリア」の鐘鳴るころ、われは近隣の子供と像の前に跪きて歌ひき。燈の光ゆらめくときは、聖母も、いろ〳〵の紐、珠、銀色したる心の臟などにて飾りたる耶蘇のをさな子も、共に動きて、我等が面を見て笑み給ふ如くなりき。われは高く朗なる聲して歌ひしに、人々聞きて善き聲なりといひき。或る時英吉利人の一家族、我歌を聞きて立ちとまり、歌ひ畢るを待ちて、長らしき人われに銀貨一つ與へき。母に語りしに、そなたが聲のめでたさ故、とのたまひき。されどこの詞は、その後我祈を妨ぐること、いかばかりなりしを知らず。それよりは、聖母の前にて歌ふごとに、聖母の上をのみ思ふこと能はずして、必ず我聲の美しきを聞く人やあると思ひ、かく思ひつゝも、聖母のわがあだし心を懷けるを嫉み給はむかとあやぶみ、聖母に向ひて罪を謝し、あはれなる子に慈悲の眸を垂れ給へと願ひき。

わが餘所の子供に出で逢ふは、この夕の祈の時のみなりき。わが世は靜けかりき。わが自ら作りたる夢の世に心を潛め、仰ぎ臥して開きたる窓に向ひ、伊太利の美しき青空を眺め、日の西に傾くとき、紫の光ある雲の黄金色したる地の上に垂れかゝりたるをめで、時の遷るを知らざることしば〳〵なりき。ある時は、遠くクヰリナアル（丘の名にて、其上に法皇の宮居あり）と家々の棟とを越えて、紅に染まりたる地平線のわたりに、眞黒に浮き出でゝ見ゆる「ピニヨロ」の木々の方へ、飛び行かばや、と願ひき。我部屋には、この眺ある窓の外、中庭に向へる窓ありき。我家の中庭は、隣の家の中庭に並びて、いづれもいと狹く、上の方は木の「アルタナ」（物見のやうにしたる屋根）にて鎖されたり。庭ごとに石にて甃みたる井ありしが、家々の壁と井との間をば、人ひとり僅かに通らるゝほどな

れば、我は上より覗きて、二つの井の内を見るのみなりき。緑なるほうらいしだ（アヂアンツム）生ひ茂りて、深きところは唯だ黒くのみぞ見えたる。俯してこれを見るたびに、われは地の底を見おろすやうに覺えて、ここにも怪しき境ありとおもひき。かゝるとき、母上は杖の尖にて窓硝子を淨め、なんぢ井に墜ちて溺れだにせずば、この窓に當りたる木々の枝には、汝が食ふべき果おほく熟すべしとのたまひき。

隧道、ちご

我家に宿りたる畫工は、廓外に出づるをり、我を伴ひゆくことありき。畫を作る間は、われかれを妨ぐることなかりき。さて作り畢りたるとき、われ穉き物語して慰むるに、かれも今はわが國の詞を解して、面白がりたり。われは既に一たび畫工に隨ひて、「クリア、ホスチリア」にゆき、昔游戲の日まで猛獸を押し込めおきて、つねに無辜の俘囚を獅子、「イエナ」獸なんどの餌としたりと聞く、かの暗き洞の深き處まで入りしことあり。洞の裡なる暗き道に、我等を導きてくゞり入り、燃ゆる松火を、絶えず石壁に振り當てたる僧、深き池の水の、鏡の如く明にて、目の前には何もなきやうなれば、その足もとまで湛へ寄せたるを知らむには、松火もて觸れ探らではかなはざるほどなる、いづれもわが空想を激したりき。われは怖をば懷かざりき。そは危しといふことを知らねばなりけり。

街のはつる處に、「コリゼエオ」（大觀棚）の頂見えたるとき、われ等はかの洞の方へゆくにや、と畫工に問ひしに、否、あれよりは※に大なる洞にゆきて、面白きものを見せ、そなたをも景色と俱に寫すべし、と答へき。葡萄圃の間を過ぎ、古の混堂の址を圍みたる白き石垣に沿ひて、ひたすら進みゆく程に羅馬の府の外に出でぬ。日はいと烈しかりき。緑の枝を手折りて、車の上に挿し、農夫はその下に眠りたるに、馬は車の片側に弔り下げたる一束の秣を食ひつゝ、ひとり徐に歩みゆけり。やう〳〵女神エジエリアの洞にたどり着きて、われ等は朝餐を食べ、岩間より湧き出づる泉の水に、葡萄酒混ぜて飲みき。洞の裏には、天井にも四方の壁にも、すべて絹、天鵝絨なんどにて張りたらむやうに、緑こまやかなる苔生ひたり。露けく茂りたる蔦の、おほいなる洞門にかゝりたるさまは、カラブリア州の谿間なる葡萄架を見る心地す。洞の前數歩には、その頃いと寂しき一軒の家ありて、「カタコンバ」のうちの一つに造りかけたりき。この家今は潰えて斷礎をのみぞ留めたる。「カタコンバ」は人も知りたる如く、羅馬城とこれに接したる村々とを通ずる隧道なりしが、半はおのづから壞れ、半は盜人、ぬけうりする人なんどの隱家となるを厭ひて、石もて塞がれたるなり。當時猶存じたるは、聖セバスチヤノ寺の内なる穹窿の墓穴よりの入口と、わが言へる一軒家よりの入口とのみなりき。さてわれ等はかの一軒家のうちなる入口より進み入りしが、おもふに最後に此道を通りたるはわれ等二人なりしなるべし。いかにといふに此入口はわれ等が危き目に逢ひたる後、いまだ幾もあらぬに塞がれて、後には寺の内なる入口のみ殘りぬ。かしこには今も僧一人居りて、旅人を導きて穴に入らしむ。

深きところには、軟なる土に掘りこみたる道の行き違ひたるあり。その枝の多き、その様の相似たる、おもなる筋を知りたる人も踏み迷ふべきほどなり。われは穉心に何ともおもはず。畫工はまた豫め其心して、我を伴ひ入りぬ。先づ蝋燭一つ點し、一をば猶衣のか

くしの中に貯へおき、一巻の絲の端を入口に結びつけ、さて我手を引きて進み入りぬ。忽ち天井低くなりて、われのみ立ちて歩まるゝところあり、忽ち又岐路の出づるところ廣がりて方形をなし、見上ぐるばかりなる穹窿をなしたるあり。われ等は中央に小き石卓を据ゑたる圓堂を過りぬ。こゝは始て基督教に歸依したる人々の、異教の民に逐はるゝごとに、ひそかに集りて神に仕へまつりしところなりとぞ。フエデリゴはこゝにて、この壁中に葬られたる法皇十四人、その外數千の獻身者の事を物語りぬ。われ等は石龕のわれ目に燭火さしつけて、中なる白骨を見き。（こゝの墓には何の飾もなし。拿破里に近き聖ヤヌアリウスの「カタコンバ」には聖像をも文字をも彫りつけたるあれど、これも技術上の價あるにあらず。基督教徒の墓には、魚を彫りたり。希臘文の魚といふ字は「イヒトユス」なれば、暗に「イエソウス、クリストス、テオウ　ウイオス、ソオテエル」の文の首字を集めて語をなしたるなり。此希臘文はこゝに耶蘇基督神子救世者と云ふ。）われ等はこれより入ること二三歩にして立ち留りぬ。ほぐし來たる絲はこゝにて盡きたればなり。畫工は絲の端を控鈕の孔に結びて、蝋燭を拾ひ集めたる小石の間に立て、さてそこに蹲りて、隧道の摸様を寫し始めき。われは傍なる石に踞けて合掌し、上の方を仰ぎ視ゐたり。燭は半ば流れたり。されどさきに貯へおきたる新なる蝋燭をば、今取り出してその側におきたる上、火打道具さへ帶びたれば、消えなむ折に火を點すべき用意ありしなり。

われはおそろしき暗黒天地に通ずる幾條の道を望みて、心の中にさま〳〵〵の奇怪なる事をおもひ居たり。この時われ等が周圍には寂として何の聲も聞えず、唯だ忽ち斷え忽ち續く、物寂しき岩間の雫の音を聞くのみなりき。われはかく由なき妄想を懷きてしばしあたりを忘れ居たるに、ふと心づきて畫工の方を見やれば、あな訝し、畫工は大息つきて一つところを馳せめぐりたり。その間かれは頻に俯して、地上のものを捜し索むる如し。かれは又火を新なる蝋燭に點じて再びあたりをたづねたり。その氣色ただならず覺えければ、われも立ちあがりて泣き出しつ。

この時畫工は聲を勵まして、こは何事ぞ、善き子なれば、そこに坐りゐよ、と云ひしが、又眉を顰めて地を見たり。われは畫工の手に取りすがりて、最早登りゆくべし、こゝには居りたくなし、とむつかりたり。畫工は、そちは善き子なり、畫かきてや遣らむ、果子をや與へむ、こゝに錢もあり、といひつゝ、衣のかくしを探して、財布を取り出し、中なる錢をば、ことごとく我に與へき。我はこれを受くるとき、畫工の手の氷の如く冷になりて、いたく震ひたるに心づきぬ。我はいよ〳〵騷ぎ出し、母を呼びてます〳〵泣きぬ。畫工はこの時我肩を掴みて、劇しくゆすり搖かし、靜にせずば打擲せむ、といひしが、急に手巾を引き出して、我腕を縛りて、しかと其端を取り、さて俯してあまたゝび我に接吻し、かはゆき子なり、そちも聖母に願へ、といひき。絲をや失ひ給ひし、と我は叫びぬ。今こそ見出さめ、といひ〳〵、畫工は又地上をかいさぐりぬ。

さる程に、地上なりし蝋燭は流れ畢りぬ。手に持ちたる蝋燭も、かなたこなたを捜し索むる忙しさに、流るゝことい よ〳〵早く、今は手の際まで燃え來りぬ。畫工の周章は大方ならざりき。そも無理ならず。若し絲なくして歩を運ばば、われ等は次第に深きところに入りて、遂に活路なきに至らむも計られざればなり。畫工は再び氣を勵まして探りしが、こたびも絲を得ざりしかば、力拔けて地上に

坐し、我頸を抱きて大息つき、あはれなる子よ、とつぶやきぬ。われはこの詞を聞きて、最早家に還られざることぞ、とおもひければ、いたく泣きぬ。畫工にあまりに緊しく抱き寄せられて、我が縛られたる手はいざり落ちて地に達したり。我は覺えず埃の間に指さし入れしに、例の絲を撮み得たり。こゝにこそ、と我呼びしに、畫工は我手を※りて、物狂ほしきまでよろこびぬ。あはれ、われ等二人の命はこの絲にぞ繫ぎ留められける。

われ等の再び外に歩み出でたるときは、日の暖に照りたる、天の蒼く晴れたる、木々の梢のうるはしく緑なる、皆常にも増してよろこばしかりき。フエデリゴは又我に接吻して、衣のかくしより美しき銀の※を取り出し、これをば汝に取らせむ、といひて與へき。われはあまりの嬉しさに、けふの恐ろしかりし事共、はや悉く忘れ果てたり。されど此事を得忘れ給はざるは、始終の事を聞き給ひし母上なりき。フエデリゴはこれより後、我を伴ひて出づることを許されざりき。フラア・マルチノもいふやう。かの時二人の命の助かりしは、全く聖母のおほん惠にて、邪宗のフエデリゴが手には授け給はざる絲を、善く神に仕ふる、やさしき子の手には與へ給ひしなり。されば聖母の恩をば、身を終ふるまで、ゆめ忘るゝこと勿れといひき。

フラア・マルチノがこの詞と、或る知人の戯に、アントニオはあやしき子なるかな、うみの母をば愛するやうなれど、外の女をばことごとく嫌ふと見ゆれば、あれをば、人となりて後僧にこそすべきなれ、といひしことあるとによりて、母上はわれに出家せしめむとおもひ給ひき。まことに我は奈何なる故とも知らねど、女といふ女は側に來らるゝだに厭はしう覺えき。母上のところに來る婦人は、人の妻ともいはず、處女ともいはず、我が稚き詞にて、このあやしき好憎の心を語るを聞きて、いとおもしろき事におもひ做し、強ひて我に接吻せむとしたり。就中マリウチアといふ娘は、この戯にて我を泣かすること屡なりき。マリウチアは活潑なる少女なりき。農家の子なれど、裁縫店にて雛形娘をつとむるゆゑ、華麪やかなる色の衣をよそひて、幅廣き白き麻布もて髪を卷けり。この少女フエデリゴが畫の雛形をもつとめ、又母上のところにも遊びに來て、その度ごとに自らわがいひなづけの妻なりといひ、我を小き夫なりといひて、迫りて接吻せむとしたり。われ諾はねば、この少女しばゝ武を用ゐき。或る日われまた脅されて泣き出しゝに、さては猶稺兒なりけり、乳房喞ませずては、啼き止むまじ、とて我を掻き抱かむとす。われ慌てゝ逃ぐるを、少女はすかさず追ひすがりて、兩膝にて我身をしかと挟み、いやがりて振り向かむとする頭を、やう〳〵胸の方へ引き寄せたり。われは少女が挿したる銀の矢を抜きたるに、豐なる髪は波打ちて、我身をも、露れたる少女が肩をも掩はむとす。母上は室の隅に立ちて、笑みつゝマリウチアがなすわざを勸め勵まし給へり。この時フエデリゴは戸の片蔭にかくれて、竊に此群を忿がきぬ。われは母上にいふやう。われは生涯妻といふものをば持たざるべし。われはフラア・マルチノの君のやうなる僧とこそならめといひき。

夕ごとにわが怪しく何の詞もなく坐したるを、母上は出家せしむるにたよりよき性なりとおもひ給ひき。われはかゝる時、いつも人となりたる後、金あまた得たらむには、いかなる寺、いかなる城をか建つべき、寺の主、城の主となりなん日には、「カルヂナアレ」の僧の如く、赤き衷甸に乘りて、金色に裝ひたる僕あまた隨へ、そ

こより出入せんとおもひき。或るときは又フラア・マルチノに聞きたる、種々なる獻身者の話によそへて、おのれ獻身者とならむをりの事をおもひ、世の人いかにおのれを責むとも、おのれは聖母のめぐみにて、つゆばかりも苦痛を覺えざるべしとおもひき。殊に願はしく覺えしは、フエデリゴが故郷にたづねゆきて、かしこなる邪宗の人々をまことの道に歸依せしむる事なりき。

母上のいかにフラア・マルチノと謀り給ひて、その日とはなりけむ。そはわれ知らでありしに、或る朝母上は、我に小き衣を着せ、其上に白衣を打掛け給ひぬ。此白衣は膝のあたりまで屆きて、寺に仕ふる兒の着るものに同じかりき。母上はかく爲立てゝ、我を鏡に向はせ給ひき。我は此日より尖帽宗の寺にゆきてちごとなり、火伴の童達と共に、おほいなる弔香爐を提げて儀にあづかり、また贊卓の前に出でゝ讃美歌をうたひき。總ての指圖をばフラア・マルチノなしつ。われは幾程もあらぬに、小き寺のうちに住み馴れて、贊卓に畫きたる神の使の童の顔を悉く記え、柱の上なるうねりたる摸樣を識り、瞑目したるときも、醜き龍と戰ひたる、美しき聖ミケルを面前に見ることを得るやうになり、鋪床に刻みたる髑髏の、緑なる蔦かづらにて編みたる環を戴けるを見てはさま〳〵＼の怪しき思をなしき。（聖ミケルが大なる翼ある美少年の姿にて、惡鬼の頭を踏みつけ、鎗をその上に加へたるは、名高き畫なり。）

美小鬟、即興詩人

萬聖祭には衆人と俱に骨龕にありき。こはフラア・マルチノの嘗て我を伴ひて入りにしところなり。僧どもは皆經を誦するに、我は火伴の童二人と共に、髑髏の贊卓の前に立ちて、提香爐を振り動したり。骨もて作りたる燭臺に、けふは火を點したり。僧侶の遺骨の手足全きは、けふ額に新しき花の環を戴きて、手に露けき花の一束を取りたり。この祭にも、いつもの如く、人あまた集ひ來ぬ。歌ふ僧の「ミゼレエレ」（「ミゼレエレ、メイ、ドミネ」、主よ、我を愍み給へ、と唱へ出す加特力教の歌をいふ）唱へはじむるとき、人々は膝を屈めて拜したり。髑髏の色白みたる、髑髏と我との間に渦卷ける香の烟の怪しげなる形に見ゆるなどを、我は久しく打ち目守り居たりしに、こはいかに、我身の周圍の物、皆獨樂の如くに り出しつ。物を見るに、すべて大なる虹を隔てゝ望むが如し。耳には寺の鐘百ばかりも、一時に鳴るらむやうなる音聞ゆ。我心は早き流を舟にて下る如くにて、譬へむやうなく目出たかりき。これより後の事は知らず。我は氣を喪ひき。人あまた集ひて、鬱陶しくなりたるに、我空想の燃え上りたるや、この眩暈のもとなりけむ。醒めたるときは、寺の園なる檸檬の木の下にて、フラア・マルチノが膝に抱かれ居たり。

わが夢の裡に見きといふ、首尾整はざる事を、フラア・マルチノを始として、僧ども皆神の業なりといひき。聖のみたまは面前を飛び過ぎ給ひしかど、はるかなき童のそのひかり耀けるさまにえ堪へで、卒倒したるならむといひき。これより後、われは怪しき夢をみること頻なりき。そを母上に語れば、母上は又友なる女どもに傳へ給ひき。そが中には、われまことにさる夢を見しにはあらねど、見きと詐りて語りしもありき。これによりて、我を神のおん子なりとする、人々の惑は、日にけに深くなりまさりぬ。

さる程に嬉しき聖誕祭は近づきぬ。つねは山住ひする牧者の笛ふ

き（ピツフエラリ）となりたるが、短き外套着て、紐あまた下げ、尖りたる帽を戴き、聖母の像ある家ごとに音信れ來て、救世主の誕れ給ひしは今ぞ、と笛の音に知らせありきぬ。この單調にして悲しげなる聲を聞きて、我は朝な〳〵覺むるが常となりぬ。覺むれば説教の稽古す。おほよそ聖誕日と新年との間には、「サンタ、マリア、アラチエリ」の寺なる基督の像のみまへにて、童男童女の説教あること、年ごとの例なるが、我はことし其一人に當りたるなり。

吾齡は甫めて九つなるに、かしこにて説教せむこと、いとめでたき事なりとて、歡びあふは、母上、マリウチア、我の三人のみかは。わがありあふ卓の上に登りて、一たびさらへ聞かせたるを聞きし、畫工フエデリゴもこよなうめでたがりぬ。さて其日になりければ、寺のうちなる卓の上に押しあげられぬ。我家のとは違ひて、この卓には毯を被ひたり。われはよその子供の如く、諳じたるまゝの説教をなしき。聖母の心より血汐出でたる、穉き基督のめでたさなど、説教のたねなりき。我順番になりて、衆人に仰ぎ見られしとき、我胸跳りしは、恐ろしさゆゑにはあらで、喜ばしさのためなりき。これ迄の小兒の中にて、尤も人々の氣に入りしもの、即ち我なること疑なかりき。さるをわが後に、卓の上に立たせられたるは、小き女の子なるが、その言ふべからず優しき姿、驚くべきまでしほらしき顔つき、調清き樂に似たる聲音に、人々これぞ神のみつかひなるべき、とさゝやきぬ。母上は、我子に優る子はあらじ、といはまほしう思ひ給ひけむが、これさへ聲高く、あの女の子の贊卓に畫ける神のみつかひに似たることよ、とのたまひき。母上は我に向ひて、かの女子の怪しく濃き目の色、鴉青いろの髮、をさなくて又怜悧げなる顔、美しき紅葉のやうなる手などを、繰りかへして譽め給ふに、わが心には妬ましきやうなる情起りぬ。母上は我上をも神のみつかひに譬へ給ひしかども。

鶯の歌あり。まだ巢ごもり居て、薔薇の枝の緑の葉を啄めども、今生ぜむとする蕾をば見ざりき。二月三月の後、薔薇の花は開きぬ。今は鶯これにのみ鳴きて聞かせ、つひには刺の間に飛び入りて、血を流して死にき。われ人となりて後、しば〳〵此歌の事をおもひき。されど「アラチエリ」の寺にては、我耳も未だこれを聞かず、我心も未だこれを會せざりき。

母上、マリウチア、その外女どもあまたの前にて、寺にてせし説教をくりかへすこと、しば〳〵ありき。わが自ら喜ぶ心はこれにて慰められき。されど我が未だ語り厭かぬ間に、かれ等は早く聽き倦みき。われは聽衆を失はじの心より、自ら新しき説教一段を作りき。その詞は、まことの聖誕日の説教といはむよりは、寺の祭を敍したるものといふべき詞なりき。そを最初に聞きしはフエデリゴなるが、かれは打ち笑ひ乍らも、そちが説教は、兎も角もフラア・マルチノが教へしよりは善し、そちが身には詩人や舍れる、といひき。フラア・マルチノより善しといへる詞は、わがためにいと喜ばしく、さて詩人とはいかなるものならむとおもひ煩ひ、おそらくは我身の内に舍れる善き神のみつかひならむと判じ、又夢のうちに我に面白きものを見するものにやと疑ひぬ。

母上は家を離れて遠く出で給ふこと稀なりき。されば或日の晝すぎ、トラステエエル（テエエル河の右岸なる羅馬の市區）なる友だちを訪はむ、とのたまひしは、我がためには祭に往くごとくなりき。日曜に着る衣をきよそひぬ。中單の代にその頃着る習なりし絹の胸當をば、針にて上衣の下に縫ひ留めき。領巾をば幅廣き襞に摺みた

り。頭には縫とりしたる帽を戴きつ。我姿はいとやさしかりき。

とぶらひ畢りて、家路に向ふころは、はや頗る遅くなりたれど、月影さやけく、空の色青く、風いと心地好かりき。路に近き丘の上には、「チプレツソオ」、「ピニヨロ」なんどの常磐樹立てるが、怪しげなる輪廓を、鋭く空に畫きたり。人の世にあるや、とある夕、何事もあらざりしを、久しくえ忘れぬやうに、美しう思ふことあるものなるが、かの歸路の景色、また然る類なりき。國を去りての後も、テヱエルの流のさまを思ふごとに、かの夕の景色のみぞ心には浮ぶなる。黄なる河水のいと濃げに見ゆるに、月の光はさしたり。碾穀車の鳴り響く水の上に、朽ち果てたる橋柱、黒き影を印して立てり。この景色心に浮べば、あの折の心輕げなる少女子さへ、扁鼓手に把りて、「サルタレルロ」舞ひつゝ過ぐらむ心地す。（「サルタレルロ」の事をば聊注すべし。こは單調なる曲につれて踊り舞ふ羅馬の民の技藝なり。一人にて踊ることあり。又二人にても舞へど、その身の相觸るゝことはなし。大抵男子二人、若くは女子二人なるが、跳ねる如き早足にて半圈に動き、その間手をも休むることなく、羅馬人に産れ付きたる、しなやかなる振をなせり。女子は裳裾を蹇ぐ。鼓をば自ら打ち、又人にも打たす。其調の變化といふは、唯遲速のみなり。）サンタ、マリア、デルラ、ロツンダの街に來て見れば、こゝはまだいと賑はし。魚蝋の烟を風のまにまに吹き靡かせて、前に木机を据ゑ、そが上に月桂の青枝もて編みたる籠に貨物を載せたるを飾りたるは、肉鬻ぐ男、果賣る女などなり。剥栗並べたる釜の下よりは、火　立昇りたり。賈人の物いひかはす聲の高きは、伊太利ことば知らぬ旅人聞かば、命をも顧みざる爭とやおもふらむ。魚賣る女の店の前にて、母上識る人に逢ひ給ひぬ。女子の間とて、物語長きに、店の蝋燭流れ盡むとしたり。さて連れ立ちて、其人の家の戸口までおくり行くに、街の上はいふもさらなり、「コルソオ」の大道さへ物寂しう見えぬ。されど美しき水盤を築きたるピアツツア、ヂ、トレヰイに曲り出でしときは、又賑はしきさま前の如し。

こゝに古き殿づくりあり。意なく投げ疊ねたらむやうに見ゆる、礎の間より、水流れ落ちて、月は恰も好し棟の上にぞ照りわたれる。河伯の像は、重き石衣を風に吹かせて、大なる瀧を見おろしたり。瀧のほとりには、喇叭吹くトリイトンの神二人海馬を馭したり。その下には、豐に水を湛へたる大水盤あり。盤を繞れる石級を見れば農夫どもあまた心地好げに月明の裡に臥したり。截り碎きたる西瓜より、紅の露滴りたるが其傍にあり。骨組太き童一人、身に着けたるものとては、薄き汗衫一枚、鞣革の袴一つなるが、その袴さへ、控釦脱れて膝のあたりに垂れかゝりたるを、心ともせずや、「キタルラ」の絃、おもしろげに掻き鳴して坐したり。忽ちにして歌ふこと一句、忽にして又奏づること一節。農夫どもは掌打ち鳴しつ。母上は立ちとまり給ひぬ。この時童の歌ひたる歌こそは、いたく我心を動かしつれ。あはれ此歌よ。こは尋常の歌にあらず。この童の歌ふは、目の前に見え、耳のほとりに聞ゆるが儘なりき。母上も我も亦曲中の人となりぬ。さるに其歌には韻脚あり、其調はいと妙なり。童の歌ひけるやう。青き空を衾として、白き石を枕としたる寢ごゝろの好さよ。かくて笛手二人の曲をこそ聞け。童は斯く歌ひて、「トリイトン」の石像を指したり。童の又歌ひけるやう。こゝに西瓜の血汐を酌める、百姓の一群は、皆戀人の上安かれと祈るなり。その戀人は今は寢て、聖ピエトロの寺の塔、その法皇の都にゆ

きし、人の上をも夢みるらむ。人々の戀人の上安かれと祈りて飲まむ。又世の中にあらむ限の、箭の手開かぬ少女が上をも、皆安かれと祈りて飲まむ。（箭の手開かぬ少女とは、髪に挿す箭をいへるにて、處女の箭には握りたる手あり、嫁ぎたる女の箭には開きたる手あり。）かくて童は、母上の脇を※りて、さて母御の上をも、又その童の鬚生ふるやうになりて、迎へむ少女の上をも、と歌ひぬ。母上善くぞ歌ひしと讃め給へば、農夫どもゝジヤコモが旨さよ、と手打ち鳴してさゞめきぬ。この時ふと小き寺の石級の上を見しに、こゝには識る人ひとりあり。そは鉛筆取りて、この月明の中なる群を、寫さむとしたる畫工フエデリゴなりき。歸途には畫工と母上と、かの歌うたひし童の上につきて、語り戯れき。その時畫工は、かの童を即興詩人とぞいひける。

フエデリゴの我にいふやう。アントニオ聞け。そなたも即興の詩を作れ。そなたは固より詩人なり。たゞ例の説教を韻語にして歌へ。これを聞きて、我初めて詩人といふことあきらかにさとれり。まことに詩人とは、見るもの、聞くものにつけて、おもしろく歌ふ人にぞありける。げにこは面白き業なり。想ふにあながち難からむとは思はれず、「キタルラ」一つだにあらましかば。わが初の作の料になりしは、向ひなる枯肉鋪なりしこそ可笑しけれ。此家の貨物の排べ方は、旅人の目にさへ留まるやうなりければ、早くも我空想を襲ひしなり。月桂の枝美しく編みたる間には、おほいなる駝鳥の卵の如く、乾酪の塊懸りたり。「オルガノ」の笛の如く、金紙巻きたる燭は並び立てり。柱のやうに立てたる腸づめの肉の上には、琥珀の如く光を放ちて、「パルミジヤノ」の乾酪据わりたり。夕になれば、燭に火を點ずるほどに、其光は腸づめの肉と「プレシチウツトオ」（らかん）との間に燃ゆる、聖母像前の紅玻璃燈と共に、この幻の境を照せり。我詩には、店の卓の上なる猫兒、店の女房と價を爭ひたる、若き「カツプチノ」僧さへ、殘ることなく入りぬ。此詩をば、幾度か心の内にて吟じ試みて、さてフエデリゴに歌ひて聞かせしに、フエデリゴめでたがりければ、つひに家の中に廣まり、又街を踰えて、向ひなるひものや女房の耳にも入りぬ。女房聞きて、げに珍らしき詩なるかな、ダンテの神曲とはかゝるものか、とぞ稱へける。

これを手始に、物として我詩に入らぬはなきやうになりぬ。我世は夢の世、空想の世となりぬ。寺にありて、僧の歌ふとき、提香爐を打ち振りても、街にありて、叫ぶ賈人、轟く車の間に立ちても、聖母の像と靈水盛りたる瓶の下なる、小き臥床の中にありても、たゞ詩をおもふより外あらざりき。冬の夕暮、鍛冶の火高く燃えて、道ゆく百姓の立ち倚りて手を温むるとき、我は家の窓に坐して、これを見つゝ、時の過ぐるを知らず。かの鍛冶の火の中には、我空想の世の如き殊なる世ありとぞ覺えし。北山おろし劇しうして、白雪街を籠め、廣こうぢの石の「トリイトン」に氷の鬚おふるときは、我喜限なかりき。憾むらくは、かゝる時の長からぬことよ。かゝる日には年ゆたかなる兆とて、羊の裘きたる農夫ども、手を拍ちて「トリイトン」のめぐりを踊りまはりき。噴き出づる水に雨は、晴れなんとする空にかゝれる虹の影映りて。

花祭

六月の事なりき。年ごとにジエンツアノにて執行せらるゝ、名高

き花祭の期は近づきぬ。（ジエンツアノはアルバノ山間の小都會なり。羅馬と沼澤との間なる街道に近し。）母上とも、マリウチアとも仲好き女房ありて、かしこなる料理屋の妻となりたり。（伊太利の小料理屋にて「オステリア、エエ、クチイナ」と招牌懸けたる類なるべし。）母上とマリウチアとが此祭にゆかむと約したるは、數年前よりの事なれども、いつも思ひ掛けぬ事に妨げられて、えも果さゞりき。今年は必ず約を履まむとなり。道遠ければ、祭の前日にいで立たむとす。かしまだちの前の夕には、喜ばしさの餘に、我眠の穩ならざりしも、理なるべし。

「エツツリノ」といふ車の門前に來しときは、日未だ昇らざりき。我等は直に車に上りぬ。是れより先には、われ未だ山に入りしことあらざりき。祭の事を思ひての喜に胸さわぎのみぞせられたる。身の邊なる自然と生活とを、人となりての後、當時の情もて觀ましかば、我が作る詩こそ類なき妙品ならめ。街道の靜けさ、鐵物いかめしき閭門、見わたす限遙なるカムパニアの野邊に、物寂しき墳墓のところ〃＼に立てる、遠山の裾を罩めたる濃き朝霧など、我がためにはことび觀るべき、めでたき祕事の前兆の如くおもはれぬ。道の傍に十字架あり。そが上には枯髏殘れり。こは辜なき人を脅したる報に、こゝに刑せられし強人の骨なるべし。これさへ我心を動すことたゞならざりき。山中の水を羅馬の市に導くなる、許多の筧の數をば、はじめこそ讀み見むとしつれ、幾程もあらぬに、倦みて思ひとゞまりつ。さて我は母上とマリウチアとに問ひはじめき。壞れ傾きたる墓標のめぐりにて、牧者が焚く火は何のためぞ。羊の群のめぐりに引きめぐらしたる網は何のためぞ。問はるゝ人はいかにうるさかりけむ。

アルバノに着きて車を下りぬ。こゝよりアリチアを越す美しき道の程をば徒にてぞゆく。木犀草（レセダ）又はにほひあらせいとう（ヘイランツス）の花など道の傍に野生したり。緑なる葉の茂れる橄欖樹の蔭は涼しくして、憩ふ人待貌なり。遠き海をば、我も望み見ることを得き。十字架立ちたる山腹を過ぐるとき、少女子の一群笑ひ戯れて過ぐるに逢ひぬ。笑ひ戯れながらも、十字架に接吻することをば忘れざりき。アリチアの寺の屋根、黒き橄欖の林の間に見えたるをば、神の使が戯に据ゑかへたる聖ピエトロ寺の屋根ならむとおもひき。索にて牽かれたる熊の、人の如くに立ちて舞へるあり。人あまた其周につどひたり。熊を牽ける男の吹く笛を聞けば、こは羅馬に來て聖母の前に立ちて吹く、「ピツフエラリ」が曲におなじかりき。男に軍曹と呼ばるゝ猿あり。美しき軍服着て、熊の頭の上、脊の上などにて翻筋斗す。われは面白さにこゝに止らむとおもふほどなりき。ジエンツアノの祭も明日のことなれば、止まればとて遲るゝにもあらず。されど母上は早く往きて、友なる女房の環飾編むを助けむとのたまへば、甲斐なかりき。

幾程もなく到り着きて、アンジエリカが家をたづね得つ。ジエンツアノの市にて、ネミといふ湖に向へる方にありき。家はいとめでたし。壁よりは泉湧き出でゝ、石盤に流れ落つ。驢馬あまたそを飲まむとて、めぐりに集ひたり。

料理屋に立ち入りて見るに賑しき物音我等を迎へたり。竈には火燃えて、鍋の裡なる食は煮え上りたり。長き卓あり。市人も田舎人も、それに倚りて、酒飲み、※藏にせる豚を食へり。聖母の御影の前には、青磁の花瓶に、美しき薔薇花を活けたるが、其傍なる燈は、棚引く烟に壓されて、善くも燃えず。帳場のほとりなる卓に置きた

る乾酪の上をば、猫跳り越えたり、鷄の群は、我等が脚にまつはれて、踏まるゝをも厭はじと覺ゆ。アンジエリカは快く我等を迎へき。險しき梯を登りて、烟突の傍なる小部屋に入り、こゝにて食を饗せられき。我心にては、國王の宴に召されたるかとおぼえつ。物として美しからぬはなく、一「フオリエツタ」の葡萄酒さへ其瓶に飾ありて、いとめでたかりき。瓶の口に栓がはりに挿したるは、纔に開きたる薔薇花なり。主客三人の女房、互に接吻したり。我も否とも諾とも云ふ暇なくして、接吻せられき。母上片手にて我頬を撫り、片手にて我衣をなほし給ふ。手尖の隠るゝまで袖を引き、又頸を越すまで襟を揚げなどして、やう〳〵心を安じ給ひき。アンジエリカは我を佳き兒なりと讃めき。

　食後には面白き事はじまりぬ。紅なる花、緑なる梢を摘みて、環飾を編まむとて、人々皆出でぬ。低き戸口をくゞれば庭あり。そのめぐりは幾尺かあらむ。すべてのさま唯だ一つの四阿屋めきたり。細き欄をば、こゝに野生したる蘆薈の、太く堅き葉にて援けたり。これ自然の籬なり。看卸せば深き湖の面いと靜なり。昔こゝは火坑にて、一たびは焔の柱天に朝したることもありきといふ。庭を出でゝ山腹を歩み、大なる葡萄架、茂れる「プラタノ」の林のほとりを過ぐ。葡萄の蔓は高く這ひのぼりて、林の木々にさへ纏ひたり。彼方の山腹の尖りたるところにネミの市あり。其影は湖の底に印りたり。我等は花を採り、梢を折りて、且行き且編みたり。あらせいとうの間には、露けき橄欖の葉を織り込めつ。高き青空と深き碧水とは、乍ち草木に遮られ、乍ち又一様なる限なき色に現れ出づ。我がためには、物としてめでたく、珍らかならざるなし。平和なる歡喜の情は、我魂を震はしめき。今に到るまで、この折の事は、埋沒したる古城の彩石壁畫の如く、我心目に浮び出づることあり。

　日は烈しかりき。湖の畔に降りゆきて、葡萄蔓纏へる「プラタノ」の古樹の、長き枝を水の面にさしおろしたる蔭にやすらひたる時、我等は纔に涼しさを迎へて、編みものに心籠むることを得つ。水草の美しき頭の、蔭にありて、徐に頷くさま、夢みる人の如し。これをも祈りて編み込めつ。暫しありて、日の光は最早水面に及ばずなりて、ネミとジエンツアノとの家々の屋根をさまよへり。我等が坐したるところは、次第にほの暗うなりぬ。我は遊ばむとて、群を離れたれど、岸低く、湖の深きを母上氣づかひ給へば、數歩の外には出でざりき。こゝには古きヂアナの祠の址あり。その破壞して形ばかりになりたる裡に、大なる無花果樹あり。蔦蘿は隙なきまでに、これにまつはれたり。われは此樹に攀ぢ上りて、環飾編みつゝ、流行の小歌うたひたり。

〃—Ah rossi, rossi flori,
Un mazzo di violi!
Un gelsomin d'amore—

（あはれ、赤き、赤き花よ。
菫の束よ。
戀のしるしの素馨〔ジエルソミノ〕の花よ。）

この時あやしく咳枯れたる聲にて、歌ひつぐ人あり。

〃—Per dar al mio bene!

（摘みて取らせむその人に。）

忽ちフラスカアチの農家の婦人の裝したる媼ありて、我前に立ち現れぬ。その脊はあやしき迄眞直なり。その顔の色の目立ちて黒く見ゆるは、頭より肩に垂れたる、長き白紗のためにや。膚の皺は繁

くして、縮めたる網の如し。黒き瞳は※を填めん程なり。この媼は初め微笑みつゝ我を見しが、俄に色を正して、我面を打ちまもりたるさま、傍なる木に寄せ掛けたる木乃伊にはあらずや、と疑はる。暫しありていふやう。花はそちが手にありて美しくぞなるべき。彼の目には福の星ありといふ。我は編みかけたる環飾を、我唇におし當てたるまゝ、驚きて彼の方を見居たり。媼またいはく。その月桂の葉は、美しけれど毒あり。飾に編むは好し。唇にな當てそといふ。此時アンジエリカ籬の後より出でゝいふやう。賢き老女、フラスカアチのフルヰア。そなたも明日の祭の料にとて、環飾編まむとするか。さらずは日のカムパニアのあなたに入りてより、常ならぬ花束を作らむとするかといふ。媼はかく問はれても、顧みもせで我面のみ打ち目守り、詞を續ぎていふやう。賢き目なり。日の金牛宮を過ぐるとき誕れぬ。名も財も牛の角にかゝりたりといふ。此時母上も歩み寄りてのたまふやう。吾子が受領すべきは、綴き衣と大なる帽となり。かくて後は、護摩焚きて神に仕ふべきか、棘の道を走るべきか。そはかれが運命に任せてむ、とのたまふ。媼は聞きて、我を僧とすべしといふ意ぞ、とは心得たりと覺えられき。されど當時は、我等悉く媼が詞の顛末を解すること能はざりき。媼のいふやう。あらず。此兒が衆人の前にて説くところは、げに格子の裏なる尼少女の歌より優しく、アルバノの山の雷より烈しかるべし。されどその時戴くものは大なる帽にあらず。福の座は、かの羊の群の間に白雲立てる、カヲの山より高きものぞといふ。この詞のめでたげなるに、母上は喜び給ひながら、猶訝しげにもてなして、太き息つきつゝ宣給ふやう。あはれなる兒なり。行末をば聖母こそ知り給はめ。アルバノの農夫の車より福の車は高きものを、かゝるをさな子のいかでか上り得むとのたまふ。媼のいはく。農車の輪のめぐるを見ずや。下なる輻は上なる輻となれば、足を低き輻に踏みかけて、旋るに任せて登るときは、忽ち車の上にあるべし。（アルバノの農車はいと高ければ、農夫等かくして登るといふ。）唯だ道なる石に心せよ。市に舞ふ人もこれに躓く習ぞといふ。母上は半ば戯のやうに、さらばその福の車に、われも倶に登るべきか、と問ひ給ひしが、俄に打ち驚きてあなやと叫び給ひき。この時大なる鷙鳥ありて、さと落し來たりしに、その翼の前なる湖を撃ちたるとき、飛沫は我等が面を濕しき。雲の上にて、鋭くも水面に浮びたる大魚を見付け、矢を射る如く來りて攫みたるなり。刃の如き爪は魚の脊を穿ちたり。さて再び空に揚らむとするに、騒ぐ波にて測るにも、その大さはよの常ならぬ魚にしあれば、力を極めて引かれじと爭ひたり。鳥も打ち込みたる爪抜けざれば、今更にその獲ものを放つこと能はず。魚と鳥との闘はいよ〳〵激しく、湖水の面ゆらぐまに〳〵、幾重ともなき大なる環を畫き出せり。鳥の翼は忽ち斂まり、忽ち放たれ、魚の背は浮ぶかと見れば又沈みつ。數分時の後、雙翼靜に水を蔽ひて、鳥は憩ふが如く見えしが、俄にはたゝく勢に、偏翼摧け折るゝ聲、岸のほとりに聞えぬ。鳥は殘れる翼にて、二たび三たび水を敲き、つひに沈みて見えずなりぬ。魚は最後の力を出して、敵を負ひて水底に下りしならむ。鳥も魚も、しばしが程に、底のみくづとなるならむ。我等は詞もあらで、此光景を眺め居たり。事果てゝ後顧みれば、かの媼は在らざりき。

　我等は詞少く歸路をいそぎぬ。森の木葉のしげみは、闇を吐き出だす如くなれど、夕照は湖水に映じて纔にゆくてに迷はざらしむ。この時聞ゆる單調なる物音は粉碾車の轢るなり。すべてのさま物凄

く恐ろしげなり。アンジエリカはゆく〳〵怪しき老女が上を物語りぬ。かの媼は藥草を識りて、能く人を殺し、能く人を惑はしむ。オレワアノといふ所に、テレザといふ少女ありき。ジユウゼツペといふ若者が、山を越えて北の方へゆきたるを戀ひて、日にけに痩せ衰へけり。媼さらば其男を喚び返して得させむとてテレザが髪とジユウゼツペが髪とを結び合せて、銅の器に入れ、藥草を雜へて煮き。ジユウゼツペは其日より、晝も夜も、テレザが上のみ案ぜられければ、何事をも打ち棄てゝ歸り來ぬとぞ。我は此物語を聞きつゝ、「アヱ、マリア」の祈をなしつ。アンジエリカが家に歸り着きて、我心は纔におちゐたり。

新に編みたる環飾一つを懸けたる、眞鍮の燈には、四條の心に殘なく火を點し、「モンツアノ、アル、ポミドロ」といふ旨きものに、善き酒一瓶を添へて供せられき。農夫等は下なる一間にて飲み歌へり。二人代る〳〵〃〳〵唱へ、末の句に至りて、坐客齊しく和したり。我が子供と共に、燃ゆる竈の傍なる聖母の像のみまへにゆきて、讃美歌唱へはじめしとき、農夫等は聲を止めて、我曲を聽き、好き聲なりと稱へき。その嬉しさに我は暗き林をも、怪しき老女をも忘れ果てつ。我は農夫等と共に、即興の詩を歌はむとおもひしに、母上とゞめて宣給ふやう。そちは香爐を提ぐる子ならずや。行末は人の前に出でゝ、神のみことばをも傳ふべきに、今いかでかさる戲せらるべき。謝肉の祭はまだ來ぬものを、とのたまひき。されど我がアンジエリカが家の廣き臥床に上りしときは、母上我枕の低きを厭ひて、肱さし伸べて枕せさせ、頼ある子ぞ、と胸に抱き寄せて眠り給ひき。我は旭の光窓を照して、美しき花祭の我を喚び醒すまで、穩なる夢を結びぬ。

その旦先づ目に觸れし街の有樣、その彩色したる活畫圖を、當時の心になりて寫し出さむには、いかに筆を下すべきか。少しく爪尖あがりになりたる、長き街をば、すべて花もて掩ひたり。地は青く見えたり。かく色を揃へて花を飾るには、園生の草をも、野に茂る枝をも、摘み盡し、折り盡したるかと疑はる。兩側には大なる緑の葉を、帶の如く引きたり。その上には薔薇の花を隙間なきまで並べたり。この帶の隣には又似寄りたる帶を引きて、その間をば暗紅なる花もて填めたり。これを街の氈の小緣とす。中央には黄なる花多く簇めて、その角立ちたる紋を成したる群を星とし、その輪の如き紋を成したる束を日とす。これよりも骨折りて造り出でけんと思はるゝは、人の名頭の字を花もて現したるにぞありける。こゝにては花と花と聯ね、葉と葉と合せて形を作りたり。總ての摸樣は、まことに活きたる五色の氈と見るべく、又彩石を組み合せたる牀と見るべし。されどポムペイにありといふ床にも、かく美しき色あるはあらじ。このあした、風といふもの絶てなかりき。花の落着きたるさまは、重き寶石を据ゑたらむが如くなり。窓といふ窓よりは、大なる氈を垂れて石の壁を掩ひたり。この氈も、花と葉とにて織りて、おほくは聖書に出でたる事蹟の圖を成したり。こゝには聖母と穉き基督とを騎せたる驢あり、ジユウゼツペその口を取りたり。顔、手、足なんどをば、薔薇の花もて作りたり。こあらせいとう（マチオラ）の花、青き「アネモオネ」の花などにて、風に翻りたる衣を織り成せり。その冠を見れば、ネミの湖にて摘みたる白き睡蓮（ニユムフエア）の花なりき。かしこには尊きミケルの毒龍と鬪へるあり。尊きロザリアは深碧なる地球の上に、薔薇の花を散らしたり。いづかたに向ひて見ても、花は我に聖書の事蹟を語れり。いづかたに向

ひて見ても、人の面は我と同じく樂しげなり。美しき衣着裝ひて、出張りたる窓に立てるは、山のあなたより來し異國人なるべし。街の側には、おのがじし飾り繕ひたる人の波打つ如く行くあり。街の曲り角にて、大なる噴井あるところに、母上は腰掛け給へり。我は水よりさしのぞきたるサチロ（羊脚の神）の神の頭の前に立てり。

日は烈しく照りたり。市中の鐘ことごとく鳴りはじめぬ。この時美しき花の氈を踏みて、祭の行列過ぐ。めでたき音樂、謳歌の聲は、その近づくを知らせたり。贊櫃の前には、兒あまた提香爐を振り動かして歩めり。これに續きたるは、こゝらあたりの美しき少女を撰り出でて、花の環を取らせたるなり。もろ肌ぬぎて、翼を負ひたる、あはれなる小兒等は、高卓の前に立ちて、神の使の歌をうたひて、行列の來るを待てり。若人等は尖りたる帽の上に、聖母の像を印したる紐のひら〳〵としたるを付けたり。鎖に金銀の環を繋ぎて、頸に懸けたり。斜に肩に掛けたる、彩りたる紐は、黒天鵝絨の上衣に映じて美し。アルバノ、フラスカアチの少女の群は、髪を編みて、銀の箭にて留め、薄き面紗の端を、やさしく髻の上にて結びたり。エルレトリの少女の群は、頭に環かざりを戴き、美しき肩、圓き乳房の露るゝやうに着たる衣に、襟の邊より、彩りたる巾を下げたり。アプルツチイよりも、大澤よりも、おほよそ近きほとりの民悉くつどひ來て、おの〳〵古風を存じたる打扮したれば、その入り亂れたるを見るときは、餘所の國にはあるまじき奇觀なるべし。花を飾りたる天蓋の下に、華美なる式の衣を着けて歩み來たるは、「カルヂナアレ」なり。さま〴〵＼の宗派に屬する僧は、燃ゆる蝋燭を取りてこれに隨へり。行列のことごとく寺を離るゝとき、群衆はその後に跟いて動きはじめき。我等もこの間にありしが、母上はしかと我肩を按へて、人に押し隔てられじとし給へり。我等は人に揉まれつゝ歩を移せり。我目に見ゆるは、唯だ頭上の青空のみ。忽ち我等がめぐりに、人々の諸聲に叫ぶを聞きつ。我等は彼方へおし遣られ、又此方へおし戻されき。こは一二頭の仗馬の物に怯ぢて駈け出したるなり。われは纔にこの事を聞きたる時、騒ぎ立ちたる人々に推し倒されぬ。目の前は黒くなりて、頭の上には瀑布の水漲り落つる如くなりき。

あはれ、神の母よ、哀なる事なりき。われは今に至るまで、その時の事を憶ふごとに、身うち震ひて止まず。我にかへりしとき、マリウチアは泣き叫びつゝ、我頭を膝の上に載せ居たり。側には母上地に横り居給ふ。これを圍みたるは、見もしらぬ人々なり。馬は車を引きたる儘にて、仆れたる母上の上を過ぎ、轍は胸を碎きしなり。母上の口よりは血流れたり。母上は早や事きれ給へり。

人々は母上の目を瞑らせ、その掌を合せたり。この掌の温きをば今まで我肩に覺えしものを。遺體をば、僧たち寺に舁き入れぬ。マリウチアは手に淺痍負ひたる我を伴ひて、さきの酒店に歸りぬ。きのふは此酒店にて、樂しき事のみおもひつゝ、花を編み、母上の腕を枕にして眠りしものを。當時わがいよ〳〵まことの孤になりしをば、まだ熟くも思ひ得ざりしかど、わが穉き心にも、唯だ何となく物悲しかりき。人々は我に果子、くだもの、玩具など與へて、なだめ賺し、おん身が母は今聖母の許にいませば、日ごとに花祭ありて、めでたき事のみなりといふ。又あすは今一度母上に逢はせんと慰めつ。人々は我にはかく言ふのみなれど、互にさゝやぎあひて、きのふの鰲鳥の事、怪しき嫗の事、母上の夢の事など語り、誰も〳〵＼母上の死をば豫め知りたりと誇れり。

暴馬は街はづれにて、立木に突きあたりて止まりぬ。車中よりは、人々齢四十の上を一つ二つ踰えたる貴人の驚怖のあまりに氣を喪はんとしたるを助け出だしき。人の噂を聞くに、この貴人はボルゲエゼの族にて、アルバノとフラスカアチとの間に、大なる別墅を搆へ、そこの苑にはめづらしき草花を植ゑて樂としたりとなり。世にはこの翁もあやしき藥草を知ること、かのフルヰアといふ媼に劣らずなど云ふものありとぞ。此貴人の使なりとて、「リフレア」着たる僕盾銀（スクヂイ）二十枚入りたる嚢を我に貽りぬ。

翌日の夕まだ「アヱ、マリア」の鐘鳴らぬほどに、人々我を伴ひて寺にゆき、母上に暇乞せしめき。きのふ祭見にゆきし晴衣のまゝにて、狹き木棺の裡に臥し給へり。我は合せたる掌に接吻するに、人々共音に泣きぬ。寺門には柩を擔ふ人立てり。送りゆく僧は白衣着て、帽を垂れ面を覆へり。柩は人の肩に上りぬ。「カツプチノ」僧は蝋燭に火をうつして挽歌をうたひ始めたり。マリウチアは我を牽きて柩の旁に隨へり。斜日は蓋はざる棺を射て、母上のおん顏は生けるが如く見えぬ。知らぬ子供あまたおもしろげに我めぐりを馳せ　りて、燭涙の地に墜ちて凝りたるを拾ひ反古を捩りて作りたる筒に入れたり。我等が行くは、きのふ祭の行列の過りし街なり。木葉も草花も猶地上にあり。されど當時織り成したる華紋は、吾少時の福と俱に、きのふの祭の樂と俱に、今や跡なくなりぬ。幽堂の穹窿を塞ぎたる大石を推し退け、柩を下ししに、底なる他の柩と相觸れて、かすかなる響をなせり。僧等の去りしあとにて、マリウチアは我を石上に跪かせ、「オオラ、プロオ、ノオビス」（祷爲我等）を唱へしめき。

ジエンツアノを立ちしは月あかき夜なりき。フエデリゴと知らぬ人ふたりと我を伴ひゆく。濃き雲はアルバノの巓を繞れり。我がカムパニアの野を飛びゆく輕き霧を眺むる間、人々はもの言ふこと少かりき。幾もあらぬに、我は車の中に眠り、聖母を夢み、花を夢み、母上を夢みき。母上は猶生きて、我にものいひ、我顏を見てほゝ笑み給へり。

蹇丐

羅馬なる母上の住み給ひし家に歸りし後、人々は我をいかにせんかと議するが中に、フラア・マルチノはカムパニアの野に羊飼へる、マリウチアが父母にあづけんといふ。盾銀二十は、牧者が上にては得易からぬ寶なれば、この兒を家におきて養ふはいふもさらなり、又心のうちに喜びて迎ふるならん。さはあれ、この兒は既に半ば出家したるものなり。カムパニアの野にゆきては、香爐を提げて寺中の職をなさんやうなし。かくマルチノの心たゆたふと共に、フエデリゴも云ふやう。われは此兒をカムパニアにやりて、百姓にせんことと惜しければ、この羅馬市中にて、然るべき人を見立て、これにあづくるに若かずといふ。マルチノ思ひ定めかねて、僧たちと謀らんとて去る折柄、ペツポのをぢは例の木履を手に穿きていざり來ぬ。をぢは母上のみまかり給ひしを聞き、又人の我に盾銀二十を貽りしを聞き、母上の追悼よりは、かの金の發落のこゝろづかひのために、こゝには訪れ來ぬるなり。をぢは聲振り立てゝいふやう。この孤の族にて世にあるものは、今われひとりなり。孤をばわれ引き取りて世話すべし。その代りには、此家に殘りたる物悉くわが方へ受け收むべし。かの盾銀二十は勿論なりといふ。マリウチアは臆面せぬ女

なれば、進み出でゝ、おのれフラア・マルチノ其餘の人々とこゝの始末をば油斷なく取り行ふべければ、おのが一身をだにもてあましたる乞丐の益なきこと言はんより、疾く歸れといふ。フエデリゴは席を立ちぬ。マリウチアとペツポのをぢとは、跡に殘りてはしたなく言ひ罵り、いづれも多少の利慾を離れざる、きたなき爭をなしたり。マリウチアのいふやう。この兒をさほど欲しと思はゞ、直に連れて歸りても好し。若し肋二三本打ち折りて、おなじやうなる畸形となし、往來の人の袖に縋らせんとならば、それも好し。盾銀二十枚をば、われこゝに持ち居れば、フラア・マルチノの來給ふまで、決して他人に渡さじといふ。ペツポ怒りて、頑なる女かな、この木履もてそちが頭に、ピアツツア、デル、ポヽロの通衢のやうなる穴を穿けんと叫びぬ。われは二人が間に立ちて、泣き居たるに、マリウチアは我を推しやり、をぢは我を引き寄せたり。をぢのいふやう。唯だ我に隨ひ來よ。我を頼めよ。この負擔だに我方にあらば、その報酬も受けらるべし。羅馬の裁判所に公平なる沙汰なからんや。かく云ひつゝ、強ひて我を※きて戸を出でたるに、こゝには襤褸着たる童ありて、一頭の驢を牽けり。をぢは遠きところに往くとき、又急ぐことあるときは、枯れたる足を、驢の兩脇にひたと押し付け、おのが身と驢と一つ體になりたるやうにし、例の木履のかはりに走らするが常なれば、けふもかく騎りて來しなるべし。をぢは我をも驢背に抱き上げたるに、かの童は後より一鞭加へて驅け出させつ。途すがらをぢは、いつもの厭はしきさまに賺し慰めき。見よ吾兒。よき驢にあらずや。走るさまは、「コルソオ」の競馬にも似ずや。我家にゆき着かば、樂しき世を送らせん。神の使もえ享けぬやうなる饗應すべし。この話の末は、マリウチアを罵る千言萬句、いつ果つべしとも覺えざりき。をぢは家を遠ざかるにつれて、驢を策たしむること少ければ、道行く人々皆このあやしき凹騎に目を注けて、美しき兒なり、何處よりか盜み來し、と問ひぬ。をぢはその度ごとに我身上話を繰り返しつ。この話をば、ほと〳〵道の曲りめごとに浚へ行くほどに、賣漿婆はをぢが長物語の酬に、檸檬水一杯を白にて與へ、をぢと我とに分ち飲ましめ、又別に臨みて我に核の落ち去りたる松子一つ得させつ。

まだをぢが栖にゆき着かぬに、日は暮れぬ。我は一言をも出さず、顔を掩うて泣き居たり。をぢは我を抱き卸して、例の大部屋の側なる狹き一間につれゆき、一隅に玉蜀黍の莢敷きたるを指し示し、あれこそ汝が臥床なれ、さきには善き檸檬水呑ませたれば、まだ喉も乾かざるべく、腹も減らざるべし、と我頬を撫でゝ微笑みたる、その面恐しきこと譬へんに物なし。マリウチアが持ちたる囊には、猶銀幾ばくかある。馭者に與ふる錢をも、あの中よりや出しゝ。貴人の僕は、金もて來しとき、何といひしか。かく問ひ掛けられて、我はたゞ知らずとのみ答へ、はては泣聲になりて、いつまでもこゝに居ることにや、あすは家に歸らるゝことにや、と問ひぬ。勿論なり。いかでか歸られぬ事あらん。おとなしくそこに寢よ。「アエ、マリア」を唱ふることを忘るな。人の眠る時は鬼の醒めたる時なり。十字を截りて寢よ。この鐵壁をば吼る獅子も越えずといふ。神を祈らば、あのマリウチアの腐女が、そちにも我にも難儀を掛けたるを訴へて、毒に中り、惡瘡を發するやうに呪へかし。おとなしく寢よ。小窓をば開けておくべし。涼風は夕餉の半といふ諺あり。蝙蝠をなおそれそ。かなたこなたへ飛びめぐれど、入るものにはあらず。神の子と共に熟寢せよ。斯く云ひ畢りて、をぢは戸を鎖ぢて去りぬ。

をぢの部屋には久しく立ち働く音聞えしが、今は人あまた集へりと覺しく、さま〴〵〳〵の聲して、戸の隙よりは光もさしたり。部屋のさまは見まほしけれど、枯れたる玉蜀黍の莢のさわ〳〵と鳴らば、おそろしきをぢの又入來ることもやと、いと徐に起き上りて、戸の隙に目をさし寄せつ。燈心は二すぢともに燃えたり。卓には麺包あり、菜※あり。一瓶の酒を置いて、丐兒あまた杯のとりやりす。一人として畸形ならぬはなし。いつもの顔色には似もやらねど、知らぬものにはあらず。晝はモンテ、ピンチヨオの草を褥とし、繃帶したる頭を木の幹によせかけ、僅に唇を搖すのみにて、傍に侍らせたる妻といふ女に、熱にて死に垂としたる我夫を憐み給へ、といはせたるロレンツオは、高趺かきて面白げに饒舌り立てたり。（注。モンテ、ピンチヨオには公園あり。西班牙磴、法蘭西大學院よりポルタ、デル、ポヽロに至る。羅馬の市の過半とヰルラ、ボルゲエゼの内苑とはこゝより見ゆ。）十指墮ちたるフランチアは盲婦カテリナが肩を叩きて、「カワリエエレ、トルキノ」の曲を歌へり。戸に近き二人三人は蔭になりて見えわかず。話は我上なり。我胸は騒ぎ立ちぬ。あの小童物の用に立つべきか、身内に何の畸形なるところかある、と一人云へば、をぢ答へて。聖母は無慈悲にも、創一つなく育たせしに、丈伸びて美しければ、貴族の子かとおもはるゝ程なりといふ。幸なきことよ、と皆口々に笑ひぬ。瞽たるカテリナのいふやう。さりとて聖母の天上の飯を賜ふまでは、此世の飯をもらふすべなくては叶はず。手にもあれ、足にもあれ、人の目に立つべき創つけて、我等が群に入れよといふ。をぢ。否　母親だに迂闊ならずば、今日を待たず、善き金の蔓となすべかりしものを。神の使のやうなる善き聲なり。法皇の伶人には恰好なる童なり。人々は我齢を算へ、我がために作さでかなはぬ事を商量したり。その何事なるかは知らねど、善きことにはあらず。奈何してこゝをば※れむ。われは穉心にあらん限りの智慧を絞り出しつ。固よりいづこをさして往かんと迄は、一たびも思ひ計らざりき。鋪板を這ひて窓の下にいたり、木片ありしを踏臺にして窓に上りぬ。家は皆戸を閉ぢたり。街には人行絶えたり。るゝには飛びおるゝより外に道なし。されどそれも恐ろし。とつおいつする折しも、この挾き間の戸ざしに手を掛くる如き音したれば、覺えず窓緣をすべりおちて、石垣づたひに地に墜ちぬ。身は少し痛みしが、幸にこゝは草の上なりき。

　跳ね起きて、いづくを宛ともなく、狹く曲りたる巷を走りぬ。途にて逢ひたるは、杖もて敷石を敲き、高聲にて歌ふ男一人のみなりき。しばらくして廣きところに出でぬ。こゝは見覺あるフオヽルム、ロマアヌムなりき。常は牛市と呼ぶところなり。

露宿、わかれ

　月はカピトリウム（羅馬七陵の一）の背後を照せり。セプチミウス・セヱルス帝の凱旋門に登る磴の上には、大外套被りて臥したる乞兒二三人あり。古の神殿のなごりなる高き石柱は、長き影を地上に印せり。われはこの夕まで、日暮れてこゝに來しことなかりき。鬼氣は少年の衣を襲へり。歩をうつす間、高草の底に横はりたる大理石の柱頭に躓きて倒れ、また起き上りて帝王堡の方を仰ぎ見つ。高き石がきは、纏はれたる蔦かづらのために、いよゝおそろし氣なり。青き空をかすめて、ところ〴〵〳〵に立てるは、眞黒におほいなるいとすぎの木なり。毀れたる柱、碎けたる石の間には、放飼の

驢あり、牛ありて草を食みたり。あはれ、こゝには猶我に迫り、我を窘めざる生物こそあれ。

月あきらかなれば、物として見えぬはなし。遠き方より人の來り近づくあり。若し我を索むるものならば奈何せん。われは巨巖の如くに我前に在る「コリゼエオ」に匿れたり。われは猶きのふ落したる如き重廊の上に立てり。こゝは暗くして且冷なり。われは二あし三あし進み入りぬ。されど硏響にひゞく足音おそろしければ、徐に歩を運びたり。先の方には焚火する人あり。三人の形明に見ゆ。寂しきカムパニアの野邊を夜更けては過ぎじとて、こゝに宿りし農夫にやあらん。さらずばこゝを戍る兵士にや。はた盜にや。さおもへば打物の石に觸るゝ音も聞ゆる如し。われは却歩して、高き圓柱の上に、木梢と蔦蘿とのおほひをなしたるところに出でぬ。石がきの面をばあやしき影往來す。處々に抽け出でたる截石の將に墜んとして僅に懸りたるさま、唯だ蔓草にのみ支へられたるかと疑はる。

上の方なる中の廊を行く人あり。旅人の此古跡の月を見んとて來ぬるなるべし。その一群のうちには白き衣着たる婦人あり。案内者に續松とらせて行きつゝ、柱しげき間に、忽ち顯れ忽ち隱るゝ光景今も見ゆらん心地す。

暗碧なる夜は大地を覆ひ來たり、高低さまざまなる木は天鵝絨の如き色に見ゆ。一葉ごとに夜氣を吐けり。旅人のかへり行くあとを見送りて、ついまつの赤き光さへ見えずなりぬる時、あたりは闃として物音絶えたり。この遺址のうちには、耶蘇教徒が立てたる木卓あまたあり。その一つの片かげに、柱頭ありて草に埋もれたれば、われはこれに腰掛けつ。石は氷の如く冷なるに、我頭の熱さは熱を病むが如くなりき。寐られぬまゝに思ひ出づるは、この「コリゼエオ」の昔語なり。猶太教奉ずる囚人が、羅馬の帝の嚴しき仰によりて、大石を引き上げさせられしこと、この平地にて獸を鬪はせ、又人と獸と相搏たせて、前低く後高き廊の上より、あまたの市民これを觀きといふ事、皆我當時の心頭に上りぬ。

そも〳〵この「コリゼエオ」は楕圓なる四層のたてものにして、「トラヱルチイノ」石もてこれを造る。層ごとに組かたを殊にす。「ドロス」、「イオン」、「コリントス」の柱の式皆備はりたり。基督生れてより七十餘年の後、ヱスパジアヌス帝の時、この工事を起しつ。これに役せられたる猶太教徒の數一萬二千人とぞ聞えし。櫛形の迫持八十ありて、これをめぐれば千六百四十一歩。平地の周匝には八萬六千坐を設け、頂に二萬人を立たしむべかりきといふ。今はこゝにて基督教の祭儀を執行せしむ。バイロン卿詩あり。

この場のあらん限は
内日刺す都もあらん
このにはのなからん時は
うちひさす都もあらじ
うちひさす都あらずば
あはれ〳〵この世間もあらじとぞおもふ

頭の上にあたりて物音こそすれ。見あぐれば物の動くやうにこそおもはるれ。影の如き人ありて、椎を揮ひ石をたゝむが如し。その人を見れば、色蒼ざめて黒き髯長く生ひたり。これ話に聞きし猶太教徒なるべし。積み疊ぬる石は見る見る高くなりぬ。「コリゼエオ」は再び昔のさまに立ちて、幾千萬とも知られぬ人これに滿ちたり。長き白き衣着たるヱスタの神の巫女あり。帝王の座も設けられたり。

赤條々なる力士の血を流せるあり。低き廊の方より叫ぶ聲、吼ゆる聲聞ゆ。忽ち虎豹の群ありて我前を奔り過ぐ。我はその血ばしる眼を見、その熱き息に觸れたり。あまりのおそろしさに、かの柱頭にひたと抱きつきて、聖母の御名をとなふれども、物騒がしさは未だ止まず。この怪しき物共の群りたる間にも、幸なるかな、大なる十字架の屹として立てるあり。こはわがこゝを過ぐるごとに接吻したるものなり。これを目當に走り寄りて、緊と抱きつくほどに、石落ち柱倒れ、人も獣もあらずなりて、我は復た人事をしらず。

人心地つきたる時は、熱すでに退きたれど、身は尚いたく疲れて、われはかの木づくりの十字架の下に臥したり。あたりを見るに、怪しき事もなし。夜は靜にして、高き石垣の上には鶯鳴けり。われは耶蘇をおもひ、その母をおもひぬ。わが母上は今あらねば、これよりは耶蘇の母ぞ我母なるべき。われは十字架を抱きて、その柱に頭を寄せて眠りぬ。

幾時をか眠りけん。歌の聲に醒むれば、石垣の頂には日の光かゞやき、「カツプチノ」僧二三人蝋燭を把りて卓より卓に歩みゆきつゝ、「キユリエ、エレイソン」（主よ、憫め）と歌へり。僧は十字架に來り近づきぬ。俯して我面を見るものは、フラア・マルチノなりき。わが色蒼ざめてこゝにあるを訝りて、何事のありしぞと問ひぬ。われはいかに答へしか知らず。されどペツポのをぢの恐ろしさを聞きたるのみにて、僧は我上を推し得たり。我は衣の袖に縋りて、我を見棄て給ふなと願ひぬ。連なる僧もわれをあはれと思へる如し。かれ等は皆我を知れり。われはその部屋をおとづれ、彼等と共に寺にて歌ひしことあり。

僧は我を伴ひて寺に歸りぬ。壁に木板の畫を貼したる房に入り、檸檬樹の枝さし入れたる窓を見て、われはきのふの苦を忘れぬ。フラア・マルチノは我をペツポが許へは還さじと誓ひ給へり。同寮の僧にも、このちごをば蹇へたる丐兒にわたされずとのたまふを聞きつ。

午のころ僧は菜※、麪包、葡萄酒を取り來りて我に飲啖せしめ、さて容を正していふやう。便なき童よ。母だに世にあらば、この別はあるまじきを。母だに世にあらば、この寺の内にありて、尊き御蔭を被り、安らかに人となるべかりしを。今は是非なき事となりぬ。そちは波風荒き海に浮ばんとす。寄るところは一ひらの板のみ。血を流し給へる耶蘇、涙を墮し給ふ聖母をな忘れそ。汝が族といふものは、その外にあらじかし。此詞を聞きて、われは身を震はせ、さらば我をばいづかたにか遣らんとし給ふと問ひぬ。これより僧は、われをカムパニアの野なる牧者夫婦にあづくること、二人をば父母の如く敬ふべき事、かねて教へおきし祈祷の詞を忘るべからざる事など語り出でぬ。夕暮にマリウチアと其父とは寺門迄迎へに來ぬ。僧はわれを伴ひ出でゝ引き渡しつ。この牧者のさまを見るに、衣はペツポのをぢのより舊りたるべし。塵を蒙り、裂けやぶれたる皮靴を穿き、膝を露し、野の花を挿したる尖帽を戴けり。かれは跪きて僧の手に接吻し、我を顧みて、かゝる美しき童なれば、我のみかは、妻も喜びてもり育てんと誓ひぬ。マリウチアは財嚢を父にわたしつ。われ等四人はこれより寺に入りて、人々皆默祷す。われも共に跪きしが、祈祷の詞は出でざりき。我眼は久しき馴染の諸像を見たり。戸の上高きところを舟に乗りてゆき給ふ耶蘇、贄卓の神の使、美しきミケルはいふもさらなり、蔦かづらの環を戴きたる髑髏にも暇乞しつ。別に臨みて、フラア・マルチノは手を我頭上に加へ、晩餐

式施行法（モオドオ、ヂ、セルヰレ、ラ、サンクタ、メツサア）と題したる、繪入の小册子を贈りぬ。

既に別れて、ピアツツア、バルベリイニの街を過ぐとて、仰いで母上の住み給ひし家をみれば、窓といふ窓悉く開け放たれたり。新しきあるじを待つにやあらん。

曠野

羅馬城のめぐりなる大曠野は、今我すみかとなりぬ。古跡をたづね、美術を究めんと、初てテヱエル河畔の古都に近づくものは、必ずこの荒野に歩をとゞめて、これを萬國史の一ひらと看做すなり。起てる丘、伏したる谷、おほよそ眼に觸るゝもの、一つとして史册中の奇怪なる古文字にあらざるなし。畫工の來るや、古の水道のなごりなる、寂しき櫛形迫持を寫し、羊の群を牽ゐたる牧者を寫し、さてその前に枯れたる薊を寫すのみ。歸りてこれを人に示せば、看るもの皆めでくつがへるなるべし。されど我と牧者とは、おの〳〵其情を殊にせり。牧者は久しくこゝに住ひて、この焦れたる如き草を見、この熱き風に吹かれ、こゝに行はるゝ疫癘に苦められたれば、唯だあしき方、忌まはしき方のみをや思ふらん。我は此景に對して、いと面白くぞ覺えし。平原の一面たる山々の濃淡いろいろなる緑を染め出したる、おそろしき水牛、テヱエルの黄なる流、これを溯る舟、岸邊を牽かるゝ軛負ひたる牧牛、皆目新しきものゝみなりき。われ等は流に溯りて行きぬ。足の下なるは丈低く黄なる草、身のめぐりなるは莖長く枯れたる薊のみ。十字架の側を過ぐ。こは人の殺されたるあとに立てしなり。架に近きところには、盜人の屍の切り砕きて棄てたるなり。隻腕、隻脚は猶その形を存じたり。それさへ心を寒からしむるに、我栖はこゝより遠からずとぞいふなる。

此家は古の墳墓の址なり。この類の穴こゝらあれば、牧者となるもの大抵これに住みて、身を戍るにも、又身を安んずるにも、事足れりとおもへるなり。用なき窪をば填め、いらぬ罅をば塞ぎ、上に草を葺けば、家すでに成れり。我牧者の家は丘の上にありて兩層あり。隘き戸口なるコリントスがたの柱は、當初墳墓を築きしときの面影なるべし。石垣の間なる、幅廣き三條の柱は、後の修繕ならん。おもふに中古は砦にやしたりけん。戸口の上に穴あり。これ窓なるべし。屋根の半は葦簾に枯枝をまじへて葺き、半は又枝さしかはしたる古木をその儘に用ゐたるが、その梢よりは忍冬（カプリフオリウム）の蔓長く垂れて石垣にかゝりたり。

こゝが家ぞ、と途すがら一言も物いはざりしベネデツトオ告げぬ。われは怪しげなる家を望み、またかの盜人の屍をかへり見て、こゝに住むことか、と問ひかへしつ。翁にドメニカ、ドメニカと呼ばれて、荒※の汗衫ひとつ着たる嫗出でぬ。手足をばことごとく露して髪をばふり亂したり。嫗は我を抱き寄せて、あまたゝび接吻す。夫の詞少きとはうらうへにて、この嫗はめづらしき饒舌なり。そなたは薊生ふる沙原より、われ等に授けられたるイスマエル（亞伯拉罕の子）なるぞ。されどわが饗應には足らぬことあらせじ。天上なる聖母に代りて、われ汝を育つべし。臥床はすでにこしらへ置きぬ。豆も烹えたるべし。ベネデツトオもそなたも食卓に就け。マリウチアはともに來ざりしか。尊き爺（法皇）を拜まざりしか。※豚をば忘れざりしならん。眞鍮の鉤をも。新しき聖母の像をも。舊きをば最早形見えわかぬ迄接吻したり。ベネデツトオよ。おん身ほど物覺

好き人はあらじ。わがかはゆきベネデツトオよ。かく語りつゞけて、狹き一間に伴ひ入りぬ。後にはこの一間、わがためには「ワチカアノ」（法皇の宮）の廣間の如く思はれぬ。おもふに我詩才を産み出ししは、此ひとつ家ならんか。

若き棕櫚は重を負ふことよ〳〵大にして、長ずることよ〳〵早しといふ。我空想も亦この狹き處にとぢ込められて、却りて大に發達せしならん。古の墳墓の常とて、此家には中央なる廣間あり。そのめぐりには、許多の小龕並びたり。又二重の幅闊き棚あり。處々色かはりたる石を甃みて紋を成せり。一つの龕をば食堂とし、一つには壺鉢などを藏し、一つをば廚となして豆を煮たり。

老夫婦は祈祷して卓に就けり。食畢りて媼は我を牽きて梯を登り、二階なる二龕にいたりぬ。是れわれ等三人の臥房なり。わが龕は戸口の向ひにて、戸口よりは最も遠きところにあり。臥床の側には、二條の木を交叉はせて、其間に布を張り、これにをさな子一人寐せたり。マリウチアが子なるべし。媼が我に「アヱ、マリア」唱へしむるとき、美しき色澤ある蜥蜴我が側を走り過ぎぬ。おそろしき物にはあらず、人をおそれこそすれ、絶てものそこなふものにはあらず、と云ひつゝ、かの穉兒をおのが龕のかたへ遷しつ。壁に石一つ抽け落ちたるところあり。こゝより青空見ゆ。黒き蔦の葉の鳥なんどの如く風に搖らるゝも見ゆ。我は十字を切りて眠に就きぬ。亡き母上、聖母、刑せられたる盜人の手足、皆わが怪しき夢に入りぬ。

翌朝より雨ふりつゞきて、戸は開けたれどいと闇き小部屋に籠り居たり。わが帆木綿の上なる穉子をゆすぶる傍にて、媼は苧うみつゝ、我に新しき祈祷を教へ、まだ聞かぬ聖の上を語り、またこの野邊に出づる劫盜の事を話せり。劫盜は旅人を覗ふのみにて、牧者の家抔へは來ることなしとぞ。食は葱、麵包などなり。皆旨し。されど一間にのみ籠り居らんこと物憂きに堪へねば、媼は我を慰めんとて、戸の前に小溝を掘りたり。この小テヱエル河は、をやみなき雨に黄なる流となりて、いと緩やかにながるめり。さて木を刻み葦を截りて作りたるは羅馬よりオスチア（テヱエル河口の港）にかよふなる帆かけ舟なり。雨あまり劇しきときは、戸をさして闇黒裡に坐し、媼は苧をうみ、われは羅馬なる寺のさまを思へり。舟に乘りたる耶蘇は今面前に見ゆる心地す。聖母の雲に駕りて、神の使の童供に舁かせ給ふも見ゆ。環かざりしたる髑髏も見ゆ。

雨の時過ぐれば、月を踰ゆれども曇ることなし。われは走り出でゝ遊びありくに、媼は戒めて遠く行かしめず、又テヱエルの河近く寄らしめず。この岸は土鬆ければ、踏むに從ひて頽るることありといへり。そが上、岸近きところには水牛あまたあり。こは猛き獸にて、怒るときは人を殺すと聞く。されど我はこの獸を見ることを好めり。蟒蛇の鳥を呑むときは、鳥自ら飛びて其咽に入るといふ類にやあらん。この獸の赤き目には、怪しき光ありて、我を引き寄せんとする如し。又此獸の馬の如く走るさま、力を極めて相闘ふさま、皆わがために興ある事なりき。我は見たるところを沙に畫き、又歌につゞりて歌ひぬ。媼は我聲のめでたきを稱へて止まず。

時は暑に向ひぬ。カムパニアの野は火の海とならんとす。瀦水は惡臭を放てり。朝夕のほかは、戸外に出づべからず。かゝる苦熱はモンテ、ピンチヨオにありし身の知らざる所なり。かしこの夏をば、我猶記えたり。乞兒は人に小銅貨をねだり、麵包をば買はで氷水を飲めり。二つに割りたる大西瓜の肉赤く核黒きは、いづれの店にもありき。これをおもへば唾湧きて堪へがたし。この野邊にては、

日光ますぐに射下せり。我が立てる影さへ我脚下に沒せんばかりなり。水牛は或は死せるが如く枯草の上に臥し、或は狂せるが如く驅けめぐりたり。われは物語に聞ける亞弗利加沙漠の旅人になりたらんやうにおもひき。

大海の孤舟にあるが如き念をなすこと二月間、何の用事をも朝夕の涼しき間に濟ませ、終日我も出でず人も來ざりき。※く如き熱、腐りたる蒸氣の中にありて、我血は湧きかへらんとす。沼は涸れたり。テヱエルの黄なる水は生温くなりて、眠たげに流れたり。西瓜の汁も温し。土石の底に藏したる葡萄酒も酸くして、半ば烹たる如し。我喉は一滴の冷露を嘗むること能はざりき。天には一纖雲なく、いつもおなじ碧色にて、吹く風は唯だ熱き「シロツコ」（東南風）のみなり。われ等は日ごとに雨を祈り、嫗は朝夕山ある方を眺めて、雲や起ると待てども甲斐なし。蔭あるは夜のみ。涼風の少しく動くは日出る時と日入る時とのみ。われは暑に苦み、この變化なき生活に倦みて、殆ど死せる如くなりき。風少しく動くと覺ゆるときは、蠅蚋なんど群がり來りて人の肌を刺せり。水牛の背にも、昆蟲聚りて寸膚を止めねば、時々怒りて自らテヱエルの黄なる流に躍り入り、身を水底に滾してこれを攘ひたり。羅馬の市にて、闃然たる午時の街を行く人は、綫の如き陰影を求めて夏日の烈しきをかこつと雖、これをこの火の海にたゞよひ、硫黄氣ある毒　を呼吸し、幾萬とも知られぬ惡蟲に膚を噛まるゝものに比ぶれば、猶是れ樂土の客ならんかし。

九月になりて氣候やゝ温和になりぬ。フエデリゴはこの燒原を畫かんとて來ぬ。我が住める怪しき家、劫盜の屍をさらしたる處、おそろしき水牛、皆其筆に上りぬ。我には紙筆を與へて畫の稽古せよと勸め、又折もあらば迎へに來て、フラア・マルチノ、マリウチア其外の人々に逢はせばやと契りおきぬ。惜むらくはこの人久しく約を履まざりき。

水牛

十一月になりぬ。こゝに來しより最快き時節なり。爽なる風は山々よりおろし來ぬ。夕暮になれば、南の國ならでは無しといふ、たゞならぬ雲の色、目を驚かすやうなり。こは畫工のえうつさぬところなるべく、また敢て寫さぬものなるべし。あめ色の地に、橄欖（オリワ）の如く緑なる色の雲あるをば、樂土の苑囿に湧き出でたる山かと疑ひぬ。又夕映の赤きところに、暗碧なる雲の浮べるをば、天人の居る山の松林ならんと思ひて、そこの谷かげには、美しき神の童あまた休みゐ、白き翼を扇の如くつかひて、みづから涼を取るらんとおもひやりぬ。或日の夕ぐれ、いつもの如く夢ごゝろになりてゐたるが、ふと思ひ付きて、鍼もて穿ちたる紙片を目にあて、太陽を覗きはじめつ。ドメニカこれを見つけて、そは目を傷ふわざぞとて日の見えぬやうに戸をさしつ。われ無事に苦みて、外に出でゝ遊ばんことを請ひ、許をえたる嬉しさに、門のかたへ走りゆき、戸を推し開きつ。その時一人の男遽だしく驅け入りて、門口に立ちたる我を撞きまろばし、扉をはたと閉ぢたり。われは此人の蒼ざめたる面を見、その震ふ唇より洩れたる「マドンナ」（聖母）といふ一聲を聞きも果てぬに、おそろしき勢にて、外より戸を衝くものあり。裂け飛んだる板は我頭に觸れんとせり。その時戸口を塞ぎたるは、血ばしる眼を我等に注ぎたる、水牛の頭なりき。ドメニカはあと叫

びて、我手を握り、上の間にゆく梯を二足三足のぼりぬ。逃げ込みたる男は、あたりを見　はしベネデツトオが銃の壁に掛かりたるを見出しつ。こは賊なんどの入らん折の備にとて、丸をこめおきたるなり。男は手早く銃を取りぬ。耳を貫く響と共に、烟は狹き家に滿ちわたれり。われは彼男の烟の中にて、銃把を擧げて、水牛の額を撃つを見たり。獸は隘き戸口にはさまりて前にも後にもえ動かざりしなり。

　こは何事をかし給ふ。君は物の命を取り給ひぬ。この詞はドメニカが纔にわれにかへりたる口より出でぬ。かの男。否聖母の惠なりき。我等が命を拾ひぬとこそおもへ。さて我を抱き上げて、されどわがために戸を開きしはこの恩人なりといひき。男の面は猶蒼く、額の汗は玉をなしたり。その語を聞くに外國人にあらず。その衣を見るに羅馬の貴人とおぼし。この人草木の花を愛づる癖あり。けふも採集に出でゝ、ポンテ、モルレにて車を下り、テヱエル河に沿ひてこなたへ來しに、圖らずも水牛の群にあひぬ。その一つ、いかなる故にか、群を離れて衝き來たりしが、幸にこの家の戸開きて、危き難を免れきとなり。ドメニカ聞きて。さらばおん身を救ひしは、疑もなく聖母のおんしわざなり。この童は聖母の愛でさせ給ふものなれば、それに戸をば開かせ給ひしなり。おん身はまだ此童を識り給はず。物讀むことには長けたれば、書きたるをも、印したるをも、え讀まずといふことなし。畫かくことを善くして、いかなる形のものをも、明にそれと見ゆるやうに寫せり。「ピエトロ」寺の塔をも、水牛をも、肥えふとりたるパアテル・アムブロジオ（僧の名）をもゑがきぬ。聲は類なくめでたし。おん身にかれが歌ふを聞かせまほし。法皇の伶人もこれには優らざるべし。そが上に性すなほなる兒なり。善き兒なり。子供には譽めて聞かすること宜しからねば、その外をば申さず。されどこの子は、譽められても好き子なりといふ。客。この子の穉きを見れば、おん身の腹にはあらざるべし。ドメニカ。否、老いたる無花果の木には、かかる芽は出でぬものなり。されど此世には、この子の親といふもの、われとベネデツトオとの外あらず。いかに貧くなりても、これをば育てむと思ひ侍り。そは兎まれ角まれ、この獸をばいかにせん。（頭より血流るゝ、水牛の角を握りて。）戸口に挾まりたれば、たやすく動くべくもあらず。ベネデツトオの歸るまでは、外に出でんやうなし。こを殺しつとて、咎めらるゝことあらば、いかにすべき。客。そは心安かれ。あるじの老女も聞きしことあるべきが、われはボルゲエゼの族なり。嫗。いかでか、と答へて衣に接吻せんとせしに、客はその手をさし出して吸はせ、さて我手を兩の掌の間に挾みて、嫗にいふやう。あすは此子を伴ひて、羅馬に來よ。われはボルゲエゼの館に住めり。ドメニカは忝しとて涙を流しつ。

　ドメニカはわが日ごろ書き棄てたる反古あまた取り出でゝ、客に示しゝに、客は我頬を撫で、小きサルワトル・ロオザ（名高き畫工）よと讃め稱へぬ。嫗。まことに宣ふ如し。穉きものゝ業としては、珍しくは候はずや。それ〳〵の形明に備はりたり。この水牛を見給へ。この舟を見給へ。こはまた我等の住める小家なり。こは我姿を寫したるなり。鉛筆なれば、色こそ異なれ、わが姿のその儘ならずや。又我に向ひて、何にもあれ、この御方に歌ひて聞せよ。自ら作りて歌ふが好し。この童は長き物語、こまやかなる法話をさへ、歌に作りて歌ひ侍り。年長けたる僧にも劣らじと覺ゆ。客は我等二人のさまを見て、おもしろがり、我には疾く歌ひて聞せよ、と勸めつ。

われは常の如く遠慮なく歌ひぬ。媼は常の如くほめそやしつ。されど其歌をば記憶せず。唯だ聖母、貴き客人、水牛の三つをくりかへしたるをば未だ忘れず。客は默坐して聽きゐたり。媼はそのさまを見て、童の才に驚きて詞なきならんと推し量りつ。

歌ひ畢りしとき、客は口を開きていふやう。さらば明日疾くその子を伴ひ來よ。否、夕暮のかたよろしからん。「アヱ、マリア」の鐘鳴る時より、一時ばかり早く來よ。さて我は最早退るべきが、いづくよりか出づべき。水牛の塞ぎたる口の外、この家には口はなきか。又こゝを出でゝ車まで行かんに、水牛に追はるゝやうなる虞なからしめんには、いかにして好かるべきか。媼。かしこの壁に穴ありて、それより這ひ出づるときは、石垣も高からねば、すべりおりんこと難からず。わが如き老いたるものも、かしこより出入すべく覺え侍り。されど貴きおん方を案内しまゐらすべき口にはあらず。客は聞きも果てず、梯を上りて、穴より頭を出し、外の方を覗きていふやう。否、善き降口なり。「カピトリウム」に降りゆく階段にも譲らず。水牛の群は河のかたに遠ざかりぬ。道には眠たげなる百姓あまた、籘の束積みたる車を、馬に引かせて行けり。あの車に沿ひゆかば、また水牛に襲はるとも身を匿すに便よからん。かく見定めて、客は媼に手を吸はせ、わが頬を撫で、再びあすの事を契りおきて、茂れる蔦かづらの間をすべりおりぬ。われは窓より見送りしが、客は間もなく籘の車に追ひすがりて、百姓の群と倶に見えずなりぬ。

みたち

牧者二三人の※を得て、ベネデツトオは戸口なる水牛の屍を取り片付けつ。その日の物語は止むときなかりしかど、今はよくも記えず。翌朝疾く起きいでゝ、夕暮に都に行かんと支度に取り掛りぬ。數月の間行李の中に鎖されゐたる我晴衣はとり出されぬ。帽には美しき薔薇の花を挿したり。身のまはりにて、最も怪しげなりしは履ものなり。靴とはいへど羅馬の鞋に近く覺えられき。

カムパニアの野道の遠かりしことよ。その照る日の烈しかりしことよ。ポヽロの廣こうぢに出でゝ、記念塔のめぐりなる石獅の口より吐ける水を掬びて、我涸れたる咽を潤しゝが、その味は人となりて後フアレルナ、チブリイの酒なんどを飲みたるにも増して旨かりき。〔北より羅馬に入るものは、ポルタア、デル、ポヽロの關を入りて、ピアツツア、デル、ポヽロといふ美しく大なる廣こうぢに出づ。この廣こうぢはテエエル河とピンチヨオ山との間にあり。兩側にはいとすぎ、亞剌比亞護謨の木（アカチア）茂りあひて、その下かげに今様なる石像、噴水などあり。中央には四つの石獅に圍まれたる、セソストリス時代の記念塔あり。前には三條の直道あり。即ち丱ア、バブ丱ノ、イル、コルソオ、丱ア、リペツタなり。イル、コルソオの兩角をなしたるは、同じ式に建てたる兩伽藍なり。歐羅巴に都會多しと雖、古羅馬のピアツツア、デル、ポヽロほど晴やかなるはあらじ。〕我は熱き頬を獅子の口に押し當て、水を頭に被りぬ。衣や潤はん、髪や亂れん、とドメニカは氣遣ひぬ。丱ア、リペツタを下りゆきて、ボルゲエゼの館に近づきぬ。我もドメニカも、此館の前をば幾度となく過りしかど、けふ迄は心とめて見しことなし。今歩を停めて仰ぎ見れば、その大さ、その豊さ、その美しさ、譬へんに物なしと覺えき。殊に目を駭かせるは、窓の裡なる長き絹

の帷なり。あの内にいます君は、いま我等が識る人となりぬ。きのふその君の我家に來給ひし如く、いま我等はそのみたちに入らんとす。斯く思へば嬉しさいかばかりならん。

　中庭、部屋々々を見しとき、身の震ひたるをば、われ決して忘れざるべし。あるじの君は我に親し。彼も人なり。我も人なり。然はあれどこの家居のさまこそ譬へても言はれね。聖と世の常の人との別もかくやあらん。方形をなして、いろ〳〵なる全身像、半身像を据ゑつけたる、白塗の　廊のいと高きが、小き園繞れるあり。（後にはこゝに瓦を敷きて中庭とせり。）高き蘆薈、霸王樹なんど、廊の柱に攀ぢんとす。檸檬樹はまだ日の光に黄金色に染められざる、緑の實を垂れたり。希臘の舞女の形したる像二つあり。力を併せて、金盤一つさし上げたるがその縁少しく欹だちて、水は肩に迸り落ちたり。丈高く育ちたる水草ありて、露けき緑葉もてこの像を掩はんとす。烈しき日に焼かれたるカムパニアの瘠土に比ぶるときは、この園の涼しさ、香しさ奈何ぞや。

　闊き大理石の梯を登りぬ。龕あまたありて、貴き石像立てり。其一つをば、ドメニカ聖母ならんと思ひ惑ひて、立ち停りてぬかづきぬ。後に聞けば、こはヱスタの像なりき。これも人間の奇しき處女にぞありける。（譯者のいはく。希臘の竈の神なり。男神二人に挑まれて、嫁せずして終りぬと云ひ傳ふ。）飾美しき「リフレア」着たる僮出で迎へつ。その面持の優しさには、こゝの間ごとの大さ、美しさかくまでならずば、我胸の躍ることさへ治りしならん。床は鏡の如き大理石なり。壁といふ壁には、めでたき畫を貼したり。その間々には、玻※鏡を嵌め、その上に花束、はなの環など持たる神童の飛行せるを畫きたり。又色美しき鳥の、翼を放ちて、赤き、黄なる、さま〴〵〳〵の木の實を啄めるを畫きたるあり。かく華やかなるものをば、今まで見しことあらざりき。

　暫し待つほどに、あるじの君出でましぬ。白衣着たる、美しき貴婦人の、大なる敏き目を我等に注ぎたるを、伴ひ給へり。婦人は我額髪を撫で上げ、鋭けれども優しき目にて、我面を打ち守り、さなり、君を助けしは神のみつかひなり、この見ぐるしき衣の下に、翼はかくれたるべしと宣ひぬ。主人。否、この兒の紅なる頬を見給へ。翼の生ゆるまでにはテヱエルの河波あまた海に入るならん。母もこの兒の飛び去らんをば願はざるべし。さにあらずや。この兒を失はんことは、つらかるべし。嫣。げにこの兒あらずなりなば、我小家の戸も窓も塞がりたるやうなる心地やせん。我小家は暗く、寂しくなるべし。否、このかはゆき兒には、われえ別れざるべし。婦人。されど今宵しばらくは、別るとも好からん。二三時間立ちて迎へに來よ。歸路は月あかゝるべし。そち達は盜を恐るゝことはあらじ。主人。さなり。兒をばしばしこゝにおきて、買ふものあらば買ひもて來よ。斯く云ひつゝ、主人は小き財嚢をドメニカが手に渡し、猶何事をか語り給ふに、我は貴婦人に引かれて奥に入りぬ。

　奥の座敷の美しさ、賓客の貴さに、我魂は奪はれぬ。我はあるは壁に畫ける神童の面の、緑なる草木の間にほゝゑめるを見、あるは日ごろ半ば神のやうにおもひし、紫の韈穿ける議官、紅の袴着たる僧官達を見て、おのれがかゝる間に入り、かゝる人に交ることを訝りぬ。殊に我眼をひきしは、一間の中央なる大水盤なり。醜き龍に騎りたる、美しきアモオルの神を据ゑたり。龍の口よりは、水高く迸り出でゝ、又盤中に落ちたり。

　貴婦人のこはをぢの命を救ひし兒ぞ、と引き合せ給ひしとき、賓

客達は皆ほゝゑみて、我に詞を掛け、議官僧官さへ頷き給ひぬ。法皇の禁軍の號衣を着たる、少く美しき士官は我手を握りぬ。人々さま〳〵＼の事を問ふに、我は臆することなく答へつ。その詞に、人々或は譽めそやし、或は高く笑ひぬ。主人入り來りて、我に歌うたへといふに、我は喜んで命に從ひぬ。士官は我に報せんとて、泡立てる酒を酌みてわたしゝかば、我何の心もつかで飲み乾さんとせしに、貴婦人快く傍より取り給ひぬ。我口に入りしは少許なるに、その酒は火の如く※の如く、脈々をめぐりぬ。貴婦人はなほ我傍を離れず、笑を含みて立ち給へり。士官我にこの御方の上を歌へと勸めしに、我又喜んで歌ひぬ。何事をか聯ねけん、いまは覺えず。人々はわが詞の多かりしを、才豐なりと稱へ、わが臆せざるを、心敏しと譽めたり。カムパニアなる貧きものゝ子なりとおもへば、世の常なる作をも、天才の爲せるわざの如く、愛でくつがへるなるべし。人々は掌を鳴せり。士官は座の隅なる石像に戴かせたりし、美しき月桂冠を取り來りて、笑みつゝ我頭の上に安んじたり。こは固より戲謔に過ぎざりき。されどわが幼き心には、其間に眞面目なる榮譽もありと覺えられて、又なく嬉しかりき。我は尚席上にて、マリウチア、ドメニカ等に教へられし歌をうたひ、又曠野の中なる古墳の栖家、眼の光おそろしき水牛の事など人々に語り聞せつ。時は惜めども早く過ぎて、我は嬶に引かれて歸りぬ。くだもの、果子など多く賜り、白銀幾つか兜兒にさへ入れられたるわが喜はいふもさらなり、嬶は衣服、器什くさ〳〵＼の外、二瓶の葡萄酒をさへ購ひ得て、幸ある日ぞとおもふなるべし。夜は草木の上に眠れり。されど仰いでおほ空を見れば、皎々たる望月、黄金の船の如く、藍碧なる青雲の海に泛びて、焦れたるカムパニアの野邊に涼をおくり降せり。

家に還りてより、優しき貴女の姿、賑はしき拍手の聲、寤寐の間斷えず耳目を往來せり。喜ばしきは折々我夢の現になりて、又ボルゲエゼの館に迎へらるゝ事なりき。かの貴婦人はわが人に殊なる性を知りておもしろがり給へば、我も亦ドメニカに對する如く、これに對して物語するやうになりぬ。貴婦人はこれを興あることに思ひて、主人の君に我上を譽め給ふ。主人の君も我を愛し給ふ。この愛は、曩に料らずも我母上を、おのが車の轍にかけしことありと知りてより、愈 深くなりまさりぬ。逸したる馬の母上を踏仆しゝとき、車の中に居たるは、こゝの主人の君にぞありける。

貴婦人の名をフランチエスカといふ。我を率て宮のうちなる畫堂に入り給ひぬ。美しき畫幀に對して、我が穉き問、癡なる評などするを、面白がりて笑ひ給ひぬ。後人々に我詞を語りつぎ給ふごとに、人々皆聲高く笑はずといふことなし。午前は旅人この堂に滿ちたり。又畫工の來ていろ〳〵＼なる畫を寫し取れるもあり。午後になれば、堂中に人影なし。此時フランチエスカの君我を伴ひゆきて、畫ときなどし給ふなり。

特に我心に※ひしは、フランチエスコ・アルバニが四季の圖なり。「アモレツトオ」といふ者ぞ、と教へられたる、美しき神の使の童どもは、我夢の中より生れ出でしものかと疑はる。その春と題したる畫の中に群れ遊べるさまこそ愛でたけれ。童一人大なる砥を運すあれば、一人はそれにて鏃を研ぎ、外の二人は上にありて飛行しつゝも、水を砥の上に灌げり。夏の圖を見れば、童ども樹々のめぐりを飛びかひて、枝もたわゝに實りたる果を摘みとり、又清き流を泳ぎて、水を弄びたり。秋は獵の興を寫せり。手に繼松取りたる童一人小車の裡に坐したるを、友なる童子二人牽き行くさまなり。愛はこ

の優しき獵夫に、共に憩ふべき處を指し示せり。冬は童達皆眠れり。美しき女怪水中より出でゝ、眠れる童たちの弓矢を奪ひ、火に投げ入れて焚き棄つ。

神の使の童をば、何故「アモレツトオ」（愛の神童）といふにか。その「アモレツトオ」は、何故箭を放てる。こは我が今少し詳に知らんと願ふところなれど、フランチエスカの君は教へ給はざりき。君の宣ふやう。そは文にあれば、讀みて知れかし。おほよそ文にて知らるゝことは、その外にもいと多し。されど讀みおぼゆる初は、あまり樂しきものにはあらず。汝は終日榻に坐して、文を手より藉かじと心掛くべし。カムパニアの野にありて、山羊と戯れ、友達を訪はんとて走りめぐることは、叶はざるべし。そちは何事をか望める。かのフアビアニの君のやうなる、美しき軍服に身をかためて、羽つきたる※を戴き、長き劍を佩きて、法皇のみ車の傍を騎りゆかんとやおもふ。さらずば美しき畫といふ畫を、殘なく知り、はてなき世の事を悟り、我が物語りしよりも、※に面白き物語のあらん限を記えんとや思ふ。我。されど左樣なる人になりては、ドメニカが許には居られぬにや。また御館へは來られぬにや。フランチエスカ。汝は猶母の上をば忘れぬなるべし。初の栖家をも忘れぬなるべし。亡き母御にはぐゝまれ、かの栖家にありしときは、ドメニカが事をも、我上をも思はざりしならん。然るに今はドメニカと我と、そちに親きものになりぬ。この交もいつか更ることあらん。かく更りゆくが人の身の上ぞ。我。されどおん身は、我母上の如く果敢なくなり給ふことはあらじ。斯く云ひて、我は涙にくれたり。フランチエスカ。死にて別れずば、生きながら分れんこと、すべての人の上なり。そちが我等とかく交らぬやうにならん折、そちが上の樂しく心安かれ、とおもひてこそ、我は今よりそちが發落を心にかくるなれ。我涙は愈　繁くなりぬ。我はいかなる故と、明には知らざりしが、斯く諭されたる時、限なき幸なさを覺えき。フランチエスカは我頬を撫でゝ、我が餘りに心弱きを諫め、かくては世に立たんをり、いと便なかるべしと氣づかひ給ひぬ。この時主人の君は、曾て我頭の上に月桂冠を戴せたるフアビアニといふ士官と倶に一間に歩み入り給ひぬ。

ボルゲエゼの別墅に婚禮あり。世に罕なるべき儀式を見よ。この風説は或るタカムパニアなるドメニカがあばら屋にさへ洩れ聞えぬ。フランチエスカの君はかの士官の妻になるべき約を定めて、遠からずフイレンチエなるフアビアニ家の莊園に遷らんとす。儀式あるべき處は羅馬附近の別墅なり。※いとすぎ桂など生ひ茂りて、四時緑なる天を戴けり。昔も今も、羅馬人と外國人と、恆に來り遊ぶ處なり。麗しく飾りたる馬車は、緑しげき　とある高窓の背後に、男女の影うつれり。あれこそ夫婦の君なれと、ドメニカ耳語きぬ。二人の影は相依りて、接吻する如くなりき。ドメニカは合掌して祈祷の詞を唱へつ。我も暗きいとすぎの木の下についゐて、恩人の上を神に祈りぬ。我傍なるドメニカは二人の御上安かれとつぶやきぬ。烟火の星の、數知れず亂れ落るは、我等が祈祷に答ふる如くなりき。されどドメニカは泣きぬ。こは我がために泣くなり。我が遠からず、分れ去るべきをおもひて泣くなり。ボルゲエゼの主人の君は、「ジエスヰタ」派の學校の一座を買ひて我に取らせ給ひしかば、我はカムパニアの野と牧者の媼とに別れて、我行末のために修行の門出せんとす。ドメニカは歸路に我にいふやう。我目の明きたるうちに、おん身と此野道行かんこと、今日を限なるべし。ドメニカなどの知

らぬ、滑なる床、華やかなる氈をや、おん身が足は踏むならん。されどおん身は優しき兒なりき。人となりてもその優しさあらば、あはれなる我等夫婦を忘れ給ふな。あはれ、今は猶果敢なき燒栗もて、おん身が心を樂ましむることを得るなり。おん身が籐を焚く火を煽ぎ、栗のやくるを待つときは、我はおん身が目の中に神の使の面影を見ることを得るなり。かく果敢なき物にて、かく大なる樂をなすことは、おん身忘れ給ふならん。カムパニアの野には薊生ふといへど、その薊には尚紅の花咲くことあり。富貴の家なる、滑なる床には、一本の草だに生ひず。その滑なる上を行くものは、蹉き易しと聞く。アントニオよ。一たび貧き兒となりたることを忘るな。見まくほしき物も見られず、聞かまくほしき事も聞かれざりしことを忘るな。さらば御身は世に成りいづべし。我等夫婦の亡からん後、おん身は馬に騎り、又は車に乘りて、昔の破屋をおとづれ給ふこともあらん。その時はおん身に搖られし籃の中なる兒は、知らぬ牧者の妻となりて、おん身が前にぬかづくならん。おん身は人に驕るやうにはなり給はじ。その時になりても、おん身は我側に坐して栗を燒き、又籃を搖りたることを思ひ給ふならん。言ひ畢りて、媼は我に接吻し、面を掩ひて泣きぬ。我心は鍼もて刺さるゝ如くなりき。この時の苦しさは、後の別の時に增したり。後の別の時には、媼は泣きつれど、何事をもいはざりき。既に閾を出でしとき、媼走り入りて、薫に半ば黒みたる聖母の像を、扉より剥ぎ取りて贈りぬ。こは我が屢　接吻せしものなり。まことにこの媼が我におくるべきものは、この外にはあらぬなるべし。

學校、えせ詩人、露肆

フランチエスカの君は夫に隨ひて旅立ち給ひぬ。我は「ジエスヰタ」派の學校の生徒となりたり。わが日ごとの業もかはり、われに交る人の面も改まりて、定なき演劇めきたる生涯の端はこゝに開かれぬ。時々刻々の變化のいと繁きに、歳月の遷りゆくことの早きことのみぞ驚かれし。當時こそ片々の畫圖となりて我目に觸れつれ、今に至りて首を回せば、その片々は一幅の大畫圖となりて我前に横はれり。是れわが學校生活なり。旅人の高山の巓に登り得て、雲霧立ち籠めたる大地を看下すとき、その雲霧の散るに從ひて、忽ち隣れる山の尖あらはれ、忽ち日光に照されたる谿間の見ゆるが如く、我心の世界は漸く開け、漸く擴ごりぬ。カムパニアの野を圍める山に隔てられて、夢にだに見えざりける津々浦々は、次第に浮び出で、歴史はそのところ／〃＼に人を住はせ、そのところ／〃＼にて珍らしき昔物語を歌ひ聞せたり。一株の木、一輪の花、いづれか我に興を與へざる。されど最も美しく我前に咲き出でたるは、わが本國なる伊太利なりき。我も一個の羅馬人ぞとおもふ心には、我を興起せしむる力なからんや。我都のうちには、寸尺の地として、我愛を引き、我興を催さゞるものなし。街の傍に棄てられて、今は界の石となりたる、古き柱頭も、わがためには、神聖なる記念なり、わがためには、めでたき音色に心を惱ますメムノンが塔なり。（昔物語にアメノフイスといふ王ありき。エチオピアを領しつるが、希臘のアヒルレエスに滅されぬ。その像を刻める塔、埃及なるヂオスポリスに立てり、日出日沒ごとに鳴るといひ傳ふ。）テエエル河に生ふる蘆の葉は風に戰ぎて、我にロムルスとレムスとの上を語れり。凱旋門、石の柱、石の像は、皆我心に本國の歴史を刻ましめんとす。我

心はつねに古希臘、古羅馬の時代に遊びて、師の賞譽にあづかりぬ。

凡そ政界にも、教界にも、旗亭に集まるものも、富豪の骨牌卓のめぐりに寄るものも、社會といふ社會の限、必ず太郎冠者のやうなるものありて、もろ人の嘲戯は一身に聚まる習なり。學校にも亦此の如き人あり。我等少年生徒の眼は、早くも嘲戯の的を見出したり。そは我等が教師多かる中にて、最眞面目なる、最怒り易き、最可笑しき一人なりき。名をば「アバテ」ハツバス・ダアダアとなんいひける。元と亞拉伯の産なるが、穉き時より法皇の教の庭に遷されて、こゝに生ひ立ち、今はこの學校の趣味の指南役、テヱエル大學院の審美上主權者となりぬ。

詩といふ神のめづらしき賜につきては、われ人となりて後、屡考へたづねしことあり。詩は深山の裏なる黄金の如くぞおもはるゝ。家庭と學校との教育は、さかしき鑛掘、鑛鋳などのやうに、これを索め出だし、これを吹き分くるなり。折々は初より淨き黄金にいで逢ふことあり。自然詩人が即興の抒情詩これなり。されど鑛山の出すものは黄金のみにあらず。白銀いだす脈もあり。錫その外卑き金屬を出す脈もあり。その卑きも世に益あるものにしあれば、只管に言ひ腐すべきにもあらず。これを磨き、これに鏤むるときは、金とも銀とも見ゆることあらん。されば世の中の詩人には、金の詩人、銀の詩人、銅の詩人、鐵の詩人などありとも謂ふことを得べし。こゝに此列に加はるべきならぬ、埴もて物作る人ありて、強ひて自ら詩人と稱す。ハツバス・ダアダアは實にその一人なりき。

ハツバス・ダアダアは當時一流の埴瓮つくりはじめて、これを氣象情致の※に優れたる詩人に擲げ付け、自ら恥づることを知らざりき。字法句法の輕捷なる、體制音調の流麗なる、詩にあらねども詩とおもはれ、人々の喝采を受けたり。平生ペトラルカを崇むも、その「ソネツトオ」の音調のみ會し得たるにやあらん。さらずば、矮人觀場なりしか。又狂人にありといふなる固執の妄想か。兎まれ角まれ、ペトラルカとハツバス・ダアダアとは似もよらぬ人なるは、爭ひ難かるべし。ハツバス・ダアダアは我等にかの亞弗利加と題したる、長き敍事詩の四分の一を諳誦せしめんとせしかば、幾行の涙、幾下の鞭か、我等が世々のスチピオを怨む媒をなしたりけん。

ペトラルカは基督暦千三百四年七月二十日アレツツオに生れき。いにしへの希臘羅馬時代にのみ眼を注ぎたりしが、千三百二十七年アヰニヨンにてラウラといふ婦人に逢ひ、その戀に引かれて、又現世の詩人となりぬ。おのが上と世々のスチピオ（羅馬の名族）の上とを、千載の下に傳へんと、長篇の敍事詩亞弗利加を著しつ。今はその甚だ意を經ざりし小抒情詩世に行はれて、復た亞弗利加を説くものなし。

我等は日ごとにペトラルカの深邃なる趣味といふことを教へられき。ハツバス・ダアダアの云ふやう。膚淺なる詩人は水彩畫師なり、空想の子なり。凡そ世道人心に害あること、これより甚しきものあらじ。その群にて最大なりとせらるゝダンテすら、我眼より見るときは、小なり、極めて小なり。ペトラルカは抒情詩の寸錦のみにても、尚朽ちざることを得べきものなり。ダンテは不朽ならんがために、天堂人間地獄をさへ擔ひ出しゝものなり。さなり。ダンテも韻語を以ばば聯ねたり。そのバビロン塔の如きもの、後の世に傳はりたるは、これが爲なり。されど若しその詞だにも拉甸ならましかば、後の世の人せめては彼が學殖をおもひて、些の敬をば起すなるべし。さるを彼は俚言もて歌ひぬ。ボツカチヨオの心醉せる、これを評して、

獅の能く泳ぎ、羊の能く踏むべき波と云ひき。我はその深さをも、その易さをも見ること能はず。通篇脚を立つべき底あることなし。唯だ昔と今との間を、ゆきつ戻りつするを見るのみ。我が眞理の聖使たるペトラルカを見ずや。既往の天子法皇を捉へて、地獄に堕すを、手柄めかすやうなる事をばなさず、その生れあひたる世に立ちて、男性のカツサンドラ（希臘の昔物語に見えたる巫女）となり、法皇王侯の嗔を懼れずして預言したるは、希臘悲壯劇の中なる「ホロス」の群の如くなりき。嘗て面り査列斯四世を刺りて、徳の遺傳せざるをば、汝に於いてこれを見ると云ひき。羅馬と巴里とより、月桂冠を贈らんとせしとき、ペトラルカは敢て輒ち受けずして、三日の考試に應じき。その謙遜なりしこと、今の兒曹も及ばざるべし。考試畢りて後、彼は「カピトリウム」の壇に上りぬ。拿破里の王は手づから濃紫の袍を取りて、彼が背に被せき。これに月桂の環をわたしたるは、羅馬の議官なりき。此の如き光榮は、ダンテの身を終ふるまで受くること能はざりしところなり。

ダンテは千二百六十五年フイレンチエに生れぬ。そのはじめの命名はヅランテなりき。神曲に見えたるベアトリチエとの戀は、夙く九歳の頃より始りぬ。千二百九十年戀人みまかりぬ。是れダンテが女性の美の極致にして、ダンテはこれに依りて、心を淨め懐を崇うせしなり。アレツツオとピザとの戰ありしときは、ダンテ軍人たりき。後政治家となりて、千三百二十一年ラヱンナにて歿す。

ハツバス・ダアダアが講説は、いつも此の如くペトラルカを揚げダンテを抑ふるより外あらざりき。この兩詩人をば、匂ふ菫花、燃ゆる薔薇の如く並び立たせてもあるべきものを。ペトラルカが小抒情詩をば、盡く諳んぜしめられき。ダンテが作をば生徒の目に觸れしめざりき。我は僅に師の詞によりて、そのおもなる作は、地獄、淨火、天堂の三大段に分れたるを知れりしのみ。この分けかたは、既に我空想を喚び起して、これを讀まんの願は、我心に溢れたり。されどダンテは禁斷の果なり。その味は、竊むにあらでは知るに由なし。

或る日ピアツツア、ナヲネ（大なる廣こうぢにて、夏の頃水を湛ふることあり）を漫歩して、積み疊ねたる柑子、地に委ねたる鐵の器、破衣、その外いろ〳〵の骨董を列ねたる露肆の側に、古書古畫を賣るものあるを見き。こゝに卑き戯畫あれば、かしこに刃を胸に貫きたる聖母の圖あり。似も通はぬものゝ伍をなしたる中に、ふとメタスタジオが詩集一巻我目にとまりぬ。我懐には猶一「パオロ」ありき。こは半年前ボルゲエゼの君が、小遣錢にせよと賜りし「スクヂイ」の殘にて、わがためには輕んじ難き金額なりき。（一「スクウド」は約我一圓五十錢に當る。十「パオリ」に換ふべし。一「パオロ」は十五錢許なり。十「バヨツチ」に換ふべし。「スクウド」、「パオロ」は銀貨、「バヨツチ」は銅貨なり。）幾個の銅錢もて買ふべくば、この巻見※すべきものならねど、「パオロ」一つを手離さんはいと惜しとおもひぬ。價を論ずれども成らざりしかば、思ひあきらめて立ち去らんとしたる時、一書の題簽に「ヂヰナ、コメヂア、ヂ、ダンテ」（ダンテが神曲）と云へるあるを見出しつ。嗚呼、これこそは我がために、善惡二途の知識の木になりたる、禁斷の果なれ。われはメタスタジオの集を擲ちて、ダンテの書を握りつ。さるに哀きかな、この果は我手の屆かぬ枝になりたり。その價は二「パオリ」なりき。露肆の主人は、一錢も引かずといふに、わ

が銀錢は掌中に熱すれども、二つにはならず。主人、こは伊太利第一の書なり、世界第一の詩なりと稱へて、おのれが知りたる限のダンテの名譽を説き出しつ。ハツバス・ダアダアには無下にいひけたれたるダンテの名譽を。

　露肆の主人のいふやう。この卷は一葉ごとに一場の説教なり。これを書きしは、かう〳〵しき預言者にて、その指すかたに向ひて往くものは、地獄の火　を踏み破りて、天堂に抵らんとす。若き華主よ。君はまだ此書を讀み給ひし事なきなるべし。然らずば君一「スクウド」をも惜み給はぬならん。二「パオリ」は言ふに足らざる錢なり。それにて生涯讀み厭くことなき、伊太利第一の書を藏することを得給はゞ、實にこよなき幸ならずや。

　嗚呼、われは三「パオリ」をも惜まざるべし。されど我手中にはその錢なきを奈何せん。かの伊蘇普が物語に、おのがえ取らぬ架上の葡萄をば、酸しといひきといふ狐の事あり。われはその狐の如く、ハツバス・ダアダアに聞きたるダンテの難を囀り出し、その代にはいたくペトラルカを讃め稱へき。露肆の主人は聞畢りて。さなりさなり。おのれの無學なる、固より此の如き大家を回護せん力は侍らず。されど君もまだ歳若ければ、此の如き大家を非難すべきにあらざるべし。おのれはえ讀まぬものなり。君は未だ讀まざるものなり。されば褒むるも貶すも、遂に甲斐なき業ならずや。唯だ訝かしきは、君はまだ讀まぬ書をいひおとし給ふことの苛酷なることぞといふ。われは心に慙ぢて、我詞の全く師の口眞似なるを白状したり。主人も我が樸直なるをや喜びけん、書を取りて我にわたしていふやう。好し、一「パオロ」にて君に賣らん。その代には早く讀み試みて、本國の大詩人をあしざまに言ふことを止め給へ。

神曲、吾友なる貴公子

　何等の快事ぞ。神曲は今我書となりぬ。我が永く藏することを得るものとなりぬ。ハツバス・ダアダアが非難をば、我始より深く信ぜざりき。わが奇を好む心は、かの露肆の主人が言に挑まれて、愈熾になりぬ。われは人なき處に於いて、はじめて此卷を繙かん折を、待ち兼ぬるのみなりき。

　われは生れかはりたる如くなりき。ダンテは實にわがために、新に發見したる亞米利加なりき。我空想は未だ一たびも斯く廣大に、斯く豐饒なる天地を望みしことなかりしなり。その岩石何ぞ峨々たる。その色彩何ぞ奕々たる。我は作者と共に憂へ、作者と共に樂み、作者と共に當時の生活を閲し盡したり。地獄の關に刻めりといふ銘は、全篇を讀む間、我耳に響くこと、世の末の裁判の時、鳴りわたるらん鐘の音の如くなりき。その銘に云く。

　こゝすぎて　うれへの市に
　こゝすぎて　歎の淵に
　こゝすぎて　浮ぶ時なき
　群に社　人は入るらめ
あたゝかき　情はあれど
　おぎろなき　心にたづね
きはみなき　ちからによりて
　いつくしき　法をうき世に
しめさんと　この關の戸を
　神や据ゑけん

われは※風に捲き起さるゝ沙漠の砂の如き、常に重く又暗き空氣を見き。われは亡魂の風に向ひて叫喚するとき、秋深き木葉の如く墜ちゆく亞當が族を見き。而れども言語の未だ血肉とならざりし世にありし靈魂の王たる人々のこゝにあるを見るに※びて、我眼は千行の涙を流しつ。ホメロス、ソクラテエス、ブルツス、ヰルギリウス、これ皆永く樂土の門に入ること能はずしてこゝに留りたるものなりき。ダンテが筆は、此等の人に、地獄といふに負かざらん限の、安さ樂しさを與へたれど、そのこゝにあるは、呵責ならぬ苦、希望なき恨にして、長く浮ぶ瀕なき罪人の陷いるなる、毒泡迸り、瘴烟立てる、深き池沼に圍まれたる大牢獄の裡なること、よその罪人に殊ならず。われはこれを讀みて、平なること能はざりき。基督の一たび地獄に降りて、又主の傍に昇りしとき、彼は何故にこゝの谿間の人々を隨へゆかざりしか。彼は當時同じ不幸にあへるものに、同じ憐を垂れざることを得たりしか。われは讀むところの詩なるを忘れつ。沸きかへる膠の海より聞ゆる苦痛の聲は、我胸を衝きたり。われは「シモニスト」の群を見き。その浮き出でゝは、鬼の持てる鋭き鐵搭にかけられて、又沈めらるゝを見き。ダンテが敍事の生けるが如きために、其狀深くも我心に彫りつけられたるにや、晝は我念頭に上り、夜は我夢中に入りぬ。我囈語の間には、屢「パペ、サタン、アレツプ、サタン、パペ」といふ詞聞えぬ。こはわが讀みたる神曲の文なるを、同房の書生はさりとも知らねば、我魂まことに惡魔に責められたるかと疑ひ惑ひぬ。教場に出でゝも、我心は課程に在らざりき。師の聲にて、アントニオよ、又何事をか夢みたる、と問はるゝ毎に、われは且恐れ且恥ぢたり。されどこの儘に神曲を擲たんことは、わがなすこと能はざるところなりき。

我が暮らす日の長く又重きことは、ダンテが地獄にて負心の人の被るといふ鍍金したる鉛の上衣の如くなりき。夜に入れば、又我禁斷の果に匍ひ寄りて、その惡鬼に我妄想の罪を數めらる。かの人を螫しては※に入り、一たびは烟となれど、又「フヨニツクス」（自ら焚けて後、再び灰より生るゝ怪鳥）の如く生れ出でゝ、毒を吐き人を傷るといふ蛇の刺をば、われ自ら我膚の上に受くと覺えき。

わが夢中に地獄と呼び、罪人と叫ぶを聞きて、同房の書生は驚き醒むることしばゝなりき。或る朝老僧の舍監を勤むるが、我臥床の前に來しに、われ眠れるまゝに眼を※き、おのれ魔王と叫びもあへず、半ば身を起してこれに抱きつき、暫し角力ひて、又枕に就きしことあり。

わがよなゝ惡魔に責めらるといふ噂は、やうゝ高くなりぬ。我床には呪水を灑ぎぬ。わが眠に就くときは、僧來りて祈祷を勸めたり。此處置は益　我心を妥ならざらしめき。囈語の由りて出づるところは、われ自ら知れり。これを隱して人を欺くことの快からぬために、我血はいよゝゝ騷ぎ立ちぬ。數日の後、反動の期至り、我心は風の吹き荒れたる迹の如くなりぬ。

學校の書生衆しといへども、その家世、その才智、並に人に優れたるは、ベルナルドオといふ人なりき。遊戲に日をおくるは咎むべきならねど、あまりに情を放ちて自ら恣にするさまも見えき。或ときは四層の屋の棟に騎り、或ときは窓より窓にわたしたる板を踐みて、人の膽を寒からしめき。凡そこの學校國に、内訌起りぬといふときは、其責は多く此人の身に歸することなり。しかもベルナルドオこれを寃とすること能はざるが常なりき。舍内の靜けさ、僧尼の房の如くならんは、人々の願なるに、このベルナルドオあるがため

に、平和はいつも破られき。されど彼が戯は人を傷ふには至らざりしが、獨りハツバス・ダアダアに對しての振舞は、やゝ中傷の嫌ありとおもはれぬ。ハツバス・ダアダアはこれを憎みてあはれ福の神は、直なる「ピニヨロ」の木を顧みで、珠を朽木に抛げ與へしよ抔いひぬ。ベルナルドオは羅馬の議官の甥にて、その家富みさかえたればなるべし。

ベルナルドオは何事につけても、人に殊なる見を立て、これを同學のものに説き聞かせて、その聽かざるものをば、拳もて制しつれば、いつも級中にて、出色の人物ともてはやされき。彼と我とは性質太く異なるに、彼は能く我に親みき。唯だわがあまりに爭ふ心に乏きをば、ベルナルドオ嘲り笑ひぬ。

或時ベルナルドオの我にいふやう。われ若し我拳の、一たび爾を怒らしむるを知らば、われは必ず爾を打つべし。汝は人に本性を見するときなきか。わが汝を嘲るとき、汝は何故に拳を揮ひて我面を撲たんとせざる。その時こそ我は汝がまことの友となるならめ。されど今はわれこの望を絶ちたりといひき。

わがダンテの熱の少しく平らぎたる頃なりき。ひと日ベルナルドオは我前なる卓に腰掛けて、しばし故ありげなる笑をもらしつゝ我顔を見つめ居たるが、忽ち我にいふやう。汝は我にもまして横着なる男なり。善くも狂言して人を欺くことよ。床は呪水に濡らされ、身は護摩の煙に薫さるゝは、これがために非ずや。我知らじとやおもふ、汝はダンテを讀みたるを。

血は我頬に上りぬ。われは爭でかさる禁を犯すべきと答へき。ベルナルドオのいはく。汝が昨夜物語りし惡魔の事は、全く神曲の中なる惡魔ならずや。汝が空想はゆたかなれば、わが説くを厭かず聽くならん。地獄に火　の海、瘴霧の沼あるは、汝が早くより知るところならん。されど地獄には又深き底まで凍りたる海あり。その中に閉ぢられたる亡者も亦少からず。その底にゆきて見れば、恩に負きし惡人ども集りたり。「ルチフエエル」（魔王）も神に背きし報にて、胸を氷にとぢられたるが、その大いなる口をば開きたり。その口に墮ちたるは、ブルツス、カツシウス、ユダス・イスカリオツトなり。中にもユダス・イスカリオツトは、魔王が蝙蝠の如き翼を振ふ隙に、早く半身を喉の裡に沒したり。この「ルチフエエル」が姿をば、一たび見つるもの忘るゝことなし。われもダンテが詩にて、彼奴と相識になりたるが、汝はよべの囈語に、その魔王の状を、詳に我に語りぬ。その時われは今の如く、汝はダンテを讀みたるかと問ひぬ。夢中の汝は、今より直にて、我に眞を打ち明け、ハツバス・ダアダアが事をさへ語り出でぬ。何故に覺めたる後には我を隔てんとする。我は汝が祕事を人に告ぐるものにあらず。汝が禁を犯したるは、汝が身に取りて譽となすべき事なり。我は久しく汝が上にかゝることあらんを望みき。されど彼書をば、汝何處にてか獲つる。我も一部を藏したれば、汝若し蚤く我に求めば、我は汝に借しゝならん。我はハツバス・ダアダアがダンテを罵りしを聞きしより、その良き書なるを推し得て、汝に先だちて買ひ來りぬ。われは長く机に倚ることを好まず。神曲の大いなる二卷には、我とほ〳〵厭みしが、これぞハツバス・ダアダアが禁ずるところとおもひ〳〵、勇を鼓して讀みとほしつ。後にはかのふみ我にさへ面白くなりて、今は早や三たび閲しつ。その地獄のめでたさよ。汝はハツバス・ダアダアの墮つべきを何處とか思へる。火のかたなるべきか、冰のかたなるべきか。

わが祕事は訐かれたり。されどベルナルドオはこれを人に語るべくもあらず。ベルナルドオとわれとの交は、この時より一際密になりぬ。旁に人なき時は、われ等の物語は必ず神曲の事にうつりぬ。わがこれを讀みて感じたるところをば、必ずベルナルドオに語り聞かせたり。この間にわが文字を知りてよりの初の詩は成りぬ。その題はダンテと其神曲となりき。

わが買ひ得たる神曲の首には、ダンテが傳を刻したりき。そはいたく省略したるものなりしかど、尚わが詩材とするに堪へたれば、われはこれに據りて、此詩人の生涯を歌ひき。ベアトリチエとの淨き戀、戰爭の間の苦、逐客となりてアルピイ山を踰えし旅の憂さ、異鄕の鬼となりし哀さ、皆我詩中のものとなりぬ。わが最も力を用ゐしは、ダンテが靈魂天翔りて、人間地獄を見おろす一段なりき。その敍事は省筆を以て、神曲の梗概を摸寫したるものなりき。淨火は又燃え上れり。果實累々たる、樂園の木のこずゑは、漲り落つる瀑布の水に浸されたり。ダンテが乘りたる、そら行く舟は、神童の白く大なる翼を帆としたり。その舟次第に騰りゆく程に、山々は搖り動されたり。太陽とそのめぐりなる神童の群とは、明鏡の如く、神の光明を映じ出せり。この時に遇ふものは、賢きも愚なるも、こゝろ〳〵〳〵に無上の樂を覺えたり。

誦してベルナルドオに聞せしに、彼はこれを激稱せり。彼のいはく。アントニオよ。次の祭の日には、汝其詩を讀み上げよ。ハツバス・ダアダアいかなる面をかすらん。面白し〳〵。汝が讀むべき詩は、その外にはあらじ。斯く勸めらるゝに、われは手を揮りて諾はざりき。ベルナルドオ語を繼ぎていふやう。さらば汝はえ讀まぬなるべし。我にその詩を得させよ。われダンテの不朽をもて、ハツバス・ダアダアを苦めんとす。汝はおのが美しき羽を拔きて、このおほおそ鳥を飾らんを惜むか。讓るは汝が常の德にあらずや。いかに〳〵、と勸めて止まざりき。我もその日のありさまいかに面白からんとおもへば、詩稿をば直にベルナルドオにわたしつ。

今も西班牙廣こうぢの「プロパガンダ」といふ學校にては、毎年一月十三日に、祭の式行はるゝ事なるが、當時は「ジエスヰタ」學校に、おなじ式ありき。諸生徒はおの〳〵その故鄕の語、若くはその最も熟したる語にて、一篇の詩を作り、これを式場に持ち出でゝ讀むことなり。題をば自ら撰びて、師の認可を請ひ、さて章を成すを法とす。

題の認可の日に、ハツバス・ダアダアはベルナルドオにいふやう。君は又何の題をも撰び給はざりしならん。君は歌ふ鳥の群にあらねば。ベルナルドオのいはく。否。ことしは例に違ひて作らんとおもへり。伊太利詩人の中にて題とすべきものを求めたるが、その第一の大家を歌はんは、わが力の及ばざるところなり。さればわれは稍※小なるものをとて、ダンテを撰びぬ、ハツバス・ダアダア冷笑ひていふ。ダンテを詠ずとならば、定めて傑作をなすなるべし。そは聞きものなり。さはあれ式の日には、僧官たちも皆臨席せらるゝが上に、外國の貴賓も來べければ、さる戲はふさはしからず。謝肉の祭をこそ待ち給ふべけれ。この詞にて、他人ならば思ひとゞまるべきなれど、ベルナルドオはなか〳〵屈すべくもあらず。別の師の許を得て、かの詩を讀むことゝ定めき。われは本國を題として、新に一篇を草しはじめつ。

學校の規則には、詩賦は他人の助を藉ることを允さずと記したり。されどいつも雨雲に蔽はれたるハツバス・ダアダアが面に、些の日

光を見んと願ふものは、先づ草稿を出して閲を請ひ、自在に塗抹せしめずてはかなはず。大抵原の語は、纔にその半を存するのみなり。さて詩の拙さは、すこしも始に殊ならず。その始に殊なるは、唯だその癖、その手段のみなるべし。斯く改めたる作、他日よそ人に譽められるゝ時は、ハツバス・ダアダアは必ずおのれが刪潤せしを告ぐ。こたび讀むべき詩も、多く一たびハツバス・ダアダアが手を經たるが、ひとりベルナルドオが詩のみは、遂にその目に觸れざりき。

　兎角する程にその日となりぬ。馬車は次第に學校の門に簇りぬ。老僧官たちは、赤き法衣の裾を牽きて式場に入り、美しき椅子に倚り給ひぬ。詩の題、その國語、その作者など列記したる刷ものは、來賓に頒たれぬ。ハツバス・ダアダア先づ開場の演説をなし、諸生徒は次を逐ひて詩を讀みたり。シリア、カルデア、新埃及、其外梵文英語の作さへありて、その耳ざはり愈　あやしうして、喝采の聲は愈　盛なりき。但だ喝采の聲には、拍手なんどのみならで、高笑もまじるを常とす。

　われは胸を跳らせて進み出で、伊太利を頌したる短篇を讀みき。喝采の聲は幾度となく起りぬ。老いたる僧官達も手を拍ち給ひぬ。ハツバス・ダアダア出來る限のやさしき顔をなし、手中の桂冠を動かしつ。伊太利語の詩もて、我後に技を奏すべきは、獨りベルナルドオあるのみにて、其次なる英語は固より賞を得べくもあらねば、あはれ此冠は我頭の上に落ちんとぞおもはれける。

　その時ベルナルドオは壇に登りぬ。我はあやぶみながら友の言動に耳を傾け目を注ぎつ。友は些の怯れたる氣色もなく、かのダンテを詠ずる詩を誦したり。式場は忽ち水を打ちたるやうに鎭まりぬ。讀誦の力あるに、聽くもの皆感動したるなり。われは初より隻句を遺さず諳じたり。されど今改めてこれを聽けば、ほと〳〵ダンテ其人の作を聞くが如くおもはれぬ。誦し畢りし時、場に臨みたる人々は、悉く喝采せり。僧官達は席を離れ給ひぬ。式はこゝに終れるが如く、桂冠はベルナルドオがものと定りぬ。次なる英語の詩をば、人々止むことを得ずして聽き、又止むことを得ずして拍手せしのみ。その畢るや、滿場の話柄はベルナルドオがダンテの詩の上にかへりぬ。

　我頬は火の如くなりき。我胸は擴まりたり。我心は人々のベルナルドオがために焚ける香の烟を吸ひて、ほと〳〵醉へるが如くなりき。この時われは友の方を打ち見たるに、彼が容貌はいたく常にかはりて見えき。その面色土の如く、目を床に注ぎて立てるさまは、重き罪を犯したる人の如くなりき。ハツバス・ダアダアも亦いたく不興げなるおも持して、心こゝにあらねばか、その手にしたる桂冠を摘み碎かんとする如くなりき。僧官のうちなる一人、迺ちこれを取りて、ベルナルドオが前に進み給ひぬ。我友は此時跪きたるが、もろ手に面を掩ひて、この冠を頭に受けたり。

　式畢りて後、われは友の側に歩み寄りしに、彼は明日こそと云ひもあへず、走り去りぬ。翌日になりても、彼は我を避けて、共に語らざりき。我は唯だ一人なる友を失へるやうに覺えて、憂きに堪へざりき。二日過ぎて、ベルナルドオは我頸を擁き、我手を把りていふやう。アントニオよ。今こそは我心を語らめ。桂冠の我頭に觸れたる時は、われは百千の棘もて刺さるゝ如くなりき。人々の我を譽むる聲は、我を嘲るが如くなりき。この譽を受くべきは、我に非ずして汝なればなり。我は汝が目のうちなる喜の色を見き。汝知らずや。この時われは汝を憎みたり。おもふに我はこゝにありて、今迄

の如く汝に交ることを得ざるべし。この故に我はこゝを去らんとす。試におもへ。明年の式あらんとき、われ又汝が羽毛を借らずば、人々の前に出づることを得ざるべし。我心爭でかこれに堪へん。我に勢あるをぢあり。我はこれに我上を頼みき。我は身を屈して願ひき。こはわが未だ嘗て爲さざることなり。わが敢てせざるところなり。我はその時又汝が事をおもひ出しつ。斯くわが心に負きて人に頼るも、その原は汝に在るらんやうにおもはれぬ。この故に我は汝に對して、忍びがたき苦を覺ゆるなり。我は一たびこゝを去りて、別に身を立つるよすがを求め、その上にて又汝が友とならん。アントニオよ。願はくはその時を待て。吾は去らん。

この夕ベルナルドオは晩く歸りて床に入りしが、翌朝は彼が退校の噂諸生の間に高かりき。ベルナルドオは思ふよしありて、目的を變じたりとぞ聞えし。

ハツバス・ダアダアは冷笑の調子にていはく。彼男は流星の如く去りぬ。その光を放てると、その影を隱しゝとは、一瞬の間なりき。その學校生涯は爆竹の遽に耳を駭かす如くなりき。その詩も亦然なり。彼草稿は猶我手に留まれり。何等の怪しき作ぞ。熟※これを讀むときは、畢竟是れ何物ぞ。斯くても尚詩といはるべき歟。全篇支離にして、絶て格調の見るべきなし。看て瓶となせば、これ瓶。盞となせば、是れ盞。劍となせば、これ劍。その定まりたる形なきこと、これより甚しきはあらず。字を剰すこと凡そ三たび。聞くに堪へざる平字の連用（ヒアツス）あり。神といふ字を下すことおほよそ二十五處、それにて詩をかう／〃＼しくせんとにや。性靈よ、性靈よ。誰かこれのみにて詩人とならん。このとりとめなき空想能く何事をか做し出さん。こゝに在りと見れば、忽焉としてかしこに在り。汝は才といふか。才果して何をかなさん。眞の詩人の貴むところは、心の上の鍛錬なり。詩人はその題のために動さるゝこと莫れ。その心は冷なること氷の如くならんを要す。その心の生ずるところをば、先づ刀もて截り碎き、一片々々に査べ視よ。かく細心して組み立てたるを、まことの名作とはいふなり。厭ふべきは熱なり、激興なり。誰かその熱に感じて、桂冠を乳臭兒の頭に加へし。その詩に史上の事實を矯め、聞くに堪へざる平字の連用をなしたるなど、皆笞ち懲すべき科なるを。我はまことに甚しき不快を覺えき。かゝる事に逢ふごとに、我は健康をさへ害せられんとす。ベルナルドオのこわつぱ奴。ハツバス・ダアダアが批評は大抵此の如くなりき。

學校の中、ベルナルドオが去りしを惜まざるものなかりき。されどその惜むことの最も深きは我なりき。身のめぐりは遽に寂しくなりぬ。書を讀みても物足らぬ心地して、胸の中には遺るに由なき悶を覺えき。さて如何してこれを散ずべき。唯だ音樂あるのみ。我生活我願望はこれを樂の裡に求むるとき、始めて殘るところなく明なる如くなりき。こゝを思へば、詩には猶飽き足らぬところあり。ダンテが雄篇にも猶我心を充たすに足らざるところあり。詩は我魂を動せども、樂はわが魂と共に、わが耳によりてわが魄を動せり。夕されば我窓の外に、一群の小兒來て、聖母の像を拜みて歌へり。その調は我にわが穉かりける時を憶ひ起さしむ。その調はかの笛ふきが笛にあはせし搖籃の曲に似たり、又或時は野邊送の列、窓の下を過ぐるを見て、これをおくる僧尼の挽歌を聽き、昔母上を葬りし時を思ひ出しつ。我心はこしかたより行末に遷りゆきぬ。我胸は押し狹めらるゝ如くなりぬ。昔歌ひし曲は虚空より來りて我耳を襲へり。その曲は知らず識らず我唇より洩れて歌聲となりぬ。

ハツバス・ダアダアが室は、我室を去ること近からぬに、我聲は覺えず高くなりて、そこまで聞えぬ。ハツバス・ダアダア人して言はしむるやう。こゝは劇場にもあらず、又唱歌學校にもあらず、讃美歌に非ざる歌の聞ゆるこそ心得られねとなり。われは默して答へず。頭を窓の縁に寄せかけて、目を街のかたに注ぎたれど、心はこゝに在らざりき。

忽ち街上より「フエリチツシイマ、ノツテエ、アントニオ」（幸あらん夜をこそ祈れ、アントニオよといふ事なり、北歐羅巴にては善き夜をとのみいふめれど、伊太利の夜の樂きより、かゝる詞さへ出來ぬるなるべし）と呼ぶ人あり。窓の前にて、美しく猛き若駒に首を昂げさせ、手を軍帽に加へて我に禮を施し、振り返りつゝ馳せ去りしは、法皇の禁軍なる士官なりき。嗚呼、我はその顏を見識りたり。これわがベルナルドオなり。わが幸あるベルナルドオなり。

我生活は今彼に殊なること幾何ぞ。われは深くこれを思ふことを好まず。われは傍なる帽を取りて、目深にかぶり、惡魔に逐はるゝ如く、學校の門を出でぬ。おほよそ「ジエスヰタ」學校、「プロパガンダ」學校、その外この教國の學校生徒は、外に出づるとき、おのれより年長けたる、若くはおのれと同じ齡なる、同學のものに伴はるゝを法とす。稀に獨り行くには、必ず許可を請ふことなり。こは誰も知りたる掟なるを、われはこの時少しも思ひ出でざりき。老いたる番僧はわが出づるを見つれど、許可を得たるものとや思ひけん、我を誰何めざりき。

めぐりあひ、尼君

大路に出づれば馬車ひきもきらず。羅馬の人を載せたるあり、外國の客を載せたるあり。往くあり、還るあり。こは都の習なる夕暮の逍遙乘といふものにいでたる人々なるべし。銅版畫を挂けつらねたる技藝品鋪の前には、人あまた立てり。その衣にまつはれて錢を得んとするは、乞兒の群なり。されば車の間を馳せぬくることを厭ひては、こゝを行くべくもあらず。我が車の隙を覗ひて走りぬけんとしたる時「ボン、ジヨオルノオ、アントニオ」（吉日をこそ、アントニオ）と呼ぶは、むかし聞き慣れたる忌はしき聲なり。見卸せば、ペツポのをぢ例の木履を手に穿きて、地上にすわり居たり。この人にかく近づきたることは、この年頃絶てなかりき。西班牙の磴を避けてとほり、道にて逢ふときは面を掩ひて知らしめず、式の日などに諸生の群にありてこれに近づくときは、友の身を盾に取りて見付けられぬ心がまへしたりき。ペツポは我裳裾を握りて離たずしていふやう。血を分けたるアントニオよ。そちがをぢなるペツポを知らぬ人のやうになあしらひそ。尊きジユウゼツペ（ペツポはこの名を約めたるなり）の上を思はゞ、我名を忘るゝことなからん。暫く見ぬ隙に、おとなびたることよ。かく親しく物言はるゝ程に、道行く人は怪みて我面を見たり。我は放ち給へと叫びて裾を引けども、ペツポは容易く手をゆるめず。アントニオよ。共に驢に乘りし日の事を忘れしか。善き兒なるかな。今は丈高き馬に乘れば、最早我を顧みざるならん。母の同胞の西班牙の磴にあるを訪はざるならん。そちも我手に接吻せしことあり。そちも我宿の一束の藁を敷寢せしことあり。昔をわすれなせそ。かくかきくどかるゝうるさゝに、我は力を極めて裾ひきはなち、車の間をくゞりぬけて、横街に馳せ入りぬ。

我胸は跳(をど)れり。こは驚のためのみにはあらず、辱(はづかしめ)のためなりき。我はをぢがもろ人の前に我を辱めたりとおもひき。されど此心は久しからずして止み、これに代りて起りしは、これよりも苦しき情なりき。をぢが詞は一つとして僞ならず。われはまことにペツポが一人の甥なり。わがこれに對して恩すくなかりしは、そも〳〵何故ぞ。若し餘所に見る人なくば、我は昔の如くをぢの手に接吻せしならん。さるを今かく殘忍なる振舞せしは、わが罪深き名譽心にあらずや。われは自ら愧(は)ぢ、又神に恥ぢて、我胸は燃ゆる如くなりき。

この時聖(サン)アゴスチノ寺の「アヱ、マリア」の鐘の聲響きしかば、われは懺悔せんとて寺の内に入りぬ。高き穹窿の下は暗くして人影絶えたり。卓の上なる蝋燭は僅に燃ゆれども光なかりき。われは聖母の前に伏し沈みて、心の重荷をおろさんとしつ。忽ち我側にありて、我名を呼ぶ人あり。アントニオの君よ。館(やかた)も御奥もフイレンツエより歸り來ませり。かしこにて設け給ひし穉き姫君をも伴ひ給ひぬ。今より共に往きて喜をのべ給はずやといふ。寺の内の暗さに見えざりしが、かく言はれてその人を見れば、我恩人の館なる門者(かどもり)の妻にてフエネルラといふものなりき。年久しく相見ざりし人々に逢はせんといふが嬉しさに、われは共に足を早めてボルゲエゼ(たち)の館にゆきぬ。

フアビアニの君はやさしく我をもてなし給ひ、フランチエスカの君は又母の如くいたはり給ひぬ。姫君にも引きあはせ給ひぬ。名をばフラミニアといふ。目の美しく光ある穉子なり。我に接吻し、我側に來居たるが、まだ二分時ならぬに、はや我に昵(なじ)み給へり。かき抱きて間のうちをめぐり、可笑(をか)しき小歌うたひて聞せしかば、面白しと打笑ひ給ひぬ。館は微笑みつゝ。穉き尼君を世の中の少女の様になせそ。法皇の手づから授けられし壻(むこぎみ)君をば、今より胸にをさめたるをとのたまふ。げにこの姫君は、白かねもて造りたる十字架に基督の像つきたるを、鎖もて胸に懸け給へり。（伊太利の俗、尼寺に入れんと定めたる女兒をば、夙(はや)くより小尼公(アベヂツサ)など呼ぶことあり。）夫婦の君は婚禮の初、喜のあまりに始て生るべき子をば、み寺に參らせんと誓ひ給ひしなり。勢ある家の事とて、羅馬に名高き尼寺の首座をば、今よりこの姫君の爲めに設けおけりとぞ。さればこの君には、苟且(かりそめ)の戲にも法(のり)の掟(おきて)に背かぬやうなることのみをぞ勸め參らせける。小尼公は偶(にんぎやう)人いれたる箱取り出でゝ、中なる穉き耶蘇の像、またあまたの白衣きたる尼の像を示し給ふ。さて尼の人形を二列に立てて、日ごとにかく歩ませて供養のにはに連れゆくとのたまひぬ。又尼どもは皆聲めでたく歌ひて、穉き耶蘇を拜めりとのたまひぬ。こは皆保姆(うばゝ)が教へつるなり。我は畫かきて小尼公を慰めき。長き※衣(けおりごろも)を着て、噴水のトリイトン(ブルチネルラなど)の神のめぐりに舞ふ農夫、一人の匍匐(はらば)ひたるが上に一人の跨(またが)りたる侏儒抔、いたく姫君の心にかなひて、始はこれに接吻し給ひしが、後には引き破りて棄て給ひぬ。兎角する程に、はや常に眠り給ふ時過ぎぬとて、うば抱きて入りぬ。

夫婦の君は我上を細(こまか)に問ひて、今より後も助にならんと契り、こゝに留らん間は日ごとに訪へかしとのたまひぬ。カムパニアの野邊に住める媼が事を語り出で給ひしかば、我は春秋の天氣好き折、かしこに尋ねゆきて、我臥床(ふしど)の跡を見、媼が經卷珠數(じゆず)と共に藏したる我畫反古(ほご)を見、また爐の側にて燒栗を噛みつゝ昔語せばやとおもふ心を聞え上げぬ。暇乞(いとまごひ)して出でんとせしとき、夫人は館を顧みてのたまふやう。學校は智育に心を用ゐると覺ゆれど、作法の末までは

ゆきとゞかぬなるべし。この子の禮するさまこそ可笑しけれ。世の中に出でん後は、これをも忽にすべからず。されど、アントニオよ、心をだに附けなば、そはおのづから直るべきものぞ。

學校に還らんとて館を出でしは、まだ宵の程なりしが、街はいと暗かりき。羅馬の市に竿燈を點くるは近き世の事にて、其の頃はまださるものなかりしなり。狹き枝みちに歩み入れば、平ならざる道を照すもの唯だ聖母の像の御前に供へたる油燈のみなり。われは心のうちに晝の程の事どもを思ひめぐらしつゝ、徐にあゆみを運びぬ。固より咫尺の間もさやかには見えねば、忽ち我手に觸るゝものあるに驚きて、われはまだ何とも思ひ定めぬ時、耳慣れたる聲音にて、奇怪なる人かな、目をさへ撞きつぶされなば、道はいよ〳〵見えずやならんといふ。われは喜のあまりに聲高く叫びて、さてはベルナルドオなるよ、嬉くも逢ひけるものかなといひぬ。アントニオか、可笑き再會もあるものよと、友は我を抱きたり。さるにても何處よりか來し。忍びて訪ふところやある。そは汝に似合はしからず。されど我に見現されぬれば是非なし。例の獄丁はいづくに居る。學校よりつけたる道づれは。我。否けふはひとりなり。ベルナルドオ。ひとりとは面白し。汝も天晴なる少年なり。我と共に法皇の護衛に入らずや。

我は恩人夫婦のこゝに來ませし喜を告げしに、吾友も亦喜びぬ。これよりは足の行くに任せて、暗路を辿りつゝ、別れての後の事どもを語りあひぬ。

猶太の翁

途すがらベルナルドオの云ふやう。我は今こそ浮世の樣をも見ることを得つれ。そなた等が世にあるは、唯だ世にありといふ名のみにて、まだ襁褓の中を出でざるにひとし。冷なる學校の榻に坐して、黴の生えたるハツバス・ダアダアが講釋に耳傾けんは、あまりに甲斐なき事ならずや。見よ、我が馬に騎りて市を行くを。美しき少女達は、燃ゆる如き眼なざしして、我を仰ぎ瞻るなり。わが貌は醜からず。われには號衣よく似合ひたり。此街の暗きことよ、汝は我號衣を見ること能はざるべし。我が新に獲たる友は、善く我を導けり。彼等は汝が如き窮措大めきたる男にあらず。我等は御國を祝ひて盞を傾け、又折に觸れてはおもしろき戲をもなせり。されど其戲をもの語らんは、汝が耳の聽くに堪へざるところならん。そなたの世を渡るさまをおもへば、男に生れたる甲斐なくぞおもはるゝ。我はこの二三月が程に十年の經驗をなしたり。我はわが少年の血氣を覺えたり。そは我血を湧し、我胸を張らしむ。我は人生の快樂を味へり。我唇はまだ燃え、我咽はまだ痒きに、我身はこれを受用すること醉ひたる人の水を飲むらんやうなり。斯く説き聞せられて、我はいつもながら氣沮みて聲も微に、さらば君が友だちといふはあまり善き際にはあらぬなるべしと答へき。ベルナルドオはこらへず。善き際にあらず、とは何をか謂ふ。我に向ひて道德をや説かんとする。吾友だちは汝にあしさまに言はるべきものにはあらず。吾友だちは羅馬にあらん限の貴き血統にこそあなれ。われ等は法皇の禁軍なり。縱ひわづかの罪ありとも、そは法皇の免除するところなり。われも學校を出でし初には、汝が言ふ如き感なきにあらざりしが、われは敢て直ちにこれを言はず、敢て友等に知らしめざりき。われは彼輩のなすところに傚ひき。そは我意志の最も強き方に從ひたるの

み。我意馬を奔らしめて、その往くところに任するときは、我はかの友だちに立ち後るゝ憂なかりしなり。されど此間我胸中には、猶少しの寺院教育の滓殘り居たれば、我も何となく自ら安ぜざる如き思をなすことありき。我はをり〳〵此滓のために戒められき。我は生れながらの清白なる身を涜すが如くおもひき。かゝる懸念は今や名殘なく失せたり。今こそ我は一人前の男にはなりたるなれ。かの教育の滓を身に帶びたる限は、その人小兒のみ、卑怯者のみ。おのれが意志を抑へ、おのれが欲するところを制して、獨り鬱々として日を送らんは、その卑怯ものゝ擧動ならずや、餘に饒舌りて途のついでをも顧みざりしこそ可笑しけれ。こゝはキヤヰカの前なり。類なき酒家にて、羅馬の藝人どもの集ふところなり。我と共に來よ。切角の邂逅なれば、一瓶の葡萄酒を飲まん。この家のさまの興あるをも見せまほしといふ。われ。そは思ひもよらぬ事なり。若し學校の人々、わが禁軍の士官と倶に酒店にありしを聞かば奈何。ベルナルドオ。現に酒一杯飲まんは限なき不幸なるべし。されど試に入りて見よ。外國の藝人等が故郷の歌をうたふさまいと可笑し。獨逸語あり。法朗西語あり。英吉利語あり。またいづくの語とも知られぬあり。これ等を聞かんも興あるべし。われ。否、君には酒一杯飲まんこと常の事なるべけれど、我は然らず。強ひて伴はんことは君が本意にもあらざるべし。斯く辭ふほどに、傍なる細道の方に、許多の人の笑ふ聲、喝采する聲いと賑はしく聞えたり。われはこれに便を得て、友の臂を把りていはく。見よ、かしこに人あまた集りたるは何事にかあらん。想ふに聖母の御龕の下にて手品使ふものあるならん。我等も往きてこそ觀め。

我等が往方を塞ぎたるは、極めて卑き際の老若男女なりき。この人々は聖母のみほごらの前にて長き圈をなし、老いたる猶太教徒一人を取り巻きたり。身うち肥えふとりて、肩幅いと廣き男あり。手に一條の杖を持ちたるが、これを翁が前に横へ、翁に跳り超えよと促すにぞありける。

凡そ羅馬の市には、猶太教徒みだりに住むことを許されず。その住むべき廓をば嚴しく圍みて、これを猶太街といふ。（我國の穢多まちの類なるべし。）夕暮には廓の門を閉ぢ、兵士を置きて人の出入することを許さず。こゝに住める猶太教徒は、歳に一たび仲間の年寄をカピトリウムに遣り、來ん年もまた羅馬にあらんことを許し給はゞ、謝肉祭の時の競馬の費用をも例の如く辨へ、又定の日には加特力教徒の寺に往きて、宗旨がへの説法をも聽くべし、と願ふことなり。

今杖の前に立てる翁は、こよひ此街のをぐらき方を、靜に走り過ぎんとしたるなり。「モルラ」といふ戲せんと集ひたりし男ども、道に遊び居たりし童等は、早くこれを見付けて、見よ人々、猶太の爺こそ來ぬれと叫びぬ。翁はさりげなく過ぎんとせしに、群衆はゆくてに立ちふさがりて通さず。かの肥えたる男は、杖を翁が前に横へて、これを跳り超えて行け、さらずは廓の門の閉ぢらるゝ迄えこそは通すまじけれ、我等は汝が足の健さを見んと呼びたり。童等はもろ聲に、超えよ超えよ、亞伯罕の神は汝を助くるならんといと喧しく囃したり。翁は聖母の像を指ざしていふやう。人々あれを見給へ。おん身等もかしこに跪きては、慈悲を願ひ給ふならずや。我はおん身等に對して何の辜をもおかしゝことなし。我髪の白きを憫み給はゞ、恙なく家に歸らしめ給へといふ。杖持ちたる男冷笑ひて、聖母爭でか猶太の狗を顧み給はん、疾く跳り超えよといひつゝいよ

〳〵翁に迫る程に、群衆は次第に狹き圈を畫して、翁の爲んやうを見んものをと、息を屏めて覗ひ居たり。ベルナルドオはこの有樣を見るより、前なる群衆を押し退けて圈の中に躍り入り、肥えたる男の側につと寄せて、その杖を奪ひ取り、左の手にこれを指し伸べ、右の手には劍を拔きて振り翳し、かの男を叱して云ふやう。この杖をば、汝先づ跳り超えよ。猶與ふことかは。超えずは、汝が頭を裂くべしといふ。群衆は唯だ呆れてベルナルドオが面を打ち眺めたり。彼男はしばし夢見る如くなりしが、怒氣を帶びたる詞、鞘を拂ひし劍、禁軍の號衣、これ皆膽を寒からしむるに足るものなりければ、何のいらへもせず、一跳して杖を超えたり。ベルナルドオは男の跳り超ゆるを待ちて杖を擲ち、その肩口をしかと壓へ、劍の背もて片頬を打ちていふやう。善くこそしつれ。狗にはふさはしき擧動かな。今一たびせよさらば免さんといふ。男は是非なく又跳り超えぬ。初め呆れ居たる群衆は、今その可笑しさにえ堪へず、一度にどつと笑ひぬ。ベルナルドオのいはく。猶太の翁よ。邪魔をば早や拂ひたれば、いざ送りて得させんといふ。されど翁はいつの間にか逃げゆきけん、近きところには見えざりき。

我はベルナルドオを引きて群衆の中を走り出でぬ。來よ我友。今こそは汝と共に酒飲まんとおもふなれ。今より後は、たとひいかなる事ありても、われ汝が友たるべし。ベルナルドオ。そなたは昔にかはらぬ物ずきなるよ。されど我が知らぬ猶太の翁のかた持ちて、かの癡人と爭ひしも、おなじ物ずきにやあらん。

我等は酒家に入りぬ。客は一間に滿ちたれども、別に我等に目を注くるものあらざりき。隅の方なる小卓に倚りて、共に一瓶の葡萄酒を酌み、友誼の永く渝らざらんことを誓ひて別れぬ。

學校の門をば、心やすき番僧の年老いたるが、仔細なく開きて入れぬ。あはれ、珍しき事の多かりし日かな。身の疲に酒の醉さへ加はりたれば、程なく熟睡して前後を知らず。

猶太をとめ

許をも受けで校外に出で、士官と倶に酒店に入りしは、輕からぬ罪なれば、若し事露れなば奈何にすべきと、安き心もあらざりき。さるを僥倖にもその夕我を尋ねし人なく、又我が在らぬを知りたるは、例の許を得つるならんとおもひて、深くも問ひ糺さで止みぬ。我が日ごろの行よく謹めるかたなればなりしなるべし。光陰は穩に遷りぬ。課業の暇あるごとに、恩人の許におとづれて、そを無上の樂となしき。小尼公は日にけに我に昵み給ひぬ。我は穉かりしとき寫しつる畫など取り出でゝ、み館にもて往き、小尼公に贈るに、しばしはそれもて遊び給へど、幾程もあらぬに破り棄て給ふ。我はそをさへ拾ひ取りて、藏めおきぬ。

その頃我は丗ルギリウスを讀みき。その六の卷なるエネエアスがキユメエの巫に導かれて地獄に往く條に至りて、我はその面白さに感ずること常に超えたり。こはダンテの詩に似たるがためなり。ダンテによりて我作をおもひ、我作によりて我友をおもへば、ベルナルドオが面を見ざること久しうなりぬ。恰も好しワチカアノの畫廊開かるべき日なり。且は美しき畫、めでたき石像を觀、且はなつかしき友の消息を聞かばやとおもひて、われは又學校の門を出でぬ。

美しきラフアエロが半身像を据ゑたる長き廊の中に入りぬ。仰塵にはかの大匠の下畫によりて、門人等が爲上げたりといふ聖經

の圖あり。壁を掩(おほ)へるめづらしき飾畫、穹窿を填(うづ)めたる飛行の童の圖、これ等は皆我が見慣れたるものなれど、我は心ともなくこれに目を注ぎて、わが待つ人や來るとたゆたひ居たり。欄(おばしま)に凭(よ)りて遠く望めば、カムパニアの野のかなたなる山々の雄々しき姿をなしたる、固より厭(あ)かぬ眺なれど、鋪石に觸るゝ劍の音あるごとに、我は其人にはあらずやとワチカアノの庭を見おろしたり。されどベルナルドオは久しく來ざりき。

　間(むなし)といふ間を空くめぐり來ぬ。ラオコオンの群の前をも徒(いたづら)に過ぎぬ。我はほと〳〵興を失ひて、「トルソオ」をも「アンチノウス」をも打ち棄てゝ、家路に向はんとせしとき、忽ち羽つきたる※(かぶと)を戴き、長靴の拍車を鳴して、輕らかに廊を歩みゆく人あり。追ひ近づきて見ればベルナルドオなり。友の喜は我喜に讓らざりき。語るべき事多ければ、共に來よと云ひつゝ、友は我を延(ひ)きて奥の方へ行きぬ。

　汝はわが別後いかなる苦を嘗めしかを知らざるべし。又その苦の今も猶止むときなきを知らぬなるべし。譬へば我は病める人の如し。そを救ふべき醫は汝のみ。汝が採らん藥草の力こそは、我が唯一の頼なれ。斯くさゝやきつゝ、友は我を延いて大なる廳を過ぎ、そこを護れる禁軍(このえ)の瑞西(スイス)兵の前を歩みて、當直士官の室に入りぬ。君は病めりと云へど、面は紅に目は輝けるこそ訝(いぶか)しけれ。さなり。我身は頭の頂より足の尖まで燃ゆるやうなり。我はそれにつきて汝が智惠を借らんとす。先づそこに坐せよ。別れてより後の事を語り聞すべし。

　汝はかの猶太の翁の事を記(おぼ)えたりや。聖母の龕(がん)の前にて、惡少年に窘(くるし)められし翁の事なり。我はかの惡少年を懲して後、翁猶在らば、家まで送りて得させんとおもひしに、早やいづち往きけん見えずなりぬ。その後翁の事をば少しも心に留めざりしに、或日ふと猶太廓(ゲットオ)の前を過ぎぬ。廓の門を守れる兵士に敬禮せられて、我は始めてこゝは猶太街の入口ぞと覺(さと)りぬ。その時門の内を見入りたるに、黒目がちなる猶太の少女あまた群をなして佇(たゝず)みたり。例のすきごゝろ止みがたくて、我はそが儘馬を乘り入れたり。こゝに住める猶太教徒は全き宗門の組合をなして、その家々軒を連ねて高く聳え、窓といふ窓よりは、「ベレスヒツト、バラ、エロヒム」といふ祈の聲聞ゆ。街には宗徒簇(むらが)りて、肩と肩と相摩するさま、むかし紅海を渡りけん時も忍ばる。簷端(のきば)には古衣、雨傘その外骨董どもを、懸けも陳べもしたり。我駒の行くところは、古かなもの、古畫を鬻(ひさ)ぐ露肆(ほしみせ)の間にて、目も當てられず穢(けが)れたる泥※(ぬかるみ)の裡(うち)にぞありける。家々の戸口より笑みつゝ仰ぎ瞻(みま)る少女二人三人を見るほどに、何にても買ひ給はずや、賣り給ふ物あらば價尊く申し受けんと、聲々に叫ぶさま堪ふべくもあらず。想へ汝、かゝる地獄めぐりをこそダンテは書くべかりしなれ。

　忽ち傍なる家より一人の翁馳せ出でゝ、我馬の前に立ち迎へ、我を拜むこと法皇を拜むに異ならず。貴き君よ、我命の親なる君よ。再び君と相見る今日(けふ)は、そも〳〵いかなる吉日ぞ。このハノホ老いたれども、恩義を忘れぬほどの記憶はありとおぼされよ。かく語りつゞけて、末にはいかなる事をか言ひけん、悉くは解(げ)せず、又解したるをも今は忘れたれば甲斐なし。これ去ぬる夜惡少年の杖を跳り越ゆべかりし翁なり。翁は我手の尖(さき)に接吻し、我衣の裾に接吻していふやう。かしこなるは我破屋(あばらや)なり。されど鴨居(かもゐ)のいと低くて君が如き貴人を入らしむべきならぬを奈何せん。かく言ひては拜み、拜

みては言ふ隙に、近きわたりの物共は、我等二人のまはりに集ひ、あからめもせず打ち守りたる、そのうるさゝにえ堪へず、我は早や馬を進めんとしたり。この時ふと仰ぎ見れば、翁が家の樓上よりさし覗きたる少女あり。色好なる我すらかゝる女子を見しことなし。大理石もて刻めるアフロヂテの神か。されど亞剌伯種の少女なればにや、目と頬とには血の温さぞ籠りたる。想へ汝、我が翁に引かれて、辭はずその家に入りしことの無理ならぬを。

廊の闇さはスチピオ等の墓に降りゆく道に讓らず。木の欄ある梯は、行くに足の尖まで油斷せざる稽古を、怠りがちなる男にせさするに宜しかるべし。部屋に入りて見れば、さまで見苦しからず。されど例の少女はあらず。少女あらずば、われこゝに來て何をかせん。技癢に堪へざる我心をも覺らず、かの翁は永々しき謝恩の演説をぞ始めける。その辭に綴り込めたる亞細亞風の譬喩の多かりしことよ。汝が如き詩人ならましかば、そを樂みて聞きもせん。我は恰も消化し難き饌に向へる心地して、肚のうちには彼女子今か出づるとのみおもひ居たり。此時翁は感ずべき好き智慧を出しぬ。あはれ此智慧、好き折に出でなば、いかにか我を喜ばしめしならん。翁のいはく。貴きわたりに交らひ給ふ殿達は、定めて金多く費し給ふならん。君も卒かに金なくてかなはぬ時、餘所にてそを借り給はば、二割三割などいひて、夥しき利息を取られ給ふべし。さる時あらば、必ず我許に來給へ。利息は申し受けずして、いくばくにても御用だて侍らん。そはイスラエルの一枝を護りたる君が情の報なりといひぬ。我は今さる望なきよし答へぬ。翁さらに語を繼ぎて。さらば先づ平かに居給へ。好き葡萄酒一瓶あれば、そを獻らんといふ。我は今いかなる事を答へしか知らず。されどその詞と共に一間に入り來りしは彼少女なり。いかなる形ぞ。いかなる色ぞ。髪は漆の黒さにてしかも澤あり。こは彼翁の娘なりき。少女はチプリイの酒を汲みて我に與へぬ。我がこれを飲みて、少女が壽をなしゝとき、その頬にはサロモ王の餘波の血こそ上りたれ。汝はいかにかの天女が、言ふにも足らぬ我腕立を謝せしを知るか。その聲は世にたぐひなき音樂の如く我耳を打ちたり。あはれ、かれは斯世のものにはあらざりけり。されば其姿の忽ち見えずなりて、唯だ翁と我とのみ座に殘りしも宜なり。

この物語を聞きて、我は覺えず呼びぬ。そは自然の詩なり。韻語にせばいかに面白からん。

媒

士官のいふやう。この時よりして我がいかばかり戀といふものゝ苦を嘗めたるを知るか。我が幾たび空中に樓閣を築きて、又これを毀ちたるを知るか。我が彼猶太をとめに逢はんとていかなる手段を盡しゝを知るか。我は用なきに翁を訪ひて金を借りぬ。我は八日の期限にて、二十「スクヂイ」を借らんといひしに、翁は快く諾ひて粲然たる黄金を卓上に並べたり。されど少女は影だに見せざりき。我は三日過ぎて金返しに往きぬ。初翁は我を信ぜること厚しとは云ひしが、それには世辭も雜りたりしことなれば、今わが斯く速に金を返すを見て、翁が喜は眉のあたりに呈れき。我は前の日の酒の旨かりしを稱へしかど、翁自ら瓶取り出して、顫ふ痩手にて注ぎたれば、これさへあだなる望となりぬ。この日も少女は影だに見せざりき。たゞ我が梯を走りおりしとき、半ば開きたる窓の帷すこしゆらめき

たるやうなりき。是れ我少女なりしならん。さらば君よ、とわれ呼びしが、窓の中はしづまりかへりて何の應もなし。おほよそ其頃よりして、今日まで盡しゝ我手段は悉くあだなりき。されど我心は決して撓むことなし。我は少女が上を忘るゝこと能はず。友よ。我に力を借せ。昔エネエアスを戀人に逢せしサツルニアとエヌスとをば、汝が上とこそ思へ。いざ我をあやしき巖室に誘はずや。われ。そは我身にはふさはしからぬ業なりと覺ゆ。さはれおん身は猶いかなる手段ありて、我をさへ用ゐんとするか、かゝる筋の事に、この身用立つべしとは、つや〳〵思ひもかけず。士官。否々。汝が一諾をだに得ば、我事は半ば成りたるものぞ。ヘブライオスの語は美しき詞なり。その詩趣に富みたること多く類を見ずと聞く。汝そを學びて、師には老いたるハノホを撰べ。彼翁は廓内にて學者の群に數へられたり。彼翁汝がおとなしきを見て、娘にも逢はせんをり、汝我がために娘に説かば、我戀何ぞ協はざることを憂へん。されど此手段を行はんには、決して時機を失ふべからず。駈足にせよ歩度を伸べたる驅足にせよ。燃ゆる毒は我脈を循れり。そは世におそろしき戀の毒なり。異議なくば、あすをも待たで猶太の翁を訪へ。われ。そは餘りに無理なる囑なり。我が爲すべきことの面正しからぬはいふも更なり、汝が志すところも卑しき限ならずや。その少女縱令美しといふとも、猶太の翁が子なりといへば。士官。それ等は汝が解し得ざる事なり。貨だに善くば、その産地を問ふことを須ゐず。友よ、善き子よ。我がためにヘブライオスの語を學べ。我も諸共に學ばんとす。たゞその學びさまを殊にせんのみ。想へ、我がいかに幸ある人となるべきかを。我。わが心を傾けて汝に交るをば、汝知りたるべし。汝が意志、汝が勢力のおほいなる、常に我心を左右するをも、汝知りたるべし。汝若し惡人とならば、我おそらくは善人たることを得じ。そは怪しき力我を引きて汝が圈の中に入るればなり。我は素より我心を以て汝が行を匡さんとせず。人皆天賦の性あり。そが上に我は必ずしも汝が將に行はんとする所を以て罪なりとせず。汝が性然らしむればなり。されど此事は、縱令成りたらんも、汝が上にまことの福を降すべきものにあらずとおもへり。士官。善し〳〵。我はたゞ汝に戲れたるのみ。我がために汝を驅りて懺悔の榻に就かしめんは、初より我願にあらず。たゞ汝がヘブライオスの語を學ばんに、いかなる障あるべきか、そは我に解せられず。況んやその猶太の翁に學ぶことをや。されどこの事に就きては、我等また詞を費さゞるべし。今日は善くこそ我を訪ねつれ。物欲しからずや。酒飲まずや。

友なる士官がかく話頭を轉じたるとき、我はその特なる目なざしを見き。こはベルナルドオが學校にありしとき屡ハツバス・ダアダアに對してなしたる目なざしなりき。友の擧動、その言語、一つとして不興のしるしならぬはなし。我も快からねば程なく暇乞して還りぬ。別るゝときは友の恭しさ常に倍して、その冷なる手は我が温なる手を握りぬ。我はわが辭退の理に※へる、友の腹立ちしことの我儘に過ぎざるを信じたりき。されど或時は無聊に堪へずしてベルナルドオなつかしく、我詞の猶穩ならざるところありしを悔みぬ。一日散歩のついで、吾友の上をおもひつゝ、かの猶太廓に入りぬ。若し期せずして其人に逢はゞ、我友の怒を霽す便にもならんとおもひき。されど我は彼翁をだに見ざりき。門よりも窓よりも、知らぬ人面を出せり。街の兩側なる敷石の上には、例の古衣、古かねなど陳べたるその間には見苦き子供遊べり。物買はずや、物賣らずやと

呼ぶ聲は、我を聾にせんとする如し。少女あり。向ひの家なる友と、窓より窓へ毬投げつゝ戯れ居たり。そが一人は頗美しと覺えき。吾友の戀人はもしこれにはあらずや。我は圖らず帽を脱したり。嗚呼、おろかなる振舞せしことよ。我は人の思はん程も影護くて、手もて額を拭ひつ。こは帽を脱したるは、少女のためならで、暑に堪へねばぞと、見る人におもはしめんとてなりき。

一とせの月日は事なくして過ぎぬ。稀にベルナルドオに逢ふことありても、交情昔のごとくならず。我はそのやさしき假面の背後に、人に※る貴人の色あるを見て、友の無情なるを恨むのみにて、かの猶太廓の戀のなりゆきを問ふに遑あらざりき。ボルゲエゼの館をば頻におとづれて、主人の君、フアビアニ、フランチエスカの人々のやさしさに、故郷にある如き思をなしつ。されどそれさへ時としては胸を痛むる媒となることありき。我胸には慈愛に感ずる情みち〳〵たれば、彼人々の一たび顰めることあるときは、徑に我世の光を蔽はるゝ如く思ひなりぬ。フランチエスカの我性を譽めつゝも、強ひて備はらんことを我に求めて、わが立居振舞、わが詞遣の疵を指すことの苛酷なる、主人の君のわが獨り物思ふことの人に踰えたるを戒めて、わが草木などの細かなる區別に心入れぬを咎め、我を自ら卷きて終には萎るゝ葉に比べたる、皆我心を苦むるものなりき。我齢は早く十六になりぬ。さるを斯ばかりの事に逢ひて、必ず涙を墮すは何故ぞや。主人の君は我が憂はしげなるさまを見るときは、又我頬を撫でゝ、聖母の善き人を得給はんためには、美しき花の壓さるゝ如く、人も壓されではかなはぬが浮世の習ぞと慰め給ひぬ。獨りフアビアニの君のみは、何事をもをかしき方に取りなして、岳翁と夫人との教の嚴なることよと打笑ひ、さて我に向ひてのたまふやう。君は父上の如き學者とはならざるべし。はた妻のやうに怜悧なる人ともならざるならん。されど君が如き性もまた世の中になくて協はぬものぞと宣ふ。斯く裁判し畢りて、小尼公を召し給へば、我はその遊び戯れ給ふさまのめでたきを見て、身の憂きことを忘れ果てつ。人々は來ん年を北伊太利にて暮さんとその心構し給へり。夏はジエノワにとゞまり、冬はミラノに往き給ふなるべし。我は來ん年の試驗にて、「アバテ」の位を受けんとす。人々は首途に先だちて、大いなる舞踏會を催し、我をも招き給ひぬ。門前には大篝を焚かせたり。賓客の車には皆松明とりたる先供あるが、おの〳〵其火を石垣に設けたる鐵の柄に挿したれば、火の子迸り落ちて赤き瀑布を見る心地す。法皇の兵は騎馬にて門の傍に控へたり。門の内なる小き園には五色の紙燈を弔り、正面なる大理石階には萬點の燭を點せり。階を升るときは奇香衣を襲ふ。こは級ごとに瓶花、盆栽の檸檬樹を据ゑたればなり。階の際なる兵は肩銃の禮を施しつ。「リフレア」着飾りたる僕は堂に滿ちたり。フランチエスカの君は眩きまで美かりき。珍らしき樂土鳥の羽、組緒多くつけたる白き「アトラス」の衣はこれに一層の美しさを添へたり。そのやさしき指に觸れたるときの我喜はいかなりし。廣間二つに樂の群を居らせて、客の舞踏の場としたり。舞ふ人の中にベルナルドオありき。金絲もて飾りたる緋羅紗の上衣、白き細袴、皆發育好き身形に適ひたり。その舞の敵手はこよひ集ひし少女の中にて、すぐれて美しき一人なるべし。纖き手をベルナルドオが肩に打ち掛けて秋波を送れり。我が舞を知らざることの可悔かりしことよ。客に相識る人少ければ、我を顧みるものなし。ベルナルドオが舞果てゝ我傍に來りしとき、我憂は忽ち散じたり。紅なる帷の長く垂れたる背後にて、我等二人

は「シヤムパニエ」酒の杯を傾け、別後の情を語りぬ。面白き樂の調は耳より入りて胸に達し、昔日の不興をば少しも殘さず打ち消しつ。われ遠慮せで猶太少女の事を語り出でしに、友は唯だ高く笑ひぬ。その胸の内なる痍は早くも愈えて跡なきに至りしものなるべし。友のいはく。われはその後聲めでたき小鳥を捕へたり。この鳥我戀の病を歌ひ治しき。これある間は、よその鳥はその飛ぶに任せんのみ。その猶太廓より飛び去りしは事實なり。人の傳ふるが信ならば、今は羅馬にさへ居らぬやうなり。友と我とは又杯を擧げたり。泡立てる酒、賑はしき樂は我等が血を湧しつ。ベルナルドオは又舞踏の群に投ぜり。我は獨り殘りたれど、心の中には前に似ぬ樂しさを覺えき。街のかたを見おろせば、貧人の兒ども簇りて、松明より散る火の子を眺め、手を打ちて歡び呼べり。われも昔はかゝる兒どもの夥伴なりしに、今堂上にありて羅馬の貴族に交るやうになりたるは、いかなる神のみ恵ぞ。われは帷の蔭に跪きて神に謝したり。

謝肉祭

その夜は曉近くなりて歸りぬ。二日たちて人々は羅馬を立ち給ひぬ。ハツバス・ダアダアは日ごとに我を顧みて、ことしは「アバテ」の位受くべき歳ぞと、いましめ顔にいふ。されば此頃は文よむ窓を離れずして、ベルナルドオをも外の友をも尋ぬることなかりき。週を累ね月を積みて、試驗畢る日とはなりぬ。

黒き衣、短き絹の外套。是れ久しく夢みし「アバテ」の服ならずや。目に觸るゝもの一つとして我を祝せざるなし。街を走る吹聽人はいふも更なり、今咲き出づる「アネモオネ」の花、高く聳ゆる松の末より空飛ぶ雲にいたるまで、皆我を祝する如し。恰も好しフランチエスカの君は、臨時の費もあるべく又日ごろの勞をも忘れしめんとて、百「スクヂイ」の爲換を送り給ひぬ。我はあまりの嬉さに、西班牙磴を驅け上りて、ペツポのをぢに光ある「スクウド」一つ抛げ與へ、そのアントニオの主公と呼ぶ聲を後に聞きて馳せ去りぬ。

頃は二月の初なりき。杏花は盛に開きたり。柑子の木日を逐ひて黄ばめり。謝肉祭は既に戸外に來りぬ。馬に跨り天鵞絨の幟を建て、喇叭を吹きて、祭の前觸する男も、ことしは我がためにかく晴々しくいでたちしかと疑はる。ことしまでは我この祭のまことの樂しさを知らざりき。穉かりし程は、母上我に怪我せさせじとて、とある街の角に佇ずみて祭の盛を見せ給ひしのみ。學校に入りてよりは、「パラツツオオ、デル、ドリア」の廡作りの平屋根より笑ひ戲るゝ群を見ることを許されしのみ。すべて街のこなたよりかなたへ行くことだに自由ならず。矧や「カピトリウム」に登り、「トラステエエル」（河東の地なり、テエエル河の東岸に當れる羅馬の一部を謂ふ）に渡らんこと思ひも掛けざりき。かゝれば我がことしの祭に身を委ねて、兒どもの樣なる物狂ほしき振舞せしも、無理ならぬ事ならん。唯だ怪しきは此祭我生涯の境遇を一變するに至りしことなり。されどこれも我がむかし蒔きて、久しく忘れ居たりし種の、今緑なる蔓草となりて、わが命の木に纏へるなるべし。

祭は全く我心を奪ひき。朝にはポヽロの廣こうぢに出でゝ、競馬の準備を觀、夕にはコルソオの大道をゆきかへりて、店々の窓に曝せる假粧の衣類を閲しつ。我は可笑しき振舞せんに宜しからんとおもへば、狀師の服を借りて歸りぬ。これを衣て云ふべきこと爲すべきことの心にかゝりて、其夜は殆と眠らざりき。

明日の祭は特に尊きものゝ如く思はれぬ。我喜は兒童の喜に遜らざりき。横街といふ横街には「コンフエツチイ」の丸賣る浮鋪簷を列べて、その卓の上には美しき貨物を盛り上げたり。（「コンフエツチイ」の丸は石灰を豌豆［#「豌豆」は底本では「 女の身上を占ひて善く中てたるものならん。友なる男は、アントニオ、物にや狂へると私語ぎて、急に婦人を拉きつゝ、巡査、希臘人、牧婦などにいでたちたる人の間を潜りて逋れ去りぬ。その聲を聞くに、ベルナルドオなりき。さるにても彼婦人は誰にかあらん。椅子を借さんとて、觀棚々々（ルオジ、ルオジ、パトロニ）と呼ぶ聲いと喧し。われは思慮する遑あらざりき。されど謝肉祭の間に思慮せんといふも、固より世に儔なき好事にやあらん。忽ち肩尖と靴の上とに鈴つけたる戯奴（アレツキノ）の群ありて、我一人を中に取巻きて跳ね　りたり。忽ち又いと高蹺したる状師あり。我傍を過ぐとて、我を顧みて冷笑ひていはく。あはれなる同業者なるかな。君が立脚點の低きことよ。おほよそ地上にへばり着きたるものは、正を邪に勝たしむること能はず。我は高く擧りたり。我に代言せしむるものは、天の祐を得たらん如し。かく誇りかに告げて大蹈歩に去りぬ。

ピアツツア、コロンナに伶人の群あり。非常を戒めんと、徐にねりゆく兵隊の間をさへ、學士、牧婦などにいでたちたるもの踊りくるひて通れり。我は再び演説を始めしに、書記の服着たる男一僕を隨へたるが我前に來て、僕に鐸を鳴さする其響耳を裂くばかりなれば、われ我詞を解し得ずして止みぬ。この時號砲鳴りぬ。こは車の大道を去るべき知らせなり。我は道の傍に築きたる壇に上りぬ。脚下には人の頭波立てり。今やコルソオの競馬始らんとするなれば、兵士は人を攘はんことに力を竭せり。街の一端に近きポヽロの廣こうちに索を引きて、馬をば其後に並べたり。馬は早や焦躁てり。脊にには燃ゆる海綿を貼り、耳後には小き烟火具を裝ひ、腋には拍車ある鐵板を懸けたり。口際に引き傍ひたる壯丁はやうやくにして馬の逸るを制したり。號砲は再び鳴りぬ。こは埒にしたる索を落す合圖なり。馬は旋風の如く奔りて、我前を過ぎぬ。幣の如く束ねたる薄金はさら〳〵と鳴り、彩りたる紐は鬣と共に飄り、蹄の觸るゝ處は火花を散せり。かゝる時彼鐵板は腋を打ちて、拍車に釁ると聞く。群衆は高く叫びて馬の後に從ひ走れり。そのさま艫打つ波に似たり。けふの祭はこれにて終りぬ。

歌女

衣脱ぎ更へんとて家にかへれば、ベルナルドオ訪ひ來て我を待てり。われ。いかなれば茲には來たる。さきの婦人をばいづくにかおきし。友は指を堅てゝ我を威すまねしていはく。措け。我等は決鬪することを好まず。さきに邂逅ひたるときの狂態は何事ぞ。言ふこともあるべきにかゝることをばなど言ひたる。然れどもこのたびは釋すべし。今宵は我と倶に芝居見に往け。「ヂド」（カルタゴ女王の名にて又樂劇の名となれり）を興行すといふ。音樂よの常ならず。女優の中には世に稀なる美人多し。加旃ず主人公に扮するは、嘗てナポリに在りしとき、闇府の民をして物に狂へる如くならしめきといふ餘所の歌女なり。その發音、その表情、その整調、みな我等の夢にだに見ざるところと聞く。容貌も亦美し、絶だ美しと傳へらる。汝は筆を載せて從ひ來よ。若し世人の言半ば信ならんには、汝が「ソネツトオ」の工を盡すも、これに贈るに堪へざらんとす。我

はけふの謝肉祭に賣り盡して、今は珍しきものになりたる菫の花束を貯へおきつ。かの歌女もし我心に協はゞ、我はこれを贄にせんといふ。我は共に往かんことを諾ひぬ。すべて謝肉祭に連りたる樂をば、つゆ遺さずして嘗みんと誓ひたればなり。

今は我がために永く※るべからざる夕となりぬ。我羅馬日記を披けば、けふの二月三日の四字に重圈を施したるを見る。想ふにベルナルドオ如し日記を作らば、また我筆に倣はざることを得ざるならん。そも〳〵「アルベルトオ」座といへるは、羅馬の都に數多き樂劇部の中にて最大なるものなり。飛行の詩神を畫ける仰塵、オリユムポスの圖を寫したる幕、黄金を鏤めたる觀棚など、當時は猶新なりき。棚ごとに壁に鉤して燭を立てたれば、場内には光の波を湧かしたり。女客の來て座を占むるあれば、ベルナルドオ必ずその月旦を怠ることなし。

開場の樂（ウヱルチユウル）は始りぬ。こは音を以て言に代へたる全曲の敍と看做さるべきものなり。狂※波を鞭ちてエネエアスはリユビアの濱に漂へり。風波に駭きし叫號の聲は神に謝する祈禱の歌となり、この歌又變じて歡呼となる。忽ち柔なる笛の音起れり。是れヂドが戀の始なるべし。戀といふものは我が未だ知らざるところなれど、この笛の音は、我に髣髴としてその面影を認めしめたり。忽ち角聲獵を報ず。暴風又起れり。樂聲は我を引いて怪しき巖室の中に入りぬ。是れ温柔鄉なり。一呼一吸戀にあらざることなし。忽ち裂帛の聲あり。幕は開きたり。

エネエアスは去らんとす。去りてアスカニウス（エネエアスの子）がために、ヘスペリヤ（晩國の義、伊太利）を略せんとす。去りてヂドを棄てんとす。憐むべしヂドはおのれが榮譽と平和とを捧げて、これを無情の人におくり、その夢猶未だ醒めざるなり。エネエアスが歌にいはく。その夢は早晩醒むべし。トロアスの兵黒き蟻の群の如く獲を載せて岸に達せば、その夢いかでか醒めざることを得ん。

ヂドは舞臺に上りぬ。その始めて現はるゝや、萬客屏息してこれを仰ぎ瞻たり。その態度、その嚴なること王者の如くにして、しかも輕らかに優しき態度には、人も我も徑に心を奪はれぬ。初めわれこのヂドといふ役を我心に畫きしときは、その姿いたく今見るところに殊なりしかど、この歌女の意外なる態度はすこしも我興を損ふことなかりき。その優しく愛らしく、些の塵滓を留めざる美しさは、名匠ラファエロが空想中の女子の如し。烏木の光ある髮は、美しく凸なる額を圍めり。深黒なる瞳には、名狀すべからざる表情の力あり。忽ち喝采の聲は柱を撼さんとせり。こは未だその藝を讃むるならずして、先づ其色を稱ふるなり。所以者何といふに、彼は今纔に場に上りて、未だ隻音をも發せざればなり。彼は面に紅を潮して輕く會釋し、その天然の美音もて、百錬千磨したる抑揚をその宣敍調の上にあらはしつ。

友は遽に我臂を把りて、人にも聞ゆべき程なる聲していはく。アントニオよ。あれこそ例の少女なれ、飛び去りたる例の鳥なれ、その姿をば忘るべくもあらず。その聲さへ昔のまゝなり、われ心狂ひたるにあらずば、わがこの目利は違ふことなし。われ。例のとは誰が事ぞ。友。猶太廓の少女なり。されど彼の少女いかにしてこの歌女とはなりし。不思議なり。有りとしも思はれぬ事なり。友は再び眼を舞臺に注ぎて詞なし。ヂドは戀の歡を歌へり。清き情は聲となりて肺腑より迸り出づ。是時に當りて、我心は怪しく動きぬ。久しく心の奥に埋もれたりし記念は、此聲に喚び醒されんとする如し。

この記念は我が全く忘れたるものなりき。この記念は近頃夢にだに入らざるものなりき。さるを忽ちにして我はその目前に現るゝを覺えき。今は我も亦ベルナルド才と倶に呼ばんとす。あれこそ例の少女なれ。われ穉かりし時、「サンタ、マリア、アラチエリ」の寺にて聖誕日の説教をなしき。その時聲めでたき女兒ありて、その人に讃めらるゝこと我右に出でき。今聞くところは其聲なり。今見るところ或は其人にはあらずや。

エネエアスは無情なる語を出せり。我は去りなん。我は嘗ておん身を娶りしことなし。誰かおん身が婚儀の松明を見しものぞ。この詞を聞きたるときの心をば、ヂドいかに巧にその眉目の間に畫き出しゝ。事の意外に出でたる驚、ことばに現すべからざる痛、負心の人に對する忿、皆明かに觀る人の心に印せられき。ヂドは今主なる單吟に入りぬ。譬へば千尋の海底に波起りて、倒に雲霄を干さんとする如し。我筆いかでか此聲を畫くに足らん。あはれ此聲、人の胸より出づとは思はれず。姑く形あるものに喩へて言はんか。大いなる鵠の、皎潔雪の如くなるが、上りては雲を裂いて※氣たゞよふわたりに入り、下りては波を破りて蛟龍の居るところに沒し、その性命は聲に化して身を出で去らんとす。

喝采の聲は屋を撼せり。幕下りて後も、アヌンチヤタ、アヌンチヤタと呼ぶ聲止まねば、歌女は面を幕の外にあらはして、謝することあまたゝびなりき。

第二齣の妙は初齣を踰ゆること一等なりき。これヂドとエネエアスとの對歌なり。ヂドは無情なる夫のせめては啓行の日を緩うせんことを願へり。君が爲めにはわれリユビアの種族を辱めき。君がためにはわれ亞弗利加の侯伯に負きぬ。君がために操を破りたるわれは、トロアスに向けて一隻の舟をだに出さゞりき。我はアンヒイゼス（エネエアスの父）が靈の地下に安からんことを勉めき。これを聞きて我涙は千行に下りぬ。この時萬客聲を呑みてその感の我に同じきを證したり。

エネエアスは行きぬ。ヂドは色を喪ひて凝立すること少らくなりき。その狀ニオベ（子を射殺されて石に化した女神）の如し。俄にして渾身の血は湧き立てり。これ最早ヂドならず、戀人なるヂド、棄婦なるヂドならず。彼は生ながら怨靈となれり。その美しき面は毒を吐けり。その表情の力の大いなる、今まで共に嘆きし萬客をして忽又共に怒らしむ。フイレンツエの博物館に、レオナルドオ・ダ・ヰンチが畫きたるメヅウザ（おそろしき女神）の頭あり。これを觀るもの怖れども去ること能はず。大海の底に毒泡あり。能くアフロヂテを作りぬ。その目の狀は言ふことを須たず、その口の形さへ、能く人を殺さんとす。

エネエアスが舟は波を蹴て遠ざかりゆけり。ヂドは夫の遺れたる武器を取りて立てり。その歌は沈みてその聲は重く、忽ちにして又激越悲壯なり。同胞なるアンナアが彼を焚かんとて積み累ねたる薪は今燃え上れり。幕は下りぬ。喝采の聲は暴風の如くなりき。歌女はその色と聲とを以て滿場の客を狂せしめたるなり。觀棚よりも土間よりも、アヌンチヤタ、アヌンチヤタと呼ぶ聲頻なり。幕上りて歌女出でたり。その羞を含める姿は故の如くなりき。男は其名を呼び、女は紛※を振りたり。花束の雨はその頭の上に降れり。幕再び下りしに、呼ぶ聲いよ〳〵劇しかりき。こたびはエネエアスに扮せし男優と並びて出でたり。幕三たび下りしに、呼ぶ聲いよ〳〵劇しかりき。こたびはすべての俳優を伴ひ出でぬ。幕四たび下りしに、

呼ぶ聲猶劇しかりき。こたびはアヌンチヤタ又ひとり出でて短き謝辭を陳べたり。此時我詩は花束と共に歌女が足の下に飛べり。呼ぶ聲は未だ遏まねど、幕は復た開かず。この時アヌンチヤタは幕の一邊より出でゝ、舞臺の前のはづれなる燭に沿ひて歩みつゝ觀客に謝したり。その面には喜の色溢るゝごとくなりき。想ふにけふは歌女が生涯にて最も嬉しき日なりしならん。されどこは特り歌女が上にはあらず。我も亦わが生涯の最も嬉しき日を求めば、そは或はけふならんと覺えき。わが目の中にも、わが心の底にも、たゞアヌンチヤタあるのみなりき。觀客は劇場を出でたり。されど皆未だ肯て散ぜず。こは樂屋の口に　りゆきて、歌女が車に上るを見んとするなるべし。我も衆人の間に介まりて、おなじ方に歩みぬれど、後には傍へなる石垣に押し付けられて動くこと能はず。歌女は樂屋口に出でぬ。客は皆帽を脱ぎてその名を唱へたり。われもこれに聲を合せつゝ、言ふべからざる感の我胸に滿つるを覺えき。ベルナルドオはもろ人を押し分けて進み、早くも車に近寄りて、歌女がためにその扉を開きぬ。少年の群は轅にすがりて馬を脱したり。こは自ら車を輓かんとてなりき。アヌンチヤタは聲を顫せてこれを制せんとしつれど、その聲は萬人のその名を呼べるに打ち消されぬ。ベルナルドオは歌女を車に載せ、おのれは踏板に上りて説き慰めたり。我も轅を握りてかの少年の群と共に喜びぬ。惜むらくは時早く過ぎて、たゞ美しかりし夢の痕を我心の中に留めしのみ。

　歸路に珈琲店に立寄りしに、幸にベルナルドオに逢ひぬ。羨むべき友なるかな。彼はアヌンチヤタに近づき、アヌンチヤタともの語せり。友のいはく。アントニオよ。奈何なりしぞ。汝が心は動かずや。若し骨焦がれ髄燃えずば、汝は男子にあらじ。さきの年我が彼に近づかんとせしとき、汝は實に我を妨げたり。汝は何故にヘブライオス語を學ぶことを辭みしか。若し辭まずば、かゝる女と並び坐することを得しならん。汝は猶アヌンチヤタの我猶太少女なることを疑ふにや。我にはかく迄似たる女の世にあらんとは信ぜられず。アヌンチヤタはたしかに猶太をとめなり。我にチブリイの酒を飲せし少女なり。少女は巢を立ちし「フヨニツクス」鳥の如く、かの穢はしき猶太廓を出でつるなり。われ。そは信じ難き事なり。我も昔一たびかの女を見きと覺ゆ。若し其人ならば、猶太教徒にあらずして加特力教徒なること疑なし。汝も熟々彼姿を見しならん。不幸なる猶太教徒の皆負へるカイン（亞當の子）が印記は、一つとしてその面に呈れたるを見ざりき。又その詞さへその聲さへ、猶太の民にあるまじきものなり。ベルナルドオよ。我心はアヌンチヤタが妙音世界に遊びて、ほと〳〵歸ることを忘れたり。汝は彼少女に近づきたり。汝は彼少女ともの語せり。彼少女は何をか云ひし。彼少女も我等と同じくこよひの幸を覺えたりしか。友。アントニオよ。汝が感動せるさまこそ珍らしけれ。「ジエス斗タ」の學校にて結びし氷今融くるなるべし。アヌンチヤタが何を云ひしと問ふか。彼少女は粗暴なる少年に車を挽かれて、且は懼れ且は喜びたりき。彼少女は面紗を緊しく引締めて、身をば車の片隅に寄せ居たり。我は途すがらかゝる美しき少女に言ふべきことの限を言ひしかど、彼は車を下るとき我がさし伸べたる手にだに觸れざりき。われ。汝が大膽なることよ。汝は歌女と相識れるにあらずして、よくもさまで馴々しくはもてなしゝよ。こは我が決して敢てせざる所ぞ。友。我もさこそ思へ。汝は世の中を知らず、又女の上を知らねばなり。今日はかの女いまだ我に答へざりしかど、我には猶多少の利益あり。そは少

女が我面を認めたることなり。我友はこれより我にさきの詩を誦せしめて聞き、頗妙なり、羅馬曰記に刻するに足ると稱へき。我等二人は杯を擧げてアヌンチヤタが壽をなしたり。我等のめぐりなる客も皆歌女の上を語りて口々に之を讃め居たり。

我がベルナルドオに別れて家に歸りしは、夜ふけて後なりき。床に上りしかど、いも寐られず。われはこよひ見し阿百拉の全曲を繰り返して心頭に畫き出せり。ヂドが初めて場に上りし時、單吟に入りし時、對歌せし時より、曲終りし時まで、一々肝に銘じて、其間の一節だに忘れざりき。我は手を被中より伸べて拍ち鳴らし、聲を放ちてアヌンチヤタと呼びぬ。次に思ひ出したるは我が心血を濺ぎたる詩なり。起きなほりてこれを寫し、寫し畢りてこれを讀み、讀みては自ら其妙を稱へき。當時はわれ此詩のやゝ情熱に過ぐるを覺えしのみにて、その名作たることをば疑はざりき。アヌンチヤタは必ず我詩を拾ひしならん。今は彼少女家に歸りて半ば衣を脱ぎ、絹の長椅の上に坐し、手もて頤を支へて、ひとり我詩を讀むならん。きみが姿を仰ぎみて、君がみ聲を聞くときは、おほそら高くあま翔り、わたつみふかくかづきいり、かぎりある身のかぎりなき、うき世にあそぶこゝちして、うた人なりしいにしへのダヌテがふみをさながらに、おとにうつしてこよひこそ、聞くとは思へ、うため（歌女）の君に。

我は嘗てダンテの詩をもて天下に比なきものとなしき。さるを今アヌンチヤタが藝を見るに及びて、その我心に入ること神曲よりも深く、その我胸に迫ること神曲よりも切なるを覺えたり。その愛を歌ひ、苦を歌ひ、狂を歌ふを聞けば、神曲の變化も亦こゝに備はれり。アヌンチヤタ我詩を讀まば、必ず我意を解して、我を知らんことを願ふならん。斯く思ひつゞけて、やう〳〵にして眠に就きぬ。後に思へば、我は此夕我詩を評せしにはあらで、始終詩中の人をのみ思ひたりしなり。

をかしき樂劇

翌日になりて、ベルナルドオを尋ね求むるに、何處にもあらざりき。ピアツツア、コロンナをばあまたゝび過ぎぬ。アントニウスの像を見んとてにはあらず。アヌンチヤタの影を見る幸もあらんかとてなり。彼君はこゝに住へり。外國人にして共に居るものもあり。いかなる月日の下に生れあひたる人にか。「ピアノ」の響する儘に耳聳つれど、彼君の歌は聞えず。二聲三聲試みる樣なるは、低き「バツソオ」の音なり。樂長ならずば彼群の男の一人なるべし。幸ある人々よ。殊に羨ましきはエネエアスの役勤めたる男なるべし。かの君と目を見あはせ、かの君の燃ゆる如き目なざしに我面を見させ、かの君と共に國々を經めぐりて、その譽を分たんとは。かく思ひつゞくる程に、我心は怏々として樂まずなりぬ。忽ち鈴つけたる帽を被れる戲奴、道化役者、魔法つかひなどに打扮ちたる男あまた我圍を跳り狂へり。けふも謝肉の祭日にて、はや其時刻にさへなりぬるを、われは心づかでありしなり。かゝる群の華かなる粧。その物騷がしき聲々はます〳〵我心地を損じたり。車幾輛か我前を過ぐ。その御者はこと〳〵〳〵〳〵く女裝せり。忌はしき行裝かな。女帽子の下より露れたる黒髯、あら〳〵しき身振、皆程を過ぎて醜し。我はきのふの如く此間に立ちて快を取ること能はず。今しも最後の眸を彼君の居給ふ家に注ぎて、はや踵を囘さんとしたるとき、その家

の門口より馳せ出る人こそあれ。こはベルナルドオなり。滿面に打笑みて。そこに立ち盡すは何事ぞ。疾く來よ。アヌンチヤタに引きあはせ得さすべし。彼君は汝を待ち受けたり。こは我友誼なれば。なに彼君が。と我は言ひさして、血は耳廓に昇りぬ。戯すな。我をいづくにか伴ひゆかんとする。友。汝が詩を贈りし人の許へ、汝も我も世の人も皆魂を奪れたる彼人の許へ、アヌンチヤタの許へ。かく云ひつゝ、友は我手を取りて門の内へ引き入れたり。我。先づわれに語れ。いかにして彼君の家に往くことゝはなしたる。いかにして我を紹介するやうにはなりし。友。そは後にゆるやかにこそ物語らめ。先づその沈みたる顔色をなほさずや。我。されどこのなよびたる衣をいかにせん。かの君にあまりに無作法なりとや思はれん。かく言ひつゝ我は衣など引き繕ひてためらひ居たり。友。否々その衣のままにて結構なり。兎角いひ爭ふほどに我等ははや戸の前に來ぬ。戸は開けり。我はアヌンチヤタが前に立てり。

衣は黒の絹なり。半紅半碧の紗は肩より胸に垂れたり。黒髪を束ねたる紐の飾は珍らしき古代の寶石なるべし。傍に、窓の方に寄りて坐りたるは、暗褐色の粗服したる媼なり。彼君の目の色、顔の形は猶太少女といはんも理なきにあらずと思はる。我友がむかし猶太廓にて見きといふ少女の事は、忽ち胸に浮びぬ。されど我心に問へば、この人その少女ならんとは思はれず。室の内には、尚一人の男居あはせたるが、わが入り來るを見て立ちあがれり。アヌンチヤタも亦起ちて笑みつゝ我を迎へたり。友はわざとらしき聲音にて。これこそ我友なる大詩人に候へ。名をばアントニオといひ、ボルゲエゼの族の寵兒なり。主人の姫は我に向ひて。許し給へ。おん目にかゝらんことは、寔に喜ばしき限なれど、かく強ひて迎へまつらんこと本意なく、二たび三たび止めしに、ベルナルドオの君聽かれねば是非なし。さきにはめでたき歌を賜はりぬ。その作者は君なること、おん友達より承りて、いかでおん目にかゝらんと願ひ居りしに、窓より君を見付けて、わが詞を聞かで呼び入れ給ひぬ。禮なしとや思ひ給ひけん。されどおん友達の上は、我より君こそよく知りておはすらめ。ベルナルドオは戯も て姫がこの詞に答へ、我は僅にはじめて相見る喜を述べたり。我頬は燃ゆる如くなりき。姫のさし伸べたる手を握りて、我は熱き唇に當てたり。姫は室にありし男を我に引き合せつ。すなはちこの群の樂長なりき。又媼は姫のやしなひ親なりといふ。その友と我とを見る目なざしは廉ある如く覺えらるれど、姫が待遇のよきに、我等が興は損はるゝに至らざりき。

樂長は我詩を讃めて、われと握手し、かゝる技倆ある人のいかなれば樂劇を作らざる、早くおもひ立ちて、その初の一曲をば、おのれに節附せさせよと勸めたり。姫その詞を遮りて。彼が言を聞き給ふな。君にいかなる憂き目をか見せんとする。樂人は作者の苦心をおもはず、聽衆はまた樂人よりも冷淡なるものなり。こよひの出物なる樂劇の本讀といふ曲はかゝる作者の迷惑を書きたるものなるが、まことは猶一層の苦界なるべし。樂長の答へんとするに口を開かせず、姫は我前に立ちて語を繼ぎたり。君こゝろみに一曲を作りて、全幅の精神をめでたき詞に注ぎ、局面の體裁人物の性質、いづれも心を籠めてその趣を盡し、扨これを樂人の手に授け給へ。樂人はこゝにかゝる聲を挿まんとす。君が字句はそのために削らるべし。かしこには笛と鼓とを交へむとす。君はこれにつれて舞はしめられん。さておもなる女優は來りて、引込の前に歌ふべき單吟の華かなるを一つ作り添へ給はでは、この曲を歌はじといふ

べし。全篇の布置は善きか悪きか。そは俳優の責にあらず。「テノオレ」うたひの男も、これに譲らぬ我儘をいはむ。君は男女の役者々々を訪ひて項を曲げ色を令くし、そのおもひ付く限の注文を聞きてこれに應ぜざるべからず。次に來るは座がしらなり。その批評、その指　、その刪除に逢ふときは、その人いかに愚ならんも、枉げてこれに從はでは協はず。道具かたはそれの道具を調へんは、我座の力の及ぶところにあらずといふ。かゝる場合に原作を改むることを、芝居にては曲を曲ぐといふ。畫工は某の畑、某の井、其の積み上げたる芻秣をばえ寫さじといふ。これがためにさへ曲ぐべき詞も出來たるべし。最後におもなる女優又來りて、それの詞の韻脚は嚙りにくし、あの韻をば是非とも阿のこゑにして賜はれといふ。これがためにいかなる重みある詞を削り給はんも、又いづくより阿のこゑの韻脚を取り給はんも、そは唯だ君が責に歸せん。かくあまたゝび改めて、ほと〳〵元の姿を失ひたる曲を革に掛けたるとき、看客のうけあしきを見て、樂長はかならず怒りて云はむ。拙劣なる詩のために、いたづらなる骨折せしことよ。わが譜の翼を借したれども、癡重なるかの曲はつひに地に墜ちたりと云はむ。

　外よりは樂の聲おもしろげに聞えたり。假面着けたる人はこゝの街にもかしこの辻にもみち〳〵たり。たちまち拍手の音と共に聞ゆる喝采の響いとかしましきに、一座の人々みな窓よりさし覗きぬ。いまわれ意中の人の傍にありて見れば、さきに厭はしと見つるとは様かはりて、けふの祭のにぎはひ又面白く、我はふたゝびきのふ衆人に立ち廻りて遊びたはぶれし折に劣らぬ興を覺えき。

　道化役者にいでたちたるもの五十人あまり。われ等のさし覗ける窓の下につどひ來て、おのれ等が中より一人の王を選擧せんとす。これに中りたるものは、彩りたる旗、桂の枝の環飾、檸檬の實の皮などを懸けたる小車に乘り遷りぬ。その旗のをかしく風に翻るさま、衣の紐などの如く見えき。王の着座するや、其頭には金色に塗りて更にまた彩りたる鷄卵を並べて作れる笠を冠として戴かせ、其手には「マケロニ（麪類の名）つけたる大いなる玩具の柄つきの鈴を笏として持たせたり。さて人々その車のめぐりを踊りめぐれば、王はいづかたへも向ひて頷きたり。やゝありて人々は自ら車の綱取りて挽き出せり。この時王は窓にアヌンチヤタあるを見つけ、親しげに目禮し、車の動きはじむると共に聲を揚げ。きのふは汝、けふは我。羅馬の牧のまことの若駒を轅に繋ぐ快さよ、とぞ叫びける。姫は面をさと赤めて一足退きしが、忽ち心を取直したる如く、又手を欄にかけて、聲高く。我にも汝にも過分なる事ぞ。かりそめにな思ひそといふ。群集も亦きのふの歌女を見つけたりけるが、今その王との問答を聞きて、喝采の聲しばしは鳴りも止まず、雨の如き花束は樓の上なる窓に向ひて飛びぬ。その花束の一つ、姫が肩に觸れて我前に落ちたれば、我はそを拾ひて胸におしつけ、何物にも換へがたき寶ぞと藏めおきぬ。

　ベルナルドオは祭の王のよしなき戯を無禮しといきどほり、そのまゝ樓を走り降りて筈ち懲らさばやといひしを、樂長は餘のひと〳〵〃〵と共になだめ止むるほどに、「テノオレ」うたひの頭なる男おとづれ來ぬ。その男は歌女に初對面なりといふ「アバテ」一人と外國うまれの樂人一人とを伴へり。續いて外國の藝人あまた打連れ來りて對面を請ひぬ。これにて一間に集ひし客の數俄に殖えたれば、物語さへいと調子づきて、さきの夕「アルジエンチナ」座にて興行したる可笑き假粧舞の事、詩女の導者たるアポルロン、古代の力士、

圓鐵板投ぐる男の像等に肖せたる假面の事など、次を逐ひて談柄となりぬ。獨りかの猶太種と覺しき老女のみはこの賑しき物語に與らで、をり〳〵姫がことさらに物言掛けたる時、僅に輕く頷くのみなりき。この時姫の態度に心をつくるに、きのふ芝居にて思ひしとは、甚しき相違あり。その家にありてのさまは、世を面白く渡りて、物に拘ることなき尋常の少女なり。されどわが姫を悦ぶ心はこれがために毫しも減ぜず。この稚き振舞は却りてあやしく我心に協ひき。姫は譯もなき戯言をも、面白くいひ出でゝ、我をも人をも興ぜさせ居たりしが、俄にこゝろ付きたるやうに※を見て、はや化粧すべき時こそ來ぬれ、今宵は樂劇の本讀（ラブルオバ、ヅン、オペラ、セリア）のうちなる役に中り居ればとて座を起ち、側なる小房のうちに入りぬ。

門を出でたるとき。われ。汝が惠によりてゆくりなき幸に逢ひしことよ。舞臺なるを見し面白さに讓らぬ面白さなりき。さはれ汝はいかにして彼君とかく迄親くはなりし。又いかにして我をさへ紹介しつる。我は猶さきよりの事を夢かと疑はんとす。友。わが少女の許を訪れしは、別にめづらしき機會を得しにあらず。羅馬貴族の一人、法皇禁軍の一將校、すべての美しきものを敬する人のひとりとして、姫をば見舞つるなり。若し又戀といふものゝ上より云はゞ、この理由の半ばをだに須ゐざるならん。されば我が姫を訪ひて、汝も前に見つる如き紹介なき客に劣らぬ、善き待遇を得しこと、復た怪むに足らざるべし。且戀はいつも我交際の技倆を進む。彼と相對するときは、倦怠せしめざる程の事我掌中に在り。相見てよりまだ半時間を經ざるに、我等は頗る相識ることを得き。さてかくは汝をさへ引合せつるなり。我。さては汝彼君を愛すといふか。眞心もて愛すといふか。友。然り、今は昔にもまして愛するやうになりぬ。

さきに猶太廓にて我に酒を勸めし少女の、今のアヌンチヤタなることは、最早疑ふべからず。わが始て居向ひしとき、姫は分明に我を認むるさまなりき。かの老いたる猶太婦人の詞すくなく、韈編めるも、わがためには一人の證人なり。されどアヌンチヤタは生れながらの猶太婦人にあらず。初め我がしかおもひしは、其髮の黒く、其瞳の暗きと其境界とのために惑はされしのみ。今思へば姫は矢張基督教の民なり。終には樂土に生るべき人なり。

この夕ベルナルド才と芝居にて逢ふことを約しき。されど餘りの大入なれば、我はつひに吾友を見出すこと能はざりき。我は辛く一席を購ふことを得き。いづれの棧敷にも客滿ちて、暑さは人を壓するやうなり。演劇はまだ始まらぬに、我身は熱せり。きのふけふの事、わがためには渾て夢の如くなりき。かゝる折に逢ひて、我心を鎭めんとするに、最も不恰好なるは、蓋し今宵の一曲なりしならん。世に知れわたりたる如く、樂劇の本讀といふは、極めて放肆なる空想の産物なり。全篇を貫ける脈絡あるにあらず。詩人も樂人も、只管觀客をして絶倒せしめ、兼ねて許多の俳優に喝采を博する機會を與へんことを勉めたるなり。主人公は我儘にして動き易き性なる男女二人にして、これを主なる歌女及譜を作る樂人とす。絶間なき可笑しさは、盡る期なき滑稽の葛藤を惹起せり。主人公の外なる人物には人のおのれを取扱ふこと一種の毒藥の如くならんことを望める俳優をのみ多く作り設けたり。かくいふをいかなる意ぞといふに、そは能く人を殺し又能く人を活す者ぞとなり。此群に雜れる憐むべき詩人は、始終人に制せられ役せられて、譬へば猶犧牲となるべき價なき小羊のごとくなり。

喝采の聲と花束の閃は場に上りたるアヌンチヤタを迎へき。その

我儘にて興ある振舞、何事にも頓着せずして面白げなる擧動を見て、人々は高等なる技といへど、我はそを天賦の性とおもひぬ。いかにといふに、姫が家にありてのさまはこれと殊なるを見ざればなり。その歌は數千の銀の鈴齊く鳴りて、柔なる調子の變化極なきが如く、これを聞くもの皆頭を擧げて、姫が目より漲り出づる喜をおのが胸に吸ひたり。姫と作譜者と對して歌ふとき相代りて姫男の聲になり、男姫の聲になる條あり。この常に異なる技は、聽衆の大喝采を受けたるが、就中姫が最低の「アルトオ」の聲を發し畢りて、最高の「ソプラノ」の聲に移りしときは、人皆物に狂へる如くなりき。姫が輕く艷なる舞は、エトルリアの瓶の面なる舞者に似て、その一擧一動一として畫工彫工の好粉本ならぬはなかりき。われはこのすべての技藝を見て姫の天性の發露せるに外ならじとおもひき。アヌンチヤタがヂドは妙藝なり、その歌女は美質なり。曲中には間何の緣故もなき曲より取りたる、可笑しき節々を※みたるが、姫が滑稽なる歌ひざまは、その自然ならぬをも自然ならしめき。姫はこれを以て自ら遣り又人に戲るゝ如くなりき。大團圓近づきたるとき、作譜者、これにて好し、場びらきの樂を始めんとて、舞臺の前なるまことの樂人の群に譜を頒てば、姫もこれに手傳ひたり。樂長のいざとて杖を擧ぐると共に、耳を裂くやうなる怪しき雜音起りぬ。作譜者と姫と、旨し〳〵と叫びて掌を拍てば、觀客も亦これに和したり。笑聲は殆ど樂聲を覆へり。我は半ば病めるが如き苦悶を覺えき。姫の姿は驕兒の恣まゝに戲れ狂ふ如く、その聲は古の希臘の祭に出できといふ狂女の歌ふに似たり。されどその放縱の間にも猶やさしく愛らしきところを存せり。我はこれを見聞きて、ギドオ・レニイ（伊太利畫工）が仰塵畫の朝陽と題せるを想出しぬ。その日輪の車を繞りて踊れる女のうちベアトリチエ・チエンチイ（羅馬に刑死せし女の名）の少かりしときの像に似たるありしが、その面影は今のアヌンチヤタなりき。我もし彫工にして、この姿を刻みなば、世の人これに題して清淨なる歡喜となしたるなるべし。あら〳〵しき雜音は愈　高く、作譜者と姫とは之に連れて歌ひたるが、忽ち旨し〳〵、場びらきの樂は畢りぬ、いざ幕を開けよといふとき幕閉づ。これを此曲の結局とす。姫はこよひもあまたゝび呼び出されぬ。花束、緑の環飾、詩を寫したるむすび文、彩りたる紐は姫が前に翻りぬ。

即興詩の作りぞめ

この夕我と同じ年頃なる人々にて、中には我を知れるものも幾人か雜りたるが、アヌンチヤタが家の窓の下に往きて絃歌を催さむといふ。我は崇拜の念止み難き故をもて、膽太くもまたこの群に加りぬ。唱歌といふものをば止めてより早や年ひさしくなりたるにも拘らで。

姫が歸りてより一時間の後なりき。一群はピアツツア、コロンナに至りぬ。出窓の内よりは猶燈の光さしたり。樂器執りたる人々は窓の前に列びぬ。我心は激動せり。我聲は臆することなく人々の聲にまじりたり。歌の一節をば、われ一人にて唱へき。この時我は唯だアヌンチヤタが上をのみ思ひて、すべての世の中を忘れ果てたり。さて深く息して聲を出すに、その力、その柔さ、能くかく迄に至らんとは、みづからも初より思ひかけざる程なりき。火伴のものは覺えず微なる聲にて喝采す。その聲は微なりと雖、猶我耳に入りて、我はおのが聲の能く調へるに心付きたり。喜は我胸に滿ちたり。神

は我身に舎り給へり。アヌンチヤタが出窓よりさし覗きて、身を屈し禮をなしたるときは、その禮を受くるもの殆ど我一人なる如くおもはれき。我は我聲の一群を左右する力ありて、譬へば靈魂の肢體を役するが如くなるを覺えき。事果てて後家に歸りしが、身は唯だ夢中に起ちてさまよひありく、怪しき病ある人の如くにして、その夜枕に就きての夢には始終アヌンチヤタが我歌を喜べるさまをのみ見き。

翌日姫をおとづれぬ。ベルナルドオ、昨夜の火伴の二人三人は我に先だちて座にありき。姫のいはく。きのふ絃歌の中にて「テノオレ」の聲のいと善きを聞きつといふ。我面はこの詞と共に火の如くなりぬ。それこそアントニオなれと告ぐるものあり。姫は直ちに我を引きて「ピアノ」の前に往き、倶に歌へと勸む。我は法廷に立てるが如き心地して、再三辭みたるに、人々側より促して止まず、又ベルナルドオは聲を勵まして、さては汝切角の姫の聲をさへ我等に聞せざらんとするかと責めたり。姫に手を拉かれたる我は、捕られし小鳥に殊ならず。縦ひ羽ばたきすとも、歌はでは叶はず。姫の歌はんといふは、わが知れる雙吟なり。姫は「ピアノ」に指を下して、先づ聲を擧げ、我は震ひつゝもこれに和したり。この時姫の目なざしは、我に膽々とさゝやきて、我をその妙音界に迎ふる如くなりき。わが怯は已みて、我聲は朗になりぬ。一座は喝采を吝まず、かの猶太おうなさへやさしげに頷きぬ。

このときベルナルドオは汝はいつも人の意表に出づる男ぞとつぶやきて、さて衆人に向ひ、吾友には猶かくし藝こそあれ、そは即興の詩を作ることなり、作らせて聞き給はずやといひき。喝采に醉ひたる我は、アヌンチヤタが一言の嘱を待ちて、大膽にも即興の詩を歌はんとせり。この技は人と成りての後未だ試みざるものなるを。我は姫の「キタルラ」を把りぬ。姫は直に不死不滅といふ題を命ぜり。材には豐なる題なりき。しばしうち案じて、絃を撥くこと二たび三たび、やがて歌は我肺腑より流れ出でたり。詩神は蒼茫たる地中海を渡り、希臘の緑なる山谷の間にいたりぬ。雅典は荒草斷碑の中にあり。こゝに野生の無花果樹の摧け殘りたる石柱を掩へるあり。この間には鬼の欷歔するを聞く。むかしペリクレエスの世には、この石柱の負へる穹窿の下に、笑ひさゞめく希臘の民往來したりき。そは美の祭を執り行へるなり。ライス（名娼の名）の如く美しき婦人は環飾を取りて市に舞ひ、詩人は善と美との不死不滅なるを歌ひぬ。忽ちにして美人は黄土となりぬ。當時の民の目を悦ばしたる形は世の忘るゝ所となりぬ。詩神は瓦礫の中に立ちて泣くほどに、人ありて美しき石像を土中より掘り出せり。こは古の巨匠の作れるところにして、大理石の衣を着けて眠りたる女神なり。詩神はこれを見て、さきの希臘の美人の俤を認めき。あはれ古人が美をかう〳〵しき迄に進めて、雪の如き石に印し、これを後昆に遺したるこそ嬉しけれ。見よや、死滅するものは浮世の權勢なり。美いかでか死滅すべき。詩神は又波を踏みて伊太利に渡り、古の帝王の住みつる城址に踞して、羅馬の市を見おろしたり。テヱエル河の黄なる水は昔ながらに流れたり。されどホラチウス・コクレスが戰ひし處には、今筏に薪と油とを積みてオスチアに輸るを見る。されどクルチウスが炎火の喉に身を投ぜし處には、今牧牛の高草の裡に眠れるを見る。アウグスツスよ。チツスよ。汝が雄大なる名字も、今は破れたる寺、壞れたる門の稱に過ぎず。羅馬の鷲、ユピテルの猛き鳥は死して巣の中にあり。あはれ羅馬よ。汝が不死不滅はいづれの處にか在る。

鷲の眼は忽ち耀きて、その光は全歐羅巴を射たり。既に倒れたる帝座は、又起ちてペトルスの椅子（法皇座）となり、天下の王者は徒跣してこゝに來り、その下に羅拜せり。おほよそ手の觸るべきもの、目の視るべきもの、いづれか死滅せざらん。されどペトルスの刀いかでか※を生ずべき。寺院の勢いかでか墮つる期あるべき。縱ひ有るまじきことある世となりんも、羅馬は猶その古き諸神の像と共に、その無窮なる美術と共に、世界の民に崇められん。東よりも西よりも、又天寒き北よりも、美を敬ふ人はこゝに來て、羅馬よ、汝が威力は不死不滅なりといはん。この段の畢るや、喝采の聲は座に滿ちたり。獨りアヌンチヤタは靜座して我面を見たるが、其姿はアフロヂテの像の如く、其眸には優しさこもれり。我情は猶輕き詩句となりて、唇より流れ出でたり。詩境は廣き世界より狹き舞臺に遷れり。こゝに技倆すぐれたる俳優あり。その所作、その唱歌は萬客の心を奪へり。歌ひてこゝに至りたるとき、姫は頭を低れたり。そは我上とおもへばなるべし。座中の人々も、亦我敍述する所によりて我意の在るところを認めしならん。かゝる俳優も歌歇み幕落ちて、喝采の聲絶ゆるときは、其藝術は死なん。死して美き屍となりて、聽衆の胸に※められたるのみならん。されど詩人の胸は衆人の胸に殊なり。譬へば聖母の墓の如し。こゝに※めらるゝものは、悉く化して花となり香となり、死者は再びこれより起たん。しかしてその詩は一たび死したる藝術をして、不死不滅の花となりて開かしめん。我目はアヌンチヤタが顔を見やりたり。我心は吐き盡したり。われは起ちて禮をなしたるに、人々は我を圍みて謝したり。姫は我を視て、君は深く我心を悦ばしめ給ひぬといひぬ。我は僅に唇をやさしき手に押し當てたり。

そも〳〵劇は虹の如きものなり。彼も此も天地の間に架したる橋梁なり。彼も此も人皆仰いで其光彩を喜ぶ。然はあれどその※忽とアヌンチヤタが技とは、其運命實にかくの如し。姫はわがこれを不朽にせんとする心を、この時能く曉り得たり。姫が我を解することの斯く深かりしことは、當時我未だ知ること能はざりしが、後に至りて明かになりぬ。

我は日ごとに姫をおとづれき。わづかに殘れる謝肉祭の日はいつしか夢の如くに過ぎ去りぬ。されどこの間われは遺憾なくこのまつりの興を受用し盡せり。そはアヌンチヤタが我に賦したる樂天主義の賜なりき。或時ベルナルドオのいふやう。汝はやうやくまことの男とならんとす。われ等に變らぬ眞の男とならんとす。されど汝はまだ唇を杯の緣にあてしに過ぎず。我は明かに知る、汝が唇の未だ曾て女子の口に觸れず、汝が頭の女子の肩に倚らざるを。今若しアヌンチヤタまことに汝を愛せばいかに。我。思ひも掛けぬ事かな。アヌンチヤタは我が僅に能く仰ぎ見るものゝ名にして、我手の屆くべきものゝ名にあらず。彼。あらず。高くもあれ低くもあれ、アヌンチヤタとは女子の名なり。汝は詩人にあらずや。詩人は測るべからざる性あるものなり。その女子の胸の片隅を占むるや、その奥に進むべき鍵は、詩人の手にあるものぞ。我。姫がやさしさ、賢しさ、姫が藝術のすぐれたるをこそ慕へ。これに戀せんなどとは、われ實に夢にだにおもひしことなし。彼。汝が眞面目なるおも持こそをかしけれ。好し〳〵、我は汝が言を信ぜん。汝は素より蛙なんどに等しき水陸兩住の動物なり。現の世のものか、夢の世のものか、そを誰か能く辨ぜん。汝はまことに彼君を愛せざるべし、わが愛する如く、世の人の戀するときに愛する如く愛せざるべし。されど汝が姫

に對する情果して戀に非ずば、今より後彼に對して面をあかめ、火の如き目なざしゝて彼に向ふことを休めよ。そは彼君のためにあしかりなん。傍より見ん人の心のおもはれて。されど姫はあさて此地を立つといへば、最早その憂もあらざるべし。基督再生祭の後には歸るといへど、そも恃むべきにはあらず。これを聞きたるとき、我胸は躍りぬ。アヌンチヤタを見るべからざること五週に亙るべし。彼君はフイレンツエの芝居に傭はれ、斷食日の初にこゝを立つなりとぞ。ベルナルドオは語を繼ぎていはく。かしこに至らば崇拜者の新なる群は姫がめぐりに集ふべし。さらば舊きは忘れられん。譬へば汝が即興の詩の如きも、その時こそ姫のやさしき目なざしに、汝に謝する色現れつれ、かしこにては思出さるゝ暇なからん。さはあれ一個の婦人にのみ心を傾くるは癡漢の事なり。羅馬には女子多し。野に遍き花のいろ〳〵は人の摘み人の采るに任するにあらずや。

この夕我はベルナルドオと共に芝居に往きぬ。アヌンチヤタは再びヂドとなりて出でぬ。その歌、その振、始に讓らざりき。完備せるものゝ上には完備を添ふるに由なし。姫が技藝はまことに其域に達したるなり。こよひは姫また我理想の女子となりぬ。その本讀の曲にての役、その平生の擧動は、例へば天上の仙の暫くこの世に降りて、人間の態をなせるが如くぞおもはるる。その態も好し。されどヂドの役にては、姫が全幅の精神を見るべし。姫がまことの我を見るべし。萬客は又狂せり。想ふにこの羅馬の民のむかし該撒とチツスとを迎へけん歡も、おそらくは今宵の上に出でざるならん。曲畢りて姫は衆人に向ひて謝辭を陳べ、再びこゝに來んことを約せり。姫はこよひもあまたゝび呼出されぬ。歸途に人々の車を挽けるも亦同じ。我もベルナルドオと共に車に附き添ひて、姫がやさしき笑顔を見送りぬ。

謝肉祭の終る日

翌日は謝肉祭の終る日なりき。又アヌンチヤタが滯留の終る日なりき。我は暇乞におとづれぬ。市民がその技能に感じて與へたる喝采をば、姫深く喜びたり。フイレンチエはその自然の美しき、その畫廊の備れる、居るに宜しきところなれど、再生祭の後こゝに歸らんことは、今より姫の樂むところなり。姫はかしこの景色を物語りぬ。アペンニノの森林、豪貴の人々の別莊の其間に碁布せるピアツツア、デル、グランヅカ、其外美しき古代の建築物など、その言ふところ人をして目のあたりに見る心地せしめき。

姫のいはく。我は再び畫廊に往かむ。我に彫刻を喜ぶこゝろを生ぜしめしは彼處なり。プロメテウスが死者に生を與ふるに同じく、人間の心の偉大なるを、わが悟りしはかしこなり。彼廊に一室あり。そは最も小なる室にして、わが最も好める室なり。今若し君をかしこに在らしむることを得ば、君は能くわがむかしの喜を解し、又能くわが今日そを想起す喜を解し給はん。この八角に築きたる室には、實に全廊の尤物を擺でゝ陳列せり。されどその尤物の皆おさるるは、メヂチのヱヌスの石像あればなり。かくまでに生けるが如き石像をば、われこの外に見しことなし。その目は人を視る如し。あらず。人の心の底を觀る如し。石像の背後には、チチアノの畫けるヱヌスの油畫二幅を懸けたり。その色彩目を奪ふと雖、こゝに寫し得たるは人間の美しさにして、彼石の現せるは天上の美しさなり。ラフアエロがフオルナリイナ（作者意中の人）は心を動すに足らざ

るにあらず。されどエヌスの生けるをば、われあまたゝび顧みざること能はず。否々、おほよそ世に彫像多しと雖、いづれか彼エヌスの右に出づべき。ラオコオンにてはまことに石の痛楚のために泣くを見る。しかも猶及ばざるところあり。獨り我エヌスと美を※ぶるは、君も知り給へるワチカアノのアポルロンならん。その詩神を摸したる力量は、彼エヌスに於きてやさしき美の神を造れるなり。我答へて。君の愛で給ふ像を石膏に寫したるをば、我も見き。姫。否、われは石膏の型ばかり整はざるものはなしと思へり。石膏の顔は死顔なり。大理石には命あり靈あり。石はやがて肌肉となり、血は其下を行くに似たり。フイレンチエまで共に行き給はずや。さらばわれ君が案内すべし。我は姫が志の厚きを謝して、さていひけるは、さらば再生祭の後ならでは、又相見んこと難かるべしといふ。姫こたへて。さなり。聖ピエトロ寺の燈を點し、烟火戲を上ぐる折は、我等が相逢ふべき時ならん。それまでは君われを忘れ給ふな。我はまたフイレンチエの畫廊に往きて君とけふ物語れることを想ふべし。われは常に面白きことに逢ふごとに、我友のその樂を分たざるを恨めり。これも旅人の故郷を偲ぶたぐひなるべし。我は姫の手に接吻して、戲に。この接吻をばメヂチのエヌスに傳へ給へ。姫。さては我にとてにはあらざりしか。我は決して私することなかるべしといひぬ。我は分れて一間を出でしとき夢みる人の如くなりき。戸の外にて家の媼に出で逢ひ、心の常ならぬけにやありけむ、われその手を取りて接吻せしに、これは善き性の人なるよとつぶやくを聞きつ。

最後の謝肉祭の日をば、飽く迄樂まむと思ひぬ。唯だアヌンチヤタと別れむことは、猶現とも覺えず。又逢はむ日は遙なる後にはあらで、明日の朝にはあらずやとおもはる。假面をば被りたらねど、「コンフエツチイ」の粒擲ぐることは、人々に劣らざりき。道の傍なる椅子には人滿ちたり。家ごとの窓よりも人の頭あらはれたり。車のゆきかふこと隙間なく見ゆるに、その餘せる地にはうれしげなる面持したる人肩摩るほどに集へり。歩まむとする人は、車と車との隙を行くより外すべなし。音樂の聲は四面より聞ゆ。車の内よりも「イル、カピタノ」（大尉）の歌洩りたり。陸に海に立てたる勳とぞ歌ふなる。腰に木馬を結びたる童あり。首と尾とのみ見えて、四足のところは膝かけの色ある巾にて掩はれたり。童の足二つにて、馬の足の用をなせるなり。かゝるものさへ車と車との間に入れば、混雜はまた一入になりぬ。われは楔の如く車の間に介まりて、後へも先へも行くこと叶はず。後なる車挽ける馬の沫は我耳に濺げり。わがこれにえ堪へで、前なる車の踏板に飛び乘りたるを、これに乘れる寢衣着たる翁とやさしき花賣娘とは、早くも惡劇のためよりは避難のためと見て取りぬと覺しく、娘は輕く我手背を敲き、例の玉のつゞて二つ投げかけしのみなれど、翁の打つ飛礫は雨の如くなりき。娘もこの攻撃を興あることにや思ひけん、遂には翁の所爲に傚ひて、持てる籠の空しくならんとするをも厭はで唯だ打ちに打つ程に、我衣は斑々として雪を被れる如くぞなりぬる。われはこの地點を守りかねて、飛びおるれば、戲奴にいでたちたる男走り來て、手に持てる采配もて、我衣を拂ひ呉れたり。

暫し避けて佇む程に、さきの車又かへり路に我を見て、再び「コンフエツチイ」を投げかけたり。わが未だ迎へ戰ふに遑あらざる時、砲聲地に震ひて、くらべ馬始まるをしらせしかば、車は皆狹き横道に入りて、翁と娘とも見えずなりぬ。二人は我を識りたりと覺し。奈何なる人にかあらん。ベルナルドオは今日街に見えざりき。かの

翁は其人にて、娘はアヌンチヤタにはあらずや。

我は街の角に近き椅子に倚りぬ。砲は再び響きて、競馬は街のたゞ中をエネチアの廣こうぢさして馳せゆき、荒浪の寄するが如き群衆はその後に隨ひぬ。わが踵を旋して還らむとするとき、馬よ〳〵と呼ぶ聲俄に喧しく、競馬の内なる一頭の馬、さきなる埒にて留まらず、そが儘街を引きかへし來れるに、最早馬過ぎたりと心許しゝ群衆は、あわて騷ぐこと一かたならず。吾心頭には稻妻の如く昔のおそろしかりしさま浮びたり。瞬くひまに街の兩側に避けたる人の黒山の如くなる間を、兩脇より血を流し、鬣戰ぎ、口より沫出でたる馬は馳せ來たり。されど我前を過ぐるとき、いかにかしけむ銃もて擊れたる如く打ち倒れぬ。怪我せし人やあると、人々しばしは安き心あらざりしが、こたびは聖母やさしき手を信者の頭の上に擴げ給ひて、一人をだに傷け給はざりき。

危さの容易く過ぎ去りしは、祭の興を損ぜずして、却りて人の心を亂し、人の歡を助けたり。これよりは謝肉祭の大詰なる燭火の遊（モツコロ）始まらんとす。今まで列を成したりし馬車は漸く亂れて、街上の雜※は人聲の噪しさと共に加はり、空の暗うなりゆくを待ち得て、人々持たる燭に火を點せり。中には一束を握りて、こと〳〵〳〵く燃せるもあり。徒なるも車なるも燭を把りたるに、窓のうちに坐したる人さへ火持たぬはあらねば、この美しき夜は地にも星ある如くなり。家々より街の上へさし出せる火には、いろ〳〵なる提灯、燈籠ありて、おの〳〵功を爭へり。さて人々皆おのが火を護りて、人のを消さむとす。火持たぬ人は死ね（リア、アムマツアトオ、キイ、ノン、ポルタア、モツコオリ）と叫ぶ聲は、次第に喧しくなりまされり。我が持てる燭も、人に觸れさせじとする骨折は其甲斐なくて、打ち滅さるゝこと頻なりければ、われ餘りのもどかしさに、智慧ある人は我に倣へよと叫びつゝ、柄ながらに投げ棄てつ。道の傍なる婦人數人は、その燭を家々の窖窓にさし込みて、これをば誰もえ消さじと心安んじ、我を指ざして燭なき人の笑止さよと嘲るほどに、家の童どもいつか窖に降り行きて、その燭を吹き滅したり。又高き窓なる人々は竿に着けたる提燈さし出して誇貌なるを、屋根に這ひ出でたる男ども竿の尖に紛※結びたるを揮ひて、これをさへ拂ひ消すめり。

異國人にて此祭見しことなきものは、かゝる折の雜※を想ひ遣ること能はざるべし。立錐の地なき人ごみに、燃やす燭の數限なければ、空氣は濃く熱くのみなり勝りぬ。忽ち街の角を曲らんとする馬車二三輛あるを認めて頭を囘しゝに、かの覆面したる翁と娘とを載せたる車は我側に來りぬ。寢衣纏ひたる老紳士の燭は早や消えたり。花賣に扮したる娘は猶四五尺許なる籐の竿に蝋燭幾本か束ねたるを着けて高く翳せり。彼の紛※結びたる竿の長足らで、我火をえ消さざるを見て、娘は嬉し氣に笑ひぬ。老紳士は又娘の火に近づくものありと見るごとに、容赦なく「コンフエツチイ」の霰を迸らせたり。われはこれをこそと思ひければ、車の背後に飛び乘り、籐の竿をしかと握るに、娘はあなやと叫び、男は石膏の丸を放つこと雨より繁かりしかど、屈せずしてかの竿を撓ませんとせしに、竿は半ばよりほきと折れて、燭の束ははたと落つ。群衆は喝采せり。娘はアントニオ、餘りならずやと怨じたり。その聲は我骨を刺すが如く覺えぬ。そはアヌンチヤタが聲なればなり。娘は籠の内なる丸の有らん限を我頭に擲げ付け、續いて籠を擲げ付けしに、われ驚きて跳り下れば、車ははや彼方へ進み、和睦のしるしなるべし、娘のうしろざま

に投じたる花束一つ我掌に留りぬ。われは車を追はんとせしが、雑沓甚しきため其甲斐なく、遂にとある横街に身を避けつ。

身の周圍の混雑收りて心落つくと共に、心に懸かるはアヌンチヤタが同乘したる男の上なり。察するにベルナルドオが故意と翁に扮したるなるべし。いで二人の家に歸るを待ち受けて確めばやと人通り少かるべき横街を駈け拔けて、姫が住めるコロンナの廣こうぢに出で、戸口に立ちて待つほどに、車は果して歸り着きぬ。われは家の僮僕などの如き樣して走り寄りつゝ、車より下る二人を援けんとするに、姫は我手に縋らで先づおり立ちぬ。さて彼老神士に心を着くるに、その立ちあがりいざりおるゝ樣にて、わが推せし人ならぬは早く明かになりたりしが、寢衣の裾より出でたる褐色の裳を見るに及びて、姫が家の媼なることは漸く知られぬ。媼はわがさし伸ばす手に縋りて下りぬ。われは姫の供したる人の男ならざりし嬉しさに、幸あらん夜をこそ祈れと聲高く呼びて去らんとせしに、姫進み寄りて、惡しき人かな、早くフイレンチエに遁れ行かばやといひつゝも、手さし出せるを握るに、かなたも親く握り返しつ。嬉しさに嬉しさの重なりたる我は、火持たぬ手うち振りて、火持たぬ人は死ねと叫び行きぬ。我心の中には姫が德を頌する念滿ちたり。その車の傍なる座をば、樂長にも許さず、吾友にも許さで、彼媼を伴ひしこそ、姫が心の清き證なれ。彼媼は又かゝる遊を喜ぶべき人とも見えぬに、男寢衣を身に着けて供せしを思へば、壹ら姫を悦ばせんがために心を竭せるものなるべし。唯だ姫が側なる人をベルナルドオならんと疑ひしとき、我心の噪がしかりしは、妬なるか否ざるか、そはわが考へ定めざるところなりき。

われは殘れる謝肉祭の時間を面白く過さんとて、假粧舞の場に入りぬ。堂の内には處狹きまで燈燭を懸け列ねたり。假粧せる土地の人、素顔のまゝなる外國人と打ち雜りて、高き低き棧敷を占めたり。平土間より舞臺へ幅廣き梯をわたしたるが、樂人の群の座はその梯の底となりたり。舞臺には畫紙を貼り、環飾紐飾を掛けて、客の來り舞ふに任せたり。樂人は二組ありて、代る代る演奏す。今は酒の神なるバツコスとその妻なる女神アリアドネとの姿したる人を圍みて、貸車の御者に扮したる男あまた踊り狂ふ最中なりき。われは梯を踏みてその群に近づき、引かるゝまゝに共に舞ひしが、心樂しく身輕きに、曲二つまで附き合ひて、夜更けたる後塒に歸りぬ。

眠りしは短き間にて、翌朝は天氣好かりき。姫は今羅馬を立つにやあらむ。華かにして賑はしく、熱して騒がしかりし謝肉祭は、今我を殘して去りぬ。外に出でゝ風に吹かれなば、心寂しきけふを慰むるに足ることもやと思ひて、獨り街に立ち出でぬ。家々の戸は閉されたり。物賣る店もまだ起き出でざりき。昨日は人の波打ちしコルソオの大道には、往き交ふ人疎にして、白衣に藍色の縁取りしを衣たる懲役人の一群、霰の如く散りぼひたる石膏の丸を掃き居たり。塵を積むべき車の轅には、骨立したる老馬の繋がれつゝ、側なる一團の芻秣を噛めるあり。とある家の戸口には、貸車の御者立ちて、あき箱あき籠あまた車の上に載せ、その上をば毛布もて覆ひ、背後に結び附けたる革行李の凹くなるまで鐵の鎖を引き締め居たり。この車は横街より出でたる、同じ樣に梱載せる車と共に去りぬ。ナポリにや行くらん。フイレンチエにや行くらん。耶蘇更生祭の來ん日まで、羅馬は五週間の長眠をなさんとするなり。

精進日、寺樂

事なくして靜に日を暮せば、その永さの常にもあらで覺えらるゝと共に、謝肉祭の間の珍らしかりし事、その事の中心をなせる姫が上のみ心頭に往來せり。墳墓の如き靜けさは日ごとに甚しくなりぬ。わが胸の空虚は書卷の能く填むるところにあらざりき。ベルナルド才はわが無二の友なり。然るに今はその音容に接することの厭はしくなれるぞ怪しき。嗚呼我等二人の間にはアヌンチヤタの立てるなり。縱ひ友を失はんも、彼君のためには惜からじと一たびは思ひぬ。されどつら〳〵思ひ返せば、友は我に先だちて姫と交を結びぬ。わが姫と相識ることを得しは、全く友の紹介の賜なり。われは友に對して、我が姫に運ぶ情の戀にあらず、藝術上の感歎なるを誓ひたり。ベルナルドオはわが無二の友なり。われは今これを欺かんとす。悔恨の棘は我心を刺せり。されどわれは遂にアヌンチヤタを忘るゝことと能はず。

アヌンチヤタを懷ふはアヌンチヤタの我に與へたる歡喜を懷ふなり。されどその歡喜をなしゝは昔日の事にして、今これが記念を喚び起せば、一として悲痛に非ざるものなし。譬へば亡人の肖像の笑へるが如し。その笑はたま〳〵以て我を泣かしむるに足る。學校にありしころ人の世途の難を説くを聞きては、或課題のむづかしき、或師匠の意地わるきなどに思ひ比べて、我も亦早く其味を知れりといひしことあり。今やその非なるを悟りぬ。われ若し能く此戀に克つにあらずば、此力以て世途の難を排するに足るとはいふべからず。試に此戀の前途を思へ。アヌンチヤタは尋常の歌妓に非ずして、その妙藝は現に天下の仰ぎ望むところなりと雖、われ往いてこれに從はゞ、その形迹世の蕩子と擇ぶことなからん。我友はこれを何とか言はむ。加之ず若し心術の上より論ぜば、我守護神たる聖母もこれよりは復我を憐み給はざるべし。況や此戀は果して能く成就せんや否や。我は口惜しきことながら、實に未だアヌンチヤタの心を知らざりき。我は寺に往きて聖母の前に叩頭き、いかで我に己に克つ力を授け給はれと祈りて、さて頭を擧げしに、何ぞ料らむ聖母の面は姫の面となりて我を悦ばせ又我を苦めむとは。我は縱ひ姫再び來んも、誓ひて復た逢はじとおもひ定めつ。

我は嘗て古の信徒の自ら笞ち自ら傷けしを聞きて、其情を解せざりしに、今や自らその爲す所に倣はんと欲するに至りぬ。燃ゆるが如き我血を冷さんとて、我は聖母の像の下に伏して、我唇をその冷なる石の足に觸れたり。憶ひ起せば、わがまだ穉き時の心安かりしことよ。母の膝下にて過す精進日は、常にも増して樂き時節なりき。四邊の光景は今猶昨のごとくなり。街の角、四辻などには金紙銀紙の星もて飾りたる常磐木の草寮あり。處々に懸けし招牌には押韻したる文も精進食の名を列べ擧げたり。夕になれば緑葉の下に彩りたる提燈を弔れり。雜食品賣る此頃の店は我穉き目に空想界を現ぜる如く見えにき。銀紙巻きたる腸詰肉を柱とし、ロヂイ産の乾酪を穹窿としたる小寺院中にて酪もて塑ねたる羽ある童の舞ふさまは、我最初の詩料なりき。食品店の妻は我詩を聞きて、ダンテの神曲なりと稱へき。當時われは不幸にして未だこの譽ある歌人のいかに世を動かしゝかを知らず、又幸にして未だアヌンチヤタが如き才貌ある歌妓のいかに人を動かすかを知らざりしなり。嗚呼、われは奈何してアヌンチヤタを忘るゝことを得べきぞ。

われは羅馬の七寺を巡りて、行者と偕に歌ひぬ。吾情は眞にして且深かりき。然るをこれに出で逢ひたるベルナルドオは、刻薄な

る語氣もて我に耳語していふやう。コルソオの大道にて戯謔能く人の頤を解きしは誰ぞ。アヌンチヤタが家にて即興の詩を誦んじ座客を驚しゝは誰ぞ。今は目に懺悔の色を帶び頬に死灰の痕を印して、殊勝なる行者と伍をなせり。汝はいかなる役をも辭せざる名優なるよ。此の如きは我が遂にアントニオに及ばざるところぞといひぬ。吾友の言ふところは實録なりき。されど當時我を傷ること此實録より甚しきはあらざりしなり。

精進の最後週は來ぬ。外國人は多く羅馬に歸り集ひぬ。ポヽロ門よりもジヨワンニ門よりも、馬車相驅逐して進み入りぬ。水曜日午後にはワチカアノのシクスツス堂にて「ミゼレエレ」（ミゼレエレ、メイ、ドミネ、憐を我に垂れよ、主よの句に取りたるにて、第五十頌の名なり）の樂あり。われは樂を聽きて悶を遣らんがために往きぬ。聽衆は堂の内外に押し掛け居たり。前なる椅榻には貴婦人肩を連ねたり。色絹、天鵝絨もて飾れる觀棚の彫欄の背後には、外國の王者並び坐せり。法皇の護衛なる瑞西隊は正裝して、その士官は※に唐頭を※めり。この裝束は今若き貴婦人に會釋せるベルナルド オには殊に好く似合ひたり。

われ裏面より埒に近き處に席を占めしに、こゝは歌者の席なる斗出せる棚に遠からざりき。背後には許多の英吉利人あり。この人々は謝肉祭の頃假粧して街頭を彷徨ひたりしが、こゝにさへ假粧して集ひしこそ可笑しけれ。推するにその打扮は軍隊の號衣に擬したるものならん。されど十歳許の童までこれを着けたるはいかにぞや。その華美ならんことを欲することの甚しきを證せんがために、こゝに一例を擧げんに、其人の上衣は淡碧にして銀絲の縫ひあり、長靴には黄金を鏤め、扁圓なる帽には羽毛連珠を着けたり。英吉利人のかゝる習をなしゝは、美しき號衣の好き座席を得しむる利益を知りたるためなるべし。我傍よりは笑を抑ふる聲洩れたり。されどわがそを可笑しと見しは、唯だ一瞬間なりき。

老いたる僧官達は紫天鵝絨の袍の領に貂の白き毛革を附けたるを穿て、埒の内に半圈状をなして列び坐せり。僧官達の裾を捧げ來し僧等は共足元に蹲りぬ。贊卓の傍なる小き扉は開きぬ。そこより出でたるは、白帽を戴き濃赤色の袍を纏へる法皇なりき。法皇は交椅に坐したり。侍者等は香爐を搖り動したり。紅衣の若僧の松明取りたるもの數人法皇と贊卓との前に跪けり。

讀誦は始まりぬ。（絃歌に先だちて十五章の讀誦あり。壇上に巨燭十五枝を燃やしおきて、一章終るごとに一燭を滅す。）われは心を死せる文字の間に潛むること能はず、魂を彼のミケランジエロが世に罕なる丹青の力もて此堂の天井と四壁とに現ぜしめたる幻界に馳せたり。その活けるが如き預言者等の形は一個々皆大册の藝術論の資をなすに餘あるべし。その力量ある容貌風采とこれを圍める美しき羽ある兒の群とは、我眼を引くこと磁石の鐵を引く如くなりき。こは畫にあらず。活ける神人なり。エワが果を夫に贈りし智慧の木は鬱蒼として彼處に立てり。父なる神は、古の畫工の作れる如く羽ある童に擔はれたるにはあらで、その肢體の上、その風に翻る衣裳の上に、許多の羽ある童を載せつゝ、水の上を天翔り給ふ。われはけふ始めて此畫を觀たるにあらず。されど此畫の我心を動かすこと今日の如きは未だ有らず。われはけふの群集のためにや、わが熱したる情のためにや知らねど、此畫中に限なき詩趣あるを認めたり。或は想ふにこは我が抒情の興多き心を畫中に投じ入れたるにはあらずや。そは兎まれ角まれ、此畫に對して此情をなすは、恐らくは獨

り我のみならず、こは我に先だてる幾多の詩人の亦免れざるところなりしなるべし。

険しきを行くこと夷なる如き筆力、望み瞻る方嚮に従ひて無遠慮なるまで肢體の尺を縮めたる遠近法は、個々の人物をして躍りて壁面を出でしめんとす。昔基督の山上に在りて言語もて説き給ひし法（馬太五至七）は、今此大匠によりて色彩と形象ともて現されたるなり。吾人はラフアエロと共に膝を此大匠の技倆の前に屈せんとす。此數多き預言者は、一つとして同じ人の石もて刻める摩西に劣ることなし。何等の魁偉なる人物ぞ。堂に入るものゝ心目は先づこれがために奪はるゝなり。

吾人はこゝに心目を淨め畢りて、さて頭を擧げて堂の後壁に向ふなり。下は大床より上は天井に至るまで、立錐の地を剰さゞるこの大密畫は、即ち是れ一顆の寶玉にして、堂内の諸畫は悉くこれを填めんがために設けし文飾ある枠たるに過ぎず。これを世の季の審判の圖となす。

判官たる基督は雲中に立てり。使徒と聖母とは不便なる人類のために憐を乞はんとて手をさし伸べたり。死人は墓碣を搖り上げて起たんとす。惠に逢へる精靈は拜みつゝ高く翔り、地獄はその※を開いて犧牲を呑めり。宣告を受けたる同胞の早く毒蛇に巻かれたるを、雲に駕せる靈の援け出さんとするあり。悔い恨める罪人の拳もて我額を擊ちつゝ、地獄の底深く沈み行くあり。天堂と地獄との間には、或は登り或は降る神將力士あまたありて、例の大膽なる遠近法もて寫し出されたり。優しく人を恤みがほなる天使、再會して相悦べる靈ども、金笛の響に母の懐に俯したる穉子など、いづれ自然ならざるなく、看るものは覺えず身を圖中に※きて、審判のことばに耳を傾く。ミケランジエロは蓋し能くダンテの歌ひしところを畫けるなり。

恰も好し將に沒せんとする夕日はそのなごりの光を最高列の窓より射込みたり。圖の下の端なる死人の起つあたり、艤せる羅刹の罪あるものを拉き去るあたりは、早や暗黒裡に沒せるに、基督とその周匝なる天翔る靈とは猶金色に照されたり。日の入ると共に最後の燭は吹き滅されて、讀誦は全く果てたり。暗黒は審判の圖の全面を覆へり。絲聲肉聲は又湧きて、世の季の審判の喜怒哀樂皆洋々たる音となりつゝ、われ等の頭上を漲り過ぐ。

法皇は式の衣を脱ぎて、贊卓の前に立ち、十字架を拜せり。金笛の響凄じく、「ポプルス、メウス、クヰツト、フエチイ、チビイ」の歌は起りぬ。低階の調に雜る軟なる天使の聲は、男の胸よりも出でず、女の胸よりも出でず、こは天上より來れるなり。こは天使の涙の解けて旋律に入りたるなり。

われはこれを聽きて、力づき甦り、この頃になき歡喜は胸に滿ちたり。われはアヌンチヤタを愛し、ベルナルドオを愛せり。この瞬時の愛はかの天上の靈の相愛するに殊ならざるべし。祈祷の我に與へざりし安慰は、今音樂にて我に授けられたるなり。

友誼と愛情と

式終りてベルナルドオが許を訪ひぬ。手を握り襟を披きて語るに、高興は能辯の母なるを知りぬ。けふ聞きつるアレエグリイ（寺樂の作者）が曲、我が夢物語めきたる生涯、我と主人との友誼は我に十分なる談資を與へたり。けふの樂はいかに我憂を拂ひし。未だ聽か

ざりし時の我疑懼、鬱悶、苦惱は幾何なりし。われは此等の事を殘なく物語りしが、唯だこれが因緣をなしゝものゝ主に我友なりしか、又はアヌンチヤタなりしかをば論じ究めざりき。我が今友に對して展べ開くことを敢てせざる心の襞はこれ一つのみなりき。友は打ち笑ひて、さて〳〵面倒なる男かな、カムパニアの羊かひの頃よりボルゲエゼの館に招かるゝまで、女子の手して育てられしさへあるに、「ジエスヰタ」派の學校に在りしなれば、斯くむづかしき性質にはなりしならん、切角の伊太利の熱血には山羊の乳を雜ぜられたり、「ラ、トラツプ」派の僧侶めきたる制欲は身を病ましめたり、馴れたる小鳥一羽ありて、美しき聲もて汝を喚び、夢幻境を出で現實界に入らしめざるこそ憾なれ、汝が心身の全く癒えんは人なみになりたる上の事ぞといひぬ。われ。我等二人の性は懸隔すること餘りに甚し。然るを我は怪しきまで汝を愛せり。折々は共に棲まばやとさへ思ふことあり。友。そは啻に我等を温めざるのみならず、却りて何時ともなくこの交を絶つべし。友誼と戀情とは別離によりて長ず。我は時に夫婦の生活のいかに我を倦ましむべきかを思へり。斷えず相見て互に心の底まで知りあはむ程興なき事はあらざるべし。さればおほかたの夫婦は幾もあらぬに厭き果つれども、名聞を憚ると人よきとにて、其緣の絲は猶繫がれたるなり。我は思ふに、我情いかに一女子のために燃えんも、その女子の情いかに我に過ぎたらんも、その※の相合ふ時は即ち相滅する時ならん。愛とは得んと欲する心なり。得んと欲する心は既に得て止むべし。われ。若し汝が妻アヌンチヤタの如く美しく又賢からむには奈何。友。其薔薇花の美しき間は、わが愛づべきこと慊なり。されど色香一たび失せたらむ日には、われは我心のいかになり行くべきを知らず。汝はわが今何事を思ひしかを知るや。この念は忽ち生じ忽ち滅すれど、今始て生ぜるにはあらず。われは汝の血のいかに赤きかを見んと願ふことあらむも計られず。されどわれには智あり。汝は我友なり。わが潔白なる友なり。縱令われ等二人同じ女に懸想することあらんも、相鬪ふには至らざるべし。斯く言ひつゝ友は聲高く笑ひ、我首を抱きて戲れながらにいふやう。我に馴れたる小鳥ありて、その情はいと濃かなれど、この頃は些し濃かなるに過ぎて厭はしくなりぬ。思ふに汝には氣に入るべし。こよひ我と共に來よ。親友の間には隱すべきことなし。面白く一夜を遊び明さむ。さて日曜日にならば、法皇は我等が罪を洗ひ淨め給ふべきぞ。われ。否、我は共に往かざるべし。友。そは卑怯なり。汝は汝の血を傾け盡して、只だ山羊の乳のみを留めんとするか。汝が目は我目に等しく耀くことあり。われは嘗てこれを見き。汝が鬱悶、汝が苦惱、汝が懺悔、是れ畢竟何物ぞ。われあからさまに言ふべきか。是れ得んと欲して得ざるところあるなり。その得ざるところのものは、赤き唇なり、軟なる膚なり。汝が假面の被りざま拙ければ、われは明白に看破せり。いざ往いてその得んと欲する所のものを得よ。汝否といはゞ、そは卑怯なり、臆病なり。われ。止めよ。そは餘りなる詞なり。そは我を辱むる詞なり。友。されど汝はその辱を甘んじ受けざること能はざるべし。これを聞きしとき、我血は上りて頭を衝きしが、我涙も亦湧きて目に溢れたり。いかなれば汝はかくまでに無情なる。我は汝を愛し汝は我を弄ぜんとす。アヌンチヤタと汝との間にわれ立てりと思へるにはあらずや。アヌンチヤタの我を視ること汝より厚しとおもへるにはあらずや。友。否、決して然らず。わが空想家ならずして思遣少きは汝も知りたらん。されど女の事をば姑く置け。唯だ心得がたきは、

汝がいつも愛々といふことなり。我等二人は手を握りて友となりたり。その外には何も無し。我は汝と共に夸張すること能はず。我をばたゞ此儘にてあらせよ。對話はおほよそ此の如くなりき。ベルナルドオが毒箭は痛く我胸を傷けしが、別に臨みて我に握らせたる手は、遂にわれ等が交情を滅するに至らずして止みぬ。

をさなき昔

翌日は木曜の祭日なりき。鐘の音は我を聖ピエトロの寺に誘ひぬ。嘗て外國人ありて此寺の堂奥はこゝに盡きたりとおもひぬといふ、いと廣き前廳に、人あまた群れたるさま、大路の上又天使橋の上に殊ならず。羅馬の民はけふ悉くこゝに集へるなり。されば彼外國人ならぬものも、おなじ迷を起すべう思はる。何故といふに、人愈衆くして廳は愈闊しと見ゆればなり。

歌は頭の上に起りぬ。伶人の群をば棚の二箇處に居らせて、其聲相應ずるやうにせり。群衆は洗足の禮の今始まるを見んとて押し合へり。（此日法皇老若の僧徒十三人の足を洗ひ、僧徒は法皇の手に接吻して、おの〳〵「マチオラ」の花束を賜り退くことなり。）偶※貴婦人席より我に目禮するものあり。誰ぞと視ればアヌンチヤタなりき。彼君は歸りぬ。彼君は此堂にあり。我胸はいたく騷げり。その席幸に遠からねば、我等は詞を交すことを得たり。姫は昨日歸りしかど、樂ははや果てし後にて、僅に「アヱ、マリア」の時此寺には來ぬとなり。

姫。此寺の光景はきのふ暗くて見しかた、けふのめでたきにも増してめでたかりき。聖ピエトロの墓の前なる一燈の外には何の光もなく、その光さへ最近き柱を照すに及ばざる程なるに、人々跪きて祷れば、われも亦跪きぬ。緘默の裡に無量の深祕あるをば、その時にこそ悟り侍りしかといふ。側にありし例の猶太婦人は、長き紗もて面を覆ひたれば、今までそれと知らざりしに、優しく我に會釋しつ。式は早や終りぬれば、姫はおのれを車に導くべき從者や來ると顧みたれど、その影だに見えず。若き人々の姫を認めて耳語き合ふもあれば、姫は早くこの堂を出でんとおもへる如し。われは車に導かんことを請ひしに、猶太婦人は直ちに手を我肘に懸け、姫は我と並びて行けり。我は姫に我肘に倚らんことを勸むる膽なかりき。されど表口の戸に近づきて、人の籠み合ふこと甚しかりしとき、姫は手を我肘に懸けたり。我脈には火の循り行くを覺えき。車をば直ちに見出だしつ。わが暇を告げんとせしとき、姫今は精進の時なればとて何もあらねど、夕餉參らすべければ來まさずやと案内したるに、姫は快手くおのれが座の向ひなる榻に外套、肩掛などあるを片付け、こゝに場所あり、いざ乘り給へと、我手を把りぬ。共に車に載せんといひしならぬを、媼の耳疎くしてかく聞き誤りたるなれば、姫はしたなくや思ひけん、顏さと赧めたり。されど我は思慮する遑もあらで乘り遷り、御者も亦早く車を驅りぬ。

膳は豐なるにはあらねど、一として王侯の口に上すとも好かるべき贅澤品ならぬはなし。姫はフイレンチエにての事細かに語りて、さて精進日の羅馬はいかなりしと問ひぬ。こは我がためにはあからさまに答ふべくもあらぬ問なりき。

われ。土曜日には猶太教徒の洗禮あるべし。君も往きて觀給ふべきか。此詞は料らず我口より出でしが、われは忽ち彼媼の側にあるを思ひ出だして、氣遣はしげにかなたを見き。姫。否、心に掛け給

ふな。御身の詞は聞えざりき。されど聞ゆとも惡しく聞くべうもあらず。唯だ彼人の往かんは妥ならねば、我もえ往かざるべし。そが上コンスタンチヌスの寺なる彼儀式は固より餘り愛でたからぬ事なり。（この儀式は歳ごとに基督再生祭に先だつこと一日にして行へり。猶太教徒若くは回々教徒數人をして加特力教に歸依せしめ、洗禮を行ふなり。羅馬年中行事に「シイ、アフ、イル、バツテシイモ、ヂイ、エブレイ、エ、ツルキイ」と記せり。）僧侶は異教の人の歸依せるをもて正法の功力の所爲となし、看る人に誇れども、その異教の人のまことに心より宗旨を改むるは稀なり。われもをさなき時一たび往きて觀しことあり。その折の厭ふべき摸樣は今に至るまで忘られず。拉き來りしは六つ七つばかりの猶太人の童なりき。櫛の痕なき頭髮の蓬々たるに、寺の贈なる麗しき素絹の上衣を纏へり。靴と韈とは汚れ裂けたるまゝなり。後に跟きて來たるは同じさまに汚れたる衣着たる父母なりき。この父母はおのれ等の信ぜざる後世のために、その一人の童を賣りしなるべし。われ。君はをさなき時この羅馬にありてそを見きとのたまふか。姫。然なり。されど我は羅馬のものにはあらず。われ。我は始て君が歌を聽きしとき、直ちに君のむかし識りたる人なることを想ひき。そを何故とも言ひ難けれど、この念は今も猶失することなし。若しわれ等輪※應報の教を信ぜば、われも君も前生は小鳥にて、おなじ梢に飛びかひぬともいひつべし。君にはさる記念なしや。何處にてか我を見しことありとはおぼさずや。姫は我と目を見あはせて、絶てさる事なしと答へき。われ詞を繼ぎて。初めわれ君は穉きときより西班牙に居給ひぬと思ひしに、今のおん詞にては羅馬にも居ましゝなり。我惑はいよ〳〵深くなりぬ。君既にをさなくして此都に居給ひきといへば、若しこゝの稚き子等と共に、「アラチエリ」の寺にて説教のまねし給ひしことあらずや。姫。あり〳〵。まことにさやうなる事侍りき。さてはかの折人々の目に留まりし童はアントニオ、おん身なりしか。われ。いかにも初め目に留まりしは我なりき。されど勝をば君に讓りしなり。姫はげに思ひも掛けぬ事かなと、我兩手を把りて我面を見るに、媼さへその氣色の常ならぬを訝りて、椅子をいざらせ、我等が方をうちまもりぬ。姫は珍らしき再會の顛末を媼に説き聞せつ。われ。我母もその外の人々も暫くは君が上をのみ物語りぬ。その姿のやさしさ、その聲の軟さをば、穉き我心にさへ妬ましきやうに覺えき。姫。その時君は金の控鈕附きたる短き上衣を着たまひしこと今も忘れず。その衣をめづらしと見しゆゑ、久しく記憶に殘れるなるべし。我。君は又胸の上に美しき赤き鈕を垂れ給ひぬ。されど最も我目に留まりしはそれにはあらず。君が目、君が黒髮なりき。人となり給へる今も、その俤は明に殘れり。始て君がヂドに扮し給へるを見しとき、われは直ちにこの事をベルナルドオに語りぬ。さるをベルナルドオはそを我迷ぞといひ消して、却りておのれが早く君を見きと覺ゆる由を語りぬ。姫、そは又いかにしてと問ひしが、その聲うち顫ふ如くなりき。われ。ベルナルドオが君を見きといふは、いたく變りたる境界なり。惡しくな聞き給ひそ。ベルナルドオも後に誤れることを覺りぬ。君が髮の色濃きなど、人にしか思はるゝ端となりしなるべし。君は、君はわが加特力教の民にあらず、されば「アラチエリ」の寺にて説教のまねし給ふ筈なしとの事なりき。姫は媼の方を指ざして、さては我友とおなじ教の民ぞといひしなるべしといふ。われは直にその手を取りて、わが詞のなめしきを咎め給ふなと謝したり。姫微笑みて、君が友の我を猶太少女とおもひきとて、わ

れ爭でか心に掛くべき、君は可笑しき人かなといひぬ。この話は我等の交を一と際深くしたるやうなりき。わが日頃の憂さは悉く散じたり。さてわが再び見じとの決心は、生憎にまた悉く消え失せたり。

姫はふと基督再生祭前のこの頃閉館中なる羅馬の畫廊の事を思ひ出でゝ、かゝる時好き傳を得て往き看ば、いと面白かるべしといふに、姫の願としいへば何事をも協へんとおもふわれ、幸にボルゲエゼの館の管守、門番など皆識りたれば、そは容易き事なりとて、あくる朝姫と媼とを伴ひ往かんことを約しつ。かの館は羅馬の畫廊のうちにて最も備れる一つなり。フランチエスカの君の穉き我を伴ひ往き給ひしはかしこなれば、アルバニが畫の羽ある童は皆わが年ごろの相識なり。

靜なる我室に歸りて、つら〳〵物を思ふに、ベルナルドオはまことに彼君を戀ふるに非ず。卑しき色慾を知りて、高き愛情を解せざる男の心と、深けれども能く澹泊に、大いなれども能く抑遜せる我心とは、日を同じくして語るべからず。さきの日の物語の憎かりしことよ。彼はたゞ驕慢なり。彼はたゞ放縱なり。かくて飽くまで我を傷けたり。そはアヌンチヤタの我に優しきを妬みてなるべし。初め我を紹介せしは、いかにも彼男なりき。されど今その心を推すれば、好意とはおもはれず。おのが風采態度のすぐれたるを彼君に見するとき、その側に世馴れぬ我を居らせて反映せしめんためにはあらずや。さるを我歌我詩は端なく彼君の心にかなひぬ。妬の心はこれより萌せるならん。さて我を又姫に逢はせじとて、かくは我を脅しゝなるべし。幸にわれ好き機會を得て、今は姫との交いと深くなりぬ。姫は我を憐めり。加之ず姫は我戀を知りたり。かく思ひつゞけつゝ、我は枕に接吻せり。さるにても口惜しきは、わが意氣地なき性質なり。いかなれば我は先の日直ちに彼の無禮を責めざりしぞ。かの詞にはかく答ふべかりしなり。かの辱をばかく雪ぐべかりしなり。我血は湧き上りたり。無上の快樂に無比の慙恨打ち雜りて、我は睡ること能はざりしが、曉近くおもひの外に妥なる夢を結びぬ。

翌朝は夙く起き、管守を訪ひて預めことわりおき、さて姫と媼とを急がせつゝ共にボルゲエゼの館に往きぬ。

畫廊

畫廊はわが穉かりしとき、惠深き貴婦人の我を伴ひ往きて、おろかなる問、いまだしき感の我口より出で我言に發するごとに、面白しとて嬉み笑ひ給ひしところにして、又わが獨り入りて遊び暮らしゝところなれば、今アヌンチヤタを導き往くことゝなりたる我胸には、言ひ知らず怪しき情漲り起れり。既に入りて畫を看れば、幅ごとに舊知なるごとく思はる。されど姫は却りてこれを知ること我より深かりき。姫は生れながらの官能に養ひ得たる鑒識をさへ具へたれば、その妙處として指し示すところは悉く我を服せしめ、我にその神會の尋常に非ざるを歎ぜしめたり。

姫はジエラルドオ・デル・ノツチイの名ある作なるロオト（ソドムに住みしハランの子）とその女兒との圖の前に立てり。われはをゝしき父の面、これに酒を勸むる樂しげなる少女の姿、暗く繁りあひたる木立のあなたに見ゆる夕映の空などめでたしと稱へしに、姫我ことばを遮りて、げに〳〵奇なる才激せる情もて畫けるものと覺し、作者の筆の傳色表情の一面は寔に貴むべし、さるを此の如き題（ロオトは其女子と通じたり）を選みしこそ心得られね、畫にも禮儀あ

り、品性あらんは我がつねに望む所なり、コルレジヨオがダナエなども、己れは人の愛づらんやうには愛でず、少女（ダナエを謂ふ、希臘諸神の祖なるチエウス黄金の雨となりて遘き給ひ、ペルセウスを生ませ給ふ）の貌はいかにも美しく、臥床の上にて黄金掻き集むる羽ある童の形もいと神々しけれど、その事餘りにみだりがはしくして、興さむる心地す、ラフアエロの大なるはこゝにあり、わが知れる限は、その採るところの題、毎に高雅にして些の穢れだになし、かくてこそめでたき聖母の面影をば傳ふべかりしなれといふ。われ。仰せは理あるに似たれども、畫の妙は題の穢を忘れしむることあるべし。姫。そはきはめて有るべからざる事なり。藝術はその枝その葉の末までも、清淨醇白なるべきものにて、理想の高潔は人を動かすこと形式の美麗に倍す。古の作者の手に成りし聖母の像を視るに、すべて硬く鋭くして、支那人の畫もかくやとおもはるれども、我はこれに打ち向ふごとに、必ず心の底に徹する如き念をなせり。この高潔といふものは、その作畫者のために缺くべからざること、度曲者に於けると同じ。名作中こゝかしこに稍　過ぎたりと見ゆる節あるをば、その作者の一時の出來心と看做して、怨すこともあるべけれど、その疵瑕は遂に疵瑕たることを免るべからず。わがまことに愛づるは無瑕の美玉にこそ。われ。さらば君は變化を命題の間に求めんことをば是とし給はずや。いかなる大家鉅匠にても、幅ごとに題を同うせば人の厭倦を招くなるべし。姫。否々、そは我が言はんと欲せしところにあらず。わが本意は畫工に聖母のみ畫かせんとにはあらず。めでたき山水も好し。賑はしき風俗畫、颶風に抗ふ舟の圖も好し。サルワトオレ・ロオザが山賊の圖もいかでか好からざらん。われは唯だ藝術の境に背徳を容れじとこそ云へ。わが趣味より視れば、かの「シヤリア」宮なるシドオニイの畫の如きすら、その巧緻その汚穢を掩ふに足らず。君は猶彼圖を記し給ふや。驢に騎りたる農夫二人石垣の下を過ぐ。垣の上に髑髏ありて、一※鼠の「ヰオリノ」弾きの隣に懸けられたるを、われも記憶す。姫。さなり。そのラフアエロが落※の見苦しき彼圖の上邊にあるこそ憾なれ。

　既にしてわれ等はフランチエスコ・アルバニイが四季の圖の前に來ぬ。われは昔穉かりし日にこゝに遊び、この圖の中なる羽ある童を見て感ぜし時の事を語りぬ。姫は君が穉くて樂しき日を送り給ひしこそ羨ましけれといひて、憂をかくすやうなるさまなり。昔の身の上にや思ひ比べけんと、あはれに覺ゆ。われ。君とても樂しき日少なからざりしならん。わが初めて相見しときは、君は幸ありげなるをさな子なりき、人々に感覆られたるをさな子なりき。わが再び相逢ふ日は、羅馬全都の君がために狂するを見る。餘所目には君、まことに樂しく見え給へり。さるを心には樂しとおもひ給はずや。かく問ひつゝ、我は頭を傾けて姫の面を俯し視たるに、姫はそのそこひ知られぬ目なざしもて打ち仰ぎ、そのめでくつがへられたるをさな子は、父もなく母もなきあはれなる身となりぬ、譬へば木葉落ち盡したる梢にとまる小鳥の如し、そを籠の内に養ひしは世の人にいやしまれ疎まるゝ猶太教徒なり、その翼を張りておそろしき荒海の上に飛び出でたるはかの猶太教徒の惠なりといひかけて、忽ち頭を掉り動かし、あな無益なる詞にもあるかな、由緣なき人のをかしと聞き給ふべき筋の事にはあらぬをといふ。由緣なき人とはわれかと、姫の手首とりてさゝやくに、暫しあらぬ方打ち目守りてありしが、その面には憂の影消え去りて、微笑の波起りぬ。否々、われも

樂しかりし日なきにあらず、その樂しかりし日をのみ憶ひてあるべきに、君が昔話を聞きて、端なくもわが心の裡に雕られたる圖を繰りひろげつゝ、身のめぐりなるめでたき畫どもを忘れたりとて、姫は我に先だちて歩を移しき。

わがアヌンチヤタと老媼とを伴ひて旅館にかへりしとき、門守る男はベルナルドオが留守におとづれしことを告げたり。我友はこの男の口より二婦人を連れ出だしゝものゝ我なるを聞けりといふ。友の怒は想ふに堪へたり。かゝる事あるごとに、我は前の日には必ず氣遣ひ憂ふる習なりしが、アヌンチヤタに對する戀は我に彼友に抗する心を生ぜしめき。さきには友我を性格なし、意志なしと罵りき。今はわれ友に見すに我性格と我意志とをもてすべしとおもひぬ。

姫が猶太教徒の籠の内に養はれきといふ詞は、絶えず我耳の根にあり。依りておもふに、友がハノホの許にて見きといふ少女はアヌンチヤタなりしならん。されど又姫にそを問ふ機會あるべきか、心許なし。

あくる日往きしときは、姫は一間にありて某の役を浚ひ居たり。われはおうなに物言ひこゝろみしに、この人はおもひしよりも耳疎かりき。されどそのさま我が詞を交ふるを喜べる如し。われは前の日即興の詩を歌ひしとき、この人の嬉み聽けるさまなりしをおもひ出でゝ、その故をたづねしに、あやしとおもひ給ひしも理りなり、君の面を見、君の詞の端々を聞きて、おほよそに解したるなり、さてその解したるところはいとめでたかりき、平生アヌンチヤタが歌うたふを聽くときも亦同じ、耳の遠くなりゆくまゝに、目もて人の聲を聞くすべをば、やう〳〵養ひ成せりといふ。媼はベルナルドオが上を問ひ、そのきのふ留守の間におとづれて、共に畫廊に往くこと能はざりしを惜みき。われ媼がベルナルドオを喜べるゆゑを問ふに、かの人の心ざまには優れたるふしあり、われその證を見しことあればよく知りたり、猶太の徒も基督の徒も、神の目より視ば同じかるべければ、彼人の行末を護り給ふならんといふ。やうやくにして媼はことば多くなりぬ。その姫を愛でいつくしむ情はいと深しと見えたり。物語のはし〳〵〃＼より推するに、姫が過ぎ來し方のおほかたは明かになりぬ。姫は西班牙に生れき。父も母も彼國の人なり。穉くて羅馬に來つるに、ふた親はやく身まかりて、頼るべき方もなし。猶太の翁ハノホは西班牙に旅せしころ、彼親達を識りつれば、孤兒を引き取りて養へりしに、故郷なる某の貴婦人あはれがりて迎へ歸り、音樂の師に就きて學ばしめき。その頃某の貴公子この若草手に摘まばやととさま〳〵〃＼のてだてを盡しゝに、姫の餘りにつれなかりしかば、公子その恨にえたへで、果はおそろしき計をさへ運らしつ。その始末をば媼深く祕めかくす様なれど、姫の命も危かるべき程の事なりきとぞ。姫は彼公子に索ね出されじとて、再び羅馬に逃れ來たり。かくて昔のやしなひ親にたよりて、人目少き猶太廓に潛み居たるは、一年半ばかり前の事といへば、ベルナルドオが逢ひしは此時なり。幾もなくして彼公子身まかりぬ。姫はこれより一身をミネルワの神（藝術の神）に捧げまつりて、その始て桂冠を戴きしはナポリにての催しなりき。媼はその頃より姫のほとりを離れずといふ。語り畢りて媼は、姫の才あり智ありて、敬神の心いよ〳〵＼深きを稱ふること頻りなりき。

旅館を出でしは祝射の眞盛なりき。玄關よりも窓よりも、小銃拳銃などの空射をなせり。こは精進日の終を告ぐるなり。寺々の壁畫を覆へる黒布をば、此聲とゝもに截りて落すなり。鬱陶しき時は

けふ去りて、蘇生祭のうれしき月はあすよりぞ來るなる。その嬉しさはアヌンチヤタと媼とを祭見に誘ひ得たるにて、又一層を加へたり。

蘇生祭

祭の鐘は鳴りわたれり。僧官を載せたる彩車は聖ピエトロの寺に向ひて奔りゆく。車の後なる踏板には、式の服着たる僮僕あまた立てり。外國人の車馬、ところの子女の裙屐に、狹き巷の往來はむづかしき程になりぬ。神使の丘の巔には、法皇の徽章、聖母の肖像を染めたる旗閃き動けり。ピエトロの辻には樂人の群あり。道の傍には露肆をしつらひて、もろ手さし伸べたる法皇授福の木板畫、念珠などを賣りたり。噴水の銀線は日にかゞやけり。柱弓の下には榻あまた置きたるに、家の人も賓客も居ならびたり。群衆は忽ち寺門より漲り出でたり。供養の儀式聲樂を見聞き、磔柱の鐵釘、長鎗などありがたき寶物を拜み得しなるべし。廣き十字街は人の頭の波打ちて、車は相倚りて隙間なき列をなせり。※父少童には石像の趺に攀ぢ上れるあり。全羅馬の生活の脈は今此辻に搏動するかと思はる。既にして法皇の行列寺門を出づ。藍色の衣を纏へる僧六人に舁かせたる、華美なる手輿に乘りたるは法皇なり。若僧二人大なる孔雀の羽もて作りたる長柄の翳を取りて後に隨ひ、香爐搖り動かす童子は前に列びてぞゆく。輿に引き添ひて歩めるは僧官達なり。行列の門を出づるや、樂隊は一齊に聲を揚ぐ。輿を大理石階の上に舁き上げて、法皇の姿廊の上に見ゆるを相圖として、廣き辻なる老若の群集は跪けり。隊伍をなせる兵士もこれに倣へり。こゝかしこに立てる人の殘りしは、新教を奉ずる外國人なるべし。アヌンチヤタは停めたる車の内に跪きて、その美しき目を法皇の面に注げり。われは見るべからざる法雨のこの群の上に降り灑ぐを覺えき。廊の上より紙二ひら翩り落つ。一は罪障消滅の符、一は怨敵調伏の符なり。衆人はその片端を得んとてひしめきあへり。鐘の音再び響き、奏樂又起りぬ。われ等の乘れる車の此辻を離るゝとき、ベルナルドオが馬、側を過ぎたり。馬上の友はアヌンチヤタと媼とに禮して、我をば顧みざりき。姫は君が友の色の蒼さよ、病めるにあらずやとさゝやきぬ。われはたゞさることはあらざるべしと答へしが、我心は明に友の面色土の如くなりし所以を知りたり。而してわれは我決心の期到れるを覺えき。

わが姫を慕ふ情は甚だ深し。姫にしてわれを棄てずば、我は一生を此戀に委ぬとも可なり。われは嘗て我才の戲場に宜くして、我吭の喝采を博するに足るを驗し得たれば、一たび意を決して俳優の群に投ぜば、多少の發展を見んこと難からざるべし。ベルナルドオ畢竟何爲者ぞ。その年ごろ姫に近づかんとする心にして、公正なる情ならば、われ決してこれが妨碍をなさじ。友と我との間に擇ばんは、一にアヌンチヤタが寸心に存ず。姫我を取らば友去れかし。友を取らば我退かん。この日われは机に對ひて書を裁し、これをベルナルドオが許に寄せたり。筆を落すに臨みて舊情を喚び起せば、不覺の淚紙上に迸りぬ。發送せし後は心やゝ安きに似たれど、或は姫を失はんをりの苦痛を想ひ遣りて、プロメテウスの鷲の嘴に刺さるゝ如き念をなし、或は姫に許されて戲場を雙棲のところとなさん日の樂奈何なるべきと思ひ浮べて、獨り微笑を催すなど、ほとほど心亂れたる人に殊ならざりき。

燈籠、わが生涯の一轉機

夕の勤行の鐘響く頃、姫と媼とを伴ひて御寺の燈籠見に往きぬ。聖ピエトロの伽藍には中央なる大穹窿、左右の小穹窿、正面の簷端、悉く透き徹りたる紙もて製したる燈籠を懸け連ねたるが、その排置いと巧なれば、此莊嚴なる大廈は火の輪廓もて青空に畫き出されたるものゝ如くなり。人の群れ集へること、晝の祭の時にも増されるにや、車をば並足にのみ曳かせて、僅に進む事を得たり。神使の橋の上より、御寺の全景を眺むるに、燈の光は黄なるテエエル河の波を射て、遊び嬉む人の限を載せたる無數の舟を照し、爰に又一段の壯觀をなせり。樂の聲、人の歡び呼ぶ聲の滿ちわたれるピエトロの廣こうぢに來りし時、火を換ふる相圖傳へられぬ。御寺の屋根々々に分ち上したる數百の人は、一齊に鐵盤中なる松脂環飾に火を點ず。小き燈のかず〳〵忽ち大火と化したる如く、この時聖ピエトロの寺は羅馬の大都を照すこと、いにしへベトレヘムの搖籃の上に照りし星にもたとへつべきさまなり。（原註。寺院もそのめぐりなる家屋も、皆石もて築き立てたるものなれば、この盤中の火は松脂の盡くるまで燃ゆれども、火虞あるべきやうなし。）群衆の歡び呼ぶ聲はいよ〳〵盛になりぬ。アヌンチヤタこの活劇を眺めたるが、遽に我に向ひていふやう。かの大穹窿の上なる十字架に火皿を結び付くる役こそおそろしけれ。おもひ遣るに身の毛いよ竪つ心地す。われ。げに埃及の尖塔にも劣らぬ高さなり。かしこに攀ぢしむるには膽だましひ世の常ならぬ役夫を選むことにて、預め法皇の手より膏油の禮を受くと聞けり。姫。さてはひと時の美觀のために、人の命をさへ賭するなりしか。われ。これも神德をかゞやかさんとての業なり。世には卑しき限の事に性命を危くする人さへ少からず。かく語るうち、車の列は動きはじめたり。人々はモンテ、ピンチヨオの頂にゆきて、遙かにかゞやく御寺と其光を浴むる市とを見んとす。われ重ねて。御寺に光を放たせて、都の上に照りわたらしむるは、いとめでたき意匠にて、コルレジヨオが不死の夜の傑作も、これよりや落想しつるとおもはる。姫。さし出がましけれど、そのおん説は時代たがへり。彼圖は御寺に先だちて成りたり。作者は空に憑りて想ひ得しなるべく、又まことに空に憑りて想ひ得たりとせんかた、藍本ありとせんよりめでたからん。モンテ、ピンチヨオは餘りに雜※すべければ、やゝ遠きモンテ、マリヨへ往かばや。こゝより市門まではいと近ければといふ。われは馭者に命じて、柱廊の背後をらしめ、幾ほどもなく市外に出でたり。丘の半腹なる酒店の前に車を停めて見るに、穹窿の火の美しさ、前に見つるとはまた趣を殊にして、正面の簷こそは隱れたれ、星を聯ねたる火輪の光の海に漂へるかとおもはる。この景色は四邊のいと暗くして、大空なるまことの星の白かねの色をなして、高く隔たりたる處に散布せるによりて、いよ〳〵その美觀を添へ、人をして自然の大なるすら羅馬の蘇生祭には歩を譲りたるを感ぜしむ。鐘の響、樂の聲はこゝまでも聞えたり。

われは車を下りて、些の稍事を買はゞやと酒店の中に入りぬ。店の前には狹き廊ありて、小龕に聖母を崇きまつり、さゝやかなる燈を懸けたり。わが店を出でんとて彼龕の前に來ぬるとき、忽ちベルナルドオが吾前に立ち塞がりたるを見き。その面の色は、むかし「ジエスヰタ」派の學校のこゝろみの日に、桂冠を受け戴きしをり

に殊ならず。眼は熱を病める如くかゞやけり。物狂ほしく力を籠めて我臂を握り、あやしく抑へ鎭めたる聲して、アントニオ、われは卑しき兒行者たらんを嫌へり、然らずば直ちに此劍もて汝が僞多き胸を刺すならん、汝は臆病ものなれば辭まむも知れねど、われは強ひて潔き決鬪を汝に求む、共に來れといふ。われは把られたる臂を引き放さんとすまひつゝ、ベルナルドオ、物にや狂へると問ふに、友は焦燥つ聲を抑へて、叫ばんとならば叫べ、男らしく立ち向ふ心なくば、人をも呼べ、この兩腕の縛らるゝ迄には、汝が息の根とめでは置かじ、兵はこゝにあり、我に恥ある殺人罪を犯させじとおもはゞ疾く來れといひつゝ、拳銃一つ我手にわたし、われを廊の外に拉き行かんとす。われは遞與されたる拳銃を持ちながら、猶身を脫せんとして爭へり。友。彼君は淺はかにも汝に靡きしならん。汝は誇らしくも、そを我に、そを羅馬の民に示さんとす。われを出し拔きしは猶忍ぶべし。いかなれば我に弔辭めきたる書を贈りて、重ねて我を辱めたる。われ。ベルナルドオ、そは皆病める人の詞なり。先づその手を弛めずや。われは力を極めて友の體を撥ね退けたり。

その時われは銃聲の耳邊に轟くを聞きたり。我右臂には衝動を感じたり。烟は廊道に滿ちたり。われは又叫ぶに似て叫ぶにあらざる一種の氣息を聞きたり。この氣息の響は我耳を襲ふよりは寧ろ我心を襲ひき。發したるは我手中の銃にして、黒く數石を染めたる血に塗れて我前に横れるは我友なり。われは喪心者の如く凝立して、拘攣せる五指の間に牢く拳銃を攫みたり。

わが此不慮此不幸の全範圍を感ぜしは、酒店の人の罵り噪ぎつゝ走り寄りアヌンチヤタと媼との我前に來るを見し時なりき。わがベルナルドオと叫びて、その軀に抱き付かんとするに先だちて、姫は早くもその傍に跪き、鮮血湧き出づる創口を押へたり。姫はかく我友をいたはりつゝ、血の色全く失せたる面を擧げて、我を凝視せり。媼は我臂を搖り動かして、疾く此場をと呼べり。

われは胸裂くるが如き苦痛を覺えき。われは叫び出せり。思ひ掛けぬ怪我なり。殺さんと欲せしは他なり。銃は他の我にわたしゝなり。われは身を脫せんとして撥條に觸れたり。アヌンチヤタ聞き給へ。我等二人は命に懸けて君を慕ひしなり。君がために血を流さんことは、われも厭はざるべきこと、我友と同じ。われはおん身が一言を聞きて去らん。おん身は我友を愛し給ひしか、我を愛し給ひしか。

友の介抱に餘念なき姫は、詞のあやもしどろに、疾く往き給へといひて、手を揮りたり。姫は往き給へと繰反したり。われは心もそらに再び、友なりしか我なりしかと叫びたり。

その時われはアヌンチヤタが友の上に俯して唇をその※に觸るゝを見、その聲を呑みて微かに泣くを聞きたり。

次第に集りたる衆人の中より、忽ち邏卒々々と呼ぶ聲を聞けり。われは目に見えぬ幾條の腕もて拉き去らるゝ心地して、此場を遁れたり。

基督の徒

愛せられしは友なり。この一條の毒箭は我渾身の血を濁して、人を殺せり友を殺せりといふ悔悟の情の頭を擡ぐるをさへ妨げんとす。灌木雜草を踏みしだき、棘に面を傷られ、梢に袖を裂かれつゝも、幾畝の葡萄畠を限れる低き石垣を乘り越え乘り越え、指すかたをも

分かでモンテ、マリヨの丘を走り下るに、聖ピエトロの御寺の火は、昔カインの奔りしとき、同胞の躯を供へたる贄卓の火のゆくてを照しゝ如くなり。（譯者云。カインは亞當が第一の子にして、弟を殺して神に供へき。）この間幾時をか經たる、知らず。わが足を駐めしは、黄なるテヱエルの流の前を遮るを見し時なりき。羅馬より下、地中海の荒波寄するあたりまで、この流には橋もなし、また索むとも舟もあらざるべし。この時我は我胸を噬む卑怯の蛆の兩斷せらるゝを覺えしが、そは一瞬の間の事にて、蛆は忽又蘇りたり。われは復たいかなる決斷をもなすこと能はざりき。

われはふと首を回らしてあたりを見しに、我を距ること數歩の處に、故墳の址あり。むかしドメニカが許に養はれし時、往きて遊びし冢に比ぶれば、大さは倍して荒れたることも一入なり。頽れ堕ちたるついぢの石に、三頭の馬を繋ぎたるが、皆おの〳〵顋下に弔りたる一束の芻を噛めり。

墓門より下ること二三級なる窪みに、燃え殘りたる焚火を圍める三個の人物あり。その火影の早く我目に映らざりしにても、我が慌てたるを知るに足るべし。火の左右に身を横へたる二人は、逞ましげに肥えたる農夫なるが、毛を表にしたる羊の裘を纏ひ、太き長靴を穿き、聖母の圖を貼けたる尖帽を戴き、短き烟管を銜みて對ひあへり。第三個は鼠色の大外套にくるまり、帽をまぶかに被りてついぢに靠りかゝりたるが、その身材はやゝ小く、瓶を口にあてゝ酒飲み居たり。

わが渠等を認めしとき、渠等も亦我を認めき。肥えたる二人は齊しく銃を操りて立ち上りたり。客人は何の用ありてこゝに來しぞ。われ。舟をたづねて河をこさんとす。三人は目を合せたり。甲。むづかしきたづねものかな。挈げ持ちて旅するものは知らず。こゝ等には舟も筏もなし。乙。客人は路にや迷ひ給ひし。こゝは物騒なる土地なり。デ・チエザアリが夥伴は遠き處まで根を張れば、法皇はいかに鋤を揮り給ふとも、御腕の痛むのみなり。甲。客人はなどて何の器械をも持ち給はぬ。見られよ、この銃は三連發なり。爲損じたるときの用心には腰なる拳銃あり。丙。この小刀も馬鹿にはならぬ貨物なり。（かの身材小さき男は冰の如き短劍を抜き出だして手に持ちたり。）乙。早く※に納めよ。年若き客人は刃物は嫌ひなるべし。客人、われ等に逢ひ給ひしは爲合せなり。若し惡棍などに逢ひ給はゞ、素裸にせられ給はん。金あらば我等にあづけ給へ。

われは今三人の何者なるかを知りたり。我五官は鈍りて、我性命は價なきものとなりぬ。諸君よ、わが持てる限の物をば、悉く贈るべし、されどおん身等を※かしむるに足らざるこそ氣の毒なれと答へて、われは進寄りつゝ、手を我衣兜にさし籠みたり。われは兜兒の中に猶盾銀二つありしを記したり。而るに我手に觸れたるは、重みある財布なりき。抽き出して見れば、手組の女ものなるが、その色は曾てアヌンチヤタが媼の手にありしものに似たり。落人の盤纏にとて、危急の折に心づけたる、彼媼の心根こそやさしけれ。三人ひとしくさし伸ぶる手を待たで、われは財布の底を掴みて振ひしに、焚火に近き※石の上に、こがねしろかね散り布けり。眞物ぞと呼びつゝ、人々拾ひ取りて勿體なき事かな、盜人などに取られ給はゞいかにし給ふといふ。われ。貨物はそれ丈なり。疾く我命を取り給へ。生甲斐なき身なれば毫しも惜しとはおもはず。甲。思ひも寄らぬ事なり。我等はロツカ・デル・パアパに住める正直なる百姓仲間なり。同じ教の人を敬ふ基督の徒なり。酒少し殘りたり。これを飲みて、

かく怪しき旅し給ふ事のもとを明し給へ。われ。そはわが祕事なり。かく答へて我は彼瓶を受け、燥きたる咽を潤したり。

三人は何事をかさゝやきあひしが、小男は嘲み笑ふ如き面持して我に向ひ、煖き夕のかはりに寒き夜をも忍び給へといひて立ちぬ。渠は驅歩の蹄の音をカムパニアの廣野に響かせて去りぬ。甲。いざ客人、船を待ち給はんは望なき事なり。我馬の尾に繋りて泅がんこともたやすからねば、鞍の半を分けて參らすべし。渠は我を後ざまに馬の脊に掻き載せて、おのれは前の方に跨り、水に墜さぬ用心なりとて、太き綱を我胸と肘とのめぐりに卷きて、脊中合せにしかと負ひたり。我には手先を動かす餘地だになかりき。逞ましき馬は前脚もて搜りつゝ流に入りしが、水の脇腹に及ぶころほひより、巧に泳ぎて向ひの岸に着きぬ。渠は河ごしは濟みたりと笑ひて、綱を弛むる如くなりしが、こたびは我脊を緊しく縛りて、その端を鞍に結ひつけ、鞍をしかと掴みておはせ、墜ちなば頸の骨をや摧き給はんといひて、靴の踵を馬の脇に加ふれば、連なる男も同じく足をはたらかせたり。かくて二匹の馬三個の人は、弦を離れし矢の如くカムパニアの原野を横ぎりたり。前なる男の長き髮は、風に亂れて我頬を拂へり。頽れたる家の傍、斷えたる水道の柱弓の畔を、夢心に過ぎゆけば、血の如く紅なる大月地平線より輾り出で、輕く白き靄騎者の首を繞りてひらめき飛べり。

山塞

友を殺し、女に別れ、國を去りて、兇賊の馬背に縛められ、カムパニアの廣野を馳す。一切の事、おもへば夢の如く、その夢は又怪しくも恐ろしからずや。あはれ此夢いつかは醒めん、醒めてこの怖るべき形相は消え淪びなん。心を鎭めて目を閉づれば、冷なる山おろしの風は我頬を繞りて吹けり。

山路にさしかゝると覺しき時、騎者は背後なる我を顧みて詞をかけたり。程なく大母の蔽膝の下に息らふべければ、客人も心安くおぼせよ。良き馬にあらずや。この頃聖アントニオの禳を受けたり。小童の絹の紐もて飾りて牽き往きしに、經を聽かせ水を灌せられぬれば、今年中はいかなる惡魔の障碍をも免るゝならん。

岩間の細徑に踏み入る頃、東の天は白みわたりぬ、連なる騎者馬さし寄せて、夜は明けんとす、客人の目疾せられぬ用心に、涼傘さゝせ申さんと、大なる布を頭より被せ、頸のまはりに結びたれば、それより方角だに辨へられず。諸手をば縛められたり。我身上は今や獵夫に獲られたる獸にも劣れり。されど憂に心昧みたる上なれば、苦しとも思はでせくゞまり居たり。馬の前足は大方仰ぐのみなれど、ともすれば又暫し阪道を降る心地す。茂りあひたる梢は頻りに我頬を拶てり。道なき處をや騎り行くらん覺束なし。

久しき後馬より卸して、我を推して進ましむ。かれこれ復た隻語を交へず。狹き門を過ぎて梯を降りぬ。心神定まらず、送迎忙はしき際の事とて、方角道程よくも辨へねど、山に入ること太だ深きにはあらずと思はれぬ。わがその何れの地なるを知りしは、年あまた過ぎての事なり。後には外國人も尋ね入り、畫工の筆にも上りぬ。こゝは古のツスクルムの地なり。栗の林、丈高き月桂の村立ある丘陵にて、今フラスカアチと呼ばるゝ處の背後にぞ、この古跡はあなる。「クラテエグス」、野薔薇などの枝生ひ茂りて、重圍をなせる榻列の石級を覆へり。山のところどころには深き洞穴あり、石の穹

窪あり。皆草叢に掩はれて、迫り視るにあらでは知れ難かるべし。谷のあなたに聳てるはアブルツチイの山にて、沼澤を限り、この邊の景に、物凄き色を添ふ。あはれ此山の容よ。この故址斷礎の間より望むばかり、人を動すことは、またあらぬなるべし。

騎者等の我を拉き往くは、とある洞窟の一つにて、その入口は石楠（ゲエア）の枝といろ〳〵なる蔓艸とに隱されたり。我等は足を駐めつ。徐かに口笛吹く聲と共に、扉を開く響す。再び數級の石磴を下る。數人の亂れ語る聲我耳に入りし時、頭に纏へる布は取り除けられぬ。わが身は大穹窿の裏に在り。中央なる大卓の上に眞鍮の燈二つ据ゑて、許多の燈心に火を點じ、逞しげなる大漢數人の羊の裘着たるが、圍み坐して骨牌を弄べり。火光の照し出せる面ざしは、苦みばしりて落ち着きたるさまなり。人々は生面の客あるを見ても、絶て怪み訝ることなく、我に榻を與へて坐せしめ、我に盞を與へて飮ましめ、肴せんとて鹽肉團をさへ截りてくれたり。その相語るを聞くに、方言にて解すべからず、されど我上に關はらざる如くなりき。

我は飢を覺えずして、たゞ燃ゆる如き渇を覺えしかば、酒を飮みつゝ四邊を見たり。隅々には脫ぎ棄てたる衣服と解き卸したる兵器とあるのみ。一角に龕の如く窪みたる處あり。その天井には半ば皮剥ぎたる兎二つ弔り下げたり。初め心付かざりしが、その窪みたる處には一人の坐せるあり。年老いたる媼の身うち痩せ細りたるが、却りて脊直にすくやかげなる坐りざまして、あたりに心留めざる如く、手はゆるやかに絲車を　せり。銀の如き髮の解けたるが、片頰に墜ちかゝりて、褐色なる頸のめぐりに垂るゝを見る。その墨の如き瞳は、とこしへに苧環の上に凝注せり。焚きさしたる炭の半ば紅なるが、媼の座の畔にちりぼひたるは、妖魔の身邊に引くといふ奇しき圈とも看做さるべし。まことに是れ一幅クロトの活畫像なり。

（譯者云。古説に三女ありて人生運命の泰否を掌る。性命の絲を繰るをクロトと曰ひ、これを撮みたるをラヘシスと曰ひ、これを斷つをアトロポスと曰ふ。姉妹神なり。）

人々の我事にかゝづらはざりしは、久しからぬ程なりき。忽ち糺問は始まりぬ。職業は何ぞ、資産ありや否や、親戚ありや否や抔いふことなりき。我は徐かに答へき。わが帶び來たるところのものをば、最早君等に傾け贈りぬ。かくてこの身はやうなき貨となりぬ。縱ひ羅馬わたりに持ち往きて沽らんとし給ふとも、盾銀一つ出すものだにあらじ。廉ある生活の業をも知らず。頃日は拿破里に往きて、客に題をたまはりて、即座に歌作りて謳はんと志したり。斯く語るついでに、われはこたび身を以て逃れたる事のもとさへ、包み藏さずして告げぬ。唯だアヌンチヤタが上をば少しも言はざりき。さてわが物語の終は、この上殊なる望なければ、この身を官府に引き渡して、褒美にても受け給へといふことなりき。

一人の男のいはく。さりとては珍らしき望なるかな。想ふに羅馬市には、黃金の耳環を典して、客人を贖ひ取ることを吝まざる人あるならん。拿破里の旅稼は、その後の事とし給はんも妨あらじ。さはあれ強ひて直ちに拿破里に往かんとならば、あぶなげなく彊を越させ申さんことも、亦我等の手中に在り。留りて此樂園に居らんとならば、それも好し。こゝに在るは善き人々なるをば、客人も夙く悟り給ひしならん。されど此等の事思ひ定め給はんには、先づ快く一夜の勞を醫し給ふに若かず。こゝに佳き牀あり。それのみならず、來歷ある好き衾をも借し參らせん。巽風吹く頃の夕立をも、雪ふゞきをも凌ぎし衾ぞとて、壁よりはづして投げ掛くるは、褐色な

る大外套なり。牀といふは卓の一端の地上に敷ける藁蓆なり。その男は何やらん一座のものに言置き、「ヂツセンチイ、オオ、ミア、ベツチイナ」（降り來よ、やよ、我戀人）と俚歌口ずさみて出行きぬ。

血書

われは眠ることを期せずして、身を藁蓆の上に僵しゝに、前の日よりの恐ろしき經歷は魘夢の如く我心を劫し來りぬ。されど氣疲れ力衰へたればにや目※おのづから合ひ、いつとは知らず深き眠に入りて、終日復た覺むることなかりき。

醒めたる時は心地爽かになりて、前に心身を苦めつる事ども、唯だ是れ一場の夢かと思はるゝ程なりき。然はれそは一瞬の間にして、身の在るところを顧み、四邊なる男等の蹙みたる顏付を見るに及びては、我魘夢の儼然として動すべからざる事實なるを認めざることを得ざりき。

一客あり。灰色の外套を偏肩に引掛け、腰に拳銃を帶びたるが、馬に騎りたる如く長椅に跨りて、男等と語れり。穹窿の隅の方には、彼の雜種いろしたる老女の初の如く坐して繰車まはせるあり。黒地に畫ける像の如し。座のめぐりには、新き炭を添へて、その煖氣は室に滿ちたり。われは客の、彈は脇を擦過りたり、些の血を失ひつれど、一月の間には治すべしといふを聞き得たり。

わが頭を擡げしを見て、われを鞍に縛せし男のいふやう。客人醒め給ひしよ。十二時間の熟睡は好き保養なるべし。こゝなるグレゴリオは羅馬より好き信をもて來たり。そはおん身の喜び給ふべき筋の事なり。手を下しゝはおん身に極つたり。時も所も符を合す如し。驕りたる評議廳の官人は、おん身がために、容赦なくその長裾を踏まれぬと見えたり。お身の大膽なる射撃に遭ひしは、評議官の從子なりき。これを聞きてわれは僅に、命にはさはらずやと問ふことを得き。グレゴリオの云はく。先づ死なで濟むべし。醫者は然云ひきとぞ。鶯の如き吭ありといふ、美しき外國婦人の夜を徹して護り居たるに、醫者は心を勞し給ふな、本復疑なしといひきとぞといふ。我を伴ひ來し男の云はく。われおもふに、君は男の身を錯り射給ひしのみにあらず、女の心をも亦錯り射給ひしなり。雌雄は今雙び飛ぶべし。君は唯だこゝに在せ。自由なる快活なる生計なり。君は小なる王者たることを得べし。而してその危さは決して世間の王位より甚しからず。酒は酌めども盡きざるべし。女は君を欺きし一人の代りに、幾人をも寵し給へ。同じく是れ生活なり、餘瀝を嘗むると、滿椀を引くと、唯だ君が選み給ふに任すと云ひき。

ベルナルドオは死せず。我は人を殺さず。この信は我がために起死の藥に※しかりき。獨りアヌンチヤタを失ひつる憂に至りては、終に排するに由なきなり。われは猶豫することなく答へき。我身は只君等の處置するに任すべし。されどわが嘗て受けし教と、現に懷ける見とは、俘囚たるにあらずして、君等が間に伍すべきやうなし。これを聞きて、我を伴ひ來し男の顏は、忽ち嚴なる色を見せたり。盾銀六百枚は定まりたる身のしろなり。そを六日間に拂ひ給はゞ、君は自由の身なるべく、さらずば君が身は、生きながらか、殺してか、我物とせではおかじ。こは此處の掟なれば、君が紅顏も我丹心も、寛假の緣とはならぬなるべし。六百枚なくば、我等の義兄弟となりて生きんとも、彼處なる枯井の底にて、相擁して永く眠れる人

々の義兄弟となりて終らんとも、二つに一つと思はれよ。身のしろ求むる書をば、友達に寄せ給はんか、又彼歌女に寄せ給はんか。おん身の一撃媒となりて、二人はその心を明しあひつれば、さばかりの報恩をば、喜びてなすなるべし。斯く語りつゝ、男は又から〳〵と笑ひて云ふ。廉き價なり。この宿の客人に、還錢のかく迄廉きことは、その例少からん。都よりの馬のしろ、六日の旅籠を思ひ給へ。われ。我志をば既に述べたり。我はさる書をも作らざるべく、又君等が夥伴にも入らざるべし。男。さて〳〵強情なる人かな。されどその強情は憎くはあらず。我彈丸の汝が胸を貫かんまでも、その心をば讃めて進ずべし。命惜まぬ客人よ。生くといふには種々あり。少年の心は物に感じ易しといふに、吾黨がかく累なく障なき世渡するを見て、羨ましとは思はずや。そが上おん身は詩人にて、即興詩もて口を糊せんといふにあらずや。吾黨の自由不羈の境界を歌ひ給へ。題をば見て心を動すことはなきか。客人試みに此境界を歌ひ給へ。題をば巖穴の間なる不撓の氣象とも曰ふべきならん。客人若しこれを歌はゞ、彼生活といひ性命といふものゝ、樂む可く愛す可きを説かざることを得ぬなるべし。その杯を傾けて、歌ひて我等に聽せ給へ。出來好くば六日の期を一日位は延ばすべしといふ。男は手をさし伸べて、壁上なる「キタルラ」を取りて我に授けつ。賊の群は立ちて我席を繞りたり。

われはそを把りて暫く首を傾けたり。課する所の題は巖穴山野にて、こは我が曾て經歴せざるところなり。前の夜こゝに來し時は、目を掩はれたれば甲斐なし。昔見しところを言はゞ、羅馬のボルゲエゼ、パムフイリの兩苑に些の松林ありしに過ぎず。まことの山とては、幼かりし程ドメニカが家の窓より望みしより外知らず。已むことなくば只だ一たび山を見き。ジエンツアノの花祭に往きし途すがらの事なり。ネミ湖畔の高原を歩みしに、道は暗く靜けき森林の間を通じたり。彼祭はわが爲には悲き祭なりければ、湖畔の道にて花束つくりしことをさへ、今猶忘れでありしなり、景は心目に上り來れり。今かく物語する時間の半をだに費さずして、景は情を生じ、情は景を生ずるほどに、我は絃を撥きたり。情景は言の葉となり、言の葉は波起り波伏す詩句となりぬ。且我が歌ひしところを聽け。深き湖あり。暗き林はそを環れり。湖の畔なる巖は聳ちて天を摩せんとす。こゝに暴鷲の巢あり。母鳥は雛等に教へて、穉き翼を振はしめ、またその目を鋭くせんために、日輪を睨ましめき。扨母鳥の云ひけるやう。汝達は諸鳥の王なるぞ。目は利く、拳は強し。いでや飛べ。飛びて母の側を去れ。我目は汝を送り、我情は彼の死に臨める大鵬の簧舌の如く汝が上を歌ふべし。その歌は不撓の氣力を題とせんといひき。雛等は巢立せり。一隻は翅を近き巖の頂に斂めて、晴れたる空の日を凝矚すること、其光のあらん限を吸ひ取らんと欲する如くなりき。一隻は高く虚空に翔りて、大圈を畫し、林※沼澤を下瞰するが如くなりき。岸に近き水面には緑樹の影を倒せるありて、その中央には碧空の光を※すを見る。時に大魚の浮べるあり。その脊は覆りたる舟の如し。忽ち彼雛鷲は電の撃つ勢もて、さと卸し來つ。刃の如き利爪は魚の背を攫みき。母鳥は喜、色に形れたり。然るに鳥と魚とは力相若くものなりければ、鳥は魚を擧ぐること能はず、魚は鳥を沈むること能はず、打ち込みたる爪の深かりしために、これを抜かんとするも、亦意の如くならず。こゝに生死の爭は始まりぬ。今まで靜なりける湖水の面は、これがために搖り動され、大圈をなせる波は相重りて岸に迫れり。既にして波上の

鳥と波底の魚と、一齊に鎭まり、鷲の翼の水面を掩ふこと蓮葉の如くなりき。忽ち隻翼は又聳ち起り、竹を割く如き聲と共に、一翼はひたと水に着き、一翼は劇しく水を鞭ち沫を飛ばすと見る間に、鳥も魚も沈みて痕なくなりぬ。母鳥は悲鳴して、巖角なる一隻の雛を顧みるに、こもいつか在らずなりて、首を仰いで遠く望めば、只だ一黒斑の日に向ひて飛ぶを見き。母鳥は悲を轉じて喜となしたり。その胸は高く躍りて、その聲は折るれども撓まぬ力を歌ひぬ。我歌はこゝに終り、喝采の聲は座に滿ちぬ。獨り我は※きもせで、龕の前なる老女をまもり居たり。そは我が歌ひて半に至りし時、老女の絲繰る手やうやく緩く、はては全く歇みて、暗き瞳の光は我面を穿つ如く、こなたに注がれたればなり。又我が能く少時の夢を喚び起して、この詩中に入るゝことの、かくまで細かなることを得しは、この老女の振舞與りて力ありければなり。

嫗は忽ち身を起し、健かなる歩みざまして我前に來て云ふやう。能くも歌ひて、身のしろを贏ち得つるよ。吭の響はやがて黄金の響ぞ。鳥と魚との水底に沈みし時にこそ、この姥は汝が星の躔るところを見つれ。鷲よ。いで日に向ひて飛べ。老いたる母は巢にありて、喜の目もてそを見送らんとす。汝が翼をば、誰にも折らせじといふ。我に勸めて歌はせし男恭しく嫗の前に※頭きて、さてはフルヰアの君は此わかうどを見給ひしことあるか、又その歌を聞き給ひしことあるかと問ひぬ。嫗。そは汝の知らぬ事なり。われは早く幸運の兒の身と光と眼の星とを見き。兒はむかし花の環を作りぬ。後又愈美しき花の環を作るならん。その臂を縛むべきことかは。六日が程は巢にあれかし。脊に爪打ち込みしにはあらず。六日立たば、汝この雛を放ち遣りて、日の邊へ飛ばしめよ。斯くつぶやきつゝ、嫗は壁の前なる筐を探りて、紙と筆とを取り出でつ。あな、やくなし。墨は巖の如くなりぬ。コスモよ。人の上のみにはあらず。汝が腕の血を呉れずやといふ。コスモと喚ばれし彼男は、一語をも出さで、刀を抜きて淺くその膚を截りたり。嫗はその血に筆を染めて我にわたし、「往拿破里」と書して名を署せしめて云ふ。好し好し、法皇の封傳に劣らぬものぞとて、懐にをさめつ。傍なる一人の男、その紙何の用にか立つべきとつぶやきしに、嫗目を見張りて、蛆のもの言はんとするにや、大いなる足の蹂躙らんを避けよといふ。コスモは首を低れて不敢不敢汝の命は神璽靈寶にも代へじといひき。人々と嫗との物語はこれにて止み、卓を圍める一座の興趣は漸くに加はりて、瓶は手より手にと忙はしく遣り取りせらるゝことゝなりぬ。さて食を供するに至りて、賊の中にはわが肩を敲きて、皿に肉塊を盛りて呉るゝもありき。唯だ彼嫗は故の如く、室隅に坐して、飲食の事には與らざりき。賊の一人は火をその坐のめぐりに添へて、大母よ、汝は凍ゆるならんといひき。我は嫗の詞につきて熟※おもふに、むかし母とマリウチアとに伴はれて、ネミ湖畔に花束作りし時、わが上を占ひしことあるは此嫗なりしなるべし。我運命の此嫗の手中にありと見ゆること、今更にあやしくこそ覺えらるれ。嫗はわれに往拿破里と書かしめき。こは固より我が願ふところなり。されど封傳なくして、いかにして拿破里には往かるべきぞ。又縱令かしこに往き着かんも、識る人とては一人だに無き身の、誰に頼りてか活をなさん。前にはわれ一たび即興詩もて世を渡らんとおもひき。されど羅馬にて人を傷けたりと知られんことおそろしければ、舞臺に出づべきこゝろもなし。されど方言をばよく知りたり、聖母のわれを見放ち給ふことだにあらずば、ともかくもして身を立てんと、強

ひて安堵の念を起しつ。あはれ、あやしきものは人のこゝろにもあるかな。この時アヌンチヤタが我を卻けて人に從ひし悲痛は、却りて我心を抑し鎭むる媒となりぬ。我がこの時の心を物に譬へて言はゞ、商人のおのが舟の沈みし後、身一つを三版に助け載せられて、知らぬ島根に漕ぎゆかるゝが如しといふべき歟。

かくて一日二日と過ぎ行きぬ。新に來り加はる人もあり、又もとより居たる人の去りていづくにか往けるもあり。ある日彼媼さへ、ひねもす出でゝ歸らざりしかば、我は賊の一人とこの山寨の留守することゝなりぬ。この男は年二十の上を一つばかりも超えたるならん。顏は卑しげなるものから、美しき髮長く肩に掛かり、その目なざしには、常にいと憂はしげなる色見えて、をり〳〵は又手負ひたる獸などの如きおそろしき氣色現るゝことあり。我と此男とは暫し對ひ坐して語を交ふることなく、男は手を額に加へて物案ずるさまなりしが、忽ち頭を擧げて我面をまもりたり。

花ぬすびと

若者はふと思ひ付きたる如く。おん身は物讀むことを能くし給ふならん。此卷の中なる祈誓の歌一つ讀みて聞せ給へとて、懷より小き讀美歌集一卷取出でたり。われいと易き程の事なりとて、讀み初めしに、若者の黑き瞳子には、信心の色いと深く映りぬ。暫しありて若者我手を握りて云ふやう。いかなれば汝は復た此山を出でんとするか。人情の詐多きは、山里も都大路も殊なることなけれど、山里は爽かに涼しき風吹きて、住む人の少きこそめでたけれ。汝はアリチアの婚禮とサヱルリ侯との昔がたりを知るならん。壻は卑しき農夫なりき。婦は貧しき家の子ながら、美しき少女なりき。侯爵の殿は婚禮の筵にて新婦が踊の相手となり、宵の間にしばし花園に出でよと誘ひ給へり。壻この約を婦に聞きて、婦の衣裳を纏ひ、婦の面紗を被りて出でぬ。好くこそ來つれと引き寄せ給ふ殿の胸には、匕首の刃深く刺されぬ。これは昔がたりなり。われも此の如き貴人を知りたり。そは某といふ伯爵の殿なりき。又此の如き壻を知りたり。唯だ婦は此の如く打明けて物言ふ性ならねば、新枕の樂しさを殿に讓りて、おのれは新佛の通夜することゝなりぬ。刃の詐多き胸を貫きし時、膚は雪の如くかゞやきぬとぞ語りし。

わが心中には畏怖と憐愍と交〳〵起りぬ。われは詞はなくて、若者の面を打まもりしに、若者又云ふやう。彼も一時なり。此も一時なり。われを女の肌知らぬものと思ひ給ふな。英吉利の老婦人ありて、年若き男女と共に、拿破里へ往かんと、此山の麓を過ぎぬ。我等は此一群を馬車より拉き卸したり。我等は三人を擒にして、財物を掠め取りつ。少女は若き男の許嫁の婦なりしならん。顏ばせつやゝかに、目なざし涼しかりき。男をば木に括りたり。女は猶處子なりき。われはサヱルリ侯に扮することを得たり。賠ひの金屆きて一群の山を下りし時、少女の顏は色褪せて、目は光鈍りたりき。深山は蔭多きけにやあらん。

この物語にわれは覺えず面をそむけしかば、若者は分疏らしく詞を添へて、されど新教の女なりき、惡魔の子なりきとつぶやきぬ。われ等二人はしばし語なくして相對へり。若者は今一つ讀み給へと乞ひぬ。われは喜びて又尊き書を開きつ。

封傳

夕ぐれにフルヰアの媼歸りて、われに一裹の文書を遞與して云ふやう。山々は濕衾を被きたるぞ。巢立するには、好き折なり。往方は遙なるに、禿げたる巖の面には麪包の木生ふることなし。腹よく拵へよといふ。若者のかひ〳〵しく立ち働きて、忙しげに供ふる饌に、われは言はるゝ儘に飢を凌ぎつ。媼は古き外套を肩に被き、手を把りて暗き廊道を引き出でつゝ云ふやう。我雛鷲よ。疆守る兵も汝が翼を遮ることあるまじきぞ。その一裹は尊き神符にて、また打出の小槌なり。おのが寶を掘り出さんまで、事闕くことはあらじ。黄金も出づべし、白銀も出づべしといふ。媼は痩せたる臂さし伸べて、洞門を掩へる蔦蘿の帳の如くなるを推し開くに、外面は暗夜なりき。濕りたる濃き霧は四方の山岳を繞れり。媼の道なき處を疾く奔るに、われはその外套の端を握りて、やう〳〵隨ひ行きぬ。木立草むらを左右に看過して、媼は魔神の如くわれを導き去りぬ。

數時の後挾き山の峽に出でぬ。こゝに伊太利の澤池にめづらしからぬ藁小屋一つあり。籐に藁まぜて、棟より地まで葺き下せり。壁といふものなし。燈の光は低き戸の隙間洩りたり。媼は我を延きて進み入りぬ。小屋の裡は譬へば大なる蜂窩の如くにして、一方口より出で兼ねたる烟は、あたりの物を殘なく眞黒に染めたり。梁柱はいふもさらなり、籐の一條だに漆の如く光らざるものなし。間の中央に、長さ二三尺、幅これに半ばしたる甎爐あり。炊ぐも煖むるも、皆こゝに火焚きてなすなるべし。炭と灰とはあたりに散りぼひたり。奥に孔ありて小き間につゞきたるが、そのさま芋塊に小芋の附きたる如し。その中には女子一人臥して、二三人の小兒はそのめぐりに横れり。隅の方に立てる驢は、頭を延べて客を見たり。主人なるべし、腰に山羊の皮を巻き、上半身は殆ど赤條々なる老夫は、起ちて媼の手に接吻し、一語を交へずして羊の皮をはふり、驢を門口に率き出し、手まねして我に騎れと教へぬ。媼は我に向ひて、カムパニアの馬に勝るべき足どりの駒なり、幸運の門出は今ぞとさゝやきぬ。われはその志の嬉しければ、媼の手に接吻せんとせしに、媼は肩に手を掛け、額髪おし上げて、冷なる唇を我額に當てたり。

老夫は鞭を驢に加へて、おのれもひたと引き添ひつゝ、暗き徑を馳せ出せり。われは猶媼の一たび手もて揮くを見しが、その姿忽ち重る梢に隠れぬ。心細さに馬夫に物言ひ掛くれば、聞き分き難き聲立てゝ、指を唇に加へたり。さては※なるよと思ひぬ。いよ〳〵心もとなくて媼の授けし裹み引き出すに、種々の書ものありと覺ゆれど、夜暗うして一字だに見え分かず。兎角して曉がたになりぬ。路は山の脊に出でゝ、裸なる巖には些許りなる蔓草纏ひ、灰色を帶びて緑なる亞爾鮮の葉は朝風に香を途りぬ。空には星猶輝けり。脚下には白霧の遠く漂へるを見る。是れ大澤の地なり。此澤はアルバノ山下に始まりて、北エルレトリより南テルラチナに至る。馬夫のしばし歩を留めし時、われは仰いで青空の漸く紅に染まりゆきて、山々の色の青天鵝絨の如くなるを視き。偶※山腹に火を焚くものあり。その黄なる　は晴天の星の如くなりき。われは覺えず驢背に合掌して、神の惠の大なるを謝したり。

われは漸くにして媼の賜を見ることを得き。その一通の文書は羅馬警察衙の封傳にして、拿破里公使の奥がきあり。旅人の欄には分明に我氏名を注したり。一通は又拿破里フアルコネツトオ銀行に振り込みたる爲換金五百「スクヂイ」の劵なり。これに添へたる紙片

に二三行の女文字あり。手負ひたる人の上をば、みこゝろ安く思されよ。遠からぬ程に癒ゆべしと申すことに侍り。されどしばらくは羅馬に歸り給はぬこそよろしく侍らめとあり。フルヰアは我を欺かざりき。わがためには、これに増す神符あらじとおもひぬ。

道は少し夷になりぬ。とみれば一群の牧者あり。草を藉きて朝餉たうべて居たり。我馬夫は兼て相識れるものと覺しく、進み寄りて手まねするに、牧者は我等にその食を分たんといふ。水牛の乾酪と麪包とにて飲ものには驢の乳あり。われは快く些の食事をしたゝめしに、馬夫は手まねして別を告げたり。さて牧者のいふやう。この徑を下りゆき給へ。只だ山を左に見て行き給はゞ、小河の流に逢ひ給はん。そは山より街道に出づる水なり。霧晴れなば、そこより街※の長く續けるを見給ふならん。流に沿ひて街樞の方へ往き給はゞ、程なく街道の側なる廢寺の背後に出で給はん。その寺今は「トルレ、チ、トレ、ポンテ」とて旅籠屋となりたり。目の暮れぬ内にテルラチナに着き給ふべしといひぬ。我は此人々に報せんとおもふに、拿破里にて受取るべき爲換の外には、身に附けたるものなし。されど財布をこそ人にやりつれ、さきに兜兒の裡に入れ置きし「スクヂイ」二つ猶在らば、人々に取らせんものをと、かい探ぐるにあらず。馬夫には領なる絹の紛※解きて與へ、牧者等と握手して、ひとり徑を下りゆきぬ。

大澤、地中海、忙しき旅人

世の人はポンチネの大澤（パルウヂ、ポンチネ）といふ名を聞きて、見わたす限りの曠野に泥まじりの死水をたゝへたる間を、旅客の心細くもたどり行くらんやうにおもひ做すなるべし。そはいたく違へり。その土地の豐腴なることは、北伊太利ロムバルヂアに比べて猶優りたりとも謂ふべく、茂りあふ草は莖肥えて勢旺なり。廣く平なる街道ありてこれを横斷せり。（耶蘇紀元前三百十二年アピウス・クラウヂウスの築く所にして、今猶アピウス街道の名あり。）車にて行かば坐席極めて妥なるべく、菩提樹の街※は鬱蒼として日を遮り、人に暑さを忘れしむ。路傍は高萱と水草と、かはる〳〵〵濃淡の緑を染め出せり。水は井字の溝渫に溢れて、處々の澱みには、丈高き蘆葦、葉闊き睡蓮（ニユムフエア）を長ず。羅馬の方より行けば左に山岳の空に聳ゆるあり。その半腹なる村落の白壁は、鼠いろなる岩石の間に亂點して、城郭かとあやまたる。左は海に向へる青野のあなたに、チルチエオの岬（プロモントリオ、チルチエオ）の隆く起れるあり。こは今こそ陸つゞきになりたれ、古のキルケが島にして、オヂツセウスが舟の着きしはこゝなり。（ホメロスの詩に徴するに、トロヤの戰果てゝ後、希臘イタカ王オヂツセウスこの島に漂流せしに、妖婦キルケ舟中の一行を變じて豕となす、オヂツセウス神傳の藥草にて其妖術を破りぬといふ。）

霧は歩むに從ひて散ぜり。晒せる布の如き溝渠、緑なる氈の如き草原の上なる薄ぎぬは、次第に※げ去られたり。時はまだ二月末なれど、日はやゝ暑しと覺ゆる程に照りかゞやきぬ。水牛は高草の間に群れり。若駒の馳せ狂ひて、後脚もて水を蹴るときは、飛沫高く迸り上れり。その疾く捷き運動を、畫かく人に見せばやとぞ覺ゆる。左の方なる原中に一道の烟の大なる柱の如く騰れるあり。こはこの地の習にて、牧者どものおのが小屋のめぐりなる野を燒きて、瘴氣を拂ふなるべし。

途にて農夫に逢ひぬ。その痩せたる姿、黄ばみし面は、あたりの草木のすくやかに生ひ立てると表裏にて、冢を出でたる枯骨にも譬へつべし。驢に騎りて、手に長き槍めきたるものを執れるが、こは水牛を率て返るとき、そは驅り集むる具なりとぞ。げにこゝらの水牛の多きことその幾何といふことを知らず。草むらを見もてゆけば、斗らず黒く醜き頭と光る眼とを認め得て、こゝにも臥したるよと驚くこと間々あり。

道に沿ひて處々に郵亭を設けたり。その造りざま、小きながら三層四層ならぬはなし。こは瘴氣を恐るればなり。亭は皆白壁なれど、礎より簷端迄、緑いろなる黴隙間なく生ひたり。人も家も、渾べて腐朽の色をあらはして、日暖に草緑なる四邊の景と相容れざるものゝ如し。わが病める心はこれを見て、つく／〃＼人生の頼みがたきを感じたり。

「アヱ、マリア」の鐘響くに先だつこと一時ばかりにして、澤地のはづれに出でぬ。山脈の黄なる巖は漸く迫り近づきて、南國の風光に富めるテルラチナの市は、忽ち我前に横りぬ。三株の棕櫚樹高く道の傍に立てるが、その實は累々として葉の間に垂れたり。山腹の果圃は黄なる斑紋ある青氈に似たり。その斑紋は檸檬、柑子などの枝たわむ程みのりたるなり。一農家の前に熟し落ちたる檸檬を堆く積みたるを見るに、餘所にて栗など搖りおとして掃き寄するさまと殊なることなし。岩石のはざまよりは、青き迷迭香（ロスマリヌス）、赤き紫羅欄花など生ひ上りたるが、その巓にはチウダレイクスが廢城の殘壁ありて、猶巍々として雲を凌げり。（譯者云。東「ゴトネス」族の王なり。西暦四百八十九年東羅馬帝の命を奉じて敵を破り、伊太利を領す。）

我心は景色に撲たれて夢みる如くなりぬ。忽ち海の我前に横はるに逢ひぬ。われは始て海を見つるなり、始て地中海を見つるなり。水は天に連りて一色の琉璃をなせり。島嶼の碁布したるは、空に漂ふ雲に似たり。地平線に近きところに、一條の烟立ちのぼれるは、ヱズヰオの山（モンテ、ヱズヰオ）なるべし。沖の方は平なること鏡の如きに、岸邊には青く透きとほりたる波寄せたり。その岩に觸るゝや、鼓の如き音立てゝぞ碎くる。われは覺えず歩を駐めたり。わが滿身の鮮血は蕩け散りて氣となり、この天この水と同化し去らんと欲す。われは小兒の如く啼きて、涙は兩頬に垂れたり。市に大なる白堊の屋ありて、波はその礎を打てり。下の一層は街に面したる大弓道をなして、その中には數輛の車を並べ立てたり。こはテルラチナの驛舍にして、羅馬拿破里の間第一と稱へらる。

鞭聲の反響に、近き山の岩壁を動かして、駟馬の車を驛舍の前に駐むるものあり。車座の背後には、兵器を執りたる從卒數人乘りたり。車中の客を見れば、痩せて色蒼き男の斑に染めたる寢衣を纏ひて、懶げに倚り坐せるなり。馭者は疾く下りて、又二たび三たび其鞭を鳴し、直ちに馬を續ぎ替へたり。さて護衛の士兵ありやと問へば、十五分間には揃ふべしと答へぬ。こはゆくての山路に、フラア・ヂヤヲロ、デ・チエザレの流を汲むものありとて、當時こゝを過ぐる旅客の雇ふものとぞ聞えし。（前者は伊太利大盜の名にして、同胞魔君の義なり。實の氏名をミケレ・ペツツアといふ。千七百九十九年夥伴を率ゐて拿破里王に屬し、佛兵と戰ひて功あり。官職を授けらる。後佛兵のために擒にせられて、千八百六年拿破里に斬首せらる。後者も亦名ある盜なり。）客は英吉利語に伊太利語まぜて、此國の人の心鈍く氣長き爲に、旅人の迷惑いかばかりぞと罵りしが、

やうやく思ひあきらめたりと覺しく、大なる紛※を結びて頭巾となし、兩の耳も隱るゝやうに被り、眼を閉ぢて默坐せり。馭者の語るを聞けば、この英人は伊太利に來てより十日あまりなるべし。北伊太利、中伊太利をばことごとく見果てつ。羅馬をば一日に看盡したり。此より拿破里にゆきて、エズヰオに登り、汽船にて馬耳塞に渡り、南佛蘭西を遊歷すべしとなり。士兵八騎はいかめしく物具して至れり。馭者は鞭を揮へり。馬も車も、忽ち黃なる岩壁にそひたる閭門を過ぎ去りぬ。

一故人

客舍の前にはたけ矮く逞ましげなる男ありて、車の去るを見送りたるが、手に持てる鞭を揮ひて鳴らし、あたりの人に向ひていふやう。護衛はいかに嚴めしくとも、兵器の數はいかに多くとも、我客人となりて往くことの安穩なるには若かじ。英吉利人ほど心忙しきものはなし。馬はいつも驅歩なり。氣まぐれなる人柄かなと嘲み笑へり。われこれに聲かけて、おん身の車には既に幾位の客人をか得給ひしと問へば、隅ごとに眞心一つなれば、四人は早く備りたり、されど二輪車の中は未一人のみなり。ナポリへと志し給はゞ、明後日は旭日のまだサンテルモ城（ナポリ府を横斷する丘陵あり、其巔の城を「カステル、サンテルモ」といふ）に刺さぬ間に送り屆け參らすべしと答ふ。爲換ありて現金なき我がためには、此勸めのいと嬉しく、談合は忽ちに纏まりぬ。（原註。伊太利の旅を知らぬ人のために註すべし。彼國の車主は例として前金を受けず、途中の旅籠一切をまかなひくれたる上、小使錢さへ客に交付し、安着の後決算するなり。）

車主は客人も零錢の御用あるべければとて、五「パオリ」の銀貨一枚撮み出して我に渡しつ。われ。さらば食卓の好き座席と臥床とを頼むなり。明日は滯なく車を出してよ。車主。勿論にこそ候へ。聖アントニオと我馬との思召だにくるはずば、正三時には出で立つべし。されど明日はむづかしき日にて候ふ。稅關の調べ二度、手形の改め三度あるべし。さらば、平かに憩はせ給へとて、車主は手を帽庇に加へ、輕く頷きて去りぬ。

誘はれたる部屋は海に向へり。折しも風輕く起りて、窓の下には長き形したる波の寄ては又返すを見る。こゝの景色はカムパニアの景色とは全く殊なるに、いかなれば吾胸中には、少時の住家の事、ドメニカの媼の事など浮び出でけん。世の中は廣けれど、眞ごゝろより我上を氣遣ひ呉るゝ人、彼媼の如きはあらじ。近きところに住みながら、屢往きて訪ふことだになかりしは、我と我身の怪まるゝばかりなり。彼フランチエスカの君の如きは、我を愛し給はざるにあらねど、凡そ恩をきるものと恩をきするものとの間には、未だ報恩の志を果さゞる限は、大なる溝渠ありて、縱ひ優しき情の蔓草の生ひまつはりて、これを掩ふことあらんも、能く全くこれを填むることなし。漸くにして、ベルナルドオとアヌンチヤタとの上に想ひ及ぶとき、われは頰の邊の沾ふを覺えき。涙にやありし、又窓の下なる石垣に中りし波の碎け散りて面に濺ぎたるにやありし。

翌日は夜のまだ明けぬに、車に乘りてテルラチナを立ちぬ。領分境に至りて、手形改めあるべしとて、人々車を下りぬ。此の時始めて同行の人を熟視したるに、齡三十あまりと覺しく、髮の色明く瞳子青き男我目にとまれり。何處にてか見たりけん、心におぼえある

顔なり。その詞を聞けば外國音なり。

手形は多く外國文もて認めたるに、境守る兵士は故里の語だによくは知らねば、檢閲は甚しく手間取りたり。瞳子青き男は帖一つ取出でゝ、あたりの景色を寫せり。げに街道に据ゑたる關の、上に二三の尖れる塔を戴きたる、その側なる天然の洞穴、遠景たるべき山腹の村落、皆好畫料とぞ思はるゝ。

わが背後よりさし覗きし時、畫工はわれを顧みて、あの大なる洞の中なる山羊の群のおもしろきを見給へと指ざし示せり。その詞未だ畢らざるに、洞の前に横へたる束藁は取り除けられたり。山羊は二頭づゝの列をなして洞より出で、山の上に登りゆけり。殿には一人の童子あり。尖りたる帽を紐もて結び、褐色の短き外套を纏ひ、足には汚れたる韈はきて、鞋を括り付けたり。童は洞の上なる巖頭に歩を停めて、我等の群を見下せり。

忽ち車主の一聲の因業を叫びて、我等に馳せ近づくを見き。手形の中、不明なるもの一枚ありとの事なり。われはその一枚の必ず我券なるべきを思ひて、滿面に紅を潮したり。畫工は券の惡しきにはあらず、吏のえ讀まぬなるべしと笑ひぬ。

我等は車主の後につきて、彼塔の一つに上りゆき戸を排して一堂に入りて見るに、卓上に紙を伸べ、四五人の匍匐ふ如くにその上に俯したるあり。この大官人中の大官人と覺しく、豪さうなる一人頭を擡げて、フレデリツクとは誰ぞと糺問せり。畫工進み出でゝ、御免なされよ、それは小生の名にて、伊太利にていふフエデリゴなりと答ふ。吏。然らばフレデリツク・シイズとはそこなるか。畫工御免なされよ。それは券の上の端に記されたる我國王の御名なるべし。吏。左樣か。（と謦咳一つして讀み上ぐるやう。）「フレデリツク、シイズ、パアル、ラ、グラアス、ド、ヂヨオ、ロア、ド、ダンマルク、デ、ワンダル、デ、ゴオト。」さてはそこは「ワンダル」なるか。「ワンダル」とは近ごろ聞かぬ野蠻人の名ならずや。畫工。いかにも野蠻人なれば、こたび開化せんために伊太利には來たるなり。その下なるが我名にて、矢張王の名と同じきフレデリツクなり、フエデリゴなり。（「ワンダル」は二千年前の日耳曼種の名なり。文に天祐に依りて※馬の王、「ワンダル」、「ゴオツ」諸族の王などゝ記するは、彼國の舊例なり。）書記の一人語を挿みて、英吉利人なりしよと云へば、外の一人冷笑ひて、君はいづれの國をも同じやうに視給ふか、券面にも北方より來しことを記せり、無論魯西亞領なりといふ。

フエデリゴ、※馬、この數語はわが懷しき記念を喚び起したり。璉馬の畫工フエデリゴとは、むかし我母の家に宿り居たる人なり、我を窟墓に伴ひし人なり。我がために畫かき、我に銀※を貽りし人なり。

關守る兵卒は手形に疑はしき廉なしと言渡しつ。この宣告の早かりしにはフエデリゴの私かに贈りし「パオロ」一枚の效驗もありしなるべし。塔を下るとき、われフエデリゴに名謁りしに、この人は想ふにたがはぬ舊相識にて、さては君は可哀き小アントニオなりしかと云ひて我手を握りたり。車に上るとき、人に請ひて席を換へ、われとフエデリゴとは膝を交へて坐し、再び手を握りて笑ひ興じたり。

われは相別れてより後の身の上をつゞまやかに物語りぬ。そはドメニカが家にありしこと、羅馬に返りて學校に入りしことなどにて、それより後をばすべて省きつるなり。我は詞を改めて、さてこれよ

りはナポリへ往かんとすと告げたり。

むかし畫工と最後に相見たるは、カムパニアの野にての事なりき。その時畫工は早晩一たび我を羅馬に迎へんと約したり。畫工は猶當時の言を記し居りて、我にその約を履まざりしを謝したり。君に別れて羅馬に歸りしに、故郷の音信ありて、直ちに北國へ旅立つことゝなりぬ。その後數年の間は、故里にありしが、伊太利の戀しさは始終忘れがたく、このたびはいよ〳〵思ひ定めて再遊の途に上りぬ。こゝはわが心の故郷なり。色彩あり、形相あるは、伊太利の山河のみなり。わが曾遊の地に來たる樂しさをば、君もおもひ遣り給へといふ。

彼問ひ我答ふる間に、路程の幾何をか過ぎけん。フオンヂイの税關の煩ひをも、我心には覺えざりき。途上一微物に遭ふごとに、友はその詩趣を發揮して我心を慰めたり。この憂き旅の道づれには、フエデリゴこそげに願ひても無かるべき人物なりしなれ。

友は往手を指ざしていふやう。かしこなるが我が懷かしき礒きイトリの小都會なり。汝は故里の我が居る町をいかなる處とかおもへる。街衢の地割の井然たるは、幾何學の圖を披きたる如く、軒は同じく出で、梯は同じく高く、家々の並びたるさまは、檢閲のために列をなしたる兵卒に殊ならず。清潔なることはいかにも清潔なり。されどかくては復た何の趣をかなさん。イトリに入りて灰色に汚れたる家々の壁を仰ぎ見よ。その窓には太だ高きあり、太だ低きあり、大なるあり、小なるあり。家によりては異樣に高き梯の巓に門口を開けるあり。その内を望めば、※車の前に坐せる老女あり。側なる石垣の上よりは黄に熟したる木の實の重げに生りたる枝さし出でたるべし。この參差錯落たる趣ありてこそ、好畫圖とはなるべきなれといふ。

車のイトリに入らんとするとき、同じく乘れる一客は、これフラア・ヂヤヲロの故郷なりと叫びぬ。この小都會は削立千尺の大岩石の上にあり。これを貫ける街道は僅に一車を行るべし。こゝ等の家は、概ね皆平家に窓を穿つことなく、その代りには戸口を大いにしたり。戸の内なる泣く小兒、笑ふ女子は、皆襤褸を身に纏ひて、旅人の過ぐるごとに、手を伸べ錢を索む。馬の足掻の早きときは、窓より首を出すべからず。石垣に觸るゝ虞あればなり。時ありて出窓の下を過ぐるときは、隧道の中を行くが如し。唯だ黒烟の戸窓より溢れて、壁に沿ひて上るを見るのみ。

閭門を出づるに及びて、友は手を拍ちつゝ、美なる都會かなと叫びぬ。車主は顧みて、否、盜人の巢なり、警察の累絶ゆる間なければとて、一たび市民の半を山のあなたに徙し、その跡へは餘所より移住せしめしことあり、されどそれさへ雜草の叢に穀物の種を蒔きしに似て、何の利益もあらで止みぬ、兎角は貧の上の事にて、貧人の根絶やし出來ねば、無駄なるべしと、諭し顔に物語りぬ。

げにも羅馬とナポリとの間ほど、劫掠に便よきところはあらざるべし。奥の知られぬ橄欖の蒼林、所々に開ける自然の洞窟より、昔がたりの一目の巨人が築きぬといふ長壁のなごりまで、いづれか身を隠し人を覗ふに宜しからざる。

友は蔦蘿の底に埋れたる一堆の石を指ざして、キケロの墓を見よといへり。是れ無慙なる刺客の劍の羅馬第一の辯士の舌を黙せしめし處なりき。（キケロの別墅はこゝを距ること遠からざるフオルミエにあり。該撒歿後、アントニウス一派の刺客キケロを刺さんと欲す。キケロ身を以て逃れ、將にブルツスの陣に投ぜんとして、遂

に刺客の及ぶところとなりぬ。時に西暦前四十三年十二月七日なり。）友は語をつぎて、車主はこたびもモラ、ヂ、ガエタ（即ち昔のフオルミエ）の別墅に車を停むるならん、今は酒店となりて、眺望好きがために人に知らるといひぬ。

旅の貴婦人

山嶽は秀で、草木は茂れり。車は月桂の街※を過ぎて客舎の門に抵りぬ。薦巾を肘にしたる房奴は客を迎へて、盆栽花卉もて飾れる闊き階の下に立てり。車を下る客の中に、稍肥えたる一夫人あるを見て進み近づき、扶けて下らしめ、ことさらに挨拶す。相識の客なればなるべし。夫人の顔色は太だ美し。その瞳子の漆の如きにて、拿破里うまれの人なるを知りぬ。

われ等の衆人と共に、門口に近き食堂に入る時、夫人は房奴に語りぬ。こたびの道づれは婢一人のみ。例の男仲間は一人だになし。かく膽太く羅馬拿破里の間を往來する女はあらぬならん、奈何などいへり。

夫人は食堂の長椅子に、はたと身を倚せ掛け、いたく倦じたる體にて、圓く肥えたる手もて頬を支へ、目を食單に注げり。「ブロデツトオ、チポレツタ、フアジヲロ」とか。わが汁を嫌ふをば、こゝにても早く知れるならん。否々、わが「アムボンポアン」の「カステロ、デ、ロヲオ」の如くならんは、堪へがたかるべし。「アニメルレ、ドオラテ」に「フイノツキイ」些計あらば足りなん。まことの晩餐をばサンタガタにてしたゝむべし。こゝは早く拿破里の風の吹くが快きなり。「ベルラ、ナポリ」と呼びつゝ、夫人は外套の紐を解き、苑に向へる廊の扉を開き、もろ手を擴げて呼吸したり。

（此詞の中には食單の品目に見えたる料理の稱多し。「ブロデツトオ」は卵の※を入れたる稀き肉羹汁、「チポレツタ」は葱、「フアジヲロ」は豆、「カステロ、デ、ロヲオ」は卵もて製したる菓子、「アニメルレ、ドオラテ」は犢の臟腑の料理、「フイノツキイ」は香料なり。「アムボンポアン」は肥胖、「ベルラ、ナポリ」は美しき拿破里といふ程の事なり。）

われは友を顧みて、拿破里は最早こゝより見ゆるかと問ひしに、友は笑ひて、まだ見えず、されどヘスペリアは見ゆるなり、アルミダの奇しき園は見ゆるなりと答へき。（譯者云。ヘスペリアは希臘語、晩國、西國の義なり。或は伊太利を斥して言ひ、或は西班牙を斥して言ふ。されどこゝには、希臘神話にヘスペリアといふ女神ありて、西方の林檎園を守れるを謂ふならん。アルミダはタツソオが詩中の妖艶なる王女なり。基督教徒を惑はし、丈夫リナルドオをアンチオヒアの園に誘ひて、酒色に溺れしむ。フエデリゴが詞の意は、山水を問ふこと勿れ、彼美人を見よとなり。）

友と廊に出でゝ望むに、その景色の好きこと、想像の能く及ぶ所にあらず。脚の下には柑子、檸檬などの果樹の林あり。黄金いろしたる實の重きがために、枝は殆ど地に低れんとす。丈高き針葉樹の園を限りたるさまは、北伊太利の柳と相似たり。この木立の極めて黒きは、これに接したる末遙なる海原の極めて明けければなり。園の一邊の石垣の方を見れば、寄せ來る波は古の神祠温泉の址を打てり。白帆懸けたる大舟小舟は、徐かに高き家の軒を並べたるガエタの灣に進み入る。（原註。ガエタはカエタより出でたる名なりといふ。是れヰルギリウスが詩の主人公エネエアスが乳媼の名にして、

此港を以て其埋骨の地となせるなり。）灣の背後に一山の聳ゆるありて、その嶺には古壘壁を見る。友は左の方を指してエズヰオの烟を見よといふ。眸を轉じて望めば、火山の輪廓は一抹の輕雲の如く、美しき青海原の上に現れたり。われは小兒の情もて此景物を迎へ、心の裡に名狀すべからざる喜を覺えき。

われ等は相携へて果園に下りぬ。われは枝上の果に接吻して、又地に墜ちたるを拾ひ、毬の如くに玩びたり。友の云ふやう。げに伊太利はめでたき國なる哉。北方の故郷に在りし間、常に我懷に往來せしものはこの景なり、この情なり。嘗て夢裡に呑みつる霞は、今うつゝに吸ふ霞なり。故郷の牧を望みては、此橄欖の林を思ひ、故郷の林檎を見ては、此柑子を思ひき。されど北海の緑なる波は、終に地中海の水の藍碧なるに似ず、北國の低き空は、終に伊太利の天の光彩あるに似ざりき。汝はわが伊太利を戀ひし情のいかに切なりしかを知るか。一たび淨土を去りたるものゝ不幸は、嘗て淨土を見ざりしものゝ不幸より甚し。我故郷なる※馬は美ならざるに非ず。山毛欅の林の鬱として空を限るあり。東海の水の闊くして天に連るあり。されど是れ皆猶人界の美のみ。伊太利は天國なり、淨土なり。かへす〳〵〝も嬉しきは再び斯土に來しことぞと云ふ。友はわれと同じく枝なる果に接吻し、又目に喜の涙を浮べて、我項を抱き我額に接吻せり。

火は火を呼び、情は情を呼ぶ。われは最早此舊相識に對して、胸臆を開き縅※を破ることを禁じ得ざりき。われは我が羅馬に在りての遭遇を語りて、高くアヌンチヤタの名を唱へたり。人を傷けて亡命せしこと、身を賊寨に托せしことより、怪しき媼の我を救ひしことまで、一も忌み避くることなかりき。友の手は牢く我手を握りて、友の眼光は深く我眼底を照せり。

忽ち啜泣の聲の背後に起るあり。背後はキケロの温泉の入口にて、月桂朱欒の枝繁りあひたれば、われは始より人あるべしとは思ひ掛けざりしなり。枝推し分けて見れば、彼温泉の入口なる石に踞して泣く女あり。そは前の拿破里の夫人なりき。

夫人は涙の顔を擧げて我に謝して云ふやう。我が無禮なるを怨し給へ。君等の歩み寄り給ひしときは、われ早くこゝに坐して涼を貪り居たり。御物語の祕事と覺しきには、後に心付きしが、せんすべなかりしなり。されど哀れ深き御物語を聞きつとこそ思ひまゐらすれ、人に告ぐべきにはあらねば、惡しく思ひ取り給ふなといふ。われは間の惡さを忍びて夫人に禮を施し、友と共に踵を旋したり。友は我を慰めて云ふやう。彼夫人の期せずして我等と物言ひしは、或は他日我等に利あらんも知るべからず。斯く言へば土耳格人めきたれど、われは運命論者なり。且汝の語りし所は國家の祕密などにはあらず。誰が心中の帳簿にも、此種の暗黒文字數葉なきことはあらざるべし。彼夫人の汝が言を聞きて泣きしは、或は他人の語中より自家の閲歷を聽き出し、他人の杯酒もて自家の磊塊に澆ぎしにはあらずや。涙は己れのために出で易く、人のために出で難きこと、なべての情なればといひき。

我等は再び車に乘り途に上りぬ。四邊の草木はいよ〳〵茂れり。車に近き庭園、田圃の境には、多く蘆薈を栽ゑたるが、その高さ人の頭を凌げり。處々の垂楊の枝は低れて地に曳かんとせり。

日の夕にガリリヤノの河を渡りぬ。古のミンツルネエ（羅馬の殖民地）は此岸にありしなり。我好古の眼もて視るときは、是れ猶古のリリス河にして、其水は蘆荻叢間の黄濁流をなし、敗將マリウス

が殘忍なるズルラに追躡せられて身を此岸に潛めしも、昨の猶くぞおもはるゝ。（紀元前八十八年ズルラ政柄を得つる時、マリウスこれと兵馬の權を爭ふ。所謂第一内訌是なり。マリウス敗れて此河岸に潛み、萬死を出で一生を得て、難を亞弗利加に避けしが、その翌年土を捲きて重ねて來るや、羅馬府を陷いれ、兵を縱ちて殺戮せしむること五日間なりき。）此よりサンタガタまでは、まだ若干の路程あるに、闇は漸く我等の車を罩まんとす。馭者は畜生を連呼して、鞭策亂下せり。拿破里の夫人は心もとながりて、頻りに車窓を覗き、賊の來りて、行李を括り付けたる索を截らんを恐るゝさまなり。われ等は纔に前面に火光あるを認めて、互に相慶したり。須臾にして車はサンタガタに抵りぬ。

晩餐の間、夫人は何事をか思ふさまにて、いともの靜なりき。さるをその目の斷えずわが方に注げるをば、われ心に訝りぬ。翌朝車の出づべき期に迫りて、われは一盞の珈琲を喫せんために、食堂に下りしに、堂には夫人只一人在りき。優しく我を迎へて詞を掛け、われを惡しく思ひ給ふな、總べて思ひ設けぬ事なりしなればと云ふ。われは夫人を慰めて、否、あしき人に聞かれたりとは思ひ候はず、言はであるべき事をば言ひ給ふべき方ならねばと答へき。夫人。さなり。おん身はまだ我をよくも識り給はず。或は我を識り給ふ期あらんも知るべからず。おん身は知らぬ大都會に往き給ふといへば、かしこにて一度我家におとづれ、我夫と相識になり給はんかた宜しからん。交際は無くて協はぬものにて、又一たび誤りてあらぬ人と相結ぶときは、悔あるべきことなりといふ。われは深くその好意を謝して、善人は隨處にありといふ諺の虛しからぬを喜びぬ。夫人は我側に寄りて、兼ねても聞き給ふならん、拿破里は少き人には危き地なりなど云ひ、猶何事をか告げんとせしに、フエデリゴも房より出でしかば、物語はこゝに絶えぬ。

我等は又車に乘りたり。今は車中の客も漸く互に打解けて、はかなき世語などしつゝ拿破里の市に近づきぬ。偶 驢に騎りたる一群の過ぐるあり。我友はこれを見て、いたくめでたがりたり。紅の上衣を頂より被りて、一人の穉兒には乳房を啣ませ、一人の稍 年たけたる子をば、腰の邊なる籠の中に睡らせたる女あり。又一家族を擧げて一驢の脊に托したりと覺しく、眞中には男騎りて、背後なる妻は臂と頭とを夫の肩に倚せて眠り、子は父の膝の間に介まれて策を手まさぐり居たるあり。いづれもピニエルリが風俗畫の拔け出でたるかと怪まるゝばかりなり。

空氣は鼠色にて雨少し降れり。エズヰオの山もカプリの島も見えず。葡萄の纏ひ付きたる高き果樹と白楊との間には、麥の露けく緑なるあり。夫人我等を顧みて、見給へ、此野はさながらに饗應のむしろなり、麪包あり、葡萄酒あり、果あり、最早わが樂しき市と美しき海との見ゆるに程あらじといひぬ。

夕に拿破里に着きぬ。トレドの街の壯觀は我前に横はりぬ。（原註。羅馬及ミラノにては大街をコルソオと曰ひ、パレルモにてはカツサロと曰ひ、拿破里にてはトレドと曰ふ。）硝子燈と彩りたる燈籠とを點じたる店相並びて、卓には柑子無花果など堆く積み上げたり。道の傍には又魚蝋を焚き列ねて、見渡す限、火の海かとあやまたる。兩邊の高き家には、窓ごとに床張り出したるが、男女の群のその上に立ち現れたるさまは、こゝは今も謝肉祭の最中にやとおもはるゝ程なり。馬車あまた火山の坑より熔け出でし石を敷きたる街を馳せ交ひて、間　馬のその石面の滑なるがために躓くを見る。

小なる雙輪車あり。五六人これに乘りて、背後には襤褸着たる小兒をさへ載せ、又この重荷の小づけには、網床めくものを結び付けたる中に半ば裸なる 賤夫 のいと心安げにうまいしたるあり。挽くものは唯だ一馬なるが、その足は騈歩なり。一軒の角屋敷の前には、焚火して、泗袴に扣鈕一つ掛けし中單着たる男二人、對ひ居て骨牌を弄べり。風琴、「オルガノ」の響喧しく、女子のこれに和して歌ふあり。兵士、希臘人、土耳格人、あらゆる外國人の打ち雜りて、且叫び且走る、その熱鬧雜沓の狀、げに南國中の南國は是なるべし。この嬉笑怒罵の天地に比ぶれば、羅馬は猶幽谷のみ、墓田のみ。夫人は手を拍ち鳴して、拿破里々々々と呼べり。

車はラルゴ、デル、カステルロに曲り入りぬ。（原註。拿破里大街の一にして其末は海岸に達す。）同じ※溢、同じ喧囂は我等を迎へたり。劇場あり。軒燈籠懸け列ねて、彩色せる繪看板を掲げたり。輕技の家あり。その群の一家族高き棚の上に立ちて客を招けり。婦は叫び、夫は喇叭吹き、子は背後より長き鞭を揮ひて爺嬢を亂打し、その脚下には小き馬の後脚にて立ちて、前に開ける簿册を讀む眞似したるあり。一人あり。水夫の環坐せる中央に立ちて、兩臂を振りて歌へり。是れ即興詩人なり。一翁あり。卷を開いて高く誦すれば、聽衆手を拍ちて賞讃す。是れ「オランドオ、フリオゾ」を讀めるなり。（譯者云。わが太平記よみの類なるべし。讀む所は「アリオストオ」の詩なり。）

夫人は忽ちヱズヒオと呼びぬ。げに〳〵廣こうぢの盡くる處に、彼の世界に名高き火山の半空に聳ゆるを見る。熔けたる巖の山腹を流れ下るさま、血の創より出づる如し。嶺の上に片雲あり。その火光を受けたる半面は殷紅なり。されど此偉觀の我眼に入りしは一瞬間なりき。車は廣こうぢを横ぎりて、旅店「カアザ、テデスカ」の前に駐まりぬ。店の隣には、小き傀儡場あり。一人ありてその前に立ち、道化役の偶人を踊らせ、且泣き且笑ひ、又可笑しき演説をなさしめたり。衆人は環り視て笑へり。向ひの家の石級には一僧あり。船頭らしき、肩幅闊く逞しげなる男に、基督の像を刻み附けたる十字架を捧げさせて説教せり。此方には聽衆いと少し。

僧は目を瞋らして傀儡師の方を見やりて云ふやう。斯くても精進日なるか。天主に仕ふる日なるか。反省して苦行する日なるか。汝達がためには、春の初より冬の終迄、日として謝肉祭ならぬはなし。斯く跳り狂ひ笑み戲れて、一歩一歩地獄に進み近づくなり。疾く奈落の底に往きて狂ひ戲れよといふ。僧の聲は漸く大に、我耳はこの拿破里訛を聞くこと、一篇の詩を聞く如くなりき。されど僧の叫ぶこと愈 大なれば、偶人の跳ること愈 忙しく、群衆は舊に依りて傀儡師に面し談義僧に背けり。僧は最早え堪へずして、石級を飛び下りさまに連なる男の手より聖像を奪ひ取り、そを高くかざして衆人の間に分け入りたり。見よ〳〵。これがまことの傀儡なり。汝達に眼あるは、これを視んためなり。耳あるはこれの教を聽かんためなり。「キユリエ、エレイソン」（主よ、慈を垂れよの義にして、歌頌の首句）とぞ唱へける。聖像は流石人に敬を起さしめて、四圍の群衆忽ち跪けば、傀儡師も亦壇を下りて跪きぬ。

われは車の側に立ちてこれを見つゝ、心に神恩の深きと人心のやさしきとを思へり。フエデリゴは夫人のために辻の馬車を雇へり。夫人は友の手を握りて謝すと見えしが、その軟き兩臂は俄に我頸を卷きて、我唇の上には燃ゆる如き接吻を覺えき。

慰籍

友の眠に就きし後、われは猶※久しく出窓に坐して、外の方を眺め居たり。こゝよりは啻に廣こうぢの隈々迄見ゆるのみならず、かのエズヰオの山さへ眞向に見えたり。夢の裡に移り來しにはあらずやと疑はるゝ此境の景色は、われをして容易く臥床に上ることを得ざらしめしなり。目の下なる街は漸く靜になりて、燈火の數も亦減ぜり。最早眞夜中過ぎたるなるべし。

エズヰオの山の姿は譬ば焔もて畫きたる松柏の大木の如し。直立せる火柱はその幹、火光を反射せる殷紅なる雲の一群はその木の巔、谷々を流れ下る熔巖はその闊く張りたる根とやいふべき。わがこれに對する情をば、いかなる詞もて寫し出すべきか、われは神と面相向へり。神の聲は彼火坑より發して直ちに我耳に響けり。神の威力、智慧、矜恤、愛憐は我胸に徹したり。その迅雷風烈を放ち出す手は、また一隻の雀をだに故なくして地に墮すことなきなり。わが久しき間の經歷は我前に現じて一瞬時の事蹟に同じく、神の扶掖嚮導の絲は分明に辨識せられたり。われは敢て自家を以て否運の兒となさじ。神の禍を轉じて福となし給へる迹は掩ふ可からざるものあればなり。初めわれ不測の禍のために母上を喪ひまゐらせき。されど故とならぬ其罪を贖はんとてこそ、車上の貴人は我に字を識り書を讀むことを教へしめ給ひしなれ。マリウチアとペツポとのわが身を爭ひて、わが全く寄邊なき身の上となりしは、寔に限なき不幸なりき。されど斯くてわれカムパニアの曠野に日を送ることなくば、かゝる貴人の爭でか我を認め得給はん。此の如く因果の鐺を手繰りもて行くに、われは神の最大の矜恤、最大の愛憐を消受せしこと疑ふべからず。唯だ凡慮に測り知られぬは我とアヌンチヤタとの上なり。ベルナルドオが姫を得んと欲せしは卑陋なる色慾にして、縱ひ渠一たびその願の成らざるを憂ふとも、渠は月日を費すことなくして、その失望を慰めその遺憾を忘れしならん。わが情はいと高くいと深くして、われ若し姫を獲たらんには、此世の中には最早何の欲望をも殘さゞりしならん。さるを姫は我を棄てゝ渠を取りたり。我黄金なす夢は一旦にして塵芥となり畢ぬ。こはそもいかなる故ぞや。此煩惱の間、我は忽ち「キタルラ」の音の街上に起るを聞く。見下せば肩に輕く一領の外套を纏ひて、手に樂器を把り、戀の歌の一曲を試みんとする男あり。未だ數彈ならざるに、對ひの家の扉は響なくして開き、男の姿は戸に隱れぬ。想ふに此人を待つものは、優しき接吻と囘抱となるべし。われは星斗のきらめける空を仰ぎ、又熔巖の影處々に紅を印したる青海原を見遣りたり。好し々々、我は我戀人を獲たり。我戀人は自然なり。自然よ。汝はわがためにその霽やかなる天を打明けて何の隱すところもなし。汝はそよ吹く風の優しきを送りて、我額我唇に觸るゝことを嫌はず。我は汝が美しさを歌はん、汝が我心を動す所以を歌はん。言ふこと莫れ、汝が心の痍は尚血を瀝らすと。針に貫かれたる蝶の猶その五彩の翼を揮ふを見ずや。落ちたぎつ瀧の水の沫と散りて猶麗しきを見ずや。これはこれ詩人の使命なり。この世は束の間の夢なり。あの世に到らんには、アヌンチヤタも我も淨き魂にて、淨き魂は必ず相愛し相憐み、手に手を取りて神のみまへに飛び行かむ。

氣力と希望とは再び我胸に入り來れり。わが此より即興詩人として世に立たんは、なか〳〵に樂しかるべき事ぞと思ひ返されぬ。只だ猶心に懸るは、恩人なる貴人の思ひ給はん程奈何なるべきといふ

事なり。彼人はわれ舊に依りて羅馬にありて書を讀めりとおもひ給ふならん。彼人のわが都を逃れしさまと我新境界とを聞き知り給はんには、果して何とか言はるべき。われは今宵を過ごさで書を裁して、人々に我未來の事を認め許されんことを請ふことゝなしたり。我書には、子の母に言はんが如く、些の繕ふことなく有の儘に、我とアヌンチヤタとの中を語り、我が一たび絶望の境に陷りて後、今又慰藉を自然と藝術とに求むるに至れる顛末を敍して、さて人々の憐を垂れてわが即興詩人となることを許されんを願ひぬ。われはその答を得ん日までは、敢て公衆のために歌はざるべしと誓へり。これを書く時、涙は紙上に墜ちて斑をなし、われは心の中に答書の至らんこと一月の間にあらんことを祈るのみなりき。書き畢りて、われは久し振にて心安く眠に就きぬ。

翌日フエデリゴはとある横町なる賃房に移り、己れは猶さきの獨逸宿屋なる、珍らしき山と海との眺ある一間に留まりぬ。われは聚珍館（ムゼオ、ボルボニイコ）、劇場、公苑など尋ねめぐりて、未だ三日ならぬに、早く此都會の風俗のおほかたを知ることを得たり。

考古學士の家

或日房奴は我に一封の書をわたしたり。披きて讀めば、博士マレツチイと夫人サンタとの案内状にして、フエデリゴ君をも伴ひて來ませとあり。初めはわれこは屈先を誤りたる書ならずやと疑ひぬ。宿屋の人に博士はいかなる人ぞと問ふに、いと名高き學者にて、考古學とやらんに長け給ふと聞ゆ、その夫人近きころ羅馬より歸り給ひしなれば、客人は途上にて相識になり給ひしにはあらずやといふ。嗚呼、われこれを獲たり。これこそ前の拿破里の貴婦人なるらめ。

夕暮にフエデリゴを誘ひて往きぬ。いと廣き間に客あまた集へり。滑なる大理石の床は、蝋燭の光を反射し、鐵の格子を繞らしたる火鉢（スカルヂノ）は、程好き煖さを一間の内に頒てり。

サンタと名告れる夫人は、嬉しげに我等二人を迎へて、一坐の客達に引合せ、又我等に、毫しも心をおかで家に在る如く振舞はんことを勸めたり。夫人は今宵空色の衣を着たるが、いと善く似合ひたり。我等は若し此人をして少し痩せしめば、第一流の美人たるべきものをとさゝやきたり。

我等は夫人に促されて坐せり。此時一少女ありて「ピアノ」に對ひ、短歌を唱ひ出せり。その曲は偶※アヌンチヤタがヂドに扮して唱ひしものと同じけれども、その力を用ゐる多少と人を動す深淺とは、固より日を同うして語るべきならず。われは只だ衆のなすところに倣ひて、共に拍手したるのみ。少女は又輕快なる舞の曲を彈じ出せり。男客の三人四人は、急に傍なる婦人を誘ひて舞ひはじめたり。われは避けて、とある窓龕に躲れたり。

初めわれは席に入りしとき、痩せたる小男の眼鏡懸けたるが、忙しげに此間に出入するを見たり。この男わが窓龕にかくれしを見て、我前に立ち留まり、慇懃なる禮をなせり。われはその何人なるを知らねども、姑く共に語らばやとおもひて、ヱズヰオの山の噴火の事を說き、その熔巖の流れ下る狀など、外より來るものゝ目を驚かす由を云ひたり。小男の答ふるやう。否。今の噴火の景などは言ふに足らず。プリニウスの書に見えたる九十六年の破裂は奈何なりけん。灰はコンスタンチノポリスにさへ降りしなり。近き年の破裂の時も、

我等拿破里人は傘さして行きしが、均しく灰降るといふも、拿破里に降るとコンスタンチノポリスに降るとは殊なり。何事によらず、今の世は遠く古の希臘羅馬の世に及ばずと知り給へ。澆季の世は古に復さんよしもなしと、かこち顔なり。われ芝居話に轉ずれば、彼は遠くテスピスの車に遡りて、（世に傳ふ、テスピスは前五四〇年頃の雅典人にして、舞臺を車上にしつらひ、始て劇を演じたりと）希臘俳優の被りぬといふ、悲壯劇の假面と滑稽劇との假面とを列擧せり。われ又近頃禁軍の檢閲ありしを聞きつと噂すれば、彼は希臘の兵制を論じて、マケドニア歩兵の方陣の操練を細叙すること目撃の状の如くなり。既にして彼は我に考古學又は美術史を研究し給ふやと問ひぬ。われ答へて、己れは専門の學をなさずと雖、凡そ宇宙の事は一として我研究の資料ならぬはなし、己れは詩人たらんと心掛くるなりと云へば、彼手を拍ちて喜び、ホラチウスが句を朗誦し、我琴を以てヨヰスの神の龜甲琴に比したり。

　忽ちサンタ我前に來て云ふやう。さては終に生捕られ給ひしよ。おん身等の物語は、定めてセソストリス時代の事なるべし。（希臘傳説に見えたる埃及王の名なり。前十四五紀の間の名ある王二人の上を混じて説けり。）客人には現世の用事あり。かしこに少き貴婦人の敵手なくて寂しげなるあり。願はくは誘ひ出して舞の群に入り給へとなり。われ逡巡して、否われは舞ふこと能はず、曾て舞ひしことなしと答ふれば、サンタ重ねて、家のあるじたる我身おん身に請はゞ奈何といふ。われ。まことに濟まぬ事ながら、われ若し強ひて踊り出でば、おのれ一人跌き轉ぶのみならず、敵手の貴婦人をさへ拉き倒すならん。夫人打ち笑ひて、そは好き見ものなるべしといひつゝ、フエデリゴの方に進み近づき、直ちに伴ひて舞の群に入りぬ。小男は我を顧みて、氣輕なる女なり、されど貌は醜からず、さは思ひ給はずやといふに、我はまことに仰の如く、めでたき姿なりと讃め稱へき。此よりいかなる話の運なりしか知らねど、我等二人は忽ち又古のエトルリヤ人（昔羅馬の北に住みし民）の遺しゝ陶器の事を論ぜざるべからざることゝなりぬ。彼は此地の聚珍館内なる瓶又は壺の數々を擧げて、これに畫きし畫工に説き及ぼし、次いでその畫工の技巧を辯明したり。此等の陶畫は、皆濕に乘じて筆を用ゐるものなれば、一點一畫と雖、漫然これを下すべきにあらずなど云へり。彼は猶其詳なるを教へんために、不日我を聚珍館に連れ往かんと約せり。

　夫人は再び我前に來て、さては論文はまだ結局とならぬにや、以下次號とし給へと呼び、急に我手を把りて拉き去りつゝ、聲を低うして云ふやう。おん身は餘りに人好きにはあらずや。我夫はいつも此の如くなれば、うるさき時は忍びて聽き給ふには及ばず。おん身の兎角沈み勝になり給ふは惡しき事なり。人々と共に樂み給へ。いざ我身おん相手となるべければ、何にても語り聞せ給へ。こゝに來給ひてより、何をか見給ひし、何をか聞き給ひし、何をか最もめでたしと思ひ給ひしといふ。われ。兼ておん身の告げ給ひしに違はず、拿破里はいとめでたき地なり。今日の午過ぎなりき。獨り歩みてポジリツポの巖窟に往きしに、葡萄の林の繁れる間に古寺の址あり。そこに貧しき人住めり。可哀げなる子供あまた連れたる母はなほ美しき女なりき。我は女の注ぎくれたる葡萄酒を飲みて、暫くそこに憩ひしが、その情その景、さながらに詩の如くなりきと語りぬ。夫人は示指を竪てゝ、笑みつゝ我顔を打守り、油斷のならぬ事かな、さるいちはやき風流をし給ふにこそ、否々、面をあかめ給ふことか

は、君の齢にては、精進日の説法聞きて心を安じ給ふべきにはあらぬものをとさゝやきぬ。

夫婦の上にて、此夕わが知ることを得たるところは、いと少かりき。されどサンタが性の拿破里婦人の特色と覺しく、語を出すに輕快にして直截なる、人に接するに自然らしく情ありげなるは、深く我心に銘せり。その夫は博學の人と見えたり。共に聚珍館に遊ばんには、これに增す人あるべからず。

われは次第に足近く彼家に出入するやうになりぬ。サンタの待遇は漸く厚く親くなりて、われは早くも心の底を打明けて此婦人に語りぬ。後に思へば、われは世馴れぬ節多く、男女の間の事などに昧きは、赤子に異ならぬ程なれば、サンタの如き女に近づくことの、多少の危險あるべきを知るに由なかりしなり。サンタが夫は卑しき饒舌家ならずして、まことに學殖ある人なりしこと、此往來の間に明になりぬ。

或日われはサンタに語るに、アヌンチヤタと別れし時の事を以てせり。サンタは我を慰めて、ベルナルドオの心ざまを難じ、又アヌンチヤタの性をさへ貶め言へり。そのベルナルドオを難ずる詞は、多少我創痍に灌ぐ藥油となりたれども、アヌンチヤタを貶むる詞は、わが容易く首肯し難きところなりき。

サンタのいふやう。彼女優をばわれも屢　見き。舞臺に上る身としては、丈餘りに低く、肌餘りに痩せたりき。拿破里にありても、若き人々の崇拜尋常ならざりしが、そは聲の好かりしためなり。アヌンチヤタが聲は人を空想界に誘ひ行く力ありき。而してその小く痩せたる身も亦空想界に屬するものゝ如くなりしなり。おん身若し我言を非へりとし給はゞ、そは猶肉身なくて此世に在らんを好しとし給ふごとくならん。假令われ男に生るとも、抱かば折るべき女には懸想せざるべしといへり。われは覺えず失笑せり。想ふにサンタは話の理に墜つるを嫌ふ性なれば、始より我を失笑せしめんとて此説をなしゝならんか。奈何といふにサンタもアヌンチヤタが品性の高尚なると才藝の人に優れたるとをば一々認むといひたればなり。

或時われは詩稿を懷にして往きぬ。こは拿破里に來てよりの近業にて、獄中のタツソオ、托鉢僧など題せる短篇の外、無題一首ありき。われは愛情の犧牲なり。わが曾て敬し曾て愛しつる影像は、皆碎けて塵となり、わが寄邊なき靈魂は其間に漂へり。われはサンタに向ひ居て詩稿を讀み始めしに、未だ一篇を終らずして、情迫り心激し、われは嗚咽して聲を續ぐことを得ざりき。サンタは我手を握りて、我と共に泣きぬ。わがサンタに親むことは、此より舊に倍したり。

サンタの家は我第二の故郷となりぬ。われは日ごとにサンタと相見て、日ごとに又その相見ることの晩きを恨みつ。この婦人の家にあるさまを見るに、其戲謔も愛すべく其氣儘も愛すべし。これをアヌンチヤタの一種近づくべからず褻るべからざる所ありしに比ぶれば、固より及ぶべくもあらねど、かの捉へ難き過去の幻影には、最早この身近き現在の形相を斥くる力なかりしなり。

或時我は又サンタと對坐して語れり。夫人。近ごろポジリツポの眺好き家と顏好き女とを尋ね給ひしか。われ。否、前後二たび往きしのみ。夫人。女は最早餘程おん身になじみしならん。子供は案内者に雇はれ、主人は漁に出でゝ在らざりしにはあらずや。用心し給へ、拿破里の海の底は、やがて地獄なりといへば。われ。否、我心を引くものは唯景色のみなり。かの賤女いかに美しとて、決して我

を誘ひ寄すること能はざるべし。夫人。吾友よ、われは明におん身の心を知れり。曩にはその心に初戀の充※したるため、些の餘地だになかりき。われは君が初戀を陋しとせざるべし。されどその敵手なる女の、君の直きが如く直からざりしは、爭ふべからざる事實なるべし。否、我話の腰を折り給ふな。さてその初戀の眞の價は兎まれ、角まれ、その君が心に充したるもの、今や無慙にも引き放ちて棄てられ、その跡は空虛になりぬ。この空虛は何物もて填むべきか。君は昔こそ書を讀み空想に耽りて自ら足れりとし給ひけめ、彼女優の一たび君を現實世界に引き出したる上は、君も亦我等と同じく血あり肉ある人となり給ひて、その血その肉はその本來の權利を求めでは止まざるべし。少壯幾時かある。男兒何の敢てすべからざる事かあらん。されば我に物隱さんとし給ふには及ばざるにあらずや。われ。おん説の前半は、げにさもあるべく思はれて、空虛の事などは首肯しても好し。されどそを填めん策をば未だ講ぜしことあらず。夫人。さらば君は猶我説を問はんとし給ふか。君の既に一たび空想を出でながら、猶再びこれに還りて、一個の空想人物とならんとし給ふが怪しきなり。アヌンチヤタは君が理想の女ならずや。高尚なる人物ならずや。それすら空想人物のアントニオの君を棄てゝ、人柄下りたるベルナルドオを取りしなり。アヌンチヤタも男欲しかりしなり。斯く言ひ掛けて、サンタは愛らしき聲して笑ひ、おん身の餘りに罪なき性なるため、我に女の口より言ひ難き事さへ言はしめ給ふこそ憎けれとて、指もて我頬を彈きたり。

旅店に還りて獨り思ふに、サンタの我を評する言は、昔ベルナルドオの我を評せし言と同じ。此頃又フエデリゴの話を聞きしに、その羅馬にありし日の經歷には、我の夢にだに知らざるやうなることもありて、賤しきマリウチアさへその事に與れりといふ。世の人はわが厭ひおそるゝところのものを悦び樂むにや。アヌンチヤタの我を棄てゝベルナルドオを取りしなどは、現にもこれを證して餘あるが如くなり。果して然らばアヌンチヤタは我感情を愛して我意志を嫌ひしにやあらん。あらず、わが意志の闕乏を嫌ひしにやあらん、いと覺束なく心許なき事にこそ。

絶交書

拿破里に來てより既に一月を經ぬ。さるにアヌンチヤタとベルナルドオとの上に就きては、何の聞くところもあらず。或夕一封の書は到りぬ。何人のいかなる便するにかと、打ち返してこれを見るに、印はボルゲエゼ家の印にして、筆は主公の筆なり。われは心に聖母を祈りつゝ、開いてこれを讀みたり。其文に曰く。

御書狀拜讀仕候。素と拙者の貴君の御世話可致と決心候節、貴君の爲めに謀候は、當地に於いて正當なる教育を受けられ、社會に益ある一人物となられ候樣にと希望候儀に有之候。然處貴君の行跡全く此希望と相反候は、今更是非なき次第と諦念候より外無之候。當初御萱堂不幸之砌、存寄らざる儀とは申ながら、拙者の身上共禍因と連係候故、報謝の一端にもと志候御世話も、此の如く相終候上は、最早債を償ひ勞を折候と同じく、何の恩讐も無之、一切事濟と看做候て宜かるべしと存候。然上は即興詩人と爲り藝人と爲りて公衆の前に出でられ候とも、拙者に於いて故障等可申には無之候。唯此際申入置度は、後日貴君の拙者一家に於ける從來の關係等、一切口外下さる間敷儀に御座候。生涯當

家の恩義忘却致さずとは先年度々申聞けられ候處に有之候へども、拙者に報ずる所以の最大事件たる學問修行をば塵芥の如く棄てられ候て、今は其最小事件即ち拙者を呼ぶに恩人を以てせられ候儀さへ、拙者の心に屑とせざるものと成果候段、歎息の外無之候。草々不宣。

われは血の胸に迫るを覺えて、兩手は力なく膝の上に垂れたり。泣かば心鎭まるべけれども涙出でず、祈らば力着くべけれども語出でず。我は悶絶せる人の如く、頭を卓上に支へて坐すること良※久しかりしが、其間何の思ふところもあらざりき。われは痛苦をだに明には覺えざりしなり。只だ心の底には言ふべからざる寂しさを感じて、今は聖母さへ世の人と同じく我を見放し給ふかと疑ひおもへり。

フエデリゴはこゝに來ぬ。進みて我手を握りて云ふやう。病めるか、アントニオ。獨り物思ふは惡しき事なり。汝はアヌンチヤタを失ひて不幸なりといへど、我は汝のアヌンチヤタを得て幸なるべかりしや否やを知らず。我經歷に徵するに、大抵わが遭逢せし所は、後に顧みるにわが最も宜しき所なりし也。然れども運命の人を引き頗る手荒きものにて、人はこれを痛苦とし不幸とするなりといふ。我は詞なくて、卓上の書狀を指し、友のこれを讀む間、これに背きて涙を拂ひつ。友は我肩を撫でゝ、泣くが好し、泣かば心落着くべしと云へり。暫しありて友は我に、此書狀を見たる後、既に思ひ定むる所ありやと問ひたり。此時われは忽ち思ひ付くよしありて、友に向ひて語り出でぬ。聞け吾友、われは僧とならんとす。我は幼きより聖母に仕へたるが、今思へば淺からぬ緣ありしならん。聖母の慈悲は廣大なれば、縱ひ一たび我を棄て給ふとも、いかでか我懺悔を聞き給はざることあらん。われは空想人物にて、汝等と同じからず。世間に立ち交るとも、何の益かあるべき。若かじ、今の機到り緣熟せるを幸として、平和を寺院の中に求めんには。友。おろかなり、アントニオ。否運に遭ひて志を屈せずしてこそ人たる甲斐はあれ。汝の氣力あり技倆あるを、傲慢なる羅馬の貴人に見せよ、世間に見せよ。詩人は賤しき業にあらず。汝は才あり學あればこそ、詩人とならんとは思ひ立ちしなれ。汝が前途は多望なり。されどわれおもふに、わが斯く辭を費すはいたづら事にはあらずや。汝が僧とならんといふは、けふの黃昏の暗黑なる思案にて、あすは旭日の光に觸れて泡沫のごとく消え去るべきものにはあらずや。兎まれ角まれ、汝が病をばわが手ぬかりにて長じたりと覺し、汝は獨り籠り居て蟲をおこしたるならん。あすは車一輛倩ひて、エルコラノ、ポムペイに往き、それよりエズヰオの山に登るべし。先づ今宵は大路まで出でゝ、面白く時を過さん。世の中は驅足して行く如し。而して人々のおのが荷を負ひたり。鉛の重さなるもあり。翫具と一般なるもあり。友は斯く語りつゝ我を促し立てゝ出で行かんとせり。嗚呼、我にも猶此の如く慰め呉るゝ友あるこそ嬉しけれ。我は默して帽を戴き、友の後に跟きて出でぬ。

好機會

戸を出づれば小屋掛の小劇場より賑かなる音樂の聲聞ゆ。われ等二人は群集の間に立ちてその劇場の狀を看たり。夫婦と覺しき男女、表をのみ飾りたる衣を纏ひて板敷の上に立ちたるが、客を喚ぶことの忙しさに、聲は全く嗄れたり。色蒼ざめたる一童子「ピエロオ」

（滑稽役）の服を着けて、悲しげに「ヰオリノ」彈けば、姉妹なるべし、少女二人のこれを続りて踊るを見る。哀なるかな此人々。その運命のはかなきこと我と同じきなるべし。我は大息を抑へて友の肩に倚りたり。友は慰めて云ふやう。物思も好き程にせよ。暫くこの邊を漫歩して、汝が目の赤きを風に吹き消させ、さて共にマレツチイ夫人の許に往かん。夫人は汝と共に笑ひ共に泣きて、汝が厭ふをも知らぬなるべし。こは我が能くせざるところにして夫人の能くするところなり。いざ〳〵と勸めつゝ、友は我を拉きて街上を行き巡り、遂に博士の家に入りぬ。

夫人は出で迎へて、好くこそ來給ひたれ、君等の定の日を待たで來給はんは何時なるべきと、兼ねてより思ひ居たりといふ。友。わがアントニオは又例の物の哀といふものに襲はれ居れば、そを少し爽かなる方に向はせんは、おん宅ならではと思ひて參りしなり。明日は共にエルコラノとポムペイとに往きて、エズヰオの山にも登らんとす。折好く噴火の壯觀あれかしと願ふのみといふ。博士聞きて友に對ひて云ふやう。そはいと好き消遣の法なり。われも暇あらば共にこそ往かまほしけれ。エズヰオに登らんは煩はしけれど、ポムペイの發掘の近状を見んこと面白かるべし。われはかしこより彩色の硝子器數種を得たれば、この頃そを時代別にして小論文一篇を作りぬ。今君に見せて、彩色に關する二三の疑を質さばやと思ふなり。アントニオ君はしばし妻の許に居給へ。後には集りて一瓶の「フアレルノ」（フアレルナに産する葡萄酒）を傾け、ホラチウスが詩を歌はんと云ふ。かくて主人は友を延いて入り、我をばサンタ夫人の許に留め置きぬ。

夫人。君は又新しき詩を作り給ひしならん。君が面を見るにその經營慘憺とやらんいふことの痕深く刻まれたる如きを覺ゆるなり。さきにはタツソオの詩を誦して聞せ給ひしが、その句は今も我懷に往來して、時ありては獨り涙を墮すことあり。そはわが泣蟲なるためにはあらず。など少しく氣を霽やかにして我面を見て面白き事を語り聞せ給はざる。尚默して居給ふか。若し言ふべきことなくば、わがこの新しき衣をだに譽め給へ。好く似合ひたるにあらずや。體にひたと着きてめでたからずや。詩人はかゝる些細なる事をも心に留めでは叶はぬものなり。我姿のすらりと痩せて「ピニヨロ」の木の如くなるを見給はずや。われ。そは直ちに心付き候ひぬ。夫人。おん身はまことに世辭好き人なり。我姿はいつもの通りなり。衣は緩く包みし袱の如し。否々、面を赤うし給ふことかは。おん身も年若き男達の癖をばえ逃れ給はずと思はる。今少し多く女子に交り給へ。われ等はおん身を教育すべし。おん身の友と我夫とは、今その考古學の深みに嵌まり居て、身動きだにせざるならん。いざ共に「フアレルノ」を飲まん。後には人々と同じく改めて杯を把り給ひても好しといふ。夫人に斯く勸められて、われは急に酒飲むことを辭み、世の常の物語せばやと、一言二言いひ試みしが、胸の憂に詞淀みて、いかにも心苦しければ、夫人よ怨し給へ、われは今快からず、さるを強ひて物語せば、そは徒におん身を惱ますに近からんと云ひつゝ、起ちて帽を取らんとせしに、夫人は忽ち我手を把りて再び椅子に着かしめ、優しく我顔を目守りて云ふやう。今は歸し參らせじ。おん身は何事にか遭ひ給ひしならん。心を隔て給ふことかは。わが氣輕なる詞つきは、おん身の心を傷つけたらんも計られねど、そは稟賦なれば、是非なし。われはまことにおん身の上を氣遣へり。何事にか遭ひ給ひしならば、包まずわれに語り給へ。故里の文

をや得給ひし。ベルナルドオが創のためにみまかりしにはあらずやと云ふ。初めわれは主公の書を得たることを此人に告げん心なかりしが、斯く問はれて心弱く、有の儘に物語りぬ。さて詞を續ぎて、われは全く世に棄てられたり、世には一人の猶我を愛するものなしと欷歔して叫びし時、否、アントニオと云ふ聲耳に響きて、われは温き掌の我額を撫で、忽又熱き唇の其上に觸るゝを覺えき。否、アントニオ猶おん身を愛する人あり。おん身は善き人なり、可哀き人なり。夫人はかく言ひつゝ、もろ手もて我頭を抱き、その頬は我耳の邊に觸れたり。我血は湧き返りて、渾身震ひ氣息塞がりたり。此時人の足音して一間の扉は外より開かれ、主人はフエデリゴと共に入り來りぬ。サンタ夫人は徐に友を顧みて、好き處に來給ひたり、アントニオ君は熱を患へ給ふにやあらん、心地惡しとのたまひつゝ、忽ち青くなり又赤くなり給ふ故、安き心はあらざりきなど云ひ、又我に向ひて、いかに、今は前の如くにはあらざるならんと云ふ。その面持すこしも常に殊ならず。われは心の底に、言ふべからざる羞と憤とを覺えて、口に一語をも出すこと能はざりき。博士は例の古語を引きて、客人心地はいかなるにか、クピド（愛の神）の磨く箭にや中り給ひしなどいひつゝ、われ等に酒を勸めたり。夫人はわれと杯を打※せて、意味ありげなる目を我面に注ぎ、これを乾さばや、好機會のためにと云ふに、我友點頭きてげに好機會は必ず來べきものぞ、屈せずして待つが丈夫の事なりと云ふ。この時博士も亦杯を擧げて、さらば我もその好機會のために飲まんと云ひぬ。夫人は高く笑ひて手もて我頬を撫でたり。

古市

翌朝フエデリゴは博士マレツチイと共に我客舍に來て促し立て、打ち連れて馬車に上りぬ。車は拿破里の入江を匝りて行くに、爽かなる朝風は海の面より吹き來れり。友は遙にエズヰオの山を指さして、あの烟の渦巻き騰る狀を見よ、今宵は興ある遊となるべきぞと云ひしに、博士首を掉りて、かばかりの烟は物の數ならず、紀元七十九年の噴火の時を想ひ見給へと云ひぬ。拿破里の町はづれを過ぎて、程なくサンジヨワンニイ、ポルチチ、レジナの三市の相連れるを見る。そのさま一市をなせるが如し。レジナに至りて車を下れば、われ等の踐める所の脚下は、早く是れ熔巖熱灰のために埋沒せられしエルコラノの古市なり。

博士に延かれて一家に入れば、その中庭に大なる枯井あるを見る。井の裏には螺旋梯を架したり。博士われ等を顧みて云ふやう。見給へ人々。これこそ紀元千七百二十年エルボヨフ公の掘らせし井なれ。穿つこと僅に數尺にして石人現れければ、その工事は遽に止められき。これより人の手を此井に觸れざること三十年。西班牙王カルロス此に來て猶深く掘らせしに、見給へ、かしこの奥に見ゆる石階に掘り當てたりと云ふ。われ等はその井をさし覗くに、日光はエルコラノの市なる大劇場の石階の隅を照せり。案内者は燭を點して、われ等をして各　これを手にせしめつ。降りて石階の上に立てば、誰か能く懷舊の情の胸間に叢り起るを覺えざらん。是れ千七百載の昔、羅馬の民の集ひ來て、齊しく眸を舞臺の光景に凝し、共に笑ひ共に感動し共に喝采歡呼せし處なるにあらずや。側なる低く小き戸を過ぐれば、闊き廊あり。われ等は舞庭に下りぬ。（舞臺と觀棚との

間に在り。）樂人房、衣房、舞臺などを見めぐるに、其結構の宏壯なるは、深く我心を感ぜしめき。燭光の照すところは數歩の外に出でざれども、われはその大さ「サン、カルロ」座に踰ゆべしと想ひぬ。われ等の四邊は空虚幽暗寂寥にして、われ等の頭上には別に一箇の熱鬧世界あるなり。世には既に死したる人のわれ等の間に迷ひ來て相交ることありとおもへるものあり。われは今これに反して、獨り泉下に入りて身を古の羅馬人の精靈の間に※きたりとおもひぬ。われは人々を促して梯を登りぬ。

右に轉じて一小巷に入れば、古市の一小部の發掘せられたるあり。數條の徑、小房多き數軒の家あり。その壁には丹青の色殘れり。エルコラノの市の天日に觸るゝ處は唯だこれのみなりといへば、工事の未だはかどらざることポムペイの比にあらずと覺し。

レジナを背にして車を馳すれば、目の及ばん限、只だ大海の忽ち凝りて黒がねとなれるかと疑はるゝ平原を見るのみ。半ば埋れたる寺塔は寂しげに道の側に立てり。處々に新に造りたる人家と葡萄圃とあり。博士われ等を顧みて云ふやう。この境の慘狀をばわれ目のあたり見ることを得たり。われは猶幼かりき。この車轍の過ぐるところは、其時火の海をなし、その怖ろしき流は山岳の方より希臘塔市（トルレ、デル、グレコ）の方へ向ひたり。葡萄圃は多く熔巖に掩はれ、父とわれとの立てる側なる岩は其光を受けて殷紅なり。寺院の火海の中央に漂へるさまはノアの船に異ならず、その燈の未だ滅せざるが微かに青く見えたり。われは生涯その時の事を忘れず。父の燒け殘りたる葡萄を摘みてわれに食はせしは、今も猶昨のごとしと云ひぬ。

凡そ拿破里の入江の諸市は、譬へば葡萄の蔓の梢より梢にわたりて相連れるが如く、一市を行き盡せば一市又前に横る。（希臘塔市の次は即トルレ、デル、アヌンチヤタの市なり。）道は此熔巖の平野に至るまで、都會の大街に異ならず。馬に乘る人、驢に騎る人、車を驅る人など絶えず往來して、その間には男女打ち雜りたる旅人の群の一しほの色彩を添ふるあり。

初めわれはエルコラノもポムペイも深く地の底に在りと思ひき。されど其實は然らず。古のポムペイは高處に築き起したるものにして、その民は葡萄圃のあなたに地中海を眺めしなり。われ等は漸く登りて、今暗黒なる燼餘の灰壘を打ち拔きたる洞穴の前に立てり。洞穴の周圍には灌木、草綿など少しく生ひ出でゝ、この寂しき景に些の生色あらせんと勉むるものゝ如し。われ等は番兵の前を過ぎて、ポムペイの市の口に入りぬ。

博士マレツチイは我等を顧みて、君等は古のタチツスをもプリニウスをも讀み給ひしならん、凡そ此等の書の最も好き註脚は此市なりと云ひたり。われ等の進み入りたる道を墳墓街と名づく。許多の石碣並び立てり。二碑の前に彫鏤したる榻あり。是れポムペイの士女の郊外に往反するときしばらく憩ひし處なるべし。想ふに當時この榻に坐するものは、碑碣のあなたなる林木郊野を見、往來織るが如き街道を見、又波靜なる入江を見つるならん、今は唯だ窓※ある石屋の處々に立てるを望むのみ。屋は地震の初に受けたりと覺しき許多の創痕を留めて、その形枯髑髏の如く、窓は空しき眼※かと疑はる。間當時普請の半ばなりし家ありて、彫りさしたる大理石塊、素燒の模型などその傍に横れり。

われ等は漸くにして市の外垣に到りぬ。これに登るに幅廣き石級あり。古劇場の觀棚の如し。當面には細長き一條の町ありて通ず。

熔巖の板を敷けること拿破里の街衢と異なることなし。蓋しこの板は遠く彼基督紀元七十九年の前にありて噴火せし時の遺物なるべし。今その面を見るに、深く車轍を印したればなり。家壁には時に戸主の姓氏を刻めるを見る。又招牌の遺れるあり。偶々その一を讀めば、石目細工の家と題したり。

家裏を窺ふに、多くは小房なり。門扇上若くは仰塵より光を採りたり。中庭の大さは大抵僅に一小花壇若くは噴水ある一水盤を容るゝに足り、柱廊ありてこれを繞れり。壁又歩牀には石目もて方圓種々の飾文を作る。白青赤などの顔料もて畫ける壁を見るに、舞妓、神物の類猶頗る鮮明なり。博士とフエデリゴとはこの美麗にして久しきに耐ふる顔料の性状を論ずと見えしが、いつかバヤルヂイが大著述の批評に言ひ及びて、身の何の處に在るかを忘るゝものゝ如くなりき。（バヤルヂイの著カタロオゴ、デリ、アンチイキイ、モヌメンチイ、デルコラノは大判紙十巻ありて千七百五十五年の刊行なり。）幸に我は平生多く書を讀まざりしかば、此物語に引き入れらるゝ虞なく、詩趣ゆたかなる四圍の光景は、十分に我心胸に徹して、平生の苦辛はこれによりて全く排せられ畢ぬ。

われ等はサルルストが故宅の前に立てり。博士帽を脱して云ふやう。縦ひ靈魂は逸し去らんも、吾豈その遺骸を拜せざらんやと。前壁には、ヂアナとアクテオンとの大圖を畫けり。（アクテオンは、希臘の男神の名なり、女神ヂアナを垣間見て、罰のために鹿に變ぜられ、畜ふ所の群犬に噬まる。）二個の「スフインクス」（女首獅身の石像）を脚としたる大理石の巨卓あり。傳へいふ、初めこの皓潔玉の如き卓を發掘せしとき、工夫は驚喜の餘、覺えず聲を放ちて叫びぬと。されど我を動すことこれより深かりしは、色褪せたる人骨と灰に印せる美しき婦人の乳房となりき。

われ等は廣こうぢを過ぎて、ユピテルの祠の前に至りぬ。日は白き大理石の柱を照せり。其背後にはヱズヰオの山あり。巓よりは黒烟を吐き、半腹を流れ下る熔巖の上には濃き蒸氣簇れり。

われ等は劇場に入りて、磴級をなせる石榻に坐したり。舞臺を見るに、その柱の石障石扉、昔のまゝに殘りて、羅馬の俳優のこゝに演技せしは昨の如くぞおもはるゝ。されど今は音樂の響も聞えず、公衆の喝采に慣れたるロスチウスが聲も聞えず。わが觀るところの演劇は、緑肥えたる葡萄圃、行人絡繹たるサレルノ街道、其背後の暗碧なる山脈等を道具立書割として、自ら悲壯劇の舞群となれるポムペイ市の死の天使の威を歌へるなり。われは覿面に死の天使を見たり。その翼は黒き灰と流るゝ巖とにして、一たびこれを開張するときは、幾多の市村はこれがために埋めらるゝなり。

噴火山

熔巖は月あかりにて見るべきものぞとて、我等は暮に至りてヱズヰオに登りぬ。レジナにて驢を雇ひ、葡萄圃、貧しげなる農家など見つゝ騎り行くに、漸くにして草木の勢衰へ、はては片端になりたる小灌木、半ば枯れたる草の莖もあらずなりぬ。夜はいと明けれど、強く寒き風は忽ち起りぬ。將に沒せんとする日は熾なる火の如く、天をば黄金色ならしめ、海をば藍碧色ならしめ、海の上なる群れる島嶼をば淡青なる雲にまがはせたり。眞に是れ一の夢幻界なり。灣に沿へる拿破里の市は次第に暮色微茫の中に沒せり。眸を放ちて遠く望めば、雪を戴けるアルピイの山脈氷もて削り成せるが如し。

紅なる熔巖の流は、今や目睫に迫り來りぬ。道絶ゆるところに、黒き熔巖もて掩はれたる廣き面あり。驢馬は蹄を下すごとに、先づ探りて而る後に踏めり。既にして一の隆起したる處に逢ふ。その狀新に此熔巖の海に涌出せる孤島の如し。されど其草木は只だ丈低き灌木の疎に生ぜるを見るのみ。この處に山人の草寮あり。兵卒數人火を圍みて聖涙酒を呑めり。（「ラクリメエ、クリスチイ」とて葡萄酒の名なり。）こは遊覽の客を護りて賊を防ぐものなりとぞ。われ等を望み見て身を起し、松明を點じて導かんとす。劇しき風に焔は横さまに吹き靡けられ、滅えんと欲して僅に燃ゆ。博士は疲れたりとて草寮に留まりぬ。我等の往手は巖の間なる細徑にて、熔巖の塊の蹄に觸るゝもの多し。處々道の險しき谿に臨めるを見る。

既にして黒き灰もて盛り成したる山上の山ありて、我等の前に横はりぬ。我等は皆徒立となりて、驢をば口とりの童にあづけおきぬ。兵卒は松明振り翳して斜に道取りて進めり。灰は踝を沒し又膝を沒す。石片又は熔巖の塊ありて、歩ごとに滾り落つるが故に、縦に列びて登るに由なし。我等は雙脚に鉛を懸けたる如く、一歩を進みては又一歩を退き、只だ一つところに在るやうに覺えたり。兵卒は、巔近し、今一息に候と叫びて、我等を勵したり。されど仰ぎ視れば山の高きこと始に異ならず。一時許にして僅に巔に到りぬ。われは奇を好む心に驅られて、直に踵を兵卒に接したれば、先づ足を此山の巔に着けたり。

巔は大なる平地にして、大小いろ〳〵なる熔巖の塊錯落として途に横る。平地の中央に圓錐形の灰の丘あり。是れ火坑の堤なり。火球の如き月は早く昇りて、此丘の上に懸れり。我等の來路に此月を見ざりしは、山のために遮られぬればなり。忽ちにして坑口黒烟を噴き、四邊闇夜の如く、山の核心と覺しき處に不斷の雷聲を聞く。地震ひ足危ければ、人々相倚りて支持す。忽ち又千百の巨※を放てる如き聲あり。一道の火柱直上して天を衝き、迸り出でたる熱石は「ルビン」を嵌めたる如き觀をなせり。されど此等の石は或は再び坑中に沒し、或は灰の丘に沿ひて顛り下り、復た我等の頭上に落つることなし。われは心裡に神を念じて、屏息してこれを見たり。

兵卒は、客人達は山の機嫌好き日に來あはせ給ひぬとて、我等を揮きて進ましめたり。われは初めその何處に導くべきかを知らざりき。火を噴ける坑口は今近づくべきにあらねばなり。導者は灰の丘を左にして進まんとす。忽ち見る。我等の往手に火の海の横れるありて、身幹數丈なる怪しき人影のその前にゆらめくを。これ我等に前だてる旅客の一群なり。我等は手足を動して熔岩の塊を避けつゝ進めり。色褪せたる月の光と松明の光とは、岩の隈々に濃き陰翳を形りて、深谷の看をなせり。忽ち又例の雷聲を聞きて、火柱は再び立てり。手もて探りて漸く進むに、石土の熱きを覺ゆるに至りぬ。巖罅よりは白き蒸氣騰上せり。既にして平滑なる地を見る。こは二日前に流れ出でたる熔岩なり。風に觸るゝ表層こそは黒く凝りたれ、底は猶紅火なり。この一帶の彼方には又常の石原ありて、一群の旅客はその上に立てり。導者は我等一行を引きて此火殻を踐ましめたるに、足跡炙ぶるが如く、我等の靴の黒き地に赤き痕を印するさま、橋上の霜を踏むに似たり。處々に斷文ありて、底なる火を透し見るべし。我等は凝息して行くほどに、一英人の導者と共に歸り來るに逢ひぬ。渠、汝等の間に英人ありやと問ふに、われ、無しと答ふれば、一聲畜生と叫びて過ぎぬ。

我等は彼旅客の群に近づきて、これと同じく一大石の上に登りぬ。

此石の前には新しき熔岩流れ下れり。譬へば金の熔爐より出づる如し。其幅は極めて闊し。蒸氣の此流を被へるものは火に映じて殷紅なり。四圍は暗黒にして、空氣には硫黄の氣滿ちたり。われは地底の雷聲と天半の火柱と此流とを見聞して、心中の弱處病處の一時に滅盡するを覺えたり。われは胸前に合掌して、神よ、詩人も亦汝の預言者なり、その聲は寺裏に法を説く僧侶より大なるべし、我に力あらせ給へ、我心の清きを護り給へと念じたり。

われ等は歸途に就きたり。此時身邊なる熔岩の流に、爆然聲ありて、陷穽を生じ炎焔を吐くを見き。されどわれは復た戰き慄ふことなかりき。一行は積灰の新に降れる雪の如きを蹴て、且滑り且降るほどに、一時間の來路は十分間の去路となりて、何の勞苦をも覺えざりき。われもフエデリゴも心に此遊の徒事ならざりしを喜びあへり。驢に乘りて草寮に至れば、博士は踞座して我等を待てり。促し立てゝ共に出づるに、風斂り月明かなり。拿破里灣に沿ひて行けば、熔岩の赤き影と明月の青き影と、波面に二條の長蛇を跳らしむ。聞説らく、昔はボツカチヨオ涙をヰルギリウスの墳に灑ぎて、譽を天下に馳せたりとぞ。われ韮才、固よりこれに比すべきにあらねど、けふヱズヰオの山の我詩思を養ひしは、未だ必ずしもむかし詩人の墳のボツカチヨオの天才を發せしに似ずばあらず。

博士はわれ等を誘ひて其家にかへりぬ。われは前度の別をおもひて、サンタ夫人との應對いかがあらんと氣遣ひしに、夫人の優しく打解けたるさまは、毫も疇昔に異ならざりき。夫人はわが即興の手際を見んとて、こよひの登山を歌はせ、辭を窮めて我才を讃めたり。

囊家

サンタのわれに優しきことは昔に變らず。されど人なき處にてこれと相見んことの影護たくて、若しフエデリゴの共に往かざるときは、必ず人の先づ集ひたらん頃を待ちて、始ておとなふこととなしつ。現にあやしきものは人の心なり。曾て心にだに留めざりし人と、ゆくりなく浮名立てらるゝときは、その人はそもいかなる人にかと疑ふより、これに心付くるやうになり、心付けて見るに隨ひて、美しくもおもはれ慕はしくもおもはるゝことありと聞く。我が夫人に於けるも亦これに似たるなるべし。前の事ありしより、我が夫人を見る目は昔に同じからで、その豐なる肌、媚ある振舞の胸騷の種となりそめしぞうたてき。

我がナポリに來てより早や二月とはなりぬ。次の日曜日はわが「サン、カルロ」の大劇場に出づべき期なり。其日の興行はセヰルラの剃手にて、その末折の終りてより、我即興詩は始まるべしとぞ掟てられし。番付には流石にわが實の苗字をしるさんことの恥かしくて、假にチエンチイと名告りたり。この運命の定まるべき日の、切に待たるゝと共に、あるときは其成功の覺束なき心地せられて、熱病む人の如くなることあり。けふも博士の家をおとづれたれど、われは人々の背後にかくれて物言ふことも稀なりき。フエデリゴは我が物思はしげなるを見ていふやう。いかに心地や惡しき。われとても同じさまなり。こは火山の所爲にて、この郷の空氣の惡しくなれるならん。ヱズヰオの噴火は次第に熾なり。熔巖の流は早く麓に到りて、トルレ、デル、アヌンチヤタの方へ向へりと聞く。今宵は激しき音の聞ゆるならん。空氣には灰多く雜れり。山に近き處にては、木々の梢皆灰に掩はれたり。巓の上は黒雲覆ひ重りて、爆發の

度ごとに青き※その中に立ち昇れりといふ。サンタは色蒼く、瞳常ならず耀けるが、友の詞を聞きていふやう。われも熱に罹れりと覺ゆ。されど日曜日には病を力めて往くべし。友のためには命をさへ輕んずべし。その翌日熱に苦めらるゝこと前に倍すとも、そは顧みるべき事ならず。友は嬉しとおもふや、あらずや、そは知るべきならねどなど、心ありげに云へり。

われは日ごとに公苑に往き戲園に入り、又心安からぬまゝに寺院を尋ねて、聖母の足の下に俯することあり。頰燃え胸跳るばかりなる怖ろしき誘惑に想ひ到れば、懺悔の念轉※深く、志を遂げ功を成さんと欲する大いなる企圖を顧み思へば、祈祷の心愈　切なり。されど我靈は我肉と鬪へり。わが心機の一轉すべき期は、想ふに日曜日にあるならん。われは慰藉を得ずして、空しく聖母の膝下を走り出でぬ。

一たび偕に囊家（博奕場）に往かずや、いかなる境界をも詩人は知らざるべからずとは、吾友フエデリゴの曾て云ひしところなり。されど友は我を伴ひしことなく、我も亦獨り往かん心を生ずることなかりき。こは見んことの願はしからざるにあらず、心の怯れたるなり。むかしベルナルドオの我にいひしことあり。汝はドメニカに育てられ、「ジエスヰタ」派の學校に人となりて、その血中には山羊の乳汁雜れり。されば汝は臆病なりといひき。當時われはその無禮を怒りしが、今思ふに此言は幾分の理なきにあらず。われまことに詩人となりて、善く社會の狀態を歌はんには、先づかゝる怯懦の心を棄てざるべからず。わが此念をなしゝは、夕ぐれに此市に聞えたる囊家の門を過ぐる時なりき。これぞ我膽を試みるべき好き機會なるべき、自ら博奕せでもあるべし、後に相識れる人々に語るとも、必ず咎むるものはあらじなど、自ら問ひ自ら答へて、騷ぐ胸を押し鎭めつゝ門に入りぬ。こゝには嚴かなる裝したる門者立てり。兩邊に燈を點じたる石階を登れば、前房あり。僮僕あまた走り迎へて、我帽と杖とを受取り、我が爲めに正面なる扉を排開したり。

戶内には燈明き室あまたあり。室ごとに大卓幾箇か据ゑたるを、男女打雜りたる客圍み坐せり。われは勇を鼓して先づ最も戶に近き一室を大股に歩み過ぎしに、諸人は顧みんとだにせざりき。卓の上には堆く金貨を積みたり。我目に留まりしは、十年前までは美しかりけんと思はるゝ、さたすぎたる婦人の服飾美しく面に紅粉を施せるが、痩せたる掌に骨牌緊しく握り持ちて、鷙鳥の如き眼を卓上の黄金に注ぎたるなり。若く美しき女子も二人三人見えたるが、その周匝には少年紳士群り立ちて、何事をか語るさまなりき。老若いづれはあれど、皆嘗て能く人の心を動しゝ人の、今は他の心文牌に目を注ぐやうになりしなるべし。

稍　狹き室に紅緑に染め分けたる一卓あり。客は柱文銀（「コロンナアトオ」といふ、その文樣に依りて名づく、我二圓十五錢許に當る）一塊若くは數塊を一色の上に置く。球ありて此卓上を走り、その留まる處の色は、賭者をして倍價の銀を贏ち得しむ。傍より覗ふに、その速なることは我脈搏と同じく、黄白の堆は忽ち卓に上り又忽ち卓を下る。われは覺えず兜兒を搜りて一塊の柱文銀を取り、漫然卓上に擲ちたるに、銀は紅色の上に駐まれり。監者は我面を注視して、其色の意に適へりや否やを問ふものゝ如し。われは又覺えず頷きたり。球は走り、我銀は二塊となりぬ。われはこれを收むるを愧ぢて、銀を其處に放置せり。球は走り又走りて、銀の數は漸く加りぬ。運命は我に與するにやあらん。銀の嵩は次第に大いになり

て、金貨さへその間に輝けり。われは喉※の燃ゆるが如きを覺えたれば、葡萄酒一杯を買ひてこれに灌ぎつ。黄白の山はみる〳〵我前に聳えたり。忽ち球は我色に背きて、監者は冷かに我銀の山を撈ひ取りぬ。われは夢の醒めたる如くなりき。我がまことに失ひしは柱文銀一つのみと、獨り自ら慰めて次の室に入りぬ。

こゝには數人の少女あり。中なる一人の姿貌は宛然たるアヌンチヤタなるが、只だ身幹高く稍肥えたるを異なりとす。われは暫くこれに注目せしに、少女は我前に歩み寄りて、傍なる小卓を指し、おん敵手にはなるまじけれどと耳語きたり。わが輕く辭みて數歩を退き去るを、少女は訝かしげに見送り居たり。

奥の詰なる室には、少年紳士等打寄りて撞球戯をなせり。婦人も幾人か立ち雜りたるに、紳士中には上衣を脱ぎたるあり。われは初め此社會の風儀のかくまで亂れたるをば想ひ測らざりしなり。入口の戸に近く、此方に背を向けて撞杖を揮へる丈高き一男子あり。今の撞きざまや巧なりけん、人々喝采せしに、前に我に骨牌を勸めし少女も彼男子の面を覗きて、笑みつゝ何事をかさゝやきたり。男は振り向きざまにその頬に接吻し、女は嬌嗔してその男を打てり。われは遙に彼男の横顔を望み見て慄慄せり。そはその餘りにベルナルドオに肖たるが爲めなり。われは進みてこれに近づくべき膽力なかりき。されどその眞のベルナルドオなりや否やを知らんことの願はしければ、傍にほの暗き室の戸の開きありたるを見て、我より窺ふべく彼より見るべからざらしめんために、壁に沿ひて徐に歩み、そとこれに進み入れり。天井には紅白の硝子燈を弔りたれど、わざと明闇相半して處々蔭多からしめたり。室は假の庭園なり。薄片鐵を塗りて葉となしたる蔓艸は、幾箇のさゝやかなる亭に纏ひ附きて、その間には巧に盆栽の橘柚等を排べたり。亭の前なる梢には剥製の鸚鵡の止まりたるあり。冷なる風は窓より入りて、自奏器の樂聲人の眠を催さんとす。

わが此裝置を一瞥し畢りし時、彼のベルナルドオに肖たる男はこなたに向ひて足の運び輕げに歩み來たり。われは思慮を費すに遑あらずして、近き亭の内に潛みしに、男は面に笑を湛へて闌上に立ち留まりぬ。その面は恰も我方へ眞向になりたるが、われはそのまがふ方なきベルナルドオなることを認め得たり。渠は隣なる亭に歩み入り、長椅に身を投げ掛けて、微かに口笛を鳴し居たり。我胸裏には萬感叢起せり。ベルナルドオこゝに在り。我と他と咫尺す。われはかく思ふと共に、身うちの悉く震ひわなゝくを覺えて、力なく亭内なる長椅の上に坐したり。花卉の薫、幽かなる樂聲、暗き燈火、軟なる長椅は我を夢の世界に誘ひ去らんとす。現に夢の世界ならでは、この人に邂逅すべくもあらぬ心地ぞする。少焉ありて前のアヌンチヤタに似たる少女は此室に入り、將に進みて我が居る亭に入らんとす。われは心にいたく驚きて、身内の血の湧き立つを覺えき。その時ベルナルドオは忽ち聲朗かに歌ひはじめたり。少女は聲をしるべに隣の亭に入りぬ。衣の戰ぎと共に接吻の聲我耳を襲へり。此聲は我心を焦し爛かせり。嗚呼アヌンチヤタは我を去りて此輕薄男子に就きしなり。この男子アヌンチヤタを獲てより幾時をか經し。而るに其唇は早く既にこの淤泥もて捏ね成したる妖姫の身に觸るゝなり。われは此室を馳せ出で、此家を馳せ出でたり。我胸は怒と悲とのために裂けんとす。此夜は曉近うして纔にまどろむことを得たり。

我が「サン、カルロ」の劇場に登るべき日は明日となりぬ。これ

を待つ疑懼の情と、さきの夜戀の敵に出逢ひたる驚愕の念とは我をして暫くも安んずること能はざらしむ。わが聖母其他の諸聖を祈る心の切なりしこと此時に過ぐるはなかりき。われは寺院に往きて、彼の救世者流血の身に擬したる麪包を乞ひ受け、その奇しき力の我を清淨にし我を康強にせんことを祷りぬ。尊き麪包は果して我に多少の安堵を與へぬ。されどこゝに最も心にかゝる一事あり。そはアヌンチヤタの此地にあるにはあらずや、ベルナルドオはこれに隨ひて來たるにはあらずやといふ疑問なりき。既にしてフエデリゴは我が爲めに偵知して、アヌンチヤタのこゝにあらず、ベルナルドオの四日前に單身こゝに到りしを報ず。友は綿密に市の來賓簿を閲しくれたるなり。サンタの熱は未だ痊えず、されど明日の興行には必ず往かんと誓へり。エズヰオは火を噴き灰を雨らすること故の如し。而して我名を載せたる番付は早く通衢に貼り出されたり。

初舞臺

日暮れて劇場の馬車の我を載せ行きしは、樂劇の幕の既に開きたる後なりき。若し運命の女神にして、剪刀を手にして此車中に座したらんには、恐らくは我は、いざ、截れと呼ぶことを得しならん。われは只だ神を頼みて餘念なかりき。

場内の逍遙場には俳優と文士と打雜りたる一群ありき。中には我と同業なる即興詩人さへありて、其名をサンチイニイと云ふ。平素人に佛蘭西語を教ふ。われはその群に近づきたり。會話は甚だ輕く、交ふるに笑謔を以てす。セヰルラの剃手の曲の爲めに登場する俳優は、乍ち去り乍ち來り、演戲のその心を擾さゞること尋常の社交舞に異ならず。舞臺はその定住の地なればさもあるべし。

サンチイニイの云ふやう。吾等は君に難題を與ふべし。譬へば殻硬き胡桃の拆き難きが如し。されど君は能く拆き能く解き給ふならん。われも猶初めて登場せし時の戰慄の状を記せり。されど我智は我に祕訣を授けたり。そは閨情、懷古、伊太利風土の美、藝術、詩賦等、何物にも附會し易きものあるを用ゐ、又人の喝采を博すべき段をば先づ作りて諳んじ置くことを得る事なりと云ふ。われ絶て此種の準備なしと答へしに、サンチイニイ頭を掉りて、否、そは隱し給ふなり、要するに君の如き怜悧なる人には此業いと易しと耳語けり。

剃手の曲は終りて、われは獨り廣闊なる舞臺の上に立てり。座長は笑を帶びて我顔を打目守り、斷頭臺は築かれたりと耳語きて、道具方に相圖せり。幕は開きたり。斯て此大劇場の觀棚に對して立てる時、わが視る所は譬へば黒洞々たる大坑に臨める如く、僅に伶人席の最前列と高き觀棚の左右の端となる人の頭を辨ずることを得るのみ。濃く温なる空氣は漲り來りて我面を撲てり。われは我精神の此の如く安く夷なるべきをば期せざりき。その状態は固より興奮せり。而れどもその諸機に※觸し易き性は十分に備はりたり。われは自家の精神作用の緊張を覺ゆると共に、又其明徹を覺えたり。猶晴れたる冬の日の空氣の極めて冷に兼ねて極めて明なるがごとくなるべし。

看客は片紙に題を記して出し、警吏これを檢して、その法律に抵觸せざるを認めたる後、われに交付す。われは數題中に就いて其一を簡み取る自由あり。初なる一紙には侍奉紳士と題せり。こは人妻に事ふる男を謂ふ。中世士風の一變したるものなるべし。されどわ

れは未だ深く心をこれに留めしことなし。（原註。「イル、カワリエル、セルエンテ」又「チチスベオ」、今侍奉紳士と翻す。此俗本とジエノワ府商賈より出づ。その行販して郷を離るゝもの婦を一友に托す。これを侍奉紳士といふ。初め僧に托するを常とせしが、後又俗士を擇む。侍奉紳士は婦の早起盥漱する時より、深更寢に就く時に至るまで、其身邊に在りて奉侍す。他婦を顧みることを容さず、聞く侍奉紳士中※褻に及ばざるもの往々にして有り。嘗て一男子の歿するや、其誄辭中侍奉紳士となりて責を負ひ任を全うすといふ語ありきと。）われは此俗を歌ふ一曲の人口に膾炙するものあるを知れど、急にこれに依りて思を搆ふること能はず、（曲とは「フエミナ、ヂ、コスツメ、ヂ、マニエレ」と題するものを謂ふ、「ソネツトオ」なり、ミユルレルの羅馬と其士女との巻中に收めたり。）望を第二紙に屬してこれを開きたり。紙上にはカプリと書せり。是れ亦わが爲めの難題なり。われは拿破里よりその山脈の美しきを賞しつれども、未だ一たびも此島に航せしことあらず。若し二者中一を取らば、猶侍奉紳士をこそ辭を措き易しとせめ。われは第三紙を開きたり。題して拿破里の窟墓といふ。これも亦我未知の境なり。されど窟墓の一語は忽ち少時の怖ろしき經歷を想ひ起す媒となりぬ。フエデリゴとの漫歩より地下に路を失ひたる時の心の周章など、悉く目前に浮びぬ。われは直ちに紘を撥きて歌ひ出でぬ。章句は自らにして成りぬ。われは唯だ自家少時の經歷を語りしのみ、唯だ羅馬の地下窟を以て拿破里の地下窟となしゝのみ。即興詩の末解は、一たび失ひつる絲の端を再び探り得たる喜を敍したり。喝采はあまたゝび起りぬ。われは脈絡中に三鞭酒の循るが如き感をなしたり。

われは第二曲の題として蜃氣樓を得たり。こは拿破里又シチリアの水濱にて屢※見るゝものといへど、われは未だ嘗て見しことあらず。唯だ此重樓複閣の奥には、我に親しき神女棲み給ふ。これをフアンタジア（空想）の君とはいふなり。われは唯だ平生夢裏に遊べる境界を歌はんのみ。その中には同じ神女の宮殿あり、苑囿あり。われは急に我資材を引纏めて、一の布局を定め、一の物語となしたり。歌ひ出づるに從ひて、新しき思想は多く來り加はりぬ。先づ敍したるは荒廢せる一寺院なりき。景をポジリツポに取りて、わざと其名をば擧げざりき。簷傾き廊朽ちて、今や漁父の栖家となりぬ。聖像を燒き附けたる窓の下に床ありて、一童子臥したり。月あかくいと靜けき夜、美しき童女來りおとづれぬ。その美しさは譬へんに物なく、その身の輕きことそよ吹く風に殊ならず。兩の肩には五彩燦然たる翼生ひたり。二人は共に嬉み遊べり。少女は漁家の子を引きて、緑深き葡萄園に往き、又近きわたりの山に分け入るに、まだ見ぬ景色いと多く、殊に山腹の自ら闢けて、その中にめでたき壁畫と數多き贊卓とある寺院の見えたるなど、言へば世の常なり。或るときは共に舟に棹して青海原を渡り、烟立つエズヰオの山に漕ぎ寄せつるに、山は全く水晶より成れりと覺しく、巖の底なる洪爐中に、烟渦巻き火燃え上るさま掌に指すが如くなり。或るときは共に地下の古市に遊ぶに、康衢屋舍悉く存じて、往來織るが如く、その殷富豐盛なること、書讀む人の遺蹟を見て説き聞かするところに增したり。少女は嘗て其羽を脱ぎ卸して、その童子の肩に結び、いざ共に空に翔らんといふ。おのれは風なす輕き身なれば、羽なきと羽あると殊ならずとなり。橘柚檸檬の林を見下し、高くは山巓の雲を踏み、低くは水草茂れる沼澤の上を飛びしときは、終に茫漠たる平野の正中なる羅馬の都城に至りぬ。鏡の如き蒼海を脚下に見、カプ

リの島の外遠く翔りて、夕陽の雲の奥深く入りしときは、忽ち粉※彫墻の前に横はるを見て、これは何ぞと問ひしに、少女答へて、母君の築き給ひし城よと云ひぬ。少女は童子と樂しき日をこの城の内に送りしこと數 なりき。童子の齢漸く長ずるに及びて、少女の訪ひ來ること漸く稀になり、はてはをり〳〵葡萄棚の葉の間又は柑子の樹の梢の隙より、美しき目もてそとさし覗くのみとなりぬ。童子はこれを見るごとに戀しく懷かしきこと限なく、人知らぬ愛に胸を苦めたりき。漁父は童子を伴ひて海に往き、艫を搖し帆を揚げ、暴風と爭ひ怒濤と鬪ふことを教へつ。年長けて後、この少年の今は影だに見せぬ昔の友を懷ふ情は愈 深くのみなりゆきぬ。月清く波靜なる夜半に、獨り舟中にあるときは、ともすれば艫を搖す手のおのづから休み、澄み渡りて底深く生ふる藻のゆらめくさへ見ゆる水にきと目を注けて、瞬もせず打目守ることあり。かゝる時は昔の少女、その嬌眸を※きて水底より覗き、或は頷き或は招けり。とある朝漁村の男女あまた岸邊に集ひぬ。そは旭日の波間より出でんとする時、一箇の奇しく珍らしき島國のカプリに近き處に湧き出でたればなり。飛簷傑閣隙間なく立ち並びて、その翳なきこと珠玉の如く、その光あること金銀の如く、紫雲棚引き星月麗れり。現にこの一幅の畫圖の美しさは、譬へば長虹を截ちてこれを彩りたる如し。蜃氣樓よと漁父等は叫びて、相指して嬉み笑へり。彼の漁父の子のみは獨り笑はざりき。知らずや、かの樓閣はわが昔少女と共に遊び暮しゝ處なるを。懷舊の念しきりにして、戀慕の情止むことなく、雙眸涙に曇る時、島國は忽ち滅えたり。月あかき宵の事なりき。島國は又湧き出でぬ。忽ち一隻の舟ありて、漁父等の立てる岬の下より、弦を離れし征箭の如く、波平かなる海原を漕ぎ出で、かの怪しき島國の方に隱れぬ。黒雲空を蔽ひて、海面には暗緑なる大波を起し、潮水倒立して一條の巨柱を成せり。須臾にして雲斂まり月清く、海面復た平かになりぬ。されど小舟は見えざりき。彼漁父の子も亦あらずなりぬ。歌ひ畢るとき、喝采の聲前に倍し、我膽力は漸く大に、我興會は漸く高し。

第三曲の題はタツソオなりき。われは一たびタツソオたりしことあり。レオノオレは即ちアヌンチヤタなり。我等はフエルララ宮中に相見たり。われは囹圄の苦を嘗め、懷裡に死を藏して又自由の身となり、波立てる海を隔てゝソルレントオより拿破里を望み、また聖オノフリイ寺の※樹の下に坐し、戴冠式の鐘聲カピトリウム街頭に起るを聞けり。されど冥使早く至りて其冠をわれに授けつ。是れ不死不滅の冠なりき。思想の急流は我を漂し去りて、我心跳は常に倍せり。

最後の一曲はサツフオオの死を題とす。嫉妬の苦も亦我が自ら味ひたるところなり。アヌンチヤタが痍負ひたるベルナルドオに吝まざりし接吻は、今憶ふも猶胸焦がる。サツフオオの美はアヌンチヤタに似て、その戀情の苦は我に似たり。波濤はこの可憐なる佳人を覆ひ了んぬ。（十六世紀の伊太利詩人タツソオと前七世紀の希臘女詩人サツフオオとの傳は今煩を憚りて悉く註せず。）看客は皆泣けり。拍手の聲は狂瀾怒濤の如く、幕一たび墮ちて後、われは二たび幕の外に呼び出されぬ。

喜は身に滿ち兼ねて胸を壓せり。舞臺を下りて、人々の來り賀するに逢ひし時、われは痙攣のさましたる啼泣を發したり。此夕サンチイニイ、フエデリゴ及二三の俳優は我が爲めに小筵を開けり。我心は嬉みたれど我舌は縅ぼれたりき。フエデリゴ打興じて曰ふやう。

此男は一の明珠なり。その一失は第二のヨゼツフたるにあり。（ヨゼツフは童貞女の夫にして耶蘇の義父なり。）盍ぞ薔薇を摘まざる、その凋落せざるひまに。

夜更けて後客舎に歸り、聖母と救世主との我を棄て給はざりしを謝して、いと穩なる夢を結びつ。

人火天火

翌朝は心地爽かに生れ更りたる如くにて、われはフエデリゴに對して心のうちの喜を語ることを得たり。身の周圍なる事々物々、皆我を慰むるものに似たり。又我心は一夜の間に老成人となりたるを覺えぬ。そは喝采の雨露の我性命樹上に墜ちて、其果實を熟せしめたるにやあらん。われは昨夜サンタの劇場にありしを知る。いでや往きて彼夫人をたづね、その讃詞をも受けてましと、足の運も常より輕く、マレツチイ博士の家に往きぬ。博士は繰り返しつゝよろこびを陳べて、さてその妻の劇場より歸りし後夜もすがら熱に惱みしを告げたり。又曰ふ、今は眠れり、眠醒めなば必ず快きに至るならん、夕暮に再び訪ひ給へと。午餐にはフエデリゴ新に獲たる友だちと、我を誘ひ出して酒店に至り、初め白き基督涙號を傾け、次いで赤き「カラブリア」號を倒し、わが最早え飲まずと辭むに※びて、さらば三鞭酒もて熱を下せなどいひ、歡を盡して別れぬ。街に歩み出づれば、大空は照りかゞやきぬ。そはエズヰオの山の噴火一層の劇しさを加へて、熔巖の流愈〻闊く漲り遠く下ればなり。岸邊には早くそを看んとて、舟を買ひて漕ぎ出づるものあり。

「アヱ、マリア」の鐘鳴り止む頃、再び博士の家に往きぬ。門に進みて婢に問へば、家にいますは夫人のみにて、目覺めて後は快くなれりとのたまへり。間雜の客をばことわれと仰せられつれど、檀那は直ちに入り給ひても宜しからんとなり。美しくして晴れがましからず、心もおのづから靜まりぬべき室なり。窓の前には厚き質の幌を垂れたるが、長く床を拂へり。鏃研ぐ愛の神の童の大理石像あり。アルガント燈は人を迷はさんと欲する如き光もてこれを照し出せり。こはわが轉瞬の間に看出したる室内のさまなりき。夫人は輕げなる寢衣を着て、素絹の長椅の上に横はりたりしが、我が入るを見て半ば身を起し、左手もて被を身に纏ひ、右手を我にさし伸べたり。

アントニオの君よ、思の儘に捷ち給ひぬ、おん身も嬉しと思ひ給ふならん、千萬人の心は渾て君に奪はれたり、君は初め我がいかに君のために胸を跳らせ、後君の成功の期するところに倍するに及びて、いかに君のために安心の息を※きたるかを知り給ふまじとは、夫人が我を迎ふる詞なりき。われはその病を問ひしに、否、はや※えんとす、君も生れ更り給へる如し、舞臺に立ち給ひしとき、君の姿は美しかりき、極めて美しかりき、興會に乘じて歌ひ給ふに及びては、この世の人とは覺えざりき、又その歌ひ給ふところは皆君が上なるやうに聞き做されたり、地下の窟に迷ひ入りし少年と畫工とは、君とフエデリゴの君とに外ならず思はれたりといふ。われ。いかにもそは宣ふところの如し。我が歌ひしは皆我閲歷なりしなり。夫人。しかなるべし。君は戀の喜をも知り給へり、戀の悲をも知り給へり。君は樂を享くべき福ある人なり。今よりその福を消受し給はんことをこそ祈れといふ。われ隨即きのふより心爽かになりて、四邊のものごとの我を樂ましむる由を語りしに、夫人は我手を引き寄せて我と目と目を見合せたり。その目なざしは人の心の奥深く穿

ち透すものゝ如くなりき。夫人は現に美しき女なりき。又此時は常にも増して美しく見えたり。その頬は薄紅に匂へり。形好くつやゝかなる額際より、平に後ざまに櫛けづりたる黒髪は、ゆたかなる波打ちて背後に垂れたり。譬へば古のフイヂアスならではえ作るまじきユノの姿にも似たるなるべし。夫人。されば君は世のために生存へ給ふべき人なり、世の寶なり、幾百萬の人をか喜ばせ樂ませ給ふらん。ゆめ一人の人になその尊き身を私せしめ給ひそ。世の中の人、誰かおん身を戀ひ慕はざらん。おん身の才、おん身の藝は、いかなる頑なる人の心をも挫きつべし。斯く云ひつゝ、夫人は我を引きて、其長椅の縁に坐けさせ、さて詞を繼ぎて云ふやう。猶改めておん身に語るべき事こそあれ。疇昔の日おん身が物思はしげに打沈みてのみ居給ひしとき、拙き身のそを慰め參らせばやとおもひしことあり。その時より今日までは、まだしみ〳〵〳〵とおん物語せしことなし。いかに申し解き侍らんか。おん身は妾が心を解き誤り給ひしにはあらずやと思はれ侍りといふ。嗚呼、此詞は深く我を動したり、我もしば〳〵或は情厚き夫人の詞、夫人の振舞を誤り解したるにはあらずやと、自ら疑ひ自ら責めしことあり。われは唯だ、御身が情は餘りに厚し、我身はそを受くるにふさはしからずと答へて、夫人の手背に接吻し、自ら勵まし自ら戒めて、淨き心、淨き目もて夫人の面を仰ぎ視たり。夫人の美しく截れたる目の深黒なる瞳は、極めて靜かに極めて重く、我面を俯視す。若し人ありて、此時我等二人を窺ひたらんには、われその何の辭もてこれを評すべきを知らず。されどわれは聖母に誓ふことを得べし。我心は清淨無垢にして、譬へば姉と弟との心を談じ情を話するが如くなりしなり。さるを夫人の目には常ならぬ光ありて、その乳房のあたりは高く波立てり。われはその自ら感動するを以爲へり。夫人は呼吸の安からざるを覺えけん、領のめぐりなる紐一つ解きたり。夫人は、おん身にふさはしからざる情といふものあるべしや、おん身の才あり、おん身の貌ありてとさゝやきて、徐かに臂を我肩に纏ひ、きと目と目を見合せて、無際限の意味ありげなる、名状すべからざる微笑を面に湛へ、猶其詞を繼いで云ふやう。いかなれば妾は初め君を知る明なくして、空想に耽り實世に疎き、偏僻なる人とは看做したりけん。おん身は機微を知り給へり。機微を知るものは必ず能く勝を制す。妾が血を焚いて熱をなすものは何ぞ。妾を病ましむるものは何ぞ。妾は寤めて何をか思へる。妾は寐て何をか夢みたる。おん身の愛憐のみ。おん身の接吻のみ。アントニオよ。妾が身を生けんも殺さんも、唯だおん身の命のまゝなり。夫人はひしと我身を抱けり。一道の猛火は夫人の朱唇より出でゝ、我血に、我心に、我靈に燃えひろごりたり。彼時速し、此時遲し。はたと我頂を擊つものあり。嗚呼、功德無量なる聖母よ。こはおん身の像を寫せる小※額にして、偶※壁頭より墮ち來りしなり。否ず、偶墮ち來りしに非ず。聖母は我が慾海の波に沈み果てんを愍みて、ことさらに我を喚び醒し給ひしなり。否と叫びて、我は起ち上りぬ。我渾身の血は涌き返る熔巖にも比べつべし。アントニオよ、妾を殺せ、妾を殺せ、只だ妾を棄てゝな去りそと、夫人は叫べり。其臉、其眸、其瞻視、其形相、一として情慾に非ざるもの莫く、而も猶美しかりき。火もて畫き成せる天人の像とや謂ふべき。我身の内なる千萬條の神經は一時に震動せり。我は一語を出すこと能はずして、室を出で階を下りぬ、怖ろしきものに逐はれたらん如く。

戸の外の皆火なること、身の内の皆火なると同じかりき。薫赫の

氣は先づ面を撲てり。ヱズヰオの嶺は炎焔霄を摩し、爆發の光遠く四境を照せり。涼を願ふ煩心は、我を驅りてモロの船橋を下り、汀灣に出でしめたり。我は身を波打際にはたと僵しつ。我は自ら面の灼くが如く目の血走りたるを覺えて、巾を鹹水に漬して額の上に加へ、又水を渡り來る汐風の些しをも失はじと、衣の鈕を鬆開せり。されど到る處皆火なるを奈何せん。山腹を流れ下る熔巖の色は海波に映じて、海もまた燃えんとす。眸を凝らして海を望めば、髣髴の間、サンタが姿のこの火焔の波を踏みて立ち、その燃ゆる如き目なざしもて我を責め我を訴ふるを視、耳邊忽ち又妾を殺せ、妾を殺せと叫ぶを聞く。われ眼を閉ぢ耳を掩ひ、心に聖母を念じて、又※を開けば、怖るべき夫人の身は踉蹌きて後に※れんとす。そのさま火焔の羽衣を燒くかとぞ見えし。あはれ、其罪を想ふだに、畏怖の念の此の如きあり。その罪を遂げたらん後は、果して奈何なるべき。

もゆる河

舟に召さずや、檀那、トルレ、デル、アヌンチヤタへ渡しまゐらせんと呼ぶ聲は、身のほとりより起りて、そのアヌンチヤタといふ語は、猶能く思に沈みし我を喚び起せり。頭を擡げて見れば、岸近く櫂を止めたる舟人あり。熔巖の流るゝこと一分時に三臂長なりといへり、（伊太利の尺の名）往きて看給はんとならば、半時間には渡しまゐらせんといふ。舟は我熱を冷すに宜しからんとおもへば乘りぬ。舟人は棹取りて岸邊を離れ、帆を揚げて風に任せたるに、さゝやかなる端艇の快く、紅の波を凌ぎ行く。汐風兩の頰を吹きて、呼吸漸く鎭まり、彼方の岸に登りしときは、心も頗るおちゐたり。

我は心に誓ひけるやう。我は再び博士の閾を踰えじ。禁ぜられたる果を指ざし示す美しき蛇に近づきて、何にかはすべき。幾千の人か、これによりて我を嘲り我を侮るべけれど、猶良心に責められんには※に優れり。壁の上なる聖母は、我を墮さじとてこそ自ら墮ち給ひけめ。斯く思ふにつけて、聖母の惠の袖に掩はれつゝ、水をも火をも避け得つべき喜は一身に溢れ、心の中に有りとあらゆる善なるもの正なるものは一齊に凱歌を奏し、我は復た心の上の小兒となりぬ。天に在す父よ、願はくは禍を轉じて福となし給へと唱へつゝ、身を終ふるまでの安樂の基を立てもしたらん如く、足は心と共に輕く、こゝの小都會を歩み過ぎて、田圃間の街道に出でぬ。

人叫び、人笑ひ、人歌ひ、徒にて走るものあり、大小くさ／〃＼の車を驅るものあり。その騷しさ言はん方なし。熔巖の流は今しも山麓なる二三の村落を襲へるなり。一群の老若男女ありて奔り逃れんとす。左に嬰兒を抱き、右に裹みを挾める村婦の、且泣き且走るあり。われは財囊を傾けてこれに贈りぬ。われは山に向ふ看者の間に介まりて、推されながらも、白き石垣もて仕切りたる葡萄圃の中なる徑を登り行きぬ。衆人は先を爭ひて、熔巖の將に到らんとする部落の方へと進めり。われは數畝の葡萄圃を隔てゝ、始て熔巖を望み見たり。數間の高さなる火の海は墻を掩ひ屋を覆ひて漲り來れり。難に遭へるものは號泣し、壯觀に驚ける外國人は讙呼して、御者商人などは客を招き價を論ぜり。馬に跨れる人あり、車を驅れる人あり、燒酎甕ぐ露肆を圍みて喧譟せる農夫の群あり。凡そ此等のもの總て火光に照し出されたれば、そのさま筆舌も描き盡すべからず。

熔巖は同じ嚮に流れ行くものなれば、好事のものは歩み近づきて

迫り視ることを得べし。杖の尖又は貨幣などを※込みて、熔巖の凝りて着きたるを抜き出し、こを看たる記念にとて持ち行くものあり。流れ下る熱質の一部、その高きが爲めに分れて迸り落つることありて、その奇觀は岸拍つ波に似たり。その落ちて地上に留まるや、猶暫くその火紅を存じて、銀河の側に輝く星を看る如し。既にして空氣は漸くその隅角と周緣とを冷却して黒變せしめ、そのさま黒き絲もて編める網に黄金を裏める如し。

熔巖の流れ行く先なる葡萄の幹に聖母の像を懸けたるものあり。こはその功徳もて熔巖の炎を避けんとのこゝろしらひなるべし。されど熔巖はその方嚮を改めず。像を懸けたる一本の葡萄は、早く熱のために葉を焦し、その幹は傾きて、首を垂れ憐を乞ふ如くなり。衆人の中なる淳樸なる民等が眼は、その發落いかならんとこの尊き神像に注げり。幹は愈　曲り低れて、今や聖母のおほん裳裾と火の流との間數尺となりぬ。忽ち我が立てる側なるフランチスクス派の一僧ありて、もろ手高くさし上げて叫べり。聖母は火に燒かれ給はんとす。汝等を永劫不滅の火焔の中より救ひ給ふ聖母なるぞ。早や助け出さずやといふ。衆人は皆震慄して一歩退き、畏怖の眼を※りて、次第に撓む梢頭の尊像を仰げり。一人の女房あり。口に聖母の御名を唱へつゝ、走りて火に赴きて死せんとす。爾時僅に數尺を剰したる烈火の壁面と女房との間に、馬を躍らして騎り入りたる一士官あり。手に白刃を抜き持ちてかの女房を逐ひ郤け、大音に呼びけるやう。物にや狂ふ、女子、聖母爭でか汝が援を求めん。聖母は彼拙く彩りたる、罪障深きものゝ手に穢されたる影像の、灰燼となりて滅せんことをこそ願ふなれといふ。その聲はベルナルドオが聲なり。その行は※忽の間に一人の命を助けて、その言は俗僧の妄誕をいましめ得たるなり。われはこの昔の友を敬する念を禁ずること能はずして、運命の我等二人を遠離けしを憾とせり。されど我胸は高く跳りて、今渠に對ひて名告り合ふことを欲せず、又能はざりき。

舊羈※

アントニオならずやと呼ぶ聲あり。我に迫りて手を※れり。初はわれベルナルドオの己れを認め得たるならんとおもひしが、その面を視るに及びて、そのフアビアニ公子なるを知りぬ。公子はわが昔の恩人の壻にして、フランチエスカの君の夫なり。我を以て不義の人となし、我に訣絶の書を贈れる人の族なり。公子。こゝにて逢はんとは思ひ掛けざりき。夫人に語らば定めて喜ぶことならん。されどいかなれば夙く我們を訪ねんとはせざりし。カステラマレに來てより既に八日になりぬ。われ。君達のこゝに在すべしとは、毫しも思ひ掛けざりき。そが上わが伺候を許し給はんや否やだに知らねば。公子。現にさることありき。おん身は昔にかはる男となりて、婦人のために人と決闘し、脱走したりとの事なりき。そは我とても好しとは思はず。をぢ君のことば短なる物語にて、その概略を知りし時は、我等もいたく驚きたり。おん身はをぢ君の書を獲たるならん。その書は優しき書にはあらざりしならんといふ。我はこれを聞きつゝも、むかしの羈※の再び我身に纏るゝを覺えて、只だ恩人に見放されたる不幸なる身の上を侘ちぬ。公子は我を慰めがほに、又詞を繼いで云ふやう。否々、おん身を見放さんはをぢ君の志にあらず。我車に上りて共に來よ。今宵は妻のために思掛なき客を伴ひ還らん

とす。カステラマレは遠くもあらず。旅宿は狭けれど、猶おん身が憩はん程の房はあるべし。をぢ君の性急なるはおん身も兼ねて知れるならずや。この和睦をばわれ誓ひて成し遂ぐべしといふ。我は首を垂れてこの成ぎの覺束なかるべきを告げしに、公子は無造作に我詞を打消して、我を延きて車の方に往きぬ。

車に乗りてより、公子は我に別後の事を語れと迫りぬ。わが賊寨に入りしことを語るに及びて、公子は面に笑を帶びて、そは即興詩にはあらずや、記憶より出でずして空想より出づるにはあらずやといひ、又恩人の絶交書の事を語るに及びて、苛酷なり、太だ苛酷なり、されどそはおん身の改悛すべきを期してなり、おん身を愛してなり、おん身はよもや非を遂げて劇場に出でなどはせざりしならんといふ。われは直ちに、否、昨晩出でたりと答へき。公子。そは實に大膽なる事なりき。結果はいかなりしか。われ。望外なりき。喝采の聲止まずして、幕の外に出でゝ謝すること再びなりき。公子。御身にかゝる成功ありしか。そは責めてもの事なりき。此詞は我材能に疑を挾めるものなれば、われはそを聞きて快からずおもひぬ、されど恩惠の我口を塞げるを奈何せん。われは夫人に會はんことの心苦しさを訴へしに、公子は唯だ戲に、そは説法なくては濟まぬならん、されど説法を聽聞せんもおん身に害あらじと答へぬ。

兎角いふ程に、車は旅店の門に到りぬ。一少年の髪に燒※當てゝ好き衣着たるが、門前に立てり。公子を迎へて云ふやう。フアビアニなるか。好くこそ歸り來たれ。細君は待ち兼ね給へり。かく云ひつゝ我を視て、扨は新顔の即興詩人を伴ひ歸りしか、チエンチイといふなるべし、違へりやと云ふ。公子はチエンチイとはと我面を顧みたり。われ。そは我が番附に書かせし名なり。公子。然なりしか。そは責めてもの思案なりき。少年。フアビアニ、御身は此人のいかに戀愛を歌ひしを想ひ得るか。昨夜おん身が「サン、カルロ」座に往かざりしこそ遺憾なれ。めでたき才藝にこそとて、我と握手し、我と相見る喜びを述べ、又フアビアニに向ひて云ふ。今宵はおん身に晩餐の馳走を所望すべし。この好漢者をおん身等夫婦にて私せんとはせじ。公子。問はるゝまでもなく、おん身は何時にても我方に歡迎せらるゝならずや。少年。さるにてもおん身は、何故に猶我等二人のために紹介の勞を取らずして、互にその名を知ることを得ざらしむるぞ。公子。そはいらぬ禮儀なり。われは熟く渠と相知れり。汝は我友なれば、渠は特らに紹介をば求めざるべし。渠は唯だおん身を知ることを得たるを喜ぶならんといふ。此挨拶は固より我心に慊ねど、われは又恩惠のために口を塞がれたり。少年は我方に向ひぬ。さらばわれ自ら我身を紹介すべし。おん身の何人たるは我既に知れり。我名はジエンナロなり。國王陛下の護衛たる一將校なり。（微笑みつゝ）拿破里の名族にて、世の人は第一に位すとぞいふ。そは僞にもあらざるべし。就中わがをばは頗るこれに重きを置けり。おん身の如きを知るは、大いなる幸なり。おん身の才と云おん身の吭と云ひと、猶詞を繼がんとするを、フアビアニは押しとゞめて、止めよ〳〵、さる挨拶を受くることは猶不慣なるべし、紹介とやらんも最早濟みたるべければ、夫人の許に往かん、かしこには又和議といふ難關あり、おん身仲裁の煩を避けずば、今の辯舌を殘し置きて其時の用に立てよと云ひつゝ、彼士官と我とを延きて、旅店の一間に進み入りぬ。われはこの生客の前にて、我身の上の大事を語らるゝを喜ばねど、二人は親しき友なるべければと自ら思ひのどめて、遲れ勝に跟ひ行きぬ。

やうやくにして歸り給ひしよと迎ふるは、久しく面を見ざりしフランチエスカの君なりき。公子。現にやうやくにして歸りぬ。されど二人の賓客を伴へり、夫人は一聲アントニオと云ひしが、忽又調子を更へてアントニオ君と云ひつゝ、その嚴かに落つきたる目を擧げて、夫と我とを見くらべたり。われは身を僂めてその手に接吻せんとせしに、夫人は我を顧みず、手をジエンナロにさし伸べて、晩餐の友を得たる喜を述べ、夫に向ひて、エズヰオの爆發はいかなりし、熔巖はいづ方へ流れんとするなど問ひぬ。公子は略ぼ見しところを語りて、我等の邂逅の事に及び、今は客として伴ひたれば昔の事を責め給ふなと云へり。ジエンナロ。然なり。此人いかなる罪を犯しゝか知らず。されど天才には何事をも許さるべきならずや。夫人は纔に面を和げて我に會釋しつゝジエンナロに對ひて云ふやう。君のいつも面白げに見え給ふことよ。犯しゝ科もあらねば、免すべき筋の事もなし。けふは何の新しき事を齎し給ふ。佛蘭西新聞には何の記事かありし。昨夜はいづくにてか時を過し給ひしと問ひぬ。ジエンナロ。新聞には珍らしき事も候はず。昨夜は劇場にまゐりぬ。セヰルラの剃手の僅に末齣を餘したる頃なりき。ジヨゼフイインはまことに天使の如く歌ひしが、一たびアヌンチヤタを聞きし耳には、猶飽かぬ節のみぞ多かりし。さはいへ我が往きしは彼曲のためにはあらず。即興詩を聞かんとてなりき。夫人。その即興詩人は君の心に協ひしか。ジエンナロ。わが期する所の上に出でたり。否、衆人の期せし所の上に出でたり。我は諛はんことを欲せず。又藝術は我等の批評もて輕重すべきものにあらず。されど我は夫人に告げんとす。夫人よ、渠の即興詩をいかなる者とか思ひ給ふ。謳者の人物はその詩中に活動して、滿場の客はこれが爲めに魅せらるゝ如くなりき。何等の情ぞ。何等の空想ぞ。題にはタツソオあり、サツフオオあり、地下窟ありき。篇々皆書卷に印して、不朽に垂るとも可なるやう思ひ候ひぬ。夫人。そは珍らしき才ある人なるべし。きのふ往きて聽かざりしこそ口惜しけれ。ジエンナロ。（我方を見て）夫人は其詩人の今宵の客なるをば、まだ知らでやおはせし。夫人。さてはアントニオなりとか。舞臺にまで上りて、即興詩を歌ひしとか。ジエンナロ。然なり。その歌は舞臺の上にも珍らしき出來なりき。されど夫人は舊く相識り給ふことなれば、定めて屡　その技倆を試み給ひしならん。夫人。（ほゝ笑みつゝ）まことに屡　聞きたり。まだ童なりし頃より、アントニオが技倆をば讃め居りしなり。公子。その時われは早く柱の冠をさへ戴かせたり。夫人は處女なりしとき其即興詩の題となりぬ。されど今は食卓に就くべき時なり。ジエンナロ、おん身はフランチエスカを伴ひ往け。われは外に婦人なければ即興詩人を伴はん。いざ、アントニオ君、手を携へて往かんと、戲れつゝ我を導けり。ジエンナロ。さるにても、フアビアニ、おん身は何故我に一たびもチエンチイの事を語らざりしぞ。公子。我家にてはアントニオと呼びならへり。その即興詩人となれるを夢にだに知らねばこそ、前の和睦の一段は生じたるなれ。アントニオは言はゞ我家の子なり。アントニオ、然にはあらずや。（我は公子を仰ぎ視て會釋せり。）アントニオは好き人物なり。唯だ物學ぶことを嫌へり。ジエンナロ。渠は既に萬物を師とする詩人なり。いかなれば強ひて書を讀ませんとはし給ひし。夫人。（戲の調子にて）餘りに讃めちぎり給ふな。我等が渠の机に對ひて數學理學に思を覃むるを期せし時、渠は拿破里の女優に懸想してうはの空なりしなり。ジエンナロ。そは多情多恨なる證なるべし。女優とはいかなる美人な

りしぞ。その名をば何とかいひし。夫人。アヌンチヤタとて人柄も技倆も共に優れし女なりき。ジエンナロ。（盃を擧げて）アヌンチヤタは我も迷ひし一人なり。そは好趣味ありと謂ふべし。さらば、即興詩人の君、アヌンチヤタの健康を祝して一杯を傾けてん。（我は苦痛を忍びて盞を※せたり。）夫人。そも一わたりの迷にあらず。議官の甥と鞘當して、敵手には痍を負はせたれど、不思議にその場を遁れ得たり。かくてこたび「サン、カルロ」座には出でしなり。アントニオをば舊く知りたれども、その大膽なることかくまでならんとは、我等も思ひ掛けざりき。ジエンナロ。その議官の甥と宣ふは、近頃こゝに來て禁軍の指揮官となりし男ならん。我も前の夜出逢ひしが、才氣ある好男子と思はれたり。想ふに情夫先づ來りて、アヌンチヤタも繼いで至るにはあらずや。此推測にして差はずば、拿破里はアヌンチヤタが最後の興行とその合※の禮とを見るならん。夫人。禁軍の將校たるものゝ爭でか歌妓を娶るべき。そは家を汚すに當るべければ。われ。（震ふ聲をえも隱さで）名士の妻を藝術界に求めて、幸福と名譽とを得たるは、その例ありとこそ思ひ候へ。夫人。幸福は或は有らん。名譽は有るべきやうなし。ジエンナロ。否、おん身に忤ふには似たれど、己れなどはアヌンチヤタを得ば、名譽此上なしとおもへり。されば人も然ならんとおもふなり。そは兎まれ角まれ、アントニオの君、今宵の即興を聞せ給へ。夫人は君がために好き題を撰み給ふべければ。夫人。そは撰むまでもなし。ジエンナロの好むところにしてアントニオの能くするところといはゞ、題は戀愛と定まり居るならずや。ジエンナロ。善くこそ宣ひたれ。その戀愛とアヌンチヤタとを題とせん。われ。又の日にはいかなる題をも辭まざるべし。今宵のみは免し給へ。心地も常ならぬやうなり。外套着ずして汐風を受け、直ちに火山の熱さに逢ひ、歸るさの車にて又涼風に觸れし故にや。公子。アントニオも早や技藝家の自重といふことを覺えたりと見えたり。今宵は免すべければ、明日は共にベスツムに往け。かしこには詩料あり。こも亦拿破里におん身が自重を示す手段なるべし。（我はえ辭まで會釋せり。）ジエンナロ。好し、渠を伴ひて行かん。渠一たび希臘廢祠の中に立たば、神來の興忽ち動きて、古のピンダロスを欺く詩を得るならん。公子明日より四日の旅路なり。歸るさにはアマルフイイとカプリとを見んとす。夫人。旅の事をば猶明朝かたらふべし。夫人先づ起ちて我等は卓を離れ、我は始て夫人の手に接吻することを得たり。公子は今夜書を作りてをぢに寄せ、我がために地をなさんと云ひぬ。ジエンナロは打ち戲れて、我はアヌンチヤタを夢にだに見ん、夢なれば決闘を求むる人はあらじと云ひて別れぬ。

われ若しこの遊を辭みなば、我生涯の運命はこゝに一變したるならん。後に思へば、此遊の四日は我少壯時代の六星霜を奪ひ去りたるなりき。誰か人間を自由なりと謂ふ。いかにも我は、目前に張りたる交錯せる綱を擇み引くことを得べし。されど我はその綱のいづれの處に結ばれたるを知るに由なし。我は恩人の勸に會ひて諾と曰ひたり。こは我生涯の未來の幾齣のために、舞臺の幕を緊しく閉づべき綱なりしを奈何せん。已みぬるかな。

われは數行の書をフエデリゴに寄せて、この思掛なき邂逅と小旅行とを報ぜんとす。こを寫し畢りしとき、我胸には種々の情の群り起るを覺えき。さても此夕の事多かりしことよ。サンタが道ならぬ戀、ベルナルドオの再び逢ひて名告り合はざる、恩人にめぐりあひての後の境遇、彼といひ此といひ、此身は風のまに〳〵弄ばるる

一片の木葉にも譬へつべき心地ぞする。きのふは縁なくゆかりなき公衆の喝采を得て、けふは世に稀なるべき美人のわが優しき一言を希ひ求むるに逢ふも我なり。忽ち舊誼の絲に手繰り寄せられて、一餐の惠に頭を垂れ、再び素のカムパニアの孤となるも我なり。恩人夫婦はわが昔の罪を宥して我を食卓に列らしめ、我を遊山に伴はんとす。豈慈愛に非ざらんや。唯だ富人の手に任せて輕く投卑するときは、その賚は貧人心上の重荷となるを奈何せん。

苦言

伊太利風景の美は羅馬又はカムパニアの郊野に在らず。されば我が少しくこれを觀ることを得しは、曾てネミの湖畔に遊びし時と近ごろ拿破里に來し時とのみ。こたび尋ねし勝概こそは、始めて我心を滿ち足らしめ、我をして平生夢寐する所の仙鄉に居る念をなさしめしものなれ。凡そ外國の人などの此境を來り訪ふものは、これをその曾て見し所の景に比べて、或は勝れりとし或は劣れりともするなるべし。足本國の外を踐まざる我徒に至りては、只だその瑰偉珍奇なるがために魂を褫はれぬれば、今復たその髣髴をだに語ることを得ざるならん。

素とわれは山水の語ることを得べきや否やを疑ふものなり。山水の全景は一齊に人目を襲ふ。而るにこれを筆舌に上すときは、語を累ねて句を作し、句を積みて章を作し、一の零碎の景に接するに他の零碎の景を以てす。譬へば寄木細工の如し。いかなる能辯能文の士なりとも、その描寫遺憾なきことを得ざらん。そが上に我が臚列する所の許多の小景は、われ自らこれを前後左右に排置して寄木の如くならしむるに由なし。その排置の如きは、一に聽者讀者の空想に委ぬ。是に於いてや、我が説く所の唯一の全景は、人々の心鏡に映じて千樣萬態窮極することなし。且人をして面貌を語らしめて聽け。目は此の如し、鼻は此の如しと云はんも、到底これに縁りて其眞相を想像するに由なからん。唯だ君の識る所の某に似たりと云ふに至りて、僅にこれを彷彿すべきのみ。山水を談ずるも亦復是の如し。人ありて我にヘスペリアの好景を歌へと曰はゞ、我は此遊の見る所を以てこれに應ふるならん。而して聽者のその空想の力を殫して自ら描出する所のものは、竟にわが目擊せし所の美に及ばざるなるべし。蓋し自然の空想圖は※に人間の空想圖の上にあるものなればなり。

カステラマレを發せしは天氣めでたき日の朝なりき。これを憶へば烟立つエズヰオの巔、露けく緑深き葡萄の蔓の木々の梢より梢へと纏ひ懸れる美しき谿間、或は苔を被れる岩壁の上に顯れ或は濃き橄欖の林に遮られたる白堊の城砦など、皆猶目前に在る心地ぞする、穹窿あり大理石柱ある竈女の祠の、今や聖母の堂となりたる（マドンナ、サンタ、マリア）は、古を好む人の心を留むべき遺蹟なり。一壁崩壞して、枯髏殘骨の露呈せる處に、葡萄の覃ひ來りて、半ばその覆ひたるは、心ありてこの悲慘の景を見せじとするにやとさへ思はれたり。

我目前には猶突兀たる山骨の立てるあり。物寂しく獨り聳えたる塔の尖に水鳥の群立ち來らんを候ひて網を張りたるあり。脚底の波打際を見おろせばサレルノの市の人家碁子の如く列れり。而して會※その街を過ぐる一行ありしがために、此一寰區は特に明かなる印象を我心裡に留むることを得たり。角極て長き二頭の白牛一車を輓

けり。車上には山賊四人を縛して載せたるが、その眼は猛獣の如く、炯々として人を射る。瞳黒く貌美しきカラブリア人あり。銃を負ひて、車の兩邊を騎行せり。

旅の初一日の宿をばサレルノと定めたり。この中古學問の淵叢たる市に近づくとき、ジエンナロのいふやう。※帛は黄變すべし。サレルノ騒壇の光は今既に滅せり。されど自然といふ大著述は歳ごとに鏤梓せらる。予はアントニオと同じく、師とするところ此に在りて彼に在らずといふ。われ答へて、自然固より師とすべし、只だ書册も亦未だ棄つべからず、譬へば酒飯の並びに廢すべからざるが如しといひしに、フランチエスカの君は我言を是なりとし給ひぬ。

此時フアビアニ公子傍より、アントニオよ、言ふは易く行ふは難きものぞ、羅馬に歸りての後は、その詞の僞ならぬを明にせよといふ。羅馬の一語は我が思ひ掛けざるところなりき。我は心の中に、復た羅馬には往かじと誓ひながら、詞に出して爭はんとはせざりき。

公子は更に語を繼ぎてさま〴〵＼の事をいひ出で、人々のこれに答へなどするひまに一行は早くサレルノに到りぬ。我等は先づ一寺院に入りたり。ジエンナロ進み出でゝいふやう。こゝにてはわれ案内者たることを得べし。これはサレルノにてみまかり給ひし法皇グレゴリヨ七世（獨帝と爭ひて位を逐はれ、千八十五年此に終りぬ）の遺骨を收めし龕なり。その大理石像はかしこなる贊卓の上に立てり。さてこの石棺は歷山大帝の遺骸を藏むといふ。公子。何とかいふ、歷山大帝の躯こゝにありとや。ジエンナロ、我が聞きしは然なりき、さにはあらずや、と寺僮を顧みれば、まことに仰の如しと答ふ。われつら〳〵＼棺を見て、否、そは誤りなるべし、歷山大帝の躯こゝに在りといはんは、歷史を蔑にするに近し、この浮彫の圖様は大帝凱旋の行列なれば、かゝる誤を傳へしにや、見給へ、かしこなる寺門に近き處にもこれに似たる石棺ありて、その圖様は酒神の行列なり、彼棺は素とペスツムに在りしを、こゝに移してサレルノの一貴人の永眠の處となし、その石像をば傍に立てたり、此類の棺槨いと多し、大帝の事を圖したりとて其屍を藏むとは定め難しといふ。ジエンナロは唯だ冷かに、現にさることあらんも計られずとのみ答へしに、フランチエスカの君我耳に付きて、自ら怜悧がりて人を屈するは惡しき習ぞと宣ふ。我は頭を低れて人々の後に退きぬ。

晩鐘の鳴る頃、公子とジエンナロとは散歩にとて出で、我は夫人に侍して客舍の軒に坐し居たり。海づらは乳の如き白色に見え、熔巖石を敷きたる街路より薔薇紅にかゞやける地平線のあたりまで、いと廣やかに晴れ渡り、波打際は藍色にきらめけり。かゝる色彩の配合は羅馬の無きところなり。われ、めでたき彩繪には候はずやと云へば、夫人、見よ、雲は今「フエリチツシイマ、ノツテ」（幸ある夜を祈る）を言ふ時ぞ、と山嶽の方を指ざし給ふ。橄欖の林に隱顯せる富人の別業の邊よりは※に高く、二塔の巓を摩する古城よりは又 に低く、一叢の雲は山腹に棚引きたり。われ。彼雲の中に棲みて、大海の潮の漲落を觀ばや。夫人。さなり。かしこに住みて即興詩を吟ぜよ。唯だ聽くものなきが恨なるべし。われ。のたまふ如く、其恨は思ひ棄て難し。詩人の喝采を受くるは草木の日光を受くると同じ。囹圄のタツソオが身を害ひしは、獨り戀路の關を据ゑられしが爲めのみにあらず。その詩の爲めに知音を得ざるを恨みしが爲めなり。夫人。われは今おん身が上を語れり。タツソオが事を言はず。われ。タツソオは詩人なり。されば好き例と思ひて引き出で

しまでに候ふ。夫人。アントニオよ、さてはおん身は自ら詩人なりと許す心あるにやあらん。我上を語らんときは、不朽の業ある人の名をば呼ばぬぞ好き。おん身は物に感動し易き情ありて、又能くさる情を解するより、直ちに己れの詩人たるを信ぜんとするならん。そは世間幾多の人の具ふる所にして、又能くする所なり。これに惑ひて徒らに思ひ上がりなどせば、生涯の不幸となるべきものぞといふ。われは面の火の如くなれるを覺えて、仰せはさる事ながら、わが自ら深く信ずるところをば包まで申すを聞き給へ、「サン、カルロ」座なる數千の客は我に何の由縁もなきに、口を齊うして喝采したり、われは惠深き君の我喜を分ち給はんことを忖りしにと答へたり。夫人。おん身の友は多かるべし。されどまことにおん身の喜を分たんもの我が如きは少からん。おん身の情に厚きこと、心ざまの卑からぬことは、我等よく知りたり。さればこそをぢ君の御腹立をも申解かばやとさへ思ふなれ。おん身には好き稟賦あり。學ばゞ一廉の人物ともなるらん。されど今の儘にては、その才僅かに坐客の耳を悦ばしむるに足りて、未だ世に立ち名を成さんには遑あらざるべし。われ。才の拙く學の足らざるは、げにおん詞の如くなり。されどわが公衆に對せし時の成功をば、君の親しく視給はねば知らせ參らせんやうなし。只だ君の信ぜさせ給ふと覺しきジエンナロの君は彼夕劇場にありて、我技を賞し給ひきと申さば足りなん。夫人。おん身はジエンナロを證人とせんとやいふ。ジエンナロは好き紳士なれど、われは其藝術上の批評には重きを置かず。劇場に集ひし一夜の公衆に至りては、いよ〳〵信ずべからず。おん身若し彼夕もろひとに辱められんには、われ深く憾とすべし。その事なくして畢りしは、まことに自他の幸なり。おん身が場に上りしは唯だ一夜にして、假名をさへ用ゐぬれば、かゝる夢の如きよしなしごとの久しく人の記憶に殘らん憂はあらじ。三日の後には我等又拿破里に在り。そのあくる日には羅馬へ旅立すべし。羅馬に往きて、おん身の耐忍と勉勵とを見せよ。おん身に眞の事を告ぐるは我のみぞとのたまひぬ。

古祠、瞽女

ペスツムは宿るべき家もなく、こゝよりかしこへの道は賊などの出沒することもありと聞えければ、翌日まだ暗きに一行は車に上りぬ。騎馬の憲兵は護衛として車の傍に隨へり。

道の左右には柑子の林ありて、その鬱茂せる狀は深山の森にも似たるべし。セラの流を渡るときは、垂柳月桂の澄める水の面に影を倒せるを見き。荒蕪せる丘陵の間、時に穀の長ぜる田圃あり。道に沿ひて蘆薈霸王樹など野生したるが、皆ところ得がほに延び育ちたり。

既にして一行は一古祠の前に立てり。即ち二千年前の建立にして、その樣式希臘時代の粹と稱せらる。この祠、見苦しき酒店一軒、貧しげなる人家三棟、籐もて作れる小屋三つ四つ。是れ世界に名高きペスツムの村なり。いにしへは此村薔薇に名あり。見渡す限り紅の霞に掩はれたりし由物に見えたれども、今は一株をだに留めず。身邊渾て是れ緑にして、其色遙に山嶽に連れり。平地には菫花多く、蔚その外の雜草の間に咲きひろごりたり。自然の力餘ありて人間の工を加へざる處なれば、草といふ草、木といふ木、おのがじし生ひ榮ゆるが中に、蘆薈、無花果、色紅なる「ピユレトルム、インヂク

ム」などの枝葉さしかはしたる、殊に目ざましくぞ覺えられし。

シチリアの自然、その豐饒の一面と荒蕪の一面とはこゝにあり。シチリアの希臘古祠はこゝにあり。而してシチリアの貧窶もまたこゝにあり。一行のめぐりには一群の乞丐來り集ひたり。その狀南海諸島の蕃人にも似たるべし。男子は長き羊の皮を、毛を表にして身に纏へり。暗褐色なる雙脚には靴を穿かず、剪らざる髮は黒き面の邊に翻り垂れたり。妬ましき迄に直に美しく生ひ立ちたる娘たちのこれに隨へるを見るに、そのさま半ば赤はだかなりといふべし。膝の上まで截り開きたる短衣は裂け綻び、鬆く肩に纏へる外套めきたる褐色の布は垢つきよごれ、長き黒髮をば項に束ね、美しき目よりは恐ろしき光を放てり。

此群に十二歳を踰えじと見ゆる、すぐれて麗しき娘あり。アヌンチヤタとなるべき姿にもあらず、さればとて又サンタとなるべき貌にもあらず。前にアヌンチヤタが物語に聞きつる、メヂチ家の愛憐神女の像は、かゝる面影あるにはあらずやと思はる。實に此少女の清き容は、人をして囘抱せんと欲せしむるものにあらで、却りて膜拜せんと欲せしむるものなり。

この少女は少し群を離れて立てり。褐色なる方巾偏肩より垂れたるが、巾を纏はざる方の胸と臂とは悉く現はれたり。雙脚には何物をも着けざりき。かくはかなき身と生れても、流石に粧ひ飾る心をば持ちたるにや、髮平かに結ひ上げて、一束の菫花を挿せるが、額の上に垂れ掛れり。われその容を窺ふに、羞慙あり、慧巧あり。而して別に一種言ふべからざる憂愁の色を帶びたる如くなりき。唯だその雙眸は恆に地上に注ぎて、人の面を見んことを恐るゝものゝ如し。

口々に物乞ふ中に、この少女のみは一言をだに發せざりき。ジエンナロ先づ進み寄りてこれに錢を與へ、手を頤の下に掛けて、此群には惜しき佳き兒ぞといふ。公子夫婦もまことに然なりといひぬ。われは少女の面の紅を潮するをみたり。少女は目を開けり。而してわれ始てその瞽なるを知りぬ。

われは同じくこれに物を贈らんと欲して敢てせざりき。既にして人々は乞丐の群に窘められて、酒店の軒に避けたれば、獨り立ち戻りて、盾銀一つ握らせたり。盲人の敏き習として、少女はその常の錢ならぬを知りたるなるべし、顔は燃ゆる如くなりて、その健かに美しき唇は我手背に觸れたり。われはその接吻の渾身の血に浸み渡る心地して、遽しく我手を引き退け、酒店の軒に馳せ入りぬ。

酒店は只だ一室ありて、大いなる竈殆どその全幅を占めたり。惜しげもなく投げ入れたる薪は盛に燃えあがりて、烟は岫を出づる雲の如く、騰りて黒みたる仰塵に至り、更に又出口を求めて室内をさまよへり。主人の蔭多き大柳樹の下にありて、誂へし朝餉の支度する間に、我等はこの烟煤の窟を※れ、古祠を見に往くことゝしたり。委它たる細徑は荊榛の間に通ぜり。公子とジエンナロとは手を組み合せて、フランチエスカはこれに腰掛けつゝ舁かれ行く。

漫歩には似つかはしからぬ恐ろしき道かな、と夫人笑みつゝ云へば、案内者の一人、さのたまへど三とせの前迄は此道全く棘に塞がれたりき、又己れが幼き頃社の圓柱のめぐりに、砂土堆く積もり居しを記え居り候ふと答ふ。案内者は皆この詞の誤らざるを證せり。

一行の後には、さきの乞丐の群猶隨ひ來り、皆目を※りて我等を打目守れり。若しわれ等にしてふとその一人の面を見ることあるときは、その手は忽ち賜を受くるがために伸べられ、その口は忽ち「ミ

ゼラビレ」（憐を乞ふ語）を唱へ出すなり。瞽女はいづち往きけん見えず。われはあはれなる少女の、獨りいかなる道の邊に蹲り居るかを思ひ遣りぬ。

我等は一の劇場と一の平和神祠との迹なる斷礎の上を登り行きぬ。ジエンナロ人々を顧みて、あはれ平和と演劇との二つのもの、いかなればかく迄相親むことを得たるぞと云ふ。（劇場の徒の多く相嫉視するを諷するにや。）我等は海神祠の前に立てり。世にはこれを「バジリカ」とぞいふ。近き頃、彼ポムペイの古市と同じく、闇黒の裡より出でゝ人の遺忘を喚び醒したるものは、此祠と穀神祠となり。この祠の荊棘に鎖され、土石に埋められたること幾百年ぞ。幸に外國の一畫師ありてこゝを過ぎ、柱尖の僅に露出せるを見、その美を喜びて寫し歸りしより、世の人こゝに注目し、終に棘を刈り土を掘りて、此の宏壯なる柱堂の、新に落せるものゝ如く、耽古者流の愛で翫ぶところとなるには至りしなり。圓柱は黄なるトラヱルチイノ石もて作られたり。（相待上新しき地層の石にして、石灰分ある温泉の鹽類の凝りて生ずる所なり。）無花果樹はその匝に枝さしかはし、野生の葡萄は柱頭迄攀ぢ上り、石質の罅隙を生じたる處には、菫花の紫と「マチオラ」の紅とを見る。

我等は倒れたる一圓柱の趺の上に踞したり。ジエンナロの力に頼りて、乞兒の群を逐ひ拂ふことを得たりしかば、我等の心靜に四邊の風景を玩ぶには、復た何の妨もあらざりき。山の姿、海の色、この古神祠の頽敗の狀など、一として我情を動さゞるものなし。公子、今こそは我等がために一篇の即興詩を作すことを辭せざるならめ、と問ひ掛け給へば、夫人も頷きて同じ心を表し給ふ。われは柱を背にして立ち、少時記せしところの一歌謡の調を借りて、目前の景を歌ひ出せり。山水の美、古藝術のすぐれたる遺蹟を見るにつけ、哀なるはかの目しひたる少女の上にぞある。この自然の無盡藏は誰も受くべき賜なるに、少女はそをだに受くることを得ずといふ。是れ我一曲の主なる着想なりき。歌※る比ひには、われ聲涙共に下るを禁ずること能はざりき。ジエンナロは手を拍ちて激賞し、公子夫妻はわが多少の情あるを認諾せり。

人々は石級を下りぬ。われはこれに從はんと欲して、ふと頭を回らしゝに、我が倚りたりし柱の背後に、身を薫高き「ミユルツス」の叢に埋めて、もろ手を項に組み合せたる人あるを見き。而してそはかの目しひたる少女なりき。われはこの哀むべき少女の我歌を聞きしを知りぬ、我がその限なき不幸を歌ふを聞きしを知りぬ。餘りの便なさに、身を僂めてさし覗けば、袖は梢に觸れてさや〳〵と鳴り、少女はさとくも頭を擡げつ。われは思做にや、その面の色のさきより蒼きを覺えたるが、少女を驚さんことのいとほしくて、身を動すことを敢てせざりき。少女は暫し耳を欹てゝアンジエロにやと呼びぬ。われは覺えず屏息せり。少女は又俯きて坐せり。前にアヌンチヤタの我に語りし希臘の神女も、石彫の像なれば瞻視をば闕きたるべし。今我が見るところは殆ど全くこれに契へりとやいふべき。少女は祠の礎に腰掛けて、身を無花果樹と「ミユルツス」との裡に埋め、手に一物を取りてこれを朱唇に宛て、面に微笑を湛へたり。何ぞ料らん、その物は我が與へしところの盾銀ならんとは。

我情はこれに動かされて耐へ忍ぶべからざるに至りぬ。我は再び身を僂めて少女の額に接吻せり。少女はあなやと叫び、物に驚きたる牝鹿の如く、瞬く隙に馳せ去りぬ。その叫びし聲は我骨髓に徹し、その遽しく奔り去りし狀は我心魂を奪ひ、われは身邊の柱楹草木

悉く旋轉するを覺えて、何故ともなく馳せ出し、荊莽の上を踏みしだきつゝ徐かに歩める人々を追ひ越し行きぬ。

アントニオ、アントニオと呼ぶ公子の聲※なる後に聞えて、我は始て我にかへりぬ。兎をや獵せんとする、否ずば天馬空を行くとかいふ詩想の象徴をや示さんとする、と公子語を繼いで云へば、ジエンナロ、否、われ等の※歩に塞める處を、渠は能く飛行すと誇るなるべし、いざ我が濟勝の具の渠に劣らぬを證せんとて、我傍に引き傍うて走り出しぬ。公子後より、汝等は我が夫人の手を拉きて同じ戲をなすことを要むるにやといふとき、ジエンナロは直に歩を駐めたり。

酒店に歸り着きし後は、瞽女は影だに見えざりき。その叫びし聲の猶絶間なく耳に聞ゆるを、怪しとおもひてつく〳〵〃＼聽けば、そは我心跳のかく聞做さるゝにぞありける。嗚呼卑むべきは我心にもあるかな。少女が胸中の苦を永言して、これをして深く生涯の不幸を感ぜしめ、終にはその額に接吻して驚かしたるは何事ぞや。そが上にかの接吻は我が婦女に與へたる第一の接吻なり。少女の貧しきを侮り、その目しひたるを奇貨として、我は我が未だ嘗て敢てせざりしところのものを敢てしたり。我はベルナルドオを輕佻なりとせり。而るに我が爲すところも亦此の如し。現に塵の世に生れたる人、誰か罪業なきことを得ん。いかなれば我は自ら待つことの寛くして、人を責むることの酷なりしぞ。われ若し再び瞽女に逢はば唯だ地上に跪いてこれに謝せん。

一行は車に上りてサレルノに歸らんとす。我は心に今一度瞽女を見んことを願ひしが、人に問ふことを憚りたり。忽ちジエンナロの案内者を顧みて、さるにても彼の目しひたる娘はいかにしたると問ふを聞く。案内者の一人答へてララが事にて候ふや、海神祠のほとりにやあるらん、常に彼處にあることを好めばといふ。ジエンナロは「ベルラ、ヂヰナ」（神々しきまで美しき子よとなり）と呼びて、手もて接吻の眞似したり。車は動き出しぬ。さては彼子の名をばララといふとこそ覺ゆれ。われは馭者と脊中合せに乘りたれば、古祠の柱列のやうやく遠ざかりゆくを見やりつゝ、耳には猶少女の叫びし聲を聞きて、限なき心の苦しさを忍び居たり。

路傍に「チンガニイ」族の一群あり。火を溝渠の中に焚きて食を調へたり。手に小鼓を把りて、我等を要して卜筮せんとしつれど、馭者は馬に策ちて進み行きぬ。黒き瞳子の※電の如き少女二人、暫し飛ぶが如くに車の迹を追ひ來りしが、ジエンナロはこれをも美しと愛で稱へき。されどララの氣高きには比ぶべうもあらざりき。

夕にサレルノに還りぬ。明日はアマルフイイに往きて、それよりカプリに　りて還らんとなり。公子自ら給ふやう。拿破里に還らば、留まることは一日にして羅馬へ立たんとぞ思ふ。アントニオが準備も暇取ることはあらじと宣給ふ。われは羅馬に往くことを願はねど、例の恩誼に口を塞がれて、僅かに、老公のおほん憤の氣遣はれてとのみ云ひしに、そはわれ等申し解くべしと答へて我に詞を繼がしめ給はず。兎角する程に、賓客のおとづれ來て、會話はこゝに絶え、我不幸なる運命もまた定まりぬ。

夜襲

天氣好き日の朝舟出して、海より望めばサレルノの美しさは又一しほなるを覺えぬ。筋骨逞ましき男六人※を搖せり。晝にしても見

まほしき美少年一人柁の傍に蹲りたるが、名を問へばアルフオンソオと答ふ。水は緑いろにして透き徹り、硝子もて張りたる如し。右手なる岸の全景は、空想のセミラミスや築き起しゝ、唯だ是れ一大苑囿の波上に浮べる如くなり。その水に接する處には許多の洞窟あり。その状柱列の迫持を戴けるに似て、波はその門に走り入り、その内にありて戯れ遊べり。突き出でたる巖端に城あり、城尖の邊には、一帯の雲ありて徐かに靡き過ぎんとす。我等は大島小島（マユウリイ、ミヌウリイ）を望みて、程なく彼マサニエルロとフラヰオ・ジヨオヤとの故郷の緑いろ濃き葡萄丘の間に隠見するを認め得たり。（マサニエルロは十七世紀の一揆の首領なり。オベエルが樂曲の主人公たるを以て人口に膾炙す。フラヰオ・ジヨオヤは羅針盤を創作せし人なり。）

伊太利に名どころ多しと雖、このアマルフイイの右に出づるもの少かるべし。われは天下の人のことごとくこれを賞することを得ざるを憾とす。此地は廣袤幾里の間、四時春なる芳園にして、其中央なる石級上にアマルフイイの市あり。西北の風絶て至ることなければ、寒さといふものを知らず。風は必ず東南より起り、椶櫚橘柚の氣を帶びて、清波を渉り來るなり。

市の層疊して高く聳ゆる状は、戯園の觀棚の如く、その白壁の人家は皆東國の制に從ひて平屋根なり。家ある處を踰えて上り、山腹に逼るものは葡萄丘なり。山上には※壁もて繞らされたる古城ありて雲を※ふる柱をなし、その傍には一株の「ピニヨロ」樹の碧空を摩して立てるあり。

舟の着く處は遠淺なれば、舟人は我等を負ひて岸に上らしめたり。岸には岩窟多くして、水に浸されたると否ざるとあり。小舟三つ四つ水なき處に引上げたるを、好き遊びどころにして、子供あまた集へり。身に挂けたるは、大抵襦袢一枚のみにて、唯だ稀に短き中單を襲ねたるが雜れり。「ラツツアロオネ」といふ賤民（立坊抔の類）の裸※なるが煖き沙に身を埋めて午睡せるあり。その常に戴ける褐色の帽は耳を隠すまで深く引き下げられたり。寺院の鐘は鳴り渡れり。紫衣の若僧の一行あり。頌を唱へて過ぐ。捧ぐる所の磔像には、新に摘みたる花の環を懸けたり。

市の上なる山の左手に、深き洞穴に隣れる美しき大僧堂あり。今は外人の旅館となりて、凡そこゝに來らん程のもの一人としてこれに投ぜざるはなし。夫人をば輿に載せて舁かせ、我等はこれに隨ひて深く巖に截り込みたる徑を進みぬ。下には清き蒼海を瞰る。一行は僧堂の前に留りぬ。内暗き洞穴は我等に向ひて其※を開けり。穴の裏には十字架三基ありて、耶蘇と二賊との像これに懸り、巖上には彩衣を着て大いなる白き翼を負ひたる數人の天使跪けり。皆美術品などいふべき限のものにはあらず、木もて彫り斑にいろどりたるまでなり。されど信仰の温き情は影を此拙作の上に留めて、おのづから美を現ぜり。

小き中庭を歩みて宿るべき部屋々々に登り着きぬ。我室の窓より見れば、烟波渺茫として、遠きシチリアのあたりまで只だ一目に見渡さる。地平線の際に、しろかね色したるものゝ點々數ふべきは舟なり。

ジエンナロは我を遊歩に誘はんとて來ぬ。いかに詩人よ。共に麓のかたに降り行きて、かしこの風景の美のこゝに殊なりや否やを見んとおもはずや。少くも女性の美は麓のかたの優れたること疑ふべからず。こゝの隣房なる英吉利婦人の色蒼ざめて心冷なるは、我が

堪ふること能はざる所なり。おん身も女子を見ることをば嫌ひ給はぬならん。恕し給へ、こは我ながらおろかなる問なりき。女子を見ることを嫌ひ給はねばこそ、君はこゝらわたりを彷徨ひて、我は又この邂逅の奇縁を結ぶことを得つるなれ。斯く戯れつゝ、ジエンナロは我を促し立てゝ石徑を下り行けり。途すがら又いふやう。猶忘れ難きは彼の目しひたる娘の美しさなり。拿破里に歸りての後、カラブリア酒誂へんをりは、かの娘をも共に取寄せんとぞおもふ。我血を沸き立たしむる功は此も彼に譲らざるべし。

我等は市街に歩み入りぬ。アマルフイイの市は裏める貨物をみだりに堆積したる状をなせり。羅馬なる猶太街の狹きも、これに比べては尚通衢大路と稱するに足るならん。こゝの街といふは、まことは家と家との間に通じ、又は家を貫きて通じたるろぢの類のみ。或るときは狹く長き歩廊を行くが如く、左右に小き窓ありて、許多の暗黒なる房に連れり。或るときは巖壁と石垣との間に、二人並び歩むに堪へざるばかりの道を開けるが、暗くして曲り、濕りて穢れ、級を登り級を降りて、その窮極するところを知らず。我等はをり〳〵身の戸外に在るを忘れて、大いなる廢屋の内を彷徨ふ念をなせり。所々燈を懸けて闇を照すを見る。而して山上は日獨り高かるべき時刻なりしなり。

既にして我等は稍開豁なる處に出でたり。一の石橋あり。こなたの巖端よりかなたの巖端に架したり。橋下の辻は市内第一の大逵なるべし。二少女ありて「サタレルロ」の舞を演せり。貌めでたく膚褐いろなる裸※の一童子の、傍に立ちてこれを看るさま、愛の神童に彷彿たり。人の説くを聞くに、この境寒を知らず、數年前祁寒と稱せられしとき、塞暑針は猶八度を指したりといふ。（寒暑針はレオミユウル式ならん。）

巖頭に小さき塔ありて、美しき入江の景色の、遠く大小二島の邊まで見ゆる處より、蘆萱、「ミユルツス」の間を通ずる迂曲せる小みちあり。これを行けば、幾もあらぬに、穹窿の如く茂りあへる葡萄の下に出づ。我等は渇を覺えぬれば、葡萄圃のあなたに白き屋壁の緑樹の間より見ゆるを心あてに歩をそなたへ向けたり。輕暖の空氣の中には草木の香みち〳〵て、美しき甲蟲あまた我等の身邊に飛びめぐれり。

到り着きて見れば、この小家のさまの畫趣多きこと言はんかたなし。壁には近き故墟より掘り出したる石柱頭と石臂石脚とを塗り籠めて飾とせり。屋上に土を盛りて園とし、柑子の樹又はくさ〳〵〳〵〵の蔓草類を栽ゑたるが、その枝その蔓四方に垂れ下りて、緑の天鵞絨もて掩へる如し、戸前には薔薇叢ありて花盛に開けるが、殆ど野生の状をなせり。六つ七つばかりの美しき小娘二人その傍に遊び戯れ、花を摘みて環となす。されどそれより一際美きは、此家の門口に立ち迎へたる女子なり。髪をば白き※布もて束ねたり。その瞻視の情ありげなる、睫毛の長く黒き、肢體の品高くすなほなる、我等をして覺えず恭しく帽を脱し禮を施さゞること能はざらしめたり。

ジエンナロ進み近づきて、さては此家あるじこそは、土地に匹儔なき美人なりしなれ、疲れたる旅人二人に、一杯の飲を惠み給はんやと云へば、いと易き程の御事なり、戸外に持ち出でてまゐらせん、されど酒は只だ一種ならでは貯へ侍らずと笑ひつゝ答ふ。その眞白なる齒に、唇の紅はいよ〳〵美さを増すを覺えき。ジエンナロ。酒はいかなる酒にもあれ、君の酌みて給はらんに、旨からぬことやはある。美しき娘の酌める酒をば、われ平生嗜みて飲めり。女主人。

されどけふは美しき娘のあらねば、色香なき人妻の酌みてまゐらするを許し給へ。ジエンナロ。さらば君ははや主ある花となり給ひしにや、そのうら若さにて。女主人。否、われははや年多くとりたり。この時傍聽したりしわれ、おん身の芳紀いくばくぞと問ひぬ。想ふにこの女子まだ十五ばかりなるべけれど、脊丈伸びて恰好なれば、行酒女神の像の粉本とせんも似つかはしかるべし。女主人はわが何の爲めに問ひしかを疑ふものゝ如く、我面を暫し守りて二十八歳と答へつ。ジエンナロ。そはまことに好き年紀にて、殊におん身には似あひたり。さるにても人の妻となりてより幾年をか經給ひし。女主人。最早十とせあまりになりぬ。かしこなる娘たちに問ひ試み給へかしといふ。この時先に門の口にて遊び居たりし二人の娘、我等が前に走り來りぬ。われは故意と娘等に向ひて、これは汝たちの母なりやと問ひしに、娘等はゑましげに主人を見て、さなり〳〵と頷きつゝ右ひだりより主人に倚り添ひたり。

女主人は酒もち來りて薦めたり。その味はいとめでたかりき。我等は杯を擧げてあるじの健康を祝したり。ジエンナロわれを指さして、この男は詩人なり、舞臺に出でゝ即興詩といふ者を歌ふを業とす、されば拿破里の婦人をばことごとく迷はしたれど、生來頑なること石の如く、世に謂ふ女嫌ひなどいふものにや、まだ婦人に接吻したることなしといへり、珍らしき人にあらずやといへば、主人、さる人は世に有りがたからんとて笑へり。ジエンナロ語を繼ぎてわれはそれとは表裏なり、あらゆる美しき女を愛し、あらゆる美しき女に接吻し、あらゆる美しき女の身方となりて、到るところ人の心をやはらぐ、されば美しき女に接吻を求むるは我權利なり、我が受け納るべき租稅なり、これをばおん身も拂ひ給はざるべからずといひて、つとあるじの手を※りたり。女主人。われは人の心やはらげ給ふといふおん惠に與らんことをも願はず、さればさる租稅をもえ納め侍らず。我租稅をば、我夫自ら來りて收め取る習なり。ジエンナロ。その夫はいづくにあるか。女主人。さまで遠からぬところにあり。ジエンナロ。われは拿破里に居れども、いまだかくまで美しき手を見つることあらず。此上に接吻一つせんといはゞ、價いくばくをか求め給ふ。女主人。盾銀一つにては貴かるべきか。ジエンナロ。さらば盾銀二つ出さば、唇をも任せ給ふべきか。女主人。否、そは千金にも換へ難し。そは吾夫の特權なり。この對話の間、女あるじは我等に酒を侑めて、ジエンナロの慣々しきをも惡む色なく、尚暫く無邪氣なる應答をなし居たり。我等はあるじのまことは十四歳にて、去年同じ里の美少年某と結婚せしこと、その夫は今拿破里にありて明日歸り來るべきこと、二人の子どものあるじの妹にて夫の留守の間來り舍れることなど、話の裏より聞き出せり。ジエンナロは二人の小娘に、查列斯銀一つ（伊太利名「カルリイノ」約十五錢五厘）與ふべければ薔薇の花束得させよといひて、そを遠ざけ、あるじに迫りて接吻せんとしたり。初めは詞もてさま／〴〵＼に誘ひたれどその驗なかりき。次には戲のやうにもてなして、掻き抱きたれど、女はいち早く擦り脱けたり。終には路易金一つ（「ルイドオル」と云ふ、約九圓七十八錢）取出し、指もて撮みて女の前にきらめかし、只だ一たびの接吻を許さば、これをおん身におくるべし、この金あらば、めでたき飾紐あまた買はるべし、その黒き髮に映好きものを擇み試みんは、いかに樂かるべきぞなど、繰返して說き勸めつ。女は我を指して、あちらのおん方は、おん身に比ぶれば※に善き人なりと云へり。われ女の手を取りて、努彼詞に耳傾けんとな

し給ひそ、彼黄金の色に目を注がんとなし給ひそ、彼男は惡しき人なり、願はくは彼男にの面當に、われに接吻一つ許し給へといひぬ。女はきと我面を見たり。われ重ねて、さきに彼男の我上を語りし中に、唯だ一つの實事あり、われ未だ一たびも女の唇に觸れずといひしは是なり、我唇は清淨なり、われに接吻し給ふは小兒に接吻し給ふと同じといひぬ。ジエンナロ。さて〳〵狡猾なる事を言ふものかな。女をくどく方便のみはわれ汝に優れりと覺えつるに、今は汝又我を凌がんとす。女主人。否々、御身は金をこそ持ち給へれ、心ざま善ならぬ人なり。我が黄金をも何ともおもはず、接吻をも何とも思はぬをおん身に見せんため、我はこの詩人の方に接吻すべし。新く言ひ畢りて、女主人は雙手もて我頬を押へ、我唇に接吻して、家の内に走り入りぬ。

日の入り果てし頃、われは獨り山上なる寺院の一房に坐して、窓より海を眺め居たり。波頭の殘紅は薔薇色をなして、岸打つ潮に自然の節奏を聞く。舟人は漁舟を陸に曳き上げたり。暮色漸く至れば、新に點したる燈火その光を増して、水面は碧色にかゞやけり。一時四隣は寂として聲なかりき。忽ち歌曲の聲の岸より起るあり。こは漁父の妻子と共に歌ひ出せるにて、子どもらしき「ソプラノ」の音は低き「バツソオ」の音にまじりたり。一種の言ふべからざる情は我胸に溢れて、我心はこれがために震ひ動けり。一の流星あり。その疾きこと擊石火の如く、葡萄の林のあなたに隕ちぬとぞ見えし。けふ我に接吻せし氣輕なる新婦の家も亦彼林のあなたにあり。われは彼女主人の美かりしをおもひ出で、又彼海神祠の畔なる瞽女の美しかりしをおもひ出でしが、その背後には心と身と皆美しかりしアヌンチヤタ」は底本では「アンヌチヤタ」」ありて、その一たび點したる火は今も猶我身を焦せり。我は餘りの堪へ難さに、口に聖母の御名を唱へて、瓶裡の薔薇一輪摘み、そを唇に押し當てつゝ心には猶アヌンチヤタが上を思へり。われは情に堪へずして、僧堂を出で、海の方へ降り行きぬ。即ち星輝を浴びたる波の岸に碎くる處、漁父の歌ふ處、涼風の面を撲つ處なり。歩みて晝間過ぎし所の石橋の上に至りぬ。この時一人の身に大外套を被り、忙しげに我傍を馳せ去りたるあり。われはその姿勢態度を見て、直ちにそのジエンナロなるを知りぬ。ジエンナロは驀地に走りて、曾て憩ひし白壁の家に向へり。我は心ともなく、その後に跟ひ行きぬ。家の窓よりは燈火の影洩りたるが、彼の外套着たる姿は其光に照されて、窓の直下に浮び出でぬ。われは葡萄架の暗き處に躲れ、石に踞して其狀を覗ひ居たり。帷を引かざれば、室の内外の光景は明白に我眼に映ぜり。この家の裏の方、側廂に通ずる大なる梯の室内より見ゆる處に、別に又一つの窓あるをも、われは此時始て認め得たり。

室内には一小卓を安んじ、上に十字架を立てたるが、燈をばその前に點せるなり。二人の小娘は衣を脱して、白き汗衫を鬆やかに身に纏ひ、卓の下に跪きて讃美歌を歌へり。姉なる新婦も亦二人の間に坐せり。我目に映じたる此一幅の圖はラフアエロの筆に成りたる聖母と二天使との圖と擇むことなかりき。新婦の漆黒なる瞳子は上に向ひて、その波紋をなせる髪は白き肩に亂れ落ち、もろ手は曲線美しき胸の上に組み合されたり。

われは屏息してこれを窺ひ居て、我脈搏の亢進するを覺えたり。既にして三人は立ちあがりぬ。新婦は二兒を延きて梯を上り、しばらくありて靜かに傍廂の戸を閉ぢ、獨り梯を下り來りぬ。さて窓に近きところを往來して、物取り片付けなどし、ふと何事をか思ひ

出でしものゝ如く、箪笥の前に坐して、その抽箱より紅色の手帳一つ取り出だしつ。打ち返し見てほゝ笑み、開き見んとするさまなりしが、忽ち又首打ち掉りて、手快く抽箱の中に投じたり。そのさま密事して父母などに見られしに驚く小兒に似たりき。

暫くして裏の方なる窓を敲く音す。新婦は驚きて頭を擡げ、耳欹てゝ聞けり。敲く音は又響きて、何事をか戸外にて言ふ如くなれど、基詞は我が居るところには聞えず。新婦は忽ち聲高く呼べり。檀那は何とて斯く遅くこゝに來給ひしぞ。何の用のおはすにか。うしろめたき事には侍らずやといふ。戸外の人は又何やらん言ひたり。新婦。さなり〳〵。おん詞はまことなり。おん身は手帳を忘れ置き給へり。さきに妹に持せて、麓なる宿屋まで遣りたれど、かしこにてはさる檀那は宿り給はずといひぬ。定めて山の上に宿り給ふならん。つとめて又持たせ遣らんとこそ思ひ侍りしなれ。手帳は現にこゝに在り。斯く云ひて、新婦は抽箱よりさきの手帳を取出せり。戸外の人は何やらん言へり。新婦は首を掉りて、否々、門の口をばえひらき侍らず、おん身のこゝに來給はんは宜しからずと云ひ、起ちてかなたの窓を開きつ。手帳をわたさんとして差し伸べたる新婦の手をば、外より握りたりと覺しく、手帳ははたと音して窓の外に落ちたり。ジエンナロの頭は此響と共に窓の内に顯れたり。新婦は走りてこなたの窓のほとりに來つ。これより後我は明に二人の詞を辨ずることを得るに至りぬ。

ジエンナロ。さらば君はわが感謝のために君の手に接吻するをだに許し給はぬにや。物落しし人の拾ひ主に謝するは世の習ならずや。そが上に走りてこゝに來つれば、喉乾きて堪へ難し。我に一杯の酒を飲ませ給ふとも、誰かはそを惡しき事といはん。何故に君は我がそこに入らんとするを拒み給ふぞ。新婦。否、かく夜ふけておん身と物言ひ交すだに影護き事なり。疾くおん身の手帳を取りて歸り給へ、我は窓を鎖すべきに。ジエンナロ。我はおん身の手を握らでは歸らず。おん身のけふ我に惜みて、彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取り返さでは歸らず。新婦は周章の間に一聲の笑を洩せり。否々。君は人の與へざる所のものを奪はんとし給ふにや。君強ひて奪はんとし給はゞ、われまた誓ひて與へざるべしといふ。ジエンナロは哀れげなる聲していふやう。我等の相見るはこれを限なるを思ひ給へ。われは再び此地に來るものにあらず。さるを君は我が手を握らんといふをだに聽き納れたまはず。我胸には君に言ふべき事さはなれど、君が手を握らんの願の外は、われ敢て口に出さじ。聖母は我等に何とか教へ給ふぞ。人は兄弟姉妹の如く相愛せよとこそ宣給へ。われはおん身の兄弟なり。我黄金をおん身と分ちて、おん身の艶やかなる姿を飾る料となさんとこそ願へ。貴き飾を身に着け給はば、おん身の美しさ幾倍なるべきぞ。おん身の友だちは皆おん身を羨むべし。されど我とおんみとの中をば世に一人として知るものなからん。斯く云ひも果てず、ジエンナロは一躍して窓より入りぬ。新婦は高く聖母の名を叫べり。

われは表の窓に走り寄りて、力を極めて其扉を打ちたり。硝子はから〳〵と鳴りたり。我は目に見えぬ威力に驅らるゝものゝ如く、走りて裏口に至り、得物もがなと見廻の、葡萄架の横木引きちぎりつ。女はニコオロにやと叫べり。さなり、我なりと、われは假聲して答へたり。室内の燈消ゆると共に、ジエンナロは窓より跳り出で、いち足出して逃げて行く。其外套は風に翻れり。ニコオロよ、いかにしておん身は歸りし、これも聖母の御惠にこそといひつ

ゝ、女は窓に走り寄りぬ。その聲は猶慄けり。われは吃りて、怨し給へ君と叫びぬ。あなやと呼ぶ女の聲と共に、扉ははたと鎖され、われは茫然として獨り窓外に立てり。

暫しありて、我は新婦の靜かに歩ゆみ、戸を開き、戸を閉ぢ、鑰を下す響を聞き、今は心安しとおもひて、そと歸途に就きぬ。われは心中に無量の喜を覺えたり。かくてこそわれは晝間の接吻に報い得つるなれ。若し彼女主人にして豫め守護の功を測り知りたらんには、渠は猶一たび接吻することをも辭せざりしなるべし。

僧堂に歸りしは恰も晩餐の時なり。人々は我が外に出でしを知らざるさまなり。食卓に就きて程經ぬるに、ジエンナロのみ來ざりければ、フランチエスカの君は心を勞し、公子はあまたたび人を馳せて、その歸るを候はせぬ。ジエンナロはやうやくにして來りぬ。漫歩して岐に迷ひ、農夫に教へられて纔に歸ることを得つといふ。夫人その姿を見て、げにおん身の衣は綻びたりといへば、ジエンナロ手もてその破れたる處を摘み、この端の斷れたるは棘にかゝりて跡に殘りぬ、われは直ちに心附きぬれど、奈何ともすること能はざりき、このあたりにて斯くまで道を失はんとは、流石に思掛けざりき、目暮の景色を弄ぶ中、俄に暗くなりしを見て、近道より歸らんとおもひしが事の原なりといふ。一座は此遊の可笑しき話柄を得たりとて打ち興じ、杯を擧げて、此迷失兒の健康を祝しつ。こゝの葡萄酒はいと旨きに、人々醉を帶び、歡を竭して分れぬ。

わが寢室に入りしとき、隣室なるジエンナロは上衣を脱ぎ襦袢一つとなりて進み來り、いとさかしげに笑ひつゝ、掌を我肩上に置きて、晝見つる美人の爲めに思を勞すること莫れといふ。われ。然か宣給へど、接吻をばわれ博し得たり。渠。そは固よりなり。されどわれを始終繼子たりしものとな思ひそ。われ。繼子たりしや否やは知らず。唯だ繼子らしかりしは事實なり。渠。われは未だ曾て繼子たりしことなし。おん身若し能く祕密を守らば、われは敢て告ぐるところあらんとす。われ。何事まれ語り給へ。われは誓ひて餘所に洩さゞるべし。渠。さらば包まず語るべし。われは歸るさに故意と手帳を遺れ置きぬ。そは日暮れて再び往かん爲めなり。原と女といふものは、只二人居向ひては頑ならぬが多し。さて我は再び往きぬ。衣の綻びたるは、墻踰え籬を穿ちし時の過なり。われ。さらば女はいかなりし。渠。晝見しよりも美しかりき。美しくして頑ならざりき。わが預め度りし如く、さし向ひとなりては何のむづかしき事もなかりき。おん身が得しは只一つの接吻なりしが、わが得しは千萬にて總て殘る隈なき爲合なりき。これよりはその時のさまを樂しき夢に見んとぞおもふ。便なきアントニオよと語りもあへず、ジエンナロはおのが臥房に跳り入りぬ。

たつまき

僧堂を辭し去る朝、大空は灰色の紗を被せたる如くなりき。岸には腕たしかなる漕手幾人か待ち受け居て、一行を舟に上らしめたり。纜を解きてカプリに向ふ程に、天を覆ひたりし紗は次第に斷れて輕雲となり、大氣は見渡す限澄み透りて、水面には一波の起るをだに認めず。美しきアマルフイイは巖のあなたに隱れぬ。ジエンナロは後を指ざして、かしこにてはわれ薔薇を摘み得たりと云ふ。われは頷きて、心の中にはこの男の強顏なることよ、まことは刺に觸れて自ら傷けしものをとおもひぬ。

舟のゆくては杳茫たる蒼海にして、その抵る所はシチリアの島なり、あらず、亞弗利加の岸なり。ゆん手の方は巖石屹立したる伊太利の西岸にして、所々に大なる洞穴あり。洞前に小村落あるものは、其幾個の人家、わざと洞中より這ひ出でゝ、背を日に曝すものゝ如く、洞の直ちに水に臨めるものゝ前には漁人の火を焚き食を調へ又は小舟に※兒を塗れるあり。

舷下の水は碧くして油の如し。試みに手をもて探れば、手も亦水と共に碧し。舟の影の水に落ちたるは極て濃き青色にして、艫の影は濃淡の紋理ある青蛇を畫けり。われは聲を放ちて叫びぬ。げに美しきは海なる哉。若し彼蒼の大いなるを除かば、何物か能く之と美を※ぶべき。我は幼かりし時、地に仰臥して天を觀つるを思ひ出でぬ。今見る所の海は即ち當時見し所の天にして、譬へば夢の一變して現となれるが如し。

舟はイ、ガルリといふ巖より成れる三小嶼の傍を過ぎぬ。そのさま海底より石塔を築き上げて、その上に更に石塔を僵し掛けたる如し。青き波は緑なる石を洗へり。想ふに風雨一たび到らば、このわたりは群狗吠ゆてふ鳴門（スキルラ）の怪の栖なるべし。

不毛にして石多きミネルワの岬は、眠るが如き潮これを繞れり。いにしへ妙音の女怪の住めりきといふはこゝなり。而してカプリの風流天地はこれと相對せり。いにしへチベリウス帝が奢をきはめ情を縱にし、灣頭より眸を放ちて拿破里の岸を望みきといふはこゝなり。

舟人は帆を揚げたり。我等は風と波とに送られて、漸くカプリの島邊に近づきぬ。水のまことの清さ、まことの明さを知らんと欲せば、この海を見ざるべからず。舷に倚りて水を望めば、一塊の石、一叢の藻、歷々として數ふべく、晴れたる日の空氣といへども、恐らくはこの玲瓏透徹なからんとぞおもはるゝ。

カプリの島は唯だ一面の近づくべきあるのみ。その他は皆削り成せる斷崖にして、その地勢拿破里に向ひて級を下るが如く、葡萄圃と橘柚橄欖の林とは交る〃＼これを覆へり。岸に沿へる處には、數軒の蜑戸と一棟の哨舍とを見る。稍※高き林木の間に、屋瓦の叢を成せるはアンナア、カプリイの小都會なり。一橋一門ありてこれに通ず。一行は棕櫚の木立てるバガアニイが酒店の前に歩を留めつ。

我等はこゝに朝餐して、公子夫婦は午時まで休憩し、それより驢を倩ひてチベリウス帝の別墅の址を訪はんとす。われは憩はんこゝろなければ、ジエンナロと共に此島を一周し、南に突き出でたる大石門をも見ばやとて、漕手二人を呼び、岸なる舟に乘り遷りぬ。

風少し起りたれば、我等は行程の半ばばかり帆の力に頼ることを得べし。巖壁に近き處には、漁人の網を張りたるあれば、舟はこれを避けて沖の方に進みぬ。既にして奇景の人目を驚すに足るものあるを見る。灰色なる巨石の直立すること千丈なるあり。その頂は天を摩し、所々僅に一石塊を容るべき罅隙を存じて、蘆薈若くは紫羅欄これに生じたり。青き焔の如き波に洗はれたる低き岩根には、紅殻の毛星族（クリノイデア）いと繁く着きたるが、その紅の色は水を被りて愈 紅に、岩石の波に觸れて血を流せるかと疑はる。

既にして我等は海を右にし島を左にする處に至りぬ。水を呑吐する大小の窟許多ありて、中には波の返す毎に僅かに其天井を露すあり。こは彼妙音の女怪のすみかにして、草木繁茂せるカプリの島は唯だこれを蓋へる屋上たるに過ぎざるにやあらん。

漕手の一人なる白髪の翁のいふやう。這裏には惡しきもの住めり。

人若し過ちて此門に入るときは、多くは再びこれを出づることを得ず。その或は又出づるものは、痴なるが如く狂せるが如く、復た尋常人間の事を解せずといふ。往手のかたに稍大なる一窟あり。されど若し舟に棹さしてこれに入らんとせば、帆を卸し頭を屈するも、猶或は難からんか。柁取りの年少き男のいふやう。これ魔窟なり。黄金珠玉その内にみち〳〵たれど、これを探らんとするものは妖火のために身を焚かる。げにいふだに恐ろしき事なり。尊きルチアよ、（サンタ、ルチア）我を護り給へといふ。ジエンナロ。彼妙音の女怪の一人此舟の中に來ぬこそ殘惜しけれ。その容色はいと好しとぞ聞く。さるものを待遇せんは、わが徒の難んぜざるところぞ。われおほよそ女といふ女のおん身の言に從はぬはあらざるべければ、化しやうのものなりとも、其數には洩れぬなるべし。ジエンナロ。接吻し回抱するは波濤の常態なれば、その上に泛べるものも之に倣ふべき筈ならずや。責ては彼アマルフイイの女房をなりとも、共に載せて來べかりしものを。げに得易からぬ女なり。然おもひ給はずや。おん身も一たびは彼唇の味を試み給ひぬ。われはその人前におとなしぶりたるを怪しとおもふなり。憾むらくはおん身はその夜のさまを見給はざりき。その迎ふる情の熱さは我が送る情の熱きに譲らざりき。ジエンナロが此詞は遂に我をして耐へ忍ぶこと能はざらしむるに至りぬ。我はいと冷かに、されどわが彼夕見しところは、いたくおん詞と違へりといひぬ。ジエンナロは驚きたる面持して、暫し我顔を打ち守りつゝ、何とかいふ、おん身の詞は解し難しと問ひ返しつ。われ重ねて、おん身の女子にもてはやされ給ふべきをば、われ露ばかりも疑はねど、彼夕はわれふと同じ處に落ち合ひてまことのさまを目撃したり、さればわれは始よりおん身の詞の戯言なるべきを知りぬといふ。ジエンナロは猶訝しげに我顔を見て一語をも出さゞりき。われ微笑みつゝジエンナロが前夜の口吻を眞似て、おん身のけふ我に惜みて彼馬鹿者に與へ給ひし接吻を取返さでは歸らずといひたり。ジエンナロの面は血色全く失せて、さてはおん身は立聞せしか、おん身は我を辱めたり、我と決闘せよといふ。其聲極て冷に、極てあらゝかなりき。わが實を述べたる一語の、此の如く渠を激せんことは、わが預期せざる所なりき。われは徐かに、ジエンナロよ、そはよも眞面目なる詞にはあらじといひて、其手を握りしに、ジエンナロは手を引き面を背け、舟人に陸に着けよと命ぜり。老いたる方の漕手答へて、舟を停むべきところは、さきに漕ぎ出でしところの外絶て無ければ、是非とも島を一周せでは叶はずといひつゝ、※を搖す手を急にしたり。舟は深碧の水もて繞されたる高き岩窟に近づきぬ。ジエンナロは杖を揮ひて舷側の水を打てり。われは且怒り且悲みて、傍より其面を打ち目守りぬ。爾時年少き漕手いと慌だしく、龍卷（ウナ、トロムバ）と叫べり。その瞠視たる方を見れば、ミネルワの岬より起りて、斜に空に向ひて竪立せる一道の黒雲あり。形は圓柱の如く、色は濃墨の如し。その四邊の水、恰も鍋中の湯の滾沸せるが如くなり。ジエンナロはいづかたに避くるかと問へり。少年は後々といへり。われ。されば又全島を巡らんとするか。少年。風なき方の岩に沿うて漕がん。龍卷は島を離れて走るべし。翁。此小舟の若し岩に觸れて碎けずば幸なり。語未だ畢らず、龍卷の響は一轉せり。一轉して吾舟の方に進めり。その疾きこと※風の如し。舟若し高く岩頭に吹き上げられずば、必ず岩根に傍ひて千尋の底に壓し沈めらるべし。われは翁と共に※を握りつ。ジエンナロも亦少年を扶けて働けり。されど風聲は早く我等の頭上に鳴り

て、狂瀾は既に我等の脚下に翻れり。二人の漕手は異口同音に、尊きルチア、助け給へと叫びつゝ、　を捨てゝ跪拜せり。ジエンナロ聲を勵して、など　を捨つると叱すれども、二人は喪心せるものゝ如く、天を仰いで凝坐す。われは忽ち乘る所の舟の、木葉の旋風に弄ばるる如きを覺え、暗黒なる物の左舷に迫るを視、舟は高く高く登り行けり。飛瀑の如き水は我頭上に灌ぎ、身は非常なる氣壓の加はるところとなりて、眼中血を迸らしめんと欲するものゝ如く、五官の能既に廢して、わが絶えざること縷の如き意識は唯だ死々と念ずるのみ。われは終に昏絶せり。

夢幻境

わが再び眼を開きし時の光景は、今猶目に在ること、彼壯大なる火山の活畫の如く、又彼沈痛なるアヌンチヤタの別離の記念の如し。我身を繞れるものは、八面皆碧色なる※氣にして、俯仰の間物として此色を帶びざるはなかりき。試みに臂を擧ぐれば、忽ち無數の流星の身邊に飛ぶを見る。われは身の既に死して無際空間の氣海に漂へるを覺えたり。我身は將に昇りて天に在せる父の許に往かんとす。然るに一物の重く我頭上を壓するあり。是れ我罪障なるべし。此物はわが昇天を妨げ、我身を引いて地に向へり。而して冷なること海水の如き※氣は我顱頂の上に注げり。

われは心ともなく手を伸べて身邊を摸し、何物とも知られぬながら、竪き物の手に觸るゝを覺えて、しかとこれに取り付きたり。我疲勞は甚だしく、我身には復た血なく、我骨には復た髓なきに似たり。我魂は天上の法廷に招かれ、我骸は海底に横れるにやあらん。われは纔にアヌンチヤタと呼びて、又我眼を閉ぢたり。

われはこの人事不省の境にあること久しかりしならん。既にしてわれは己れの又呼吸するを覺え、我疲勞の稍　恢復すると共に、我意識は稍　曚明なりき。我身は冷にして堅き物の上に在り。こは一の巨巖の頭なるべし。而して此巖は高く天半に聳えたるものゝ如く、彼の光ある碧色の※氣のこれを繞れる狀は、前に見しと殊なることなし。天は碧穹窿をなして我を覆ひ、怪しき圓錐形の雲ありてこれに浮べり。雲の色は天と同じく碧かりき。四邊寂として音響なく、天地皆墓穴の靜けさを現ず。われは寒氣の骨に徹するを覺えたり。われは徐かに頭を擡げたり。我衣は青き火の如く、我手は磨ける銀の如し。されどこの怪しき身の虚き影にあらずして、實なる形なるは明なりき。我は疲れたる腦髓に鞭うちて、強ひて思議せしめんとしたり。われは眞に既に死したるか、又或は猶生けるか。われは手を展べて身下の碧氣を探りしに、こは冷なる波なりき。されどその我手に觸れて火花を散らす狀は、酒精の火に殊ならず。我側には怪しき大圓柱あり。その形は小なれども、略ぼ前に見つる龍卷に似て、碧き光眼を射たり。こはわが未だ除かざる驚怖の幻出する所なるか、將た未だ滅えざる記念の化現する所なるか。暫しありて、われは手をもてこれを摸することを敢てしたるに、その堅くして冷なること石の如くなりき。摸して後邊に至れば、手は堅く滑なる大壁に觸る。その色は暗碧なること夜の天色の如し。

そも〳〵われは何處にか在る。前に身下に積氣ありとおもひしは、燃ゆれども熱からざる水なりき。我四圍を照すものは、彼燃ゆる水なるか、さらずば彼穹窿と巖壁と皆自ら光を放つものなるか。こは幽冥の境なるか、わが不死の靈魂の宅なるか。われは現世に此の如

き境ありとおもふこと能はず。凡そ身邊の物、一として深淺種々の碧光を放たざることなく、我身も亦内より碧火を發して、その光明は十方を照すものの如し。

身に近き處に大石級あり。琅※もて削り成せるが如し。これに登らんと欲すれば、巖扉密に鎖して進むべからず。推するに、こは天堂に到る階級にして、其門扉は我が爲めに開かざるならん。我は一人の怒を齎して地下に入りぬ。ジエンナロはいかにしたるぞ、又二人の舟人はいかにしたるぞ。

われは獨り此境に在り。我母を懷ひ、ドメニカをおもひ、フランチエスカの君をおもひ、我記憶の常に異ならざるを知りぬ。されわが見る所のものは、必ず幻影に非ざるならん。我は故の我なり。只だ在るところの境の幽明いづれに屬するかを辨ずること能はざるのみ。

彼邊の壁に罅隙ありて、一の大なる物を安んず。手もて摸すれば銅の鉢なり。その内には金銀貨を盛りて溢れんと欲す。われは此異境の異の愈　益　甚しきを覺えたり。

地平線に接する處に、我身を距ること甚だ遠からず、青光まばゆき一星ありて、その清淨なる影は波面に長き尾を曳けり。われは俄に彼星の、譬へば日月の蝕の如く、其光を失ふを見たり。既にして黒き物の其前に現るゝあり。諦視すれば、一葉の舟の、海底より湧き出でもしたらん如く、燃ゆる水の上を走り來るにぞありける。

その漸く近づくを候へば、靜かに※を搖すものは一人の老翁なり。の一たび水を打つごとに、波は薔薇花紅を染め出せり。舟の舳に一人の蹲れるあり。その形女子に似たり。舟は漸く近づけども、二人は口に一語を發せず、その動かざること石人の如く、動くものは唯だ翁が手中の　のみ。忽ち聲ありて、一の長大息の如く、我耳に入り來りぬ。その聲は曾て一たび聞けるものゝ如くなりき。

舟は岸に近づきて圈を劃き、我が起ちて望める邊に漕ぎ寄せられたり。翁が手は　を放てり。女子はこの時もろ手高くさし上げて、哀に悲しげなる聲を揚げ、神の母よ、我を見棄て給ふな、我は仰を畏みてこゝに來たりと云へり。われは此聲を聞きて一聲ララと叫べり。舟中の女子は彼ベスツム古祠の畔なる瞽女なりしなり。

ララは我に對ひて起ち、聲振り絞りて、我に光明を授け給へ、我に神の造り給ひし世界の美しさを見ることを得させたまへと祈願したり。その聲音は尋常ならず、譬へば泉下の人の假に形を現して物言ふが如くなりき。我即興詩は漫りに混沌の窽を穿ちて、少女に宇宙の美を教へき。今や少女は期せずして我前に來り、我に眼を開かんことを請へり。われは少女の聲の我心魂に徹するを覺えて、口一語を出すこと能はず、只だ手を少女の方にさし伸べたるのみ。少女は再び身を起して、我に光明を授け給へと唱へかけしが、張り詰めし氣や弛みけん、小舟の中にはたと伏し、舷側なる水ははら〳〵と火花を飛しつ。

翁は暫く身を屈して、少女のさまを覗ひ居たるが、やをら岸に登りて、きと眼を我姿に注ぎ、空中に十字を書し、彼大銅鉢を抱いて舟中に移し、己も續いて乘りうつれり。われは思慮するに遑あらずして、同じく舟に上りしに、翁は我を迎へんともせず、さればとて又我を拒まんともせず、只だ目を※りて我を視るのみ。翁は又※を握りて、彼青き星に向ひて漕ぎ行けり。冷なる風は舟に向ひて吹き來れり。舟は巖窟の中に進み入りて、我等の頭は巖に觸んとす。われは身をララの上に俯したり。忽にして舟は杳茫として涯なき大海

の上に出でぬ。頭を回せば、斷崖千尺、斧もて削り成せる如くにして、乘る所の舟は崖下の小洞穴より潛り出でしなり。

新月の光は怪しきまでに清澄なりき。斷崖の一隅に龕の形をなしたる低き岸あり。灌木疎に生じて、深紅の花を開ける草之に雜れり。岸邊には一隻の帆船を繫げるを見る。翁は小舟を其側に留めしに、少女は期する所ある如く、身を起して我に向へり。われはその手に觸るゝことをだに敢てせずして、心の裡に我が遇ふ所の夢に非ず幻に非ず、さればとて又現にも非ず、人も我も遊魂の陰界に相見るものなるべきを思ひぬ。少女は、いざ藥草を采りて給へと云ひて、右手を我にさし着けたり。われは鬼に役せらるるものゝ如く、岸に登りて彼香しき花を摘み、束ねて少女に遞與しつ。この時われは堪へ難き疲を覺えて、そのまゝ地上に僵れ臥したり。われは猶首を擡げて、翁が手快くララを彼帆船に抱き上げ、わが摘みし花束をも移し載せて、自らこれに乘りうつり、小舟を艫に結び付けて、帆を揚げて去るを見たり。されど我は身を起すこと能はず、又聲を出すこと能はずして、徒らに身を悶え手を振るのみ。我は死の我心に迫りて、心の裂けんと欲するを覺えたり。

蘇生

かくては性命の虞はあらじとは、始て我耳に入りし詞なりき。われは眼を開いてフアビア二公子と夫人フランチエスカとを見たり。されど彼語を出しゝは、我手を握りて、眞面目なる思慮ありげなる目を我面に注ぎたる未知の男なりき。我は廣闊にして敞明なる一室に臥せり。時は白晝なりき。われは身の何の處にあるを知らずして、只だ熱の脈絡の内に發りたるを覺えき。わがいかにして救はれ、いかにしてこゝに來しを審にすることを得しは、時を經ての後なりき。

きのふジエンナロとわれとの歸り來ざりしとき、人々はいたく心を苦め給ひぬ。我等を載せて出でし舟人を尋ぬるに、こも行方知れずとの事なりき。さて島の南岸に沿ひて、龍卷ありしを聞き給ひしより、人々は早や我等の生きて還らざるべきを思ひ給ひぬ。搜索の爲めに出し遣られし二艘の舟は、一はこなたより漕ぎ往き、一はかなたより漕ぎ戻りて、末遂に一つところに落ち合ふやうに掟てられしに、その舟皆歸り來て、舟も人もその踪跡を見ずといふ。フランチエスカの君は我がために涙を墮し給ひ、又ジエンナロと舟人との上をも惜み給ひぬと聞えぬ。

その時公子の宣給ふやう。かくて思ひ棄てんは、猶そのてだてを盡したりといふべからず。若し舟中の人にして、或は浪に打ち揚げられ、或は自ら泅ぎ着きて、巖のはざまなどにあらんには、人に知られで飢渴の苦艱を受けもやせん。いでわれ親ら往いて求めんとて、朝まだきに力強き漕手四人を倩ひ、湊を舟出して、こゝかしこの洞窟より巖のはざまゝで、名殘なく尋ね給ひぬ。されど彼魔窟といふところには、舟人辭みて行かじといふを、公子強ひて説き勸め、草木生ひたりと見ゆる岸邊をさして漕ぎ近づかせしに、程近くなるに從ひて、人の僵れ臥したりと覺しきを認め、さてこそ我を救ひ取り給ひしなれ。われは緑なる灌木の間に横はり、我衣は濱風に吹かれて半ば乾きたりしなり。公子は舟人して我を舟に扶け載せしめ、おのれの外套もて被ひ、手の尖胸のあたりなど擦り温めつゝ、早く我呼吸の未だ絶え果てぬを見給ひぬといふ。われはかくてこゝに伴は

れ、醫師の治療を受けつるなりけり。

さればジエンナロと二人の舟人とは魚腹に葬られて、われのみ一人再び天日を見ることゝなりしなり。人々は我に當時の事を語らしめたり。われは光まばゆき洞窟の中に醒めしを始とし、目しひたる少女を載せ來し翁に遭へるに至るまで、そのおほよそを語りしに、人々笑ひて、そは熱ある人の寒き夜風に觸れ、半醒半夢の間にありて妄想せるならんといへり。げにわれさへ事の餘りに怪しければ、夢かと疑ふ心なきにしもあらねど、また熟※思へばしかはあらじと思ひ返さざることを得ず。かへす〳〵〝〵も奇しく怪しきは、彼洞天の光景と舟中の人物となり。

我物語を傍聽せし醫師は公子に向ひ頭を傾けて、さては君の此人を捜し得給ひしは彼魔窟の畔なりけるよといひぬ。公子。さなり。さりとて君は世俗のいふ魔窟に、まことに魔ありとは、よも思ひ給はじ。醫師。そは輒く答へまつるべうもあらぬ御尋なり。自然は謎語の鉤鎖にして吾人は今その幾節をか解き得たる。

我心は次第に爽かになりぬ。抑※わが見し洞窟はいかなる處なりしぞ。舟人の物語に、この石門の奥に光りかゞやくところありといひしは、わが漂ひ着きし別天地を斥して言へるにはあらざるか。かの怪しき翁の舟の、狹き穴より潛り出しをば、われ明かに記憶せり。夢まぼろしにてはよもあらじ。さらば彼洞窟は幽魂の往來するところにして、我は一たび其境に陷り、聖母の惠によりて又現世に歸りしにや。われはかく思ひ惑ひつゝも、わが掌を組み合せて彼舟中の少女の上を懷ひぬ。まことに彼少女は我を救へる天使なりき。

年經て我夢の夢に非ざることは明かになりぬ。彼洞窟は今カプリ島の第一勝、否伊太利國の第一勝たる琅※洞（グロツタ、アツウラ）にして、舟中の少女も亦實にかのペスツムの瞽女ララなりしなり。

歸途

公子夫婦は我を率て拿破里に歸らんために、猶カプリに留まること二日なりき。二人の我を待つ言動は、始の程こそ屡　我感情を傷ふこともありつれ、遭難の後病弱の身となりては、親族にも稀なるべき人々の看護の難有さ身にしみて、羅馬へ伴ひ行かんと云はるゝが嬉しとおもはるゝやうになりぬ。そが上かの洞窟の内に遭遇せし怪異と、萬死を出でゝ一生を獲たる幸とは、いたくわが興奮したる腦髓を刺戟して、我をして無形の威力の人の運命を左右することの復た疑ふべからざるを思はしめぬれば、我は公子夫婦の羅馬へ往けと勸め給ふを聞きても、又直ちにその聲を以て運命の聲となさんとしたり。わが健康の漸く故に復らんとする頃、公子夫婦は又我床頭にありて、何くれとなく語り慰め給ひき。夫人。アントニオよ。おん身の往方まだ知れざりし程は、我等は屡　おん身の爲めに泣きぬ。おん身の不思議に性命を全うせしは、聖母の御惠なりしならん。今はおん身情強きも、よも再び拿破里に住みて、ベルナルドオと面をあはせんとは云はぬならん。公子。そは勿論なるべし。われ等は只だ羅馬に伴ひ歸りて、曾て過ありしアントニオは地中海の底の藻屑となりぬ、今こゝに來たるはその昔幼く可哀ゆかりしアントニオなりと云はん。夫人。さるにても便なきはジエンナロなり。才も人に優れ情も深かりしものを、いかなれば神は末猶遠き此人の命を助けんとはし給はざりけん。惜みても餘あることならずやなど宣給へり。

醫師は屡　病牀をおとづれて、數時間を我室に送れり。この人は

拿破里に住みて、いまは用事ありて此カプリに來居たるなりといふ。第三日に至りて、醫師我を診して健康の全く故に復りたるを告げ、己れも我等の一行と共に歸途に就きぬ。醫師の我を健全なりといふは、形體上より言へるにて、若し精神上より言はゞ、われは自ら我心の健全ならざるを覺えき。わが少壯の心は、かの含羞草といふものゝ葉と同じく萎み卷きて、曩に一たび死の境界に臨みてよりこのかた、死の天使の接吻の痕は、猶明かに我額の上に存せり。公子夫婦の我と醫師とを引き連れて舟に上り給ふとき、我は澄み渡れる海水を見下して、忽ち前日の事を憶ひ起し、激しく心を動したり。今日影のうらゝかに此積水の緑を照すを見るにつけても、我は永く此底に眠るべき身の、恙なくて又此天日の光に浴するを思ひ、涙の頬に流るゝを禁ずること能はざりき。人々は皆優しく我を慰めたり。

フランチエスカの君は我才を稱へ、我を呼びて詩人となし、醫師に我が拿破里の劇場に上りて、即興詩を歌ひしことを語り給ひしに、醫師驚きたる面持して、さてはかの謳者は此人なりしか、公衆の稱歎は尋常ならざりき、重ねて技を演じ給はゞ、世に名高き人ともなり給はんものをなどいへり。風の餘り好かりければ、初めソレント才より陸に上るべかりし航路を改め、直ちに拿破里の入江を指して進むことゝなりぬ。

われは拿破里の旅寓に入りて、三通の書信に接したり。その一は友人フエデリゴが手書なり。フエデリゴはきのふイスキアの島に遊び、三日の後ならでは還らずとの事なりき。明日の午頃には人々こゝを立たんと宣給へば、われはこの唯だ一人なる友にだに、暇乞することを得ざらんとす。その二はわが宿を出でし次の日に來しものなる由、房奴われに語りぬ。これを讀むに唯だ二三行の文あり。心誠なるものゝおん身の爲め好かれとおもへるありて、今宵おん身の來まさんことを願ふとのみ書きて、末に昔の友なる女と署し、會合の家を指し示せり。其三はこれと同じ手して書けるものなり。その文左の如くなりき。

よしなき御疑念など起し給はで、御出下されかしと、ひたすら御待申上候。御別申上候節は、實に思ひ掛けぬ事にて、胸騒ぎ魂消えて、申上ぐべき詞をもえ辨へ侍らざりしかど、今は御許にても、あわたゞしかりし當時の事を思ひ棄て給ひつらんと存じ候。御許にて思ひ違へ給ひしにはあらずやと思はるゝ節も候へども、そはすべて御目にかゝりたる上にて申解くべく候。只だ一刻も早く御目にかゝり度御待申上ぐるより外無御座候。かしこ。

末には又昔の友なる女と署したり。會合の家は知らぬ巷に在れど、サンタならではかゝる文書くべき婦人あるべうもあらず。われは今更彼婦人に逢ひて何とかすべきと思ひぬれば、御返事もやあると促しに來し男を呼び入れて、詞短かにいひぬ。われは遽かに思ひ定むる事ありて、拿破里を去らんとす。今までの厚き御恵は誓ひて忘れ侍らじ。御目に掛かりて御暇乞すべきなれど、あわたゞしき折なれば、唯だこの由御使に申すなりといひぬ。フエデリゴには數行の書を作りて遺し置きつ。その概略は今物書くべき心地もせねば、精しき事の顛末をば、羅馬に到り着きて後にこそ告ぐべけれ、手を握らで別れ去ることの心苦しさを察せよといふ程の意なりき。

暇乞にとては、何處へも往かざりき。街上にてベルナルドオの面を見んことの影護く、又此地に來てより交を結びし人には、相見んことの願はしくもあらねば、われは旅寓の一室にたれこめて此日を暮さんとおもひ居たり。さるを公子の車を誂へ置きたれば、共に

醫師の家訪はずやと宣給ふがことわりなれば、隨ひて行きぬ。小く心安げなる家にて、年長けたる姉の家政を掌れるあり。質直なる性質眉目の間に現はれて、むかしカムパニアの野邊にありける時、鞠育の恩を受けしドメニカに似たるところあり。されど此は教育ある人なれば、起居振舞のみやびやかなる、いろ〳〵なる藝能ある抔、日を同じうして語るべくもあらざるなるべし。

翌朝われは先づエズヰオの山を仰ぎ見て別を告げたり。嶺は深く烟霧の裏に隱れて、われに送別の意を表せんともせざる如し。是日海原はいと靜にして、又我をして洞窟と瞽女との夢を想はしむ。嗚呼、此拿破里の市も、今よりは同じ夢中の物となり了るならん。

房奴はけふの拿破里日報（ヂアリオ、ヂ　ナポリ）を持ち來りぬ。披きて見れば、我假名あり。さきの日の初舞臺の批評なりき。いかなる事を書けるにかと、心忙しく讀みもて行くに、先づ空想の贍にして、章句の美しかりしを稱へ、恐らくは是れパンジエツチイの流を酌めるものにて、摸倣の稍　甚しきを嫌ふと斷ぜり。パンジエツチイといふ人はわれ夢にだに見しことあらず。われは唯だ我天賦の情に本づきて歌ひしなり。想ふに彼批評家といふものは、おのれ常に摸擬の筆を用ゐるより、人の藝術も亦然ならんと思へるにやあらん。末の方には例に依りて、奬勵の語を添へたり。いはく。此人終に名を成すべき望なきにあらず、今の見る所を以てするも、猶非凡なる材能たることを失はざるべし、空想感情靈應の諸性具備したりと見ゆればなりとあり。此評は惡しき方にはあらねど、當日の公衆の喝采に比ぶるときは、その冷かなること著しとおもはる。われは此新聞紙を疊みて行李の中に藏めたり。そは他年わが拿破里の遭遇の悉く夢ならぬを證せん料にもとてなり。嗚呼、われ拿破里を見たり、拿破里の市を彷徨せり。わが得しところそも幾何ぞ、わが失ひしところはたそも幾何ぞ。知らず、フルヰアの預言は既に實現し盡せりや否や。

われ等は拿破里を出立ちたり。葡萄栽ゑたる丘陵は見る〳〵烟雲の間に沒せり。一行は羅馬に向ひて行くこと四日なりき。わが行くところの道は、二月の前にフエデリゴ、サンタの二人と與に行きし道なりき。モラの旅亭に來て見れば、柑子の林は今花の眞盛なり。われは再び我祕言をサンタに偸み聽かれし木蔭に立寄りたり。人の離合聚散の測り難きこと、また今更に驚かれぬ。イトリの狹隘を過ぐる時、われはフエデリゴが上を憶ひ起しつ。旅券を閲する國境には、けふも洞穴の中に山羊の群をなせるあり。されどフエデリゴが筆に上りし當時の牧童は見えざりき。

一行はテルラチナに宿りぬ。夜明くれば天氣晴朗なりき。あはれ、美しき海原よ。汝は我を懷抱し我をゆり動かして、我にめでたき夢を見させ、我をかう〳〵〃〳〵しきララに逢はせき。今はわれ汝に別れんとぞすなる。水の天に接する處には、猶エズヰオの山の雄々しき姿見えて、立昇る烟の色は淡き藍色を成し、そのさま清明にして而も幽微に、譬へば霞を以て顏料となし、かゞやく空の面に畫ける如し。われは大息して呼べり。さらば〳〵、いで我は羅馬に入らん。我墓穴は我を待つこと久し。

われは曾て怪しき媼フルヰアとさまよひありきし山を望みき。われはジエンツアノ市を過ぎて、我母の車に觸れてみまかり給ひし廣こうぢを見き。路の傍なる乞兒は我衣服の卑しからぬを見て、われを殿　樣と呼べり。むかし母に手を拉かれて祭を見し貧家の子幸ありといはんか、今ボルゲエゼ家の賓客となりて歸れる紳士幸あり

といはんか、そは輒く答へ難き問なるべし。

一行はアルバノの山を踰えたり。カムパニアの曠野は我前に横れり。道の傍なる、蔦蘿深く鎖せるアスカニウスの墳は先づ我眼に映ぜり。古墓あり、水道の殘礎あり、而して聖彼得寺の穹窿天に聳えたる羅馬の市は、既に目睫の中に在り。（アスカニウスは昔アルバ、ロンガの基を立てし人なり。是れ拉甸人の始めて市を成せる處にして、後の羅馬市はこれより生ぜりといふ。）

車の聖ジヨワンニイの門（ポルタ、サン、ジヨワンニイ）より入るとき、公子は我を顧みて、いかに樂しき景色にはあらずやと宣給へり。「ラテラノ」の寺、丈長き尖柱、「コリゼエオ」の大廈の址、トラヤヌスの廣こうぢ、いづれか我舊夢を喚び返す媒ならざる。

羅馬は拿破里の熱鬧に似ず。コルソオの大路は長しと雖、繁華なるトレドの街と異なり。車の窓より道行く人を覗ふに、むかし見し人も少からず。老いたる教師ハツバス・ダアダアのボルゲエゼ家の車の章に心づきて、蹣跚たる歩を住め我等を禮したるは、おもはずなる心地せらる。コンドツチイ街（ヰヤ、コンドツチイ）の角を過ぐれば、むかしながらのペツポが手に屐まがひの木片を裝ひて、道の傍に坐せるを見る。

フランチエスカの君の、やう〳〵我家に歸り着きぬと宣給ふに答へて、まことにさなりと云ひつゝも、我は心の内に名状し難き感情の迫り來るを覺えき。我は今曾て訣絶の書を賜ひし舊恩人を拜せざるべからず。その待遇は果していかなるべきか。我はこゝに至りて、復たこれを避けんと欲することなく、却りて二馬の足掻の猶太だ遲きを恨みき。譬へば死の宣告を受けたるものゝ、早く苦痛の境を過ぎて彼岸に達せんことを願ふが如くなるべし。

車はボルゲエゼの館の前に駐まりぬ。僮僕は我を誘ひて館の最高層に登り、相接せる二小房を指して、我行李を卸さしめき。

少選ありて食卓に呼ばれぬ。われは舊恩人たる老公の前に出でゝ、身を僂めて拜せしに、アントニオが席をば我とフランチエスカとの間に設けよと宣給ふ。是れ我が久し振にて耳にせし最初の一語なりき。

會話の調子は輕快なりき。われは物語の昔日の過に及ばんことを慮りしに、この御館を遠ざかりたりしことをだに言ひ出づる人なく、老公は優しさ舊に倍して我を※待し給ひぬ。されどわれは此一家の復た我に厚きを喜ぶと共に、人の我を恕するは我を輕んずる所以なるを思ふことを禁じ得ざりき。

教育

ボルゲエゼ家の宮殿は今わが居處となりぬ。人々の我をもてなし給ふさまは、昔に比ぶれば優しく又親しかりき。時として我を輕んずるやうなる詞、我を侮るやうなる行なきにしもあらねど、そはわが爲め好かれとて言ひもし行ひもし給ふなれば、憎むべきにはあらざるなるべし。

夏は人々暑さを避けんとて餘所に遷り給へば、われ獨り留まりて大廈の中にあり。涼しき風吹き初むれば人々歸り給ふ。かく我は漸く又此境遇に安んずることゝなりぬ。

我は最早カムパニアの野の童にはあらず。最早當時の如く人の詞といふ詞を信ずること、宗教に志篤き人の信條を奉ずると同じきこと能はず。我は最早「ジエスヰタ」派學校の生徒にはあらず。最早

教育の名をもてするあらゆる束縛を甘んじ受くること能はず。さるを憾むらくは人々、猶我を視ること|カムパニア|の野の童、「ジエスヰタ」派學校の生徒たる日と異ならざりき。此間に處して、我は六とせを經たり。今よりしてその生活を顧みれば、波瀾層疊たる海面を望むが如し。好くも我はその波濤の底に埋沒し畢らざりしことよ。讀者よ、わが物語を聞くことを辭まざる讀者よ。願はくは一氣に此一段の文字を讀み去れ。われは唯だ省筆を用ゐて、その大概を敍して已みなんとす。

この六年の歷史はわが受けし精神上教育の歷史なり。この教育は人の師たるを好むものゝことさらに設けたる所にして、不便なる我はこれを身に受けざること能はざりしなり。人々は我を善人とし、我に棄て難き機根ありとして、競ひて自ら教育の任を負へり。恩人はその恩を以て我に臨みて我師たり。恩人ならぬ人はわが人好きに乘じて僭して我師となれり。我は忍びて無量の苦を受けたり。そは教育といふを以ての故なり。

主公はわが學の膚淺なるを責め給へり。我はいかに自ら勵まんも、わが一書を讀みたる後、何物か我胸中に殘れると問はゞ、そはたゞ其卷册の裡より我心に適へるものを抽き出し得たりといふのみにて、譬へば蜂の百花の上に翼を休めて、唯だ一味の蜜を探らんが如くなるべし。こは老侯の喜び給ふところにあらざりしなり。家の常の賓客、その他われを愛すといふ人々には、おの〳〵その理想ありて、われを測るにその合理想の尺度をもてす。人々いかでかわが成績に甘んずることを得ん。數學者は|アントニオ|あまりに空想に富みて、冷靜の資なしと云ひ、儒者は|アントニオ|の拉甸語に精しからざることよと云ひ、政治家は稠人の前にありて、ことさらに我に問ふにわが知らざるところの政治上の事をもてし、われを苦めて自ら得たりとし、遊戲をもて性命とせる貴公子は、また我と馬相を論じて、わが馬を愛することの己れの身を愛するごとくならざるを怪み、貴族にして毒舌ある一婦人の、まことは人に超えたる智あるにあらずして、漫りに批評に長ぜりと稱せられたるは、また我詩稿を刪潤せんと欲し、我に一枚づゝ寫して呈せんことを求めたり。その外、|ハツバス・ダアダア|の如く、むかし有望の少年たりしわが、今才盡き想涸れたるを歎ずるものあり、舞踏を善くする某の如く、わが舞場に出でゝ姿勢の美を闕くを憾むものあり、文法に精しき某の如く、わが往々讀に代ふるに句を以てするを難ずるものあり。就中|フランチエスカ|の君は、もろ人の我を褒むるに過ぎて、わが慢心のこれがために長ずべきを惜むとて、毎に峻嚴と威儀とをもて我に臨まんとし給へり。おほよそ此等の毒は滴々我心上に落ち來りて、われは我心のこれが爲めに硬結すべきか、さらずば又これが爲めにその血を瀝らし盡すべきをおもひたりき。

我心は一物に逢ふごとに、その高尚と美妙との方面よりして強く刺戟せられ深く悅懌す。われは獨り閑室に坐するとき、首を回して彼の我師と稱するものを憶ふに、一種の奇異なる感の我を襲ひ來るに會ひぬ。世界は譬へば美しき少女の如し。その心その姿その粧は、わが目を注ぎ心を傾くるところなり。さるを靴工は、彼の穿ける靴を見よ、その身上第一の飾はこれぞと云ひ、縫匠は、否、彼の着たる衣を見よ、その裁ちざまの好きことよ、その色あひを吟味し、その縫際に心留むるにあらでは、少女の姿を論ずべからずと云ひ、理髮師は、否々、彼の美しき髮のいかに綰ねられたるかを見ずやと云ひ、語學の師はその會話の妙をたゝへ、舞の師はその擧止のけだ

かさを讃む。彼の我師と稱するものは、この工匠等に異ならず。されどわれ若し憚ることなくして、人々よ、我も一々の美を見ざるにあらねど、我を動かすものは彼に在らずしてその全體の美に在り、是れ我職分なりと曰はゞ、人々は必ず陽に、げに〳〵我等の教ふるところは汝詩人の目の視るところより低かるべしと曰ひつゝ、陰に我愚を笑ふなるべし。

天地の間に生物多しと雖、その最も殘忍なるものは蓋し人なるべし。われ若し富人ならば、われ若し人の廡下に寄るものならずば、人々の旗色は忽ちにして變ずべきならん。人々の聰明ぶり博識ぶりて、自ら處世の才に長けたりげに振舞ふは、皆我が食客たるをもてにあらずや。我は泣かまほしきに笑ひ、唾せんと欲して却りて首を屈し、耳を傾けて俗士婦女の蝋を嚼むが如き話説を聽かざるべからず。所謂教育は果して我に何物をか與へし。面從腹誹、抑鬱不平、自暴自棄などの惡癖陋習の、我心の底に萌しゝより外、又何の效果も無かりしなり。

十の指は我があらゆる暗黒面を指し、却りて我をして我に一光明面なしや否やを思はしめ、我をして自ら己の長を覓め、自ら己の能を銜はしめたり。而して彼指は又この影を顧みて自ら喜ぶ情を指して、更に一の暗黒面を得たりとせり。

人々はわが我見の強くして固きを難ぜり。政治家のわが我見を責むるは、われ心を政況に委ねざればなり、馬を愛づる貴公子のわが我見を責むるは、われ馬を品し馬に乘りて居諸を送ること能はざればなり、曾て又一少年の審美學の書に耽るものありしが、其人は我にいかに思惟し、いかに吟詠し、いかに批評すべきを教へ、一朝わがその授くる所の規矩に遵はざるを見るに及びては、忽又わが我執を責めたり。こはわが我執あるにはあらで、人々の我執あるにはあらざるか。そを翻りてわれ我執ありといふは、わが人の恩蔭を被りたる貧家の孤たるを以てにあらずや。

名よりして言はんか、我は貴族にあらず。されど心よりして觀んか、我豈賤人ならんや。されば我は人に侮蔑せらるゝごとに、必ず深き苦痛を忍べり。いかなれば我は赤心を棒げて人々に依頼せしに、人々は我をして鹽の柱と化すること彼ロオト（亞伯拉罕の甥）が妻の如くならしめしぞ。是に於いてや、悖戻の情は一時我心上に起り來りて、自信自重の意識は緊縛をわが恆の心に加へ、此緊縛の中よりして、増上慢の鬼は昂然として頭を擡げ、我をして平生我に師たる俗客を脚底に見下さしめ、我耳に附きて語りて曰はく。汝の名は千載の後に傳へらるべし。彼の汝に師たるものゝ名は、これに反して全く忘らるべし。縱令忘られざらんも、その偶※存ずるは汝が囹圄の桎梏として存じ、汝が性命の杯中に落ちたる毒藥として存ずるならんといふ。われはタツソオの上をおもへり。矜持せるレオノオレよ。驕傲なるフエルララの朝廷よ。その名は今タツソオによりて僅に存ずるにあらずや。當時の王者の宮殿は今瓦石の一堆のみ、その詩人を拘禁せし牢舍は今巡拜者の靈場たりなどゝおもへり。此の如き心の卑むべきは、われ自ら知る。されど所謂教育は我をして此の如き心を生ぜしめざること能はず。われ若し彼教育を受けて、此心をだに生ぜざりせば、われは性命を保ちて今に到るに由なかりしなり。わが潔白なる心、敬愛の情は、一言の奬勵、一顧の恩惠を以て雨露となしゝに、人々は却りて毒水を灌ぎてこれを槁枯せしめしなり。

今の我は最早昔の如き無邪氣の人ならず。さるを人々は猶無邪氣

なるアントニオと呼べり。今の我は斷えず書を讀み、自然と人間とを觀察し、又自ら我心を顧みて己の長短利病を審にせんとせり。さるを人々は始終物學びせぬアントニオと呼べり。この教育は六年の間續きたり、否、七年ともいふことを得べし。されど六とせ目の年の末には、早く多少の風波の我生涯の海の面に噪ぎ立つを見たり。この教育の六年の間、猶書かまほしき事なきにあらねど、今より顧みれば、皆流れて毒水一滴となり了んぬ。こは門地なく金錢なき才子の常に仰ぎ常に服するところのものにして、此毒水は此類の才子の爲には、人の呼吸するに慣れたる空氣に異ならずともいふべきならん。

われは「アバテ」となりぬ。われは又即興詩人として名を羅馬人の間に知られぬ。そは「チベリナ」學士會院（アカデミア、チベリナ）の演壇の、我が上りて詩稾を讀み、又即興詩を吟ずることを許しゝがためなり。されどフランチエスカの君は、會院の吟誦には喝采を得ざるものなしといふをもて、わが自負の心を抑へ給へり。

ハツバス・ダアダアは會院中の最も名高き人なり。その名の最も高きは、その演説し著述することの最も多きがためなり。院内の人々は一人としてハツバス・ダアダアの※陋にして友を排し、褒貶並に過てるを知らざるものなし。されど人々は猶この翁の籍を會院に掲ぐるを甘んじ允せり。ハツバス・ダアダアは愈　意を得て、只管書きに書き説きに説けり。ある日我詩稾を閲し、評して水彩畫となし、ボルゲエゼ家の人々に謂ふやう。アントニオに才藻の萌芽ありしをば、嘗て我生徒たりしとき認め得たりしに、惜いかな、其芽は枯れて、今の作り出すところは畸形の詩のみ。アントニオは古の名家の少時の作を世に公にせしものあるを見て、或はおのれのをも梓行せんとすることあらんか。そは世の嘲を招くに過ぎず。願はくは人々彼を諫めて、さる無謀の企を思ひ留まらしめ給へとぞいひける。

アヌンチヤタが上はつゆばかりも聞えざりき。アヌンチヤタは我が爲めには隔世の人たり。されどこの女子は死に臨みて、その冷なる手もて我胸を壓し、これをして事ごとに物ごとに苦痛を感ずることよの常ならざらしめしなり。ナポリの旅と當時の記憶とは、なつかしく美しきものながら、今はその美しさの彼メヅウザに逢ひて化石したるにはあらずやとおもはれたり。（メヅウザは希臘神話中の恐るべき處女神にして、之を視るものは忽ち石に化したりといふ。）媿き巽風の吹くごとに、われはベスツムの温和なる空氣をおもひ出して意中にララが姿を畫き、ララによりて又その邂逅の處たる怪しき洞窟に想ひ及びぬ。われは彼物教へんとする賢き男女の人々の間に立ちて、上校の兒童の如くなるとき、心にはむかし賊寨にて博せし喝采と「サン、カルロ」座にて聞きつる讙呼の聲とを思ひ、又人々の我を遇すること極めて冷なるが爲めに、身を室隅に躲けたるとき、心にはむかしサンタがもろ手さし伸べて、我を棄てゝ去らんよりは寧ろ我を殺せと叫びしことをおもひぬ。六とせは此の如くに過ぎ去りて、我齢は二十六になりぬ。

小尼公

フアビアニ公子とフランチエスカ夫人との間に生れし姫君の名をばフラミニアといひぬ。されど搖籃の中にありて、早く神に許嫁せさせ給ひしより、人々小尼公とのみ稱ふることゝなりぬ。この小尼公には、むかし我手にかき抱きて、をかしき畫などかきて慰めま

つりし頃より後、再び見ゆることを得ざりき。小尼公は教育の爲めにとて、四井街（クワトロ・フオンタネ）の尼寺にあづけられ給ひしより、早や六とせとなりぬ。境内（けいだい）を出で給ふことなく、母君なるフランチエスカの夫人ならでは往きて逢ふことを許されねば、父君すら一たびも面を合せ給ふことあらざりき。われ等は唯だ人傳（ひとづて）に姫君の今は全く人となり給ひて、その學藝をさへ人並ならず善くし給ふを聞きしのみ。

寺の掟（おきて）に依るに、凡そ尼となるものは、授戒に先だてる數月間親々の許に還り居て、浮世の歡（よろこび）を味ひ盡し、さて生涯の暇乞して俗縁を斷つことなり。この時となりて、再び寺に入るとそが儘我家に留まるとは、その女子の意志の自由に委（ゆだ）ぬといへど、そは只だ掟の上の事のみにて、まことは幼きより尼の裝（よそほひ）したる土偶（にんぎやう）を翫（もてあそ）ばしめ、又寺に在る永き歳月の間世の中の罪深きを説きては威（おど）しすかし、寺院の靜かにして戒行の尊きを説きては勸め誘（いざな）ひ、必ず寺に歸り入らしむる習なりとぞ。

是より先きわれは四井街の邊を過ぐるごとに、この尼寺の築泥（ついぢ）の蔭にこそ、わが嘗て抱き慰めし姫君は居給ふなれ、今はいかなる姿にかなり給ひしと、心の内におもひ續けざることなかりき。一日われは尼寺に往きて、格子の奥にて尼達の讃美歌を歌ふを聽きしことあり。あの歌ふ人々の間に小尼公（アベヂツサ）はおはさずやとおもひしかど、流石（さすが）心に咎められて、教子（をしへこ）として寺に宿れるものゝ、彼歌樂の群に加はるや否やを問ひあきらむることを果さゞりき。既にしてわれはこのもろ聲の中より、一人の聲の優れて高く又清く、一種言ふべからざる凄切（せいせつ）の調（しらべ）をなせるものあるを聞き出しつ。その聲のアヌンチヤタが聲にいと好く似たりければ、把住（はちゆう）し難き我空想は忽ちはかなき舊歡の影をおもひ浮べて、彼ボルゲエゼ家の少女の事を忘れぬ。

次の月曜日にはフラミニアこそ歸り來べけれと、老公宣給（のたま）ひぬ。この詞はあやしく我情を動して、その人と成りしさまの見まほしさはよの常ならざりき。想ふに小尼公も亦我と同じき籠中（こちゆう）の鳥なり。こたび家に歸り給ふは、譬へば先づ絲もてその足を結びおき、暫し籠より出だして※翔（かうしやう）せしむるが如くなるべし。傷（いた）ましきことの極（きはみ）ならずや。

わが姫の面を見しは午餐（ひるげ）の時なりき。げに人傳に聞きつる如くおとなびて見え給へど、世の人の美しとてもてはやす類（たぐひ）の姿貌（すがかたち）にはあらざるべし。面の色は稍蒼かりき。唯だ惠深く情厚きさまの、さながらに眉目の間に現れたるがめでたく覺えられぬ。

食卓に就きたるは近親の人々のみなり。されど一人の姫に我の誰なるを告ぐるものなく、姫も又我面を認め得ざるが如くなりき。さてわれは姫に對（むか）ひてかたばかりの詞を掛けしに、その答いと優しく、他の親族の人々と我との間に、何の軒輊（けんち）するところもなき如し。こは此御館（みたち）に來てより、始ての※待（もてなし）ともいひつべし。

人々は打解けてくさ〳〵＼＼の物語などし、姫は笑ひ給ふ。われは覺えず興に乘じて、その頃羅馬に行はれたりし一口話を語りぬ。姫はこれをも可笑（をか）しとて笑ひ給ふに、外の人々は遽（には）かに色を正して、中にもかゝる味なき事を可笑しとするは何故ならんなどいふ人さへあり。われ。しか宣給（のたま）へど、今語りしは近頃流行の一口話にて、都人士のをかしとするところなるを奈何（いかに）せん。夫人。否、おん身の話は掛詞（かけことば）の類のいと卑しきをさげとせり。人の腦髓のかくまで淺はかなる事を弄ぶことを嫌はざるは、げに怪しき限ならずや。嗚呼、我とても爭（いか）でかことさらに此の如き事のために、我腦髓を役せんや。我は唯だ世の人の多く語るところにして、我が爲めにもをかしとお

もはるゝものなるからに、人々の一粲を博する料にもとおもひし迄なり。

日暮れて客あり。數人の外國人さへ雜りたり。われは晝間の譴責に懲りて、室の片隅に隱れ避け、一語をだに出ださゞりき。人々は圈の形をなして、ペリイニイといふものゝめぐりに集へり。この人は齡略ぼ我と同じくして、その家は貴族なり。心爽かにして頓智あり、會話も甚巧なれば、人皆その言ふところを樂み聽けり。忽ち人々の一齊に笑ふ聲して、老公の聲の特さらに高く聞えければ、われは何事ならんとおもひつゝ、少しく歩み近づきたり。然るに我は何事をか聞きし。晝間我が語りて人々の咎に逢ひし、彼一口話は今ペリイニイの口より出でゝ人々に喝采せらるゝなりき。ペリイニイは一句を添へず又一句を削らず、その口吻態度些の我に殊なることなくして、人々は此の如く笑ひしなり。語り畢る時、老公は掌を撫して、側に立ちて笑ひ居たる姫に向ひ、いかにをかしき話ならずやと宣給へり。姫、まことに仰せの如くに侍り、けふ午の食卓にて、アントニオが語りし時より然かおもひ侍りきと答へ給ふ。その語調はいと温和にて、怨み憤る色もなく辨へ難ずる色もなし。われは心の内にて、この優しき小尼公の前に跪かんとしたり。この時フランチエスカの君も、げに〳〵をかしき物語なりきと宣給ふ。われは心の跳るを覺えて、そと人々に遠ざかり、身を長き幌の蔭に隱して、窓の外なる涼しき空氣を呼吸したり。

この一口話の事をば、われ唯だ一の例として、かく詳にはしるしゝなり。これより後も、日としてこれに似たる辱を被らざることなかりき。唯だ小尼公のすゞしき目の我面を見上げて、衆人の罪惡の爲めに代りて我に謝するに似たるありて、われはその辱の疇昔よりも忍び易きを覺えたり。竊におもふに我にはまことに弱點あり。そを何ぞといふに、影を顧みて自ら喜ぶ性ありて、難きを見て屈せざる質なきこと是なり。そもこの弱點はいづれの處よりか生ぜし。生を微賤の家に稟けしにも因るべく、最初に受けし教育にも因るべく、又恆に人の廡下に倚る境遇にも因るなるべし。我は胸に溢れ口に發せんと欲するところのものあるごとに、必ず先づ身邊の嘗て我に恩惠を施したる人々を顧みて、自ら我舌を結び、終に我不屈不撓の氣象を發展するに及ばずして止みぬ。若し自から辯護して評せばこも謙讓の一端なるべし。されどその弱點たることは到底掩ふべからざるを奈何せん。

今の勢をもてすれば、その恩義の絆を斷たんことをいとむづかし。人々は我にいかなる苦痛を與へ給はんも、我が受けたるところの恩義は飽くまで恩義なり。そは人々なかりせば、我は或は饑渇の爲めに苦められけんも計り難きが故なり。我が人々の爲めに身にふさはしき業して、恩義に酬いんとせしことは幾度ぞ。我は報恩の何の義なるかを知らざるにあらず、良心のいかなるものなるかを解せざるにあらず。いかなれば人々は此良心の發動、報恩の企圖を妨碍して、天才は俗事に用なしといひ、又思想多きに過ぎて世務に適せずといふぞ。若しまことに天才を視ること此の如く、思想を視ること此の如くならば、そは天才をも思想をも知らざるなり。

その頃我は大闢を題として長篇を作りぬ。この詩は字々皆我心血なりき。昔の不幸なる戀と拿破里客中の遭遇とは、常に胸裡に往來して、侯爵家の人々の所謂教育は斷えず腦髓を刺戟し、我を驅りて詩國に入らしめ、我心頭には時として我生涯の一篇の完璧をなして浮び出づることあり。その中にはいかなる瑣細なる事も、いかなる

厭ふべく苦むべき事も、一として滿分の詩趣を具へざるはなかりき。我中情は此の如く詠歎の聲を迫り出して、我をしてダヰツトの故事の最も當時の感興を寓するに宜しきを覺えしめしなり。

詩成りて、我は復たその名作たるを疑はざりき。而して我は神に謝する情の胸に溢るゝを見たり。そは我平生の習として、一詩句を得るごとに、未だ嘗て神の我靈魂を護りて、詩思を生ぜしめ給ふを謝せざることあらざればなり。此作は我心の瘡痍を醫すべき藥液なりき。我は自ら以爲へらく。人々若し我此作を讀まば、その我に苦痛を與ふることの非なるを悟りて、善く我を遇するに至るならんと。

詩成りて、作者より外、未だ一人の肉眼のこれに觸れたるものあらず。この塵を蒙らざる美の影圖は、その氣高きこと彼「ワチカアノ」なるアポルロンの神の像の如く、儼然として我前に立てり。嗚呼、この影圖よ。今これを知りたるものは、唯だ神と我とのみ。我は學士會院に往きてこれを朗讀すべき日を樂み待てり。

さるを一日フアビアニ公子とフランチエスカ夫人との優しさ常に倍するを覺えければ、我は此二恩人に對して心中の祕密を守ること能はざりき。こは小尼公の來給ひしより二三日の後なりきと覺ゆ。公子夫婦は聞きて、さらばその詩をば我等こそ最初に聽くべけれと宣給ふ。我は直ちに諾しつれど、心にはこの本讀の發落いかにと氣遣はざること能はざりき。さて我詩を讀むべき夕には、老侯も席に出で給ふ筈なりき。此日となりて又期せずしてハツバス・ダアダアの侯爵家を訪ふに會ひぬ。フランチエスカはこれを留めて、渠にも我が讀むべき詩を聽かしめんといひぬ。われは此翁の偏執の念強くして人の才を妬み、特に平生我を喜ばざるを知れり。公子夫婦の心冷なる、既に好き聽衆とすべきならぬに、今又此毒舌の翁を獲つ。我が本讀の前兆は太だ佳ならざるが如くなりき。

我胸の跳ることは、嘗て「サン、カルロ」座の舞臺に立ちし時より甚しかりき。若し我が期するところの效果にして十分ならば、人々はこれを聽きて、その常に我を遇する手段の正しからざるを悟り、未來に於いて自ら改むるに至るならん。是れ一種の精神上の治療法なり。われは明かに我が期するところの難きを知る。さるを猶これを敢てするものは、深く自ら「ダヰツト」の一篇の傑作なることを信じたればなり、又小尼公の優しき目の暗に我を鼓舞するに似たるあるに感じたればなり。

我詩は一として自家の閲歷に本づかざる者なし。此篇も亦然なり。首段は牧童たるダヰツトの事を敍す。即ち我が穉かりし頃、ドメニカにはぐゝまれてカムパニアの茅屋に住めりし時の境界に外ならず。フランチエスカの君聞もあへず、そは汝が上にあらずや、汝がカムパニアの野にありし時の事に非ずやと叫び給へば、老侯笑ひて、そは預期すべき事なり、いかなる題に逢ひても、自家の感情をもてこれに附會することを得るはアントニオが長技ならずやと答へ給ふ。ハツバス・ダアダアは嗄れたる聲振り絞りていふやう。句々洗鍊の足らざるが恨なり、ホラチウスの教を知らずや、唯だ放置せよ、放置してその熟するを待てといへり、おん身の作も亦然なり。

人々は早く既に一槌をわが美しき彫像に加へしなり。我は猶二三章を讀みしかど、只だ冷澹にして輕浮なる評語の我耳に詛り入るあるのみ。人々は又我肺腑中より流れ出でたる句を聞きて、古人某の集より剽竊せるかと疑へり。嗚呼、初め我が人をして聳聽せしむべく、怡悦せしむべき句ぞとおもひしものは、今は人々の一顧にだに價せざらんとす。我は第二折の末に到りて、興全く盡きぬれば、

人々に謝して讀むことを止めたり。此に至りて、自ら我手中の詩篇を顧みれば、復た前の綽約たる姿なくして、彼三王日の前夜フイレンチエ市を擔ひ行くなる「ベフアアナ」といふ偶人の、面色極めて奇醜にして、目には硝子球を嵌めたるにも譬へつべきものとなりぬ。是れ聽衆の口々より※きたる毒氣のわが美の影圖をして此の如く變化せしめしにぞありける。

　おん身のダヰツトは市井の俗人をだに殺すことなからん、とはハツバス・ダアダアが總評なりき。人々は又評して宣給ふやう。篇中往々好き處なきにあらず。そは情深きと無邪氣なるとの二つに本づけりとなり。我は頭を低れて口に一語を出さず、罪囚の刑の宣告を受くるやうなる心地にて、人々の前に凝立せり。ハツバス・ダアダアは再びホラチウスの教を忘れ給ふなと繰返しつゝも、猶慇懃に我手を握りて、詩人よ、懋めよやと云ひぬ。我は室の一隅に退きたりしが、暫しありて同じハツバス・ダアダアが耳疎き人の癖とて、聲高くフアビアニ公子にさゝやくを聞きつ。そは杜撰彼篇の如きは己れの未だ嘗て見ざるところぞとの事なりき。

　人々は我詩を解せざらんとせり。又我を解せざらんとせり。こは我が忍ぶこと能はざるところなり。室の隣には、開爐に炭火を焚きたる廣間あり。われはこれに退き入り、手に詩稾を把りて、爪甲の掌を穿たんばかりに握りたり。嗚呼、我夢は一瞬の間に醒め、我希望は一瞬の間に破壞せられたり。我身は神の御姿の摸造ながら、自ら顧みれば苦※の器に殊ならず。われは我鍾愛の物、我がしば〳〵接吻せし物、我が心血を濺ぎし物、我が性命ある活思想とも稱すべき物をもて、熾火の裡に擲ちたり。我詩卷は炎々として燃え上れり。忽ちアントニオと叫ぶ一聲我身邊より起りて、小尼公の優しき腕の爐中の詩卷を攫まんとせし時、事の慌忙しさに足踏みすべらしたるなるべし、この天使の如き少女はあと叫びて、横ざまに身を火の間に僵しつ。我は夢心地の間に姫を抱き起しつ。人々は何事やらんと馳せ集へり。

　フランチエスカ夫人は聖母の御名を唱へつ。我手に抱き上げられたる姫は、眞蒼なる顔もて母上を仰ぎ見つゝ、足すべりて爐の中に倒れ、手少し傷け侍り、アントニオなかりせば大いなる怪我をもすべかりしをと宣給ひぬ。われは激しき感情に襲はれて、口に一語を發すること能はず、只だ喪心せるものゝ如くなりき。

　姫は右手を劇しく燒き給へり。一家の騷擾は一方ならず。彼問ひ此答ふる繁き詞の中にも、幸にして人の我詩卷を問ふ者なく、我も亦默ありければ、ダヰツトの詩篇の事は終に復た一人の口に上ることなかりき。あらず、後に至りてこれに言ひ及びし人唯一人あり。そは我が爲めに翼を焦しゝ天使なりき、小尼公なりき。嗚呼、小尼公なかりせば、われは全く厭世の淵に沈み果てしならん。われをして人の心の猶頼むべきを覺えしめ、われをして少時の淨き心を喚び返さしめたるは、げにこのボルゲエゼ一家の守護神たる小尼公なりき。小尼公の手は痛むこと十四日の間なりき。我胸の痛むことも亦十四日の間なりき。

　ある日われは獨り姫の病牀に侍することを得たり。われ。フラミニアの君よ、願はくは我罪を許し給へ。君は我が爲めに其苦痛を受け給へり。姫。否、その事をば再び口に出し給ふな。又ゆめ餘所に洩し給ふな。そが上に、さのたまふはおん身自ら歎き給ふにてこそあれ。我足のすべりしは事實なり。おん身若し扶け起し給はずば、わが怪我はいか

なりけん。されば我はおん身の恩を荷へり。父母も然か思ひて、御身のいちはやく救ひ給ひしを感じ給ひぬ。獨り此事のみにはあらず。父母の御身を愛し給ふ心のまことの深さをば、おん身は未だ全く知り給はぬごとし。われ。そは宣給ふまでもなし。わが今日あるは皆御家の賜なり。かくて一日ごとに我が受くるところの恩澤は加はりゆくなり。姫。否、さる筋の事をいふにはあらず。わが二親のおん身を遇し給ふさまをば、此幾日の間に我熟く知れり。二親はかくするが好しとおもひ給ふなれば、そは奈何ともし難けれど、總ておん身を惡しとおもひ給ひてにはあらず。殊に母上の我に對しておん身を譽め給ふ御詞をば、おん身に聞せまほしきやうなり。師の尼君の宣給ふに、おほよそ人と生れて過失なきものあらじとぞ。憚あることには侍れど、おん身にも總て過失なしとはいひ難くや侍らん。例之ばおん身は、いかなれば一時怒に任せて、彼美しき詩を焚き給ひし。われ。そは世に殘すべき價なければなり。唯だ焚くことの遲かりしこそ恨なれ。姫。否々、われは世の人の心の險しきを憶ひ得たり。靜かなる尼寺の垣の内にありて、優しき尼達に交らんことの願はしさよ。われ。げに君が淨き御心にては、しかおもひ給ふなるべし。我心は汚れたり。惠の泉の甘きをば忘れ易くして、一滴の毒水をば繰返して味ふこと、まことに罪深き業にこそ侍らめと答へぬ。

この館には一人として我を憎むものなし。されど尼寺の心安きには似ず。こは小尼公の獨り我に對し給ふとき、屡　宣給ひし詞なり。われはこの姫をもて我感情の守護神、わが清淨なる思想の守護神とし、漸くこれに心を傾けつ。想ふに姫の歸り來給ひしより、館の人々の我を遇し給ふさま、面色よりいはんも語氣よりいはんも、著く温和に著く優渥なるは、この優しき人の感化に因るなるべし。

姫は數※我をして平生の好むところを語らしめ給ひぬ、詩を談ぜしめ給ひぬ。興に乘じて古人の事を談ずるときは、われは自ら我辯舌の暢達になれるに驚きぬ。姫はもろ手の指を組み合せて、我面を仰ぎ見給ふ。姫。おん身の如く詩をもて業とするは、まことに人生の幸福なるべし。されど神の預言者たるべき詩人の、神の德、天國の平和をば歌はで、人の業、現世の爭奪を歌ふは何故ぞ。おん身は世の人に福を授け給ふことも多かるべけれど、又禍を遺し給ふことも少からざるならん。われ。否、詩人の人を歌ふは隨即神を歌ふなり。神は己れの德を表さんとて、人をば造り給ひしなり。姫。おん身の宣給ふところには、わが諾ひ難き節あれど、われは我心を明すべき詞を求め得ず。人の心にも世のたゝずまひにも、げに神の御心は顯れたるべし。さればそを指し示して、世の人をして神の懷に歸り入らしめんこそ、詩人の務とはいふべけれ。さるを却りて世の人を驅りて、おそろしき呑噬爭奪の境界に墮ちしめんとする如くなるは、好しとはおもはれず。そは兎まれ角まれ、おん身はいかにして即興の詩を歌ひ給ふか。われ。題を得るときは思想は招かずして至るものなり。姫。さなり。其思想は神の賜ふ所なること人皆知る。されどそを句とし章とし、それに美しき姿しらべを賦し給ふは奈何。われ。君は尼寺に居給ふとき、「プサルモス」の歌を聽き、又古の聖の上を綴りたる韻語を學び給ひしならん。さてある時端なく一の思想の浮び出づるに逢ひて、これと與に曾て聞ける歌、曾て聞ける韻語を憶ひ得給ひしことはあらずや。憾むらくは、おん身はかゝる機會を逸し給ひて、筆とりて其思想を寫さんことを試み給はざりしなり。おん身若しそを試み給ひしならば、思想の全き形の心頭に顯れたるものは凝りて散ぜず、句は句を生じ章は章を生じ、詩は無意

識の間になりしならん。こは唯だ我一人の經驗ながら、詩人の製作といふものはかくあらんとおもふなり。われは詩を作るごとに、我詩の前世の記憶の如く、前身の搖籃中にて聞きし歌の名殘の如きを感ず。われは創作すと感ぜず、われは復誦すと感ず。姫。その思想といふものも、いかなるが詩となすに宜しかるべきか知るよしなけれど、わが尼寺にありし時、ふと物の懐かしき如き情、遠きに騁する如き情の胸に溢るゝことあり。その懐かしきは何ぞ、その騁するは何をあてぞといはば、われ自ら答ふるところを知らず。されど夢に吾夫たるべき耶蘇を見、又聖母を見るときは、我心はこれに慰められたり。かゝる情も詩となるべしや否や、覺束なし。館に歸りての後は、耶蘇聖母の夢に見え給ふこと稀にして、華やかなる浮世の事、罪深き人間の事のみ夢に入りぬ。されば唯だ尼寺に返らんことこそ願はしけれ。アントニオよ。おん身は親しき友なれば告ぐべし。われはこの頃漸く心の汚れんとするを覺ゆるなり。そは粧ひ飾らんとする願起りて、人の美しと褒むるが喜ばしくなれるにて知らる。尼寺の人々に知られなば、何とかいはれん。われ。世に君の如く淨き心あるべしや。われは唯だ我心の君に似ざるを愧づるのみ。今我目もて見るときは、君の心の淨さは、昔穉くて此御館に居給ひし日に殊ならず。（われはかく言ひて姫の手に接吻せり。）姫。その頃おん身の我を抱き給ひしこと、我が爲めに晝かきて賜はりしことをば、まだ忘れ侍らず。われ。おん身の其晝を看畢りて、破り棄て給ひしをも、われは忘れず。姫。そを憎しとおもひ給ひしや。われ。世の人は我胸中なる美しき繪の限を破り棄てぬれど、われはそれすら憎むことなし。

わが小尼公に親む心は日にけに増さり行きぬ。われは世の人の皆我敵にして、唯だ小尼公のみ身方なるを覺えき。

落飾

暑き二箇月の間は、館の人々チヲリに遊び給ひぬ。わがその群に入ることを得つるは、恐らくは小尼公の緩頬に由れるなるべし。橄欖の茂き林、石走る瀧津瀬など、自然の豐かに美しき景色の我心を動すことは、嘗てテルラチナに來て始て海を觀つる時と殊なることなかりき。この山のたゝずまひ、この風の清く涼しきに、我は復たナポリの夢を喚び起すことを得たり。我は羅馬の塵多き衢、焦げたるカムパニアの野、汗流るゝ午景を背にせしを喜びて、人々の我を伴ひ給ひしを謝したり。

小尼公の侍女と共に驢に騎りてチヲリの谷間に遊び給ふときは、我はこれに隨ひ行くことを許されたり。姫は頗る自然を愛する情に富みて、我に些の寫生を試みしめ給ひぬ。荒漠たるカムパニアの野の盡くるところに、聖彼得寺の塔の湧出したる、橄欖の林、葡萄の圃の緑いろ濃く山腹を覆ひたる、瀑布幾條か漲り墮つる巖の上にチヲリの人家の簇りたるなど、皆かつがつ我筆に上りしなり。

終の圖に筆を染むる時、姫の宣給ふやう。かく麓より眺むれば、この落ちたぎつ水の勢は、早晩巖石を穿ち碎き、押し流して、その上なる人家も底なき瀧壺に陷らずやと怖しく思はると宣給ふ。われ。まことに宜給ふ如し。されどそを憂へずして、彼家々に栖める人の笑ひ樂みて日を送れるこそ神の惠ならめ。神は憫むべき人類のために、おそろしき地下のさまを掩ひ隱し給ふとおぼし。君は此水をすらおそろしと見給へども、ナポリの市の地下のさまはいかなるべき

か。此は水なり、彼は火なり。かしこの民は、沸き返る熔巖の釜の上に生涯を送れるなりと答へぬ。我又語を繼ぎて、ヱズヰオの火山の形、わが其巔に登りし時の事、エルコラノとポムペイとの來歷など、姫に聞えまつりしに、姫は耳を傾け給ひて、館に還りての後、猶大澤の彼方の珍らしき事どもを語り聞せよと宣給ひぬ。

姫は海のいかなるものなるを想ひ見ること能はずと宣給ふ。そは親しく海と云ふ者を觀給ひしは唯一たびにて、それさへ山の巔より、地平線を限れる一帶の銀色したる物を認め給ひしに過ぎざればなり。われは姫に告げて、まことの海原は我脚底に又一の碧空を視る如しと云ひしに、姫は手を組み合せて、神の此世界を飾り給ひしことの極みなく奇しきをたゝへ給ひぬ。この時我は、その奇しく妙なる世界を背にして、狹き尼寺の垣の内に籠らんとし給ふ御心こそ知られねと云はんと欲せしが、姫の思ひ給はん程のおぼつかなくて默しつ。ある日姫と我等とは、荒れたる神巫寺の傍に立ちて雲霧の如く漲り下る二條の大瀑を下瞰したり。一道の白き水烟は、小暗き林木を穿ちて逆立し、その末は青き空氣の中に散じ、日光はこれに觸れて彩虹を現じ出せり。側なる小瀑の上なる岩窟には、一群の鴿ありて巢を營みたり。その時ありて大いなる圈を畫きて、我等の脚下を飛ぶや、噴珠と共に亂れて、見る目まばゆき程なり。姫は歎賞することと久しうして、我に即興を求め給へり。われは平生夢寐の間に往來する所の情の、終に散じ終に銷すること此飛泉と同じきを想ひて、忽ち歌ひ起していはく。人生の急湍は須臾も留まることなし。太陽同じく照すといへど、一滴一沫よりして見れば、その光を仰ぎその温を被らざるあり。惟だ美妙の大光明は全景を覆ひ盡すのみと云ひぬ。姫は我歌を遮り留めて、止めよ、われは悲傷の詞を聞かんことを願はず、汝が心まことに樂しからずば、姑く我が爲めに歌ふことを休めよと宣給ひぬ。

姫の我を信じ給ふことの厚きは、我が姫を信ずることの厚きに殊ならず。ある時姫の詞に、いかなる故とも知る由なけれど、館に往來する他の男子には語り難き事をも、おん身には語り易し、御身の親しきは父母に劣らざる心地すといはれしことあり。されば我もまた心を置かで、何くれとなく物語するやうになりぬ。幼かりし日の事を語りて、地下の石窟に入りて路を失ひし話よりジエンツアノの花祭に老侯の馬車の我母を轢殺せし話に至りしときは、姫の驚一方ならざりき。姫は我手を※りて、我面を打目守り、その事をば館の人々まだ一たびも我に告げざりき、さては我族の御身に負ふ所はいと大いなりと宣給ひぬ。カムパニアの媼ドメニカには、姫深き同情を寄せ給ひて、おん身は定めて今も怠らずおとづれ給ふなるべしと宣給ひぬ。われは少しく心に恥ぢながら、去年は唯だ二たび訪ひしのみなれど、彼方より尋ね來たるごとに、些の小づかひ錢をば分ち與ふるを例とすと答へぬ。

われは姫に促されて、我自傳を語りつゞけ、ベルナルドオの上に及び、又アヌンチヤタの上に及びぬ。されど我面に注ぎたる姫の涼しき目は、我をして縱に戀愛を説き嫉妬を説くこと能はざらしめき。われは話題を轉じてナポリの紀行に入り、ララの事を語り、こたびは又サンタの事にさへ及びぬ。

最も姫の心に※ひしはララなり。姫の宜給ふやう。アヌンチヤタは美しくもありしなるべく、賢しくもありしなるべし。されど面を公衆の前に曝すことを憚らず、浮薄なる貴公子を戀ひ慕へるなど、われはいかなる詞もて評すべきを知らぬながら、その人のおん身の

妻とならざりしをば喜ぶなり。ララはこれに異にて、まことにおん身の爲めの守護神なるべし。おん身の靈の天上に在らん時、先づ來りて相見んものはララならずして誰ぞやと宣給ひぬ。

サンタをば姫いたく怖れ給ひて、燃ゆる山、闇き海の景色はいかに美しからんも、かゝる怖ろしき人の住める地に往かんことは、わが願にあらず、おん身の恙なかりしは、聖母の御惠なりと宣給ふ。われは此詞を聞きて、さきに包み藏して告げざりしサンタとの最後の會見の事を憶ひ起しつ。現に我頭を擊ちて我夢を醒ましゝは、尊き聖母の御影なりき。姫若しわが當時の惑を知らば、猶我に許すに善人をもてすべしや否や。我肉身の弱きことは、よその男子に殊ならざりしなり。姫は又我に迫りて、嘗て即興詩人として劇場に上りし折の事を語らしめ給ひぬ。山深き賊寨にて歌はんは易く、大都の舞臺にて歌はんは難かるべしとは、姫の評なりき。われは行李を探りて、かの拿破里日報を出して姫に見せつ。姫は先づ當時の評語を讀みて、さて知らぬ都會の新聞紙のいかなる事を載せたるかを見ばやとて、あちこち翻し見給ひしが、忽ち我面を仰ぎ視て、おん身はアヌンチヤタの同じ時ナポリに在りしをば、まだ我に告げ給はざりきと宣給ふ。われはこの思ひ掛けぬ詞に、アヌンチヤタの爭でかとつぶやきつゝ、彼新聞紙に目を注ぎつ。われは此一枚の紙を手にとりしこと幾度なるを知らねど、いつも評語をのみ讀みつれば、アヌンチヤタの事を書ける雜報あるには心付かざりしなり。

姫の指ざし給ふ雜報には、アヌンチヤタ明日登場すべしとあり。その明日といへるは即ち我が拿破里を發せし日なり。われは姫と目を見合せて、暫くはものいふこと能はざりき。既にして我は纔に口を開き、さるにても我が再び面をあはせざりしは、せめてもの幸なりきといひぬ。姫。さは宣給へど、今其人に逢ひ給はゞいかに。定めて喜ばしと思ひ給ふならん。われ。否、われは悲しと思ふべし。そを何故といふに、わが昔崇拜せしアヌンチヤタは今亡せたり、昔の理想の影は今消えぬ、わがこれを思ふは泉下の人を思ふ如し、さるを若しそのアヌンチヤタならぬアヌンチヤタ又出でゝ、冷なる眼もて我を見ば、※えなんとする心の創は復た綻びて、却りてわれに限なき苦痛を感ぜしむるなるべし。

いと暑き日の午後、われは共同の廣間に出でしに、緑なる蔓草の纏ひ付きたる窓櫺の下に、姫の假寢し給へるに會ひぬ。纖手もて頰を支へて眠りたるさま、只だ戲に目を閉ぢたるやうに見えたり。胸の波打つは夢見るにやあらん。忽ち微笑の影浮びて、姫の眠は醒めぬ。アントニオそこにありや。われは料らずも眠りて、料らずも夢見たり。おん身はわが夢に見えしは何人の上なりとかおもふ。われ。ララにはあらずや。この答はわが姫の目を閉ぢたるを見し時、心に浮びし人を指して言へるのみなりしに、期せずして中りしなり。姫。さなり。われはララと共に飛行して、大海の上を渡りゆきぬ。海の中には一の島山ありき。その山の巓はいと高きに、われ等は猶おん身の物思はしげなる面持して石に踞して坐し給ふを見ることを得つ。ララは翼を振ひて上らんとす。われはこれに從はんとして、羽搖するごとに後れ、その距離千尋なるべく覺ゆるとき、忽ち又ララとおん身との我側にあるを見き。われ。そは死の境界なるべし。生きて千里を隔つるものも、死しては必ず相逢ふ。死は惠深きものにて、我に我が愛するところのものを與ふ。姫。われは遠からず尼寺に歸らんとす。これより後の我生涯は、おん身の爲めには死せると同じ。おん身は能く我を忘れずして、死後相見んことを期し給はんや。姫

の此詞はいたく我心を動して、我をして輒ち答ふること能はざらしめき。

ある日フランチエスカ夫人は姫を伴ひてヰルラ、デステの園の中をそゞろありきし給へり。我も亦許されてその後に從ひぬ。園は高き絲杉あるをもて世に聞えたるところなり。一行の人工の噴泉ある長き街※の間を歩むとき、路上に襤褸を纏ひたる貧人の群の草を拔くありき。われそが一人に「パオロ」銀一箇（我二十錢餘）を與へしに、姫もまた微笑みつゝ一箇を與へ給ひぬ。草拔く人は、美しき姫君と壻君とに聖母の御惠あれかしと呼びたり。フランチエスカ夫人はこれを聞きて高く笑へり。われは熱血の身を焦すを覺えて、姫の面を覗ふことを敢てせざりき。われは今明に姫の我が爲めに離れ難き人となりしを覺りぬ。されど此情は嘗てアヌンチヤタの爲に發せしと※に殊にて、又ララに對して生ぜしとも同じからず。アヌンチヤタの才と色とは殆ど我をして狂せしめ、ララの理想めきたる美は魔力を吾頭上に加へ、並に皆我をしてその人を我物にせん願を起さしめしなり。獨り小尼公に至りては、我友情を催すこと極て深きに、われは却りて又我慾念のこれが爲めに抑へらるゝを覺えき。

幾もあらぬに我等は又羅馬に歸りぬ。姫は二三週の後には尼寺に返り給ふべく、返り給ひては直ちに覆面の式を行はせらるべしと傳ふ。姫の長き髮はこれを截り、その身には生きながら凶衣を被らしめ、輓歌を歌ひ鯨音を鳴し、法の如く假に葬りて、さて天に許嫁せる人となりて蘇生せしむ。是れ式のあらましなり。姫は面に喜の色を湛へてこれを語りぬ。われは聞くに忍びずして、いかなれば君は自ら壙穴を穿ちて自ら下り入らんとはし給ふぞといひぬ。姫は色を正して、さる詞を人にな聞せそ、此塵の世に心牽かるゝことおん身の如くならんも拙し、少しは後の世の事をも思へかしと宣給ふ。その聲音さへ常ならぬに我はいたく驚きぬ。霎時ありて、姫は詞の過ぎたるを悔み給ひしにや、面に紅を潮して我手を取り、アントニオとても我心の平和を破り、我に要なき物思せさせんとにはあらざるべしと宣給ふ。我は詞なくて姫の金蓮の下に臥し轉びつ。

別の舞踏會は御館にて催されぬ。われは姫の最後に色ある衣を着け給ふを見き。是れ人々の生贄の羔を飾れるなり。姫は我傍に歩み寄りて、おん身も人々の歡を分ち給はずや、われ若しおん身の憂はしき面を見て別れ去らば、尼寺に入りて後に屡 御身の上を氣づかふならん、かくてはおん身我に罪障を增させ給ふなりと宣給ふ。其聲は我が爲めに、瀕死の人の氣息を聞くが如くなりき。

出立ち給ふ前の日の夕となりぬ。姫は神色常の如く、父君と老侯とに接吻して、あすの別の事を語り給ふ。其詞つきの、唯だ假初の旅路抔に出立ち給ふにかはらぬぞ、なか〳〵に哀なりける。アントニオに暇乞せずやといふは、フアビアニ公子の聲なり。坐上にて、獨り此君のみは面に憂の色を帶び給へり。我は趨りて姫の前に出で、白く細き右手に接吻せり。姫はアントニオと我名を呼び掛け給ひしが、流石にしばし口籠りて、世に幸ある人となり給へ、さらばとて、我額に接吻し給ふ。われは夢心に其間を走り出でゝ、我室に泣きに入りぬ。

終にその日とはなりぬ。空は晴れ渡りて、日は麗かに照りぬ。我は父君母君の盛妝せる姫を贊卓の前に導き行き給ふを見、歌頌の聲を聞き、けふの式を拜まんとて來り集へる衆人の我四邊を圍めるを覺えき。されど僧徒の群に引かれてつくゑの前に跪き給へる、天使の如き姫君の、色白く優しげなる面のみは、我心の上に殊に明か

なる印象を與へて、年經ての後も消ゆることなかりき。我は僧等の姫が頭上の紗を剥ぎて、雲の如き※髪の亂れ墜ちて兩の肩を掩へるを見、これを斷つ剪刀の響を聞きつ。僧等は幾襲の美しき衣を脱がせて、姫を柩の上に臥させまつり、下に白き希を覆ひ、上に又髑髏の文樣ある黒き布を重ねたり。忽ち鐘の音聞えて、僧等の口は一齊に輓歌を唱へ出しつ。かくて姫は此世を隱れましゝなり。爾來尼院に連れる廊道の前なる黒漆の格子擧りて、式の白衣を着たる一群の尼達現れ、高く天使の歌を歌ふ。僧官は姫の手を取りて扶け起しつ。姫は早や天に許嫁し給ひて、御名さへエリザベツタと改まりぬ。我は姫の群集の上に投じ給ふ最後の一瞥を望み見たり。一人の故參の尼は姫の手を引きて入りぬ。黒漆の格子は下りて、姫の姿、姫の裳裾は見えずなりぬ。

なきあと

ボルゲエゼ家の館は賀客絡繹たり。エリザベツタの天に許嫁せしを賀するなり。フランチエスカ夫人は面に微笑を浮べて客に接し給へど、その良心のまことに平なるにあらざるをば、われ猶能くこれを知れり。

フアビアニ公子は我を招きて一包の金を賜ひぬ。汝は好き方人を失ひぬれば、氣色すぐれず見ゆるも理なきにあらず。姫は我に此金を殘しおきて、カムパニアの媼に與へんことを頼み聞えぬ。想ふに姫はドメニカの上を汝に聞きて知りたりしならん。持ち往きて與へよとなり。

死は蛇の如く我心を纏へり。我は自殺の念の一種の旨味あるを覺えて、心に又此念の生じ來れるを怖れたり。御館の廣き間ごと間ごとに、我はうらさびしき空虚を感ぜり。我はこゝを出でゝカムパニアの野に往かんことの樂しかるべきをおもひぬ。そは我搖籃のありつる處、ドメニカが子もり歌の響きし處の、今更に懷しき心地したればなり。

カムパニアの廣き野は、この頃の暑さに焦げ爛れて、些の生氣をだに留めざりき。黄なるテヱエルの流の、層々の波を滾し去るは、そをして海に沒せしめんが爲めなるべし。われは又蔦蘿の壁にまとひ屋根にまとへる、小さなる石屋を見たり。是れ實にわが少時の天地なりしなり。門の戸は開けり。われは媼の我を見て喜ぶべきを思ひて、胸に樂しく又哀なる一種の感を起しつ。先に此家をおとづれてより、早や一とせを經ぬ。先に羅馬にて彼媼を見しより、早や八月を經ぬ。此間われは媼を忘れたりしならず、起臥ごとに思ひ出でゝ、小尼公にも語り聞せつ。されどチヲリの避暑、御館にかへりて後の心の憂などは、我を妨げてカムパニアに來させざりしなり。家の見え初めてより、われは媼の歡び迎ふる詞を想像しつゝ、歩を早めたりしが、家の門近くなりては、又跫音の疾く聞えんことを恐れて、ぬきあししつゝ進み寄りぬ。

門口より見るに、土間の中央に籐を折り加べて火を燃やし、大いなる鐵の銚を弔りたり。その下に火を吹く童ありて、こなたへ振り向くを見ればピエトロなり。昔はわれ此童の搖籃を護りしことありしに、此頃はいと逞しきものにぞなりぬる。聖ジユウゼツペ、檀那の來ましつるよ、さきに來ましゝより早や久しくなり候ふとて、立ち上りて迎へぬ。わがさし伸ばす手に、童の接吻せんとするを遮りつゝ、われ、無面目くも忘られしよとおもへるならん、忘れたるに

はあらずとことわりつ。童。否、母もさは思ひ候はざりき、生存へたらばいかに嬉しとおもふらんものを。われ。何とか言ふ。ドメニカは最早世にあらずとか。童。地の下に埋めてより、既に半年になりぬ。病みしは僅に二日ばかりなりしが、その間アントニオ、アントニオとのみ呼び續け候ひぬ。わがかく檀那の御名をいふを無禮しとおもひ給ふな。母は唯一目アントニオを見て死なんといひき。今宵はとおもはれし日の午過ぎて、われは羅馬の御館に參りしに、檀那はチヲリに往き給ひし後なりき。歸りて見れば、母は息絶えたり。言ひ畢りて、ピエトロは手もて面を掩ひぬ。

ピエトロが物語は、句ごとに言ごとに、我胸を刺す如くなりき。恩情母に等しきドメニカが、死に垂んとして我名を呼びしとき、我は避暑の遊をなして、心のどかに日を暮しつ。媼の餘命いくばくもあらぬをば、われ爭でか知らざらん。何故に我はチヲリに往くに先だちて、一たび媼の許には來ざりしぞ。我はかくても猶自ら辯護して、我は善き人ぞといはんとするか。

われは彼金包を取りいで、我身邊に帶び來りし錢をも添へて、悉く童に與へつ、童は土間に跪きて、我を天使と呼べり。我が爲めには此詞の嘲謔の意あるが如く聞えて、我は此家の内にあるに堪へず、一つの憂をもて來し身の、今は二つの憂を懷きて、逃るが如く馳せ去りぬ。

未錬

カムパニアの野より御館までは、いかにして歸り着きけん知らず。われは限なき苦惱を覺えて、我臥床の上に僵れ臥しゝに、忽ち高熱を發して人事を知らざること三晝夜なりき。看病にはフエネルラとて、聾ひたる女を附けられしかば、幸に我譫語も人に怪まるゝことあらざりしならん。されどフアビアニ公子の屢　病床に來給ひぬといふは、猶胸苦しき心地ぞする。

我恢復は頗る遲かりき。館の人に見舞はるゝごとに、我は勉めて面を和げ快げにもてなせども、胸の中の苦しさは譬へんに物無かりき。此間人々は一たびも小尼公の名を我前に唱ふることなかりき。かくて小尼公の尼寺に入り給ひしより、六週の後となりし時、醫師は始て我に戸外を逍遙することを許しつ。

我は期する所あるに非ずして、ポルタ、ピアの傍に立ち、目を四井街（トロ、フオンタネ）の方に注ぎつ。されど我は猶心に憚りて、尼寺の門に到ることを果さゞりき。二三日の後、我は新月の光を趁ひて、又同じところに來しに、こたびは自ら禁ずること能はずして、進みて灰色の寺壁の下に立ち、格子窓を仰ぎ視たり。我は自らことわりて、誰かわが此墳墓を展るを難ずることを得んと云ひぬ。これよりして、我足は日として四井街に向はざることなく、偶※識る人に逢ふことあれば、散歩のゆくてはヰルラ、アルバニなりと欺きつ。

我足の尼寺の築泥の外に通ふこと愈　繁く、我情の迫ること愈　切に、われはこの通路の行末いかになるべきかを危まざること能はざるに至りぬ。果せる哉、ある暗き夕我が尼寺の一窓の微に燈光を洩せるを仰ぎ見て、心に小尼公をおもふ時、忽ち傍よりアントニオと呼ぶものあるを聞きつ。アントニオ、おん身はこゝに何をか爲せる。我は頭を回して公子の面を認め得たり。公子は直ちに我を促して共に歸りぬ。公子は途上復たわれと一語を交へざるに、われは心に公子の思はん程の恥かしくて、その面を見ることを敢てせざりき。

我室に入りて相對せる時、公子容を改めて宣給ふやう。アントニオよ。御身の病はまだ痊えずと覺し。少しく世の人に立ち交りて、氣鬱を散ぜんかた、身の爲めに宜しからん。曩にはおん身一たび翼を張りて飛ばんとせしを、われ強ひて抑留し、おん身をして久しく樊籠の中にあらしめき。そは我過にはあらざりしか。人各　意志あり。行かんと欲するところに行き、住まらんと欲するところに住まりて、さて不幸に遭はば、そは自ら作せるなれば、悔ゆることもあらざるべし。おん身は最早童にあらねば、人の監督を受くることをば喜ばざるべし。この頃醫師に謀りしに、これも轉地を勸めたり、拿破里の方をば既に見つれば、こたびは北伊太利を見に往けかし。一とせの間の費をば、われいかにともすべし。此館にありし間の我等の待遇には、おん身は或は懶ざりしならん。されど又世間に出でゝは、誠の心もておん身を待つ人少きことを忘れ給ふな。われ等は未來一年の間のおん身の振舞を見て、過去の我等の待遇のおん身に利ありしか利あらざりしかを驗すべしといはれぬ。

　公子は我答を待たずして室を出で給ひぬ。こは我に謀るにあらずして我に命ずるものなればなり、我に命ずるは我を逐ふものなればなり。世途は艱難ならん。されどその我を毒すること今の生涯に孰與ぞ。今や公子はわれに自由を與へ給ふ。こは仙方なり、靈藥なり。われは只だその仙方靈藥の劇毒の如く我創痍を刺し、我に苦痛を與ふるを感ずるのみ。去らんかな、羅馬を去らんかな。いでや、記念の花の匂へる南國を出でゝ、アペンニノの山を踰え、雪深き北地に入らん。アルピイおろしの寒威は、恰も好し、我が沸きかへる血を鎭むるならん。いでや浮島のエネチアに往かん、わたつみの配てふエネチアに往かん。神よ、我をして復た羅馬に歸らしむること勿れ、我記念の墳墓を訪はしむること勿れ。さらば羅馬、さらば故郷。

梟首

　車は物寂びたるカムパニアの野を走りぬ。サン、ピエトロの寺塔は丘陵のあなたに隱れぬ。既にして我はモンテ、ソラクテの側を過ぎ、山を踰えてネピの市に入りぬ。明月は市の狹き巷を照せり。一僧の酒肆の前に立ちて説法するあり。群衆は活聖マリアの聲に和しつゝ僧に隨ひて去れり。われはこれを避けて歩を轉ぜり。蔦蘿に包まれたる水道の址とこれを圍める橄欖の茂林とは、黯澹たる一幅の圖をなして、わが刻下の情に※へり。われは又前に過ぎたる門を出でたり。門外に大廢屋あり。その城壘たりしと寺觀たりしとを知らず。今の街道はその廣間を貫きて通ぜり。側なる細徑を下れば、小房の蜂※の如きありて、常春藤と石長生とは其壁を掩ひ盡せり。進みて一の廣間に入るに、地に委ねたる石柱の頭と瓦石の堆とは高草の底に沒し、こゝかしこに色硝子の斷片を留めたる尖弧式の窓をば幅廣き葡萄の若葉物珍らしげにさし覗き、數丈の高さなる墻壁の上には荊棘叢生ぜり。偶　月光の一の壁面を照すを見れば、半ば剥蝕せられたる鮮畫は、箭に貫かれたる聖セバスチアノの像を物せり。此廣間は絶えず遠雷の如き響ありて、四壁に反響す。われその響を追ひて狹き戸を潛り出でしに、道は「ミユルツス」と葡萄との鬱茂せる間に窮まりて、脚底千仞の斷崖を形づくれり。一の瀑布ありてこれに懸る。月光其泡沫を射て、銀丸を擲つ如し。凡そ此等の景は、なべて世の好奇心あるものを動かすに足るものなるべし。されど富時の我の憂愁に沈める、或は等閑に看過した

らんも知るべからず。幸に我は此境に在りて、別に一事に遭ひたり。我は其事を我心上に血書して復た消滅すべからざらしめしが故に、亦併せて此景の詳なることを記し得たり。

崖に沿ひて一條の細徑あり。迂　して初の街道に通ず。われ高く萱を分け小草を踏みて行きしに、月は高き石垣の上を照して、三人の色蒼ざめたる首の、鐵格の背後より、我を覗ふを見たり。こは山賊を梟せるなりき。ネピの人の此壁上に梟首するは、羅馬の人のアンジエロ門（ポルタ、デル、アンジエロ）の上に梟首するに殊ならず。首を鐵籠中に置くことはた同じ。常の我ならば、遠く望みて走り去るべきに、此頃の痛苦は我に哲學思想を與へ、我をして冷眼もてこれを視ることを敢てせしめき。嗚呼、王侯の前に屈せざりし首よ、人を殺し火を放つ計を出しゝ首よ、深山の荒鷲に似たる男等の首よ。今は靜に身を籠中に托すること、人に馴れたる小鳥の如し。近づくこと一歩にして見れば、刎ねられてよりまだ日を經ざるものと覺しく、鬚眉猶生けるがごとし。既にして我は中央なる首級の少しく異なるものあるを認め得たり。こは分明に老女の首なりしなり。我はこの褐いろの顏、半ば開ける※、格子の外に洩れ出でゝ風に亂るゝ銀髪を凝視して、我脈搏の忽ち亢進するを覺えき。われは眼を壁に懸けたる石版に注げり。版には土地の習にて、梟せられたるものゝ氏名と其罪科とを彫りたり。果せるかな、中央に老女フルヰア、フラスカアチの産と記せり。われはいたく感動して、覺えず歩み退くこと二三歩なりき。嗚呼、嘗て一たび我性命を救ひ、我に拿破里に至る盤纏を給せしフルヰアは、今此梟木の上より我と相見るなり。この藍色なる唇は、曾て我額に觸れしことあり。この物言はざる口は、曾て我に未來の運命を語りしことあり。汝は我福祉を預言したり。汝の猛き鷲は日邊に到らずして其翼を折けり、世のまがつみと戰ひてネミの湖に沈みたり。われは涙を灑いでフルヰアの名を呼び、盤散として閭門の外なる街道に歩み旋りぬ。

翌朝ネピを發してテルニイに抵りぬ。こは伊太利疆内にて最も美しく最も大なる瀑布ある處なり。われは案内者と共に、騎して市を出で、暗く茂れる橄欖の林に入りぬ。濕ひたる雲は山巓に棚引けり。我は羅馬以北の景を看て、その概ね皆陰鬱なるに驚きぬ。大澤の畔の如くならず、テルラチナなる橄欖の林の棕櫚を交へたるが如くならず。されど我は猶此感の我中情より出でたるにあらざるかを疑へり。

道は一苑を過ぎて、巖壁と激流との間なる街※に入りぬ。その木は皆鬱蒼たる橄欖なり。これを行く間、われは早く水沫の雲の如く半空に騰上して、彩虹の其中に現ぜるを見き。蝦夷石南と「ミユルツス」との路を塞げるを、押し分けつゝ攀ぢ登りて見れば、大瀑は山の絶巓より起り、削れる如き巖壁に沿ひて倒下す。側に一支流ありて、迂曲して落つ。其狀銀色の帶を展べたる如し。この細大二流は、わが立てる巖の前に至りて合し、幅闊き急流となり、乳色の渦巻を生じて底なき深谷に漲り落つ。雷の如き響は我胸を鼓盪して、我失望我苦心と相應じ、我をして前に小尼公の爲めにチヲリの瀧の前に立ちて、即興の詩を吟ぜし時の情を憶ひ起さしむ。げにや、碎け、消え、死するは自然の運命なること、獨り此瀑布のみにはあらず。

導者はわれを顧みていふやう。昨年英吉利人ひとり山賊に擊ち殺されしは、此巖の上にての事なりき。賊はサビノの山のものなりといへど、羅馬のテルニイとの間に出沒して、人その踪蹤を審にす

ること能はず。警吏は直ちに來りて、そが夥伴なる三人を捕へき。われはその車上に縛せられて市に入るを見たり。市の門にはフルヰアの老女立ち居たり。老女は天の下の奇しき事どもを多く知れるものにて、世には法皇の府の僧官達も及ばざること遠しとぞいふ。その時老女の車上の賊に向ひて語りしは、何事にかありけん、例の怪しき詞なれば、傍聽せしものは辨へ知らん由なかりき。さるを後には老女を彼賊の同類なりとし、ことし數人の賊と共に彼老女をさへ刎ねて、ネピの石垣の上に梟けたりと語りぬ。

妄想

自然と云ひ人事と云ひ、一として我心の憂を長ずる媒とならざるものなし。暗黒なる橄欖の林はいよ〳〵濃き陰翳を我心の上に加へ、四邊の山々は來りて我頭を壓せんとす。われは飛ぶが如くに、里といふ里を走り過ぎて、早く海に到らんことを願へり、風吹く海に、下なる天の我を載すること上なる天の我を覆ふが如くなる處に。

我胸は愛を求むるが爲めに燃ゆ。是より先き此火は既に二たび點ぜられしなり。昔のアヌンチヤタは我が仰ぎ瞻しところ、我が新に醒めたる心の力もて攀ぢんと欲せしところなるに、憾むらくは我を棄てゝ人に往けり。今のフラミニアは我を眩せしめず、我を狂せしめずして、漸く我心と膠着すること、寶石のまばゆからざる光の、久しきを經て貴きことを覺えしむるが如くなりき。フラミニアは我手を握ること、妹の兄の手を握る如く、我にこれに接吻することを許すこと、妹の兄に許す如く、又我を説き慰め、我が爲めに祈りて世の穢を受けざらしめんとして、その度ごとに知らず識らず鏃を我心に沒せしめたり。我はこれを愛すること許嫁の婦を愛するが如くならず。されどその人の婦とならんをば、われまた冷に傍より看ること能はざりしならん。今やフラミニアは死せり、現世の爲めには亡人の數に入りたり。世にはこれを抱き、その唇に觸るゝことを得るものなし。是れ我が責てもの慰藉也。

海に往かん、往いて海の驚くべき景を觀ん。是れ我が新なる境界なり。エネチアよ、水に泛べる都城よ、ハドリアの海の王女よ、願はくは我をして重れる山と黒き林とを過ぎることを須ゐず、空に翔り波を凌ぎて汝と會することを得しめよとは、我が當時の夢なりき。

初め我は先づフイレンチエに往き、かしこよりボロニア、フエルララを經て、エネチアに達せんと欲せしに、今は忽ち前の計畫を擲ち、スポレツトオより雇車を下り、暗夜身を郵便車に托してアペンニノの嶺を踰え、ロレツトオの地をさへ、尊き御寺を拜まずして馳せ過ぎつ。

山道を登りて巔に至りし時、我は早く地平線上一帶の銀色を認め得たり。是れハドリア海なり。脚下に大波の層疊せるを見るは、群巒の起伏せるなり。既にして碧波の上に、檣竿の林立せるを辨ず。種々なる旗章は其尖に翻れり。光景は略ぼ拿破里に似たれど、エズヰオの山の黒烟を吐けるなく、又カプリの島の港口に橫れるなし。此夜の夢に、我はフルヰアのおうなとフラミニアの君とに逢ひしに、二人皆面に微笑を湛へて、君が福祉の棕櫚は緑ならんとすと告げたり。

眠醒めしとき、日は旅店の窓よりさし入りたり。房奴來りていふやう。客人よ、エネチアに渡る舟は今帆を揚げんとす、猶留りてこのわたりの景色を觀んとやし給ふといふ。否、舟あるこそ幸なれ、

さらば直ちにエネチアに往かんと答へつ。我心は何故とも知る由なけれど、唯だ推され輓かるゝ如くなりき。われは埠頭におり立ちて、行李を搬び來らしめ、目を放ちて海原を望み見たり。さらば〳〵我故郷。われは足の此土を離れんとするに臨みて、いよ〳〵新なる世界の我が爲めに開くべきを感ぜり。北伊太利國の自然の全く相殊なるべきは始より疑ふべからず。就中エネチアは盛飾せる海の配偶にして、他の伊太利諸市と全く其趣を異にすべきこと明なり。我が乘るところの此舟は、即ちエネチアの舟にして、翼ある獅子の旗は早く我が頭上に翻れり。帆は風に※きて、舟は忽ち外海に※り出で、我は艙板の上に坐して、藍碧なる波の起伏を眺め居たるに、傍に一少年の蹲れるありて、エネチアの俚謠を歌ふ。其歌は人生の短きと戀愛の幸あるとを言へり。こゝに大概を意譯せんか。其辭にいはく。

朱の唇に觸れよ、誰か汝の明日猶在るを知らん。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。白髪は死の花にして、その咲くや心の火は消え、血は氷とならんとす。來れ、彼輕舸の中に。二人はその蓋の下に隱れて、窓を塞ぎ戸を閉ぢ、人の來り覗ふことを許さゞらん。少女よ、人は二人の戀の幸を覗はざるべし。二人は波の上に漂ひ、波は相推し相就き、二人も亦相推し相就くこと其波の如くならん。戀せよ、汝の心の猶少く、汝の血の猶熱き間に。汝の幸を知るものは、唯だ不言の夜あるのみ、唯だ起伏の波あるのみ。老は至らんとす、氷と雪とも汝の心汝の血を殺さん爲めに。少年は一節を唱ふごとに、其友の群を顧みて、互に相頷けり。友の群は劇場の舞群の如くこれに和せり。まことに此歌は其辭卑猥にして其意放縱なり。さるを我はこれを聞きて輓歌を聞く思ひをなせり。老は至らんとす。少壯の火は消えなんとす。我は尊き愛の膏油を地上に覆して、これを焚いて光を放ち熱を發せしむるに及ばざりき。こは濫用して人に禍せしならねど、遂に徒費して天に背きしことを免れず。そも〳〵我は誓約の良心を縛するあるにあらず、責任の云爲を妨ぐるあるにあらずして、何故に我前に湧ける愛の泉を汲まざりしぞ。かく思ひ續くれば、一種の言ふべからざる情はわが胸に溢れたり。これに名づけて自ら慊ざる情ともいふべきか。こは我慾火の勢を得て、我智慧を燬くにやあらん。

我がサンタを畏れて走り避けしは何故ぞ。聖母の像の壁上より落ちぬればなり。否々、※びたる釘はいづれの時か折れざらん。まことに我をして走り避けしめしものは、我脈絡中なる山羊の乳のみ、「ジエスヰタ」派學校の教育のみ。われはサンタの艶色を憶ひ起して、心目にその燃ゆる如き目なざしを見心耳にその渇せる如き聲音を聞き、我と我を嘲り我と我を卑めり。何故に我は世上の男子の如く、ベルナルドオの如くなることを得ざる。愛を求むるは我心にあらずや。我心は神の授け給ひし光明にあらずや。さらば愛を求むるは神にあらずや。此時我は此の如くに思議せり。此の如くに思議して、エネチアの繁華をおもひ、その女ありて雲の如くなるをおもひ、我血の猶熱せるをおもひ、忽ち聲を放ちて我少年の歌に和したり。

嗚呼、是れ皆熱の爲めに發せし譫語のみ、苦痛の餘なる躁狂のみ。我に心の光明を授け給ひし神よ、我運命の柄を握り給ふ神よ。我は御身の我罪を問ひ給ふことの刻薄ならざるべきを知る。人の心中には舌頭に上すべからざる發作あり、爭闘あり。是れ吾人の清廉なる守護神の膝を惡魔の前に屈する時なり。世の能く欲して能く遂ぐる人々は、我がいたづらに欲せしところに就いて、自在に評論せよ。されど汝等は裁決せざれ。さらば汝等は裁決せられざるならん。

汝等は呪詛せざれ。さらば汝等は呪詛せられざるべし。我は實に此の如く思議せり。此の如く思議して、復た祷の詞を出すこと能はずして寝たり。舟は穏に我夢を載せて、北のかたエネチアに向へり。

水の都

曉に起きて望めば、前面早く家々の壁と寺塔とを辨ずることを得たり。そのさま譬へば帆を揚げたる無數の舟の横に列れるが如し。左のかたにはロムバルヂアの岸の平遠なる景を畫けるあり。遙に地平線に接してはアルピイの山脈の蒼靄に似たるあり。われはこれを望みて、彼蒼の廣大なるを感ぜり。天球の半は一時に影を我心鏡に映ずることを得たるなり。

爽涼なる朝風は我感情を冷却せり。我は心裡にエネチアの歴史を繰り返して、その古の富、古の繁華、古の獨立、古の權勢乃至大海に配すといふ古の大統領の事を思ひぬ。（エネチア共和國に「ドオジエ」を置きしは、第八世紀より千七百九十七年に至る。）既にして舟は漸く進み、鹹澤（ラグウナ）の上なる個々の人家を見るに、その壁は黄を帶びたる灰色を呈し、古代の様式にもあらず、又近時の設計にもあらねば、要するに好觀にあらざりき。名に聞えたるマルクスの塔は思ひしよりも高からず。舟は陸と鹹澤との間を進めり。後なるものは曲りたる堤の如く、海中に斗出したり。土地は全體極めて卑しとおぼしく、岸の水より高きこと僅に數寸なるが如し。偶數戸の小屋の群を成せるあれば、指ざして市と云ふ。こゝかしこには一叢の木立あり。其他は渾て是れ平地なりき。

われはエネチアの既に甚だ近きを覺えしに、今傍人に問へば猶一里ありと答ふ。而して此一里の間は、皆澑留せる沼澤の水のみ。處々には泥土の島嶼の状をなして頭を露せるあり。その上には一鳥の足を留むるなく、一莖の草の萌え出づるなし。沼澤の中に、深き渠を穿ちて、杭を立て泥を支ふるあり。是れ舟を行る道なり。われは始て「ゴンドラ」といふ小舟を見き。皆黒塗にして、その形狹く長く、波を截りて走ること弦を離れし箭に似たり。逼りて視れば、中央なる船房にも黒き布を覆へり。水の上なる柩とやいふべき。拿破里の水は岸に近づきても猶藍いろなるに、こゝは漸く變じて汚れたる緑となれり。偶※一島の傍を過ぐるに、その家々は或は直ちに水面より起れる如く、或は廢れたる舟の上に立てる如し。最も高き石壁の頂に、幼き耶蘇を抱ける聖母の御像ありて、この荒涼なる天地を眺め居給ふ。水の淺きところは、別に一種の鴨緑色をなして、一面深き淵に接し、一面は黒き泥土の島に接す。日は明くエネチアの市を照して、寺々の鐘は皆鳴り響けり。されど街衢は閴として人影なきに似たり。船渠を覗へば、只だ一舟の横れるありて、こゝにも人を見ざりき。

我は身を彼水上の柩に托して、水の衢に入りぬ。樓屋軒をならべて石階の裾は直ちに水面に達し、復た犬ばしり程の土をだに着けず。家々の穹窿門は水に架して橋梁の如く、中庭は大なる井の如し。この中庭には舟に帆掛けて入るべけれど、舳艫を旋さんことは難かるべし。海水はその緑なる苔皮をして、高く石壁に攀ぢ登らしめ、巍々たる大理石の宮殿も、これが爲めに水中に沈まんと欲する状をなし、人をして危殆の念を生ぜしむ。況や金薄半ば剥げたる大窓の※《けづ》らざる板もて圍まれたるありて、大廈の一部まことに朽敗になん〳〵としたるをや。既にして梵鐘は聲を斂めて、※の水

を撃つ音より外、何の響をも聞かずなりぬ。われは猶未だ人影を見ずして、只だ美しきエネチアの鴿の尸の如く波の上に浮べるを見るのみ。

舟は轉じて他の水路に入りぬ。その幅頗る狹くして石橋あまたかゝれり。こゝには人ありて、或は橋を渡りて家の間に隱れ、或は石壁の門を出入す。されど街と名づくべきものは、水路の外有ることなし。舟人の棹を留めたるとき、われは何處に往くべきぞと問ひぬ。舟人は家と家との間を通ずる、橋の側なる隘き巷を指ざし教へつ。兩邊の家に住める人は、おの〳〵六層樓上の窓を開いて、互に手を握ることを得べく、この日光を受けざる巷は、僅に三人の並び行くことをゆるすなるべし。我舟は既に去りて、身邊また寂として人を見ず。

あはれエネチアとは是か、海の配偶と云ひ、世界第一の富強者と云ひしエネチアとは是か。われは名に聞えたるマルクスの廣こうぢに入りぬ。こはエネチアの心胸と稱すべき處にして、國の性命は此に存ずといふなるに、その所謂繁華は羅馬のコルソオに孰與ぞ、又拿破里の市に孰與ぞ。石の迫持の下なる長き廊道には、書肆あり珠玉店あり繪畫鋪あれども、足を其前に留むるもの多からず。唯だ骨喜店の前には、幾個の希臘人、土耳格人などの彩衣を纏ひて、口に長き烟管を啣み、默坐したるあるのみ。日は「マルクス」寺の星根の鍍金せる尖と寺門の上なる大いなる銅馬とを照して、チユペルス、カンヂア、モレア等の舟の赤檣の上なる徽章ある旗は垂れて動かず。數千の鴿は廣こうぢを飛びかひて、甃石の上に※れり。

われは進みてポンテ、リアルトオに到りて、いよ〳〵斯土の風俗を知りぬ。エネチアは大いなる悲哀の鄉なり、我主觀の好き對象なり。而して此鄉の水の上に泛べること、古のノアの舟と同じ。われは小き舟を下りて、この大いなる舟に上りしなり。

日の夕となりて、模糊として力なき月光の全都を被ひ、隨處に際立ちたる陰翳を生ぜしとき、われはいよ〳〵エネチアの眞味を領略することを得たり。死せる都府の陰森の氣は、光明に宜しからずして幽暗に宜しければなり。われは客亭の窓を開いて立ち、黑き小舟の矢を射る如く黑き波を截り去るを望み、前の舟人の歌ひし戀の歌を憶ひ起せり。われは此時アヌンチヤタを恨みき。いかなれば彼佳人は我を棄てゝベルナルドオに奔りしぞ。こは誠實を去りて輕薄に就きしにあらずや。われは此時フラミニアをさへ恨みき。いかなれば彼少女は我を棄てゝ尼寺に入りしぞ。こは情愛を去りて平和に就きしにあらずや。我胸は一種の言ふべからざる空虛を感じたり。我胸はあらゆる我を喜ばせしものとあらゆる我を慰めし者とを一掃して去らんと欲せり。然るにかく思議する間、終始我心目の前に往來するものは、可哀きララと罪深きサンタとの面影なりき。われは蹣跚として階を下り、舟を喚びて水の衢を逍遙せり。二人の柁手は相和して歌ふ。其歌は古の恢復せられたるエルザレム（ジエルザレムメ、リベラアタ）の調にあらず、大統領の族絶えて、獅子の翼の外人に縛せられてより、エネチアの民はその歌謠の上の國粹をさへ失ひつるなり。われは獨語して、いでや人生の渦裏に投じて、人生の樂を受用し、誓ひて餘瀝なからしめんと云ふとき、舟はもとの旅館の階下に留まりぬ。われは又蹣跚として階を上り、おぼつかなき孤客の夢を結びぬ。

颶風

羅馬より齎したる紹介状は、我をして相識を得しめ、我をして所謂朋友あらしめたり。人々は我を「アバテ」と喚べり。我言の善きをば人皆褒め、我才をば人皆稱せり。羅馬なる恩人は常に我に不快なる事を告げ、中にはことさらに我に快からざるべき事どもを探り覓めて、そを我に告ぐる如くなりしに、今はさる詞を耳にすることなし。羅馬にては常に長上にのみ交ることゝて、フラミニアの姫の情あるすら、我をして抑壓の苦を忘れしむること能はざりしに、今は心にさる負荷を覺ゆることなし。苦言を聞かざるは、信ある友なきなりといへば、こゝには信ある友は絶て無きなるべし。

われは大統領の館の輪奐の美を討ねて、その華麗を極めたる空しき殿堂を經※り、おそろしき活地獄の圖ある鞫問所を觀き。われは彼四面皆塞りたる橋の、小舟通ふ溝渠の上に架せられたるを渡りぬ。是れ館より牢獄に往く道にして、名づけて歎息橋と曰ふとぞ。橋に接する處は即ち牢井なり。廊に點じたる燈火は僅かに狹き鐵格を穿ちて、最上層の獄を照し出せり。此層の如きは、これを下層に比するときは、猶晴やかなる房と稱すべきならん。濕ひて菌を生じたる床は、※に溝渠の水面の下にあり。あはれ、此房の壁は幾何の人の歎息と叫喚とを聞きつる。われは慴然として肌膚の粟を生ずるを覺え、急に舟を呼んで薄赤いろなる古宮殿、獅子を刻める石柱の前を過ぎ、鹹澤の方に向ひぬ。舟の指すところは即ち所謂岸區なりき。

われは岸區に近づくとき、何物をか見し。ここには一の大いなる墓田ありき。外國人と新教徒とは、この水と水とに挾まれたる一帶の土の、殆ど時々刻々洗ひ去らるゝ狀をなせる處に埋めらるゝなり。白き人骨は沙の表に露れて、これが爲めに哭するものは、只だ浪の音あるのみ。

漁父の危きを冒して沖に出でたるとき、その妻そのいひなづけの妻などの、坐して夫の舟の歸るを待つは、此岸區なりといふ。颶風の勢少しく挫けたるとき、こゝに坐したる女子の、彼恢復せられたるエルザレム中の歌を歌ひ、耳を傾けて夫の聲のこれに應ずるや否やを覗ひしこと幾度ぞ。さるをその懷かしき夫の聲の終に應ずることなく、可憐の女子の獨り不言の海に對して口は復た歌ふこと能はず、目は空しく沙上の髑髏を見、耳は徒らに岸打浪の音を聞きて、暮色の漸く死せる古都を掩ふを覺えしこと又幾度ぞ。

この暗澹たる畫圖は我心目に上りて消えず、我情調はこれに一層の悲慘の色を添へんとせり。わが對するところの自然は、無常と歴劫との觀を惹き起すこと、一の寺院の如くなりき。フラミニアの姫の詞は、此時端なく憶ひ出されぬ。詩人は神の預言者にあらずや。何故に詩人は神の徳を頌せんことを勉めざる。嗚呼、我は忽ち此詞の眞理なることを感得せり。不滅なる詩人の心は不滅なる神をこそ詩料とすべきなれ。目前の榮華は泡沫の五彩の色を現ずるに異ならずして、その生ずる時はやがてその滅する時なり。われは忽ち興到り氣奮ふを覺えしに、忽ち又興散じて氣衰ふるを覺え、悄然として舟に上り、大海に臨める岸區に着きぬ。

海はやゝ浪立てり。われは佇立してアマルフイイの灣を憶ひ起しつゝ、目を轉じて身邊を顧みれば、波のもて來し藻草と小石との間に坐して、草書を作れる男あり。われは其姿に些の見おぼえあるをもて、徐にこれに近づくほどに男は身を起して此方に向へり。こはわがエネチアに來てよりの新相識の一人なる貴族の少年にて名をポ

ツジヨといふものなりき。

ポツジヨのいふやう。こゝにて君と相見んとは思ひ掛けざりき。この怒り易く恃み難きハドリアの海の、能く君を招き致したるは、唯だその紅波白浪の美あるがためか、そも〳〵別に美なるものありて、この岸區に住めるにはあらざるかといひぬ。我等は互に進み寄りて手を握りつ。

人の語るを聞くに、ポツジヨは畫才ありて資力なき人なり。その人に對する言語動作は活潑にして、間々放縱なるかとさへ疑はるゝ節あれども、まことはいみじき厭世家なり。言ふところはドン・ホアンを欺く蕩子なる如くにして、まことは聖アントニウスの誘惑を峻拒する氣概あり。無邪氣なること赤子の如く、胸中一事を包藏するに堪へざるものに似て、智を恃める士流は遂にその底蘊を窮むること能はず。こは深き憂に中れるが爲めなるべけれど、その憂は貧か戀か、そも〳〵別に尋常ならざる祕密あるか。これを知るもの絶て無しとぞ。われは人の若語るを聞きて、かねてよりポツジヨに親まんことを願ひしかば、今ゆくりなくこれに逢ひて、心にこの邂逅を喜び、早く胸の狹霧のこれがために晴るゝを覺えき。

ポツジヨは海を指ざしてかゝる青く波立てる大面積は羅馬の無き所なり、おほよそ地上の美なるもの海に若くはなかるべし、宜なり海はアフロヂテの母にしてと云ひさし、少し笑ひて、又エネチア歷代の大統領の未亡人なりといへり。われ。海を愛する心は、エネチアの人殊に深かるべき理あり。海は己れが母なるエネチアの母にして、己れを愛撫し己れを游嬉せしむる祖母なればなり。ホツジヨ。その氣高かりし海の女の今は頭を低れたるぞ哀なる。われ。フランツ帝の下にありて幸ありとはいふべからざるか。ポツジヨ。われは政治を解せず。エネチア人は今も不平を説くことを須ゐざるなるべし。されどわが解するところのものは美妙なり。陸上宮殿の柱像たらんは、海の女王たらんことの崇高なるには若かず。おもふに君の美妙を崇拜し給ふこと我に殊ならざるべければ、君はかしこより來る彼美の呼び迎ふるをも辭み給はぬならん。こは識る所の酒亭の娘なり。共に往き給はずやといふ。われはポツジヨと少女に誘はれて、海に枕める小家に入りぬ。酒は旨し。友は善く談ぜり。誰かポツジヨが軽快なる辯と怡悦の色とを見て、その厭世の客たるを知り得ん。我は共に坐すること二時間ばかりなりしに、舟人は急に我を呼びて歸途に就かんことを促せり。こは颶風の候ありて、岸區とエネチアとの間なる波は、最早小舟を危うするに足るが故なりと云へり。ポツジヨは耳を欹てたり。何とか云ふ。颶風は我が久しく觀んことを願ひしところなり。「アバテ」も暫く我と共に留まり給へ。日の暮るゝまでには凪ぐべし。若凪がずば、枕をこの茅屋根の下に安くして、波の音を聞くこと、昔子もり歌を聞きしが如くせんといふ。我は舟人を顧みて、舟を要せば別に雇ふべければ、汝達は去留自在にせよといひて、暇を取らせつ。

須臾にして波濤洶々の音漸く高く、風力の衝突は頻りに全屋を撼せり。我とポツジヨとは偕に戸外に出でゝ瞻望したり。時に夕陽は震怒したる海の暗緑なる水を射て、大波の起る處雪花亂れ翻れり。地平線に近き邊には、層雲堆を成して、稻妻の其間より閃發せるさま、幾箇の火山の噴坑を開けるに似たり。我等は忽ち二三の舟の紙上の黒點の如く彼雲に映ずるを見しが、忽ち又之を失へり。岸を噬む水は、石に觸れて倒立し、鹹沫は飛んで二人の面を撲てり。ポツジヨの興は風浪の高きに從ひて高く、掌を抵ちて哄笑し、海に對し

て快哉を連呼せり。此興は我に感じ傳はりて、我は胸中の苦悶の天地の忿怒に壓倒せらるゝを覺え、亦ポツジヨの聲に應じて叫びぬ。

暮色は急に襲ひ至りぬ。我等は亭に入りて、當※の女をして良酒を供せしめ、續けさまに數杯を傾けて、此自然の活劇を翫べり。忽ちポツジヨの聲を放ちて歌ふを聞きつ。其曲は嘗て此地に來りしとき舟中にありて聞きしと同じき戀の歌なり。われ杯を擧げて、エネチアの美人の健康のために飲まんと云へば、ポツジヨ、さらば我は羅馬の美人のために飲まんと云ふ。若し相識らぬ人の、我等の狂態を見たらんには、定めて尋常時に及びて行樂する徒となすなるべし。ポツジヨのいふやう。女子の美は羅馬に若くはなし。君はいかにおもひ給ふか。憚ることなく答へ給へ。われ。そは我が首肯する所なり。ポツジヨ。さもあるべし。されど伊太利第一の美人は此エネチアにこそあれ。憾むらくは君未だ市長の女を見給はず。清楚なること此の如きは、世の絶て無くして僅に有るところにして、これをや精神上の美とは云ふべき。若しカノワにして此女を識りたらましかば、その三美の像の最も少きをば、必ず此女の姿によりて摸し成しならん。（カノワは彫匠なり。ポツサニヨに生れエネチアに歿す。三美の像は獨逸ミユンヘンに在り。）われは嘗て晩餐式ありしとき、寺院にて見、又聖摩西の劇場にて一たび見たり。その高根の花に似て、仰ぎ看るだに容易からぬを恨むものは、獨り我のみにはあらず。おほよそエネチアの少年紳士にして同じ恨を抱かぬはあらざるならん。只だ人々と我と相異なるは、彼は懸想し我は懸想せざるのみ。我俗眼もて見れば、彼人は餘りに天人めきたり。されど天人は崇拜の對象とすべきならん。「アバテー」はいかに思ひ給ふといふ。われは此語を聞いて、フラミニアの事を思ひ出し、喜の色は我面より消え失せたり。ポツジヨ。酒は好し。風波は我筵の爲めに歌舞す。いかなれば君愁の色を見せ給ふぞ。われ。市長は客を招き筵を張ることありや。ポツジヨ。稀にそのことなきにあらず。されど招請を愼むことゝいと嚴なり。矧や彼人は物に怯るゝこと鹿子の如く、同じ席に列るものもたやすく近づくこと能はざるを奈何せん。われは必ずしもかの人心より此の如しと説かず。そは人にめづらしがられんとてかく振舞ふ女も少からねばなり。そが上に彼人の身上には明白ならざる處なきにしもあらず。わが聞くところに依れば、市長に二人の妹ありて、皆久しく遠國に住めりき。その最も少き方の妹は希臘人に嫁ぎたりしに、その夫婦の間に彼の奇しき少女はまうけられぬといふ。今一人の妹は猶處子なり、しかも老いたる處子なり。四とせ前の頃彼の少女を伴ひて歸り來りしは、此の老處子に他ならざりき。

夜の如き闇黒は急に酒亭を襲ひて、ポツジヨが話の腰を折りたり。あなやと驚く隙もあらせず、赫然たる電光は身邊を繞り、次いで雷聲大に震ひ、我等二人をして覺えず首を低れて、十字を空に畫かしめつ。

酒亭の女主人色を變じて馳せ來りて云ふやう。氣の毒なることこそ出來り候ひぬれ。岸區の優れたる舟人六人未だ海より歸らずして、就中憐むべきアニエゼは子供五人と共に岸に坐して待てり。いかになり行くことならん。只だ聖母の御惠を祈らんより外術なしといひぬ。忽ち歌頌の聲はわれ等の耳に入れり。戸を出でゝ覗へば、彼の激浪倒立すること十丈なる岸頭に、一群の女子小兒の立てるあり。小兒等は十字架を棒げ持てり。群のうちに一人の年少き女の、地に坐して海上を凝視せるあり。この女は赤子に乳房を銜ませたる

に、別に年稍　長ぜる一兒の膝に枕したるさへありき。忽ち一道の雷火下り射ると共に、颶風は引き去らんと欲する状をなせり。地平線には小き稻妻亂れ起りて、暗碧なる浪の尖なる雪花はほの／〃＼と白み來れり。彼女は俄に蹶起して、舟はかしこにと呼べり。われ等はその指す方に一の黒點あるを認め得たり。黒點は次第に鮮かになりぬ。時に一人の老漁ありて、褐いろなる無庇帽を戴き指を組み合せて立ちたりしに、不意にあなやと叫べり。聲未だ畢らざるに、我等は黒點の泡立てる巨濤の蔭に隱るゝを見たり。果せるかな老漁の目は我を欺かざりき。一群の人は周章の色を現せり。天の漸く明かに、海の漸く靜に、舟人遭難の事の漸く確實になりゆくと共に、周章の色は加はり來れり。小兒は捧げ持ちたりし十字架を地に委ねて、泣き號びつゝ母に縋りぬ。その時老漁は十字架を地より拾ひて、救世主の足に接吻し、更に高くこれを※げて口に聖母の御名を唱へき。

半夜に至りて天に纖雲なく、皎月はエネチアと岸區との間なる風なき水を照せり。われはポツジヨと舟を倩ひて岸區を離れたり。そは留まりて彼の五子の母を慰藉し、又これを救恤するに由なかりしが爲めなり。

感動

翌晩われはポツジヨとエネチア屈指の富人某の家に會せり。こはわが出納の事を托したる銀行の主人なり。會するものはいと多かりしかど、席上一の我が相識れる婦人なく、又一の我が相識らんことを欲する婦人なかりき。

會話は昨夜の暴風の事に及べり。ポツジヨは舟人の横死と遺族の窮乏とを語りて、些少なる棄損のいかに大いなる功德をなすべきかを諷し試みたれども、人々は只だその笑止なることなるかなとて、肩を聳かして相視たるのみにて、眞面目にこれに應ふるものなく、會話は餘所の題目に移りぬ。

頃くして席は遊藝を競ふところとなり、ポツジヨは得意の舟歌（バルカルオラ）を歌へり。我は友の笑を帶びたる容貌の背後に、暗に富貴なる人々の卑吝を嘲る色を藏したるかを疑ひぬ。舟歌畢りしとき、主婦は我に對ひて、君は歌ひ給はずやと問ひぬ。われ、さらば即興の詩一つ試みばやと答へぬ。四邊には渠は即興詩人なりと耳語く聲す。婦人の群は優しき目もて我を促し、男子等は我を揖して請へり。われは「キタルラ」の琴を抱きて人々に題を求めつ。忽ち一少女の臆する色なく目を我面に注ぎてエネチアと呼ぶあり。男子幾人か之に應じてエネチア、エネチアと反復せり。そはかの少女の頗る美なるが爲めなり。われは絃を理めて、先づエネチア往古の豪華を説きたり。人々は歴史と空想とを編み交ぜたる我詞章に耳を傾けつゝ、彼過去の影をもて此現在の形となすにやあらん、その眼光は皆耀けり。われは心中にララをおもひサンタをおもひつゝ、月明かなる夜、渠水に枕める出窓の上に、美人の獨りたゝずめる状を敍したり。婦人等はこれを聞きて、謳ふもの直ちに己れを讃むとなすにやあらん、纖手を拍ちて我に酬いぬ。わが席上の成功はスグリツチ（原註、知名の即興詩人）にも讓らざる如くなりき。

ポツジヨは我耳に附きて、市長の姪あり、此席にありとさゝやきしが、會※婦人數人と老いたる貴族某との坐客を代表して、我に再演を請ひたりしが爲めに、われは友と多く語を交ふること能はざり

き。此請は我が預め期したるところなりき。われは好機會を得て、昨夜の暴風と難船との事を敍し、前に友の雄辯もて遂ぐること能はざりしところをも、詞章もて遂げんと期したりしなり。

我はチチアノの贊といふ題を得たり。即興はおもふまゝなる喝采を博して、古名匠の贊はわが自贊となりぬ。されどチチアノは海を畫く人ならざりしが爲めに、われは此題を利用して我志を果すに由なかりき。

主婦は我に近づきていふやう。君の如く自家の技藝もてかくあまたの人を樂ましめ感ぜしめんは、いかに快き事なるべきか。われ。詩人第一の快事は詩の成功なり。主婦。さらば能くその快きを題として歌ひ給はんや。君の辭を措き給ふことの容易げなるよりわれ等は、頻りに請ふことの無禮げなるをさへ忘れんとす。われ。こゝに一の奇術あり。そは人々皆詩人となりて、能く詩人の快さを體驗することなり。われは此術を善くすれども、かゝる術の常として、報なくては演ずべきにあらず。わが此詞は果して座客をして耳を※てしめ、人々は爭ひ進みて、願はくはその奇術を見ることを得んと云へり。我は側なる卓を指ざして、報せんと思ふ方々は、金錢にもせよ珠玉首飾の類にもせよ、此上に出し給へと云ひぬ。婦人の一人は戯に、さらば我はこの黄金の鎖を置かんと云ひて、言ふところの品を卓上に擲てり。一男子は笑ひつゝ、さらば我は骨牌の爲めに帶び來れる此金殘らずを置かんと云ひて、その財囊を擲てり。われ。人々よ、我詞は戯言にあらず、人々は再び其品を得給ふまじといふに、滿座の客は、さもあらばあれ君が奇術こそ見まほしけれと、金銀、指環、鎖の類を堆く卓上に積みたり。軍服着たる一老人、若しその奇術奇ならざるときは、われは我が「ヅカアチイ」二個（約三圓三十八錢）を取り返すことを得んかといひしに、ポツジヨは我に代りて、若し疑はしとおもひ給はゞ、夥伴に入り給はでもあるべきにと答へぬ。人々はこれを聞きて打笑ひ、只管我が演じいだす所のいかなるべきを俟ち居たり。

われは將に口を開かんとするに臨みて、神の我に光明を與へ給ふを覺えたり。先づエネチアの配偶なる、威力ある海を敍し、それより海の兒孫なる航海者に及び、性命を一葦に托する漁者に及べり。次に前夕の目擊せしところに就きて颶風を敍し、岸に臨みて翹望せる婦幼に及び、十字架を落す兒童とこれを拾ひて高く※ぐる漁翁とに及べり。我は殆ど歌ふところのものゝ即ち神の御聲にして、我身の唯だ此聲を發する器具に過ぎざるを覺えき。時に廣座の間寂として人なきが如く、處々に巾もて涙を拭ふものあるを見る。われはこれより茅屋のうちなる寡婦孤兒の憐むべき生活を敍し、賑恤の必要と其效果とに及べり。われは人間の快さは取るに在らずして與ふるに在り、與ふる快さは即ち神の御心にして、此心あるものは誰か眞の詩人たらざらんと云へり。我聲の威力、その幅員は曲の末解に至りて強さと大さとを加へき。我曲は能く衆人を感動せしめき。我が卓上の物を取りてポツジヨに交付し、これに救助の事を托せしときは喝采の聲屋を撼したり。爾時一の年わかき婦人ありて、我前に來り跪き、我手を握り、その涙に潤へる黒き瞳もて我面を見上げ、神の母の報は君が上にあれと呼びたり。われは婦人の黒き瞳を見て、曾て夢中に相逢ひたる如き念をなし、深くこれに動されぬ。婦人は此言をなし畢りて、纔におのれの擧動の矩を踰えたるを曉れりとおぼしく、臉に火の如き紅を上して席をすべり出でぬ。

座客は皆我傍に集ひて、わが博愛の心を稱へ、わが即興の作を讃

む。ポツジヨは我を擁して、幸ある友よ、人の仰ぎ視ることをだに敢てせざる美人は、膝を君が前に屈せしにあらずやとささやけり。われ。渠は何人なりしか。ポツジヨ。エネチア第一の美人なり。市長の姪なり。一の老婦人ありて我に歩み近づきて、君は最早我を忘れ給ひしか、そは理なきにあらず、唯だ一たび相見てより後、年あまた經ぬればと云ひつゝ、我に手をさし伸べたり。われ、一たび相見しことある御方とは知れど、何時何處にての事ともおもひ定め難しといふに、老婦人、我同胞は醫師にて拿破里に居たり、君はボルゲエゼ家の公子と共に弟を訪ひ給ひぬといふ。われ。まことに宣給ふ如し。こゝにて逢ひまつらんとは思ひ掛けざりしなり。老婦人。拿破里の弟は妻なかりし故、われに家政をとりまかなはせしに、四とせ前にみまかりぬ。今はこゝなる兄の許に住めり。我姪はその性人と殊なれば、一たび家に歸らんといひ出でゝは、思ひ留まるべくもあらず、又こそ御目にかゝらめとて、老婦人は出で去りぬ。ポツジヨは再び我にさゝやくやう。かへすがへすも幸ある友よ。市長の妹の君が相識にて、君と再會を約せしは願ひてもなき事ならずや。エネチアの少年紳士にして君を羨まぬものはあらじ。人々は遠距離にありてだに心に傷を負へるを、君は敵の陣地に入ることなれば、注意して自ら護り給へといふ。市長の姪の去りしには、座客氣付きぬれど、皆その心の優しきこと姿の美しきにかはらずとて、讃め稱へて已まざりき。

善行は心に光明を與ふ。われは久しぶりに心の中の快活を感じて、ポツジヨと杯を※せ、此より兄弟の如くならんことを誓ひぬ。家に歸りしは夜半なりき。直ちに眠に就くべき心地ならねば、窓に坐して清風明月に對せり。渠水波なく、古宮空しく聳ゆる處、我が爲めには神話中の夢幻界を現じ來れり。我は兒童の如く合掌して祈祷したり。父よ、我諸惡を免せ。我に氣力を賦して善良の人たることを得しめよ、我をして些の羞慚の心なく、彼尼院中なるフラミニアを懷ふことを得しめよ。

翌朝は身極めて爽快なりき。我は舟人を喚びて市長の家に往くことを命ぜしに、舟人その才テル口宮（パラツツオオ、ドテルロ）なるを告げたり。オテルロとは彼シエエクスピイアの戯曲エネチアの黒人の主人公にして、市長の家は其舊館なれば、英吉利人は此地に來る毎に必ずこれを尋ぬること、マルクス寺又は武庫に殊ならずといふ。

市長の一家は歡びて我を迎へ、主人の妹なるロオザ夫人は、亡弟の記念と拿破里の繁華とを語りて、我に再遊の願の甚だ切なるを告げ、主人の姪なるマリアは我をして復たララの姿を見、フラミニアの才を見る心地せしめき。マリアとララとの相肖たるは驚くべき程なり。さるにても身に襤褸を纏ひて、髪に一束の董花を挿みし乞丐の女の、能くエネチア第一の美人と美を※ぶるこそ不思議なれ。是より我は頻りに此家に往來して、ロオザ夫人の爲めにダンテの神曲、アルフイエリ、ハコリイニイ（並に詩人の名）等の集を朗讀せり。ポツジヨもわが紹介によりて市長の常の客となることを得たり。

即興詩人としての我名は漸くエネチアの都に傳はり、美術會院（アカデミア、デル、アルテ）は一日我を招きて技を奏せしめき。われはダンドロのコンスタンチノポリス征服とマルクス寺の銅馬とを題として即興の詩を歌ひ、會員證を授與けられたり。（ダンドロはエネチアの大統領なりき。千二百三年コンスタンチノポリスを征服す。即ち所謂第四次十字軍なり。）されどその頃我は別に一物の

此會員證より貴きものを得つ。そは極めて細かなる貝を絹紐もて貫きたる瓔珞なり。岸區の漁者の遺族は我がために作りてポツジヨに托し、ポツジヨはマリアにあづけ置きぬ。ある日マリアは我が往きて訪ふを待ちて、美しく愛らしきものならずやと云ひつゝ我手にわたし、ロオザ夫人は傍より、他日おん身の許嫁の妻に掛けさせ給ふべき品なり、作りし人もその心ありしなるべしと詞を添へつ。われは料らずも眉を蹙めて、我に許嫁の妻なし、未來にも亦さる人なからんと叫びぬ。マリアの面には失望の色をあらはせり。そはこの贈を取次ぎて我を悦ばしめんことを期せしが故なり。われは手に瓔珞を捧げて、心にこれをマリアに與へんことを願ひぬ。マリアの顔の紅を潮せしは、我心を忖り得たるにやあらん、覺束なし。

末路

とある夕わが爲換金を取扱ふ商家を尋ねしに、主人の妻のいふやう。近頃はおん身の來給ふこと稀になりぬ。そは市長の許に往き給ふことの頻なるが爲めなるべし。我家にはマリアの如き美しき人あるにあらねば、誰かおん身の足の彼方にのみ向くを理ならずとせん。マリアは今エネチア第一の美人にして、御身はエネチア第一の才子におはすれば、彼此似つかはしき中なるに、マリアが所有なりといふカラブリアの地面はいと廣しといへば、おん二人の生計さへ豐かなることを得べきならん。御身若し早く心を決めて誓約をだになし給はゞ、エネチア全市の男子一人としておん身を羨まざるものなからんといふ。われ。いかなれば我をさまで利己心多きものとはし給ふぞ。わがマリアを尊むは、あらゆる美しきものを尊む情に外ならず。これをしも愛と謂はゞ、何人かマリアを愛せざらん。縦ひわれマリアを愛せんも我心は又決してその財産に左右せらるゝことなかるべし。主人の妻。否、さてはおん身はつまさだめするものゝ先づ心得べき事あるを知り給はぬなるべし、粮廚に滿ち酒窖に滿ちて、始て夫婦の間の幸福は全きものぞ。古き諺にも、生活を先にし戀愛を後にすといへるにあらずやと云ひぬ。

人の我上をかくおもへる、既に我が忍ぶべきところならず。況や面りこれを語るをや。我は喜んで市長一家の人々と交れども、此の如き嫌疑を受くることを甘んじて、猶その家に出入すべくもあらず。今宵も市長の家を訪ふべかりし我は、歩を轉じてエネチアの狹き巷をさまよひめぐりぬ。相向へる二列の家は、簷と簷と殆ど相觸れんとし、市店の燈を張ること多きが爲めに、火光は到らぬ隈もなく、士女の往來織るが如くなり。渠水を望めば、燈影長く垂れて、橋を負へる石弓の下に、「ゴンドラ」の舟の箭よりも疾く駛るを見る。忽ち歌聲の耳に入るあり。諦聽すれば、是れ戀愛と接吻との曲なり。迷路の最も邃き處に一軒の稍大なる家ありて、火の光よそよりも明かに、人多く入りゆくさまなり。こはエネチアの數多き小芝居の一にして、座の名をば聖ルカスと云へりとぞ。大抵樂劇の一組ありて、日ごとに二曲を興行すること、拿破里の「フエニチエ」座に同じ。初の一曲は午後四時に始まり六時頃には早く終り、次なる曲は夕の八時より始まる。素より精しき技藝、高き趣味をこゝに求むべきにはあらねど、些の音樂に耳を悦ばしめんとする下層の市民の願をばこれによりて遂げしむることを得べく、又旅人などの消遣の爲めに來り觀るも少からざるべし。觀棚の料は甚だ廉く晝夜とも空席を留めぬを例とす。

招牌を仰げば、「ドンナ、カリテア、レジナ、ヂ、スパニア」（西班牙女王カリテア夫人）と大書し、作譜者の名をばメルカダンテと注せり。われ心の中におもふやう。かゝる時にこそ、我脈絡にカムパニアの野なる山羊の乳汁循らずして、温き血環れるを人に示すべきなれ、我が世馴れたることのベルナルドオにもフエデリゴにも劣らぬを示すべきなれ。兎も角も一たび此場内に入りて、美しき女優の面を見ばや。若し興なくば、曲の終るを待たで出でんも妨あらじとおもひぬ。入場券を買ふに、小き汚れたる牌を與へつ。我觀棚は極めて舞臺に近き處なりき。

此劇場には高下二列の觀棚あり。平間をばいと低く設けたり。されど舞臺の小なること、給仕盆の如しとも謂ふべし。あはれ、此舞臺にいくばくの人か登り得べきとおもふに、例の小芝居の習とて、中むかしの武弁の上をしくめる大樂劇の、行列の幕あり戰闘の幕あるものをさへ興行するなるべし。觀棚は内壁の布張汚れ裂けて、天井は鬱悒きまで低し。少焉ありて、上衣を脱ぎ襯衣の袖を攘げたる男現れて、舞臺の前なる燭を點しつ。客は皆無遠慮に聲高く語りあへり。又少時ありて、樂人出でゝ奏樂席に就きぬ。これを視るに、只是れ四奏の一組なりき。彼と云ひ此と云ひ、今宵の受用の覺束なかるべき前兆ならぬものなけれど、われは猶せめて第一折を觀んとおもひて、獨り觀棚に坐し居たり。

場内の女客に美しきはあらずやと左を顧み右を眄しかど、遂にさる者を認め得ざりき。忽ち隣席に就く人あり。こは嘗て某の筵にて相見しことある少年紳士なりき。紳士は笑みつゝ我手を握りて云ふやう。こゝにて君に逢はんとは思ひ掛けざりき。君はその邊の消息を知り給ふか知らねど、かゝる處にては、折々面白き女客と肩を並ぶることあり。かくて薄暗き燈火は、これと親む媒となるものなりと云ひぬ。紳士の詞は未だ畢らぬに、傍より叱々と譬むる聲す。それは開場の曲の始まれるが爲めなりき。

音樂は心細きまで微弱なりき。幕は開きたり、只だ見る、男子三人女子二人より成れる一群の唱和するを。その骨相を看れば、座主は俄に※畝の間より登庸し來りて、これに武士の服を衣せしにはあらずやと疑はれぬ。隣席の紳士は我を顧みて、餘りに力を落し給ふな、單吟には稍觀る可きものなきにあらず、此組にも好き道化師あり、大劇場に出だしても恥かしからぬ男なりなど云ふ。この時今宵の曲の女王は、侍姫に扮せる二女優と共に場に上りぬ。紳士眉を顰めて、さては女王は渠なりしか、全曲は最早一錢の價だにあらざるべし、あはれジヤンネツテならましかばとつぶやきぬ。

女王は身の丈甚だ高からず、面の輪廓鋭くして、黒き目は稍陷りたり。衣裳つきはいと惡し。無遠慮に評せば、擬人せる貧窶の妃嬪の裝束したるとやいふべき。さるを怪むべきは此女優の擧止のさま都雅にして、いたく他の二人と異なる事なり。われは心の中に、若し少き美しき娘に此行儀あらば奈何ならんとおもひぬ。既にして女王は進みて舞臺の縁に點し連ねたる燈火の處に到りぬ。此時我心は我目を疑ひ、我胸は劇しき動悸を感じたり。われは暫くの間、傍なる紳士に其名を問ふことを敢てせざりき。われ。此女優の名をば何とかいふ。紳士。アヌンチヤタといへり。歌ふことを善くせぬに、その顔ばせさへこれが償をなすに足らねば、顧みる人なきもことわりなり。此詞は句々腐蝕する藥の如く我心上に印せり。われは瞠目枯坐して心を喪ふものゝ如くなりき。

女王は歌ひはじめき。否、こはアヌンチヤタが聲ならず。微かに

して恃なく、濁りて響かず。紳士。この喉には些の修行の痕あるに似たれど、氣の毒なるは聲に力なきことなり。われ。（騒ぐ胸を押し鎭めて）さきには羅馬、拿破里に譽を馳せたる西班牙生れの少女ありしが、この女優は偶※其名を同じうして、色も聲もこれに似ること能はざりしよ。紳士。否、この女優こそはその名譽あるアヌンチヤタがなれる果なれ。盛名一時に騒ぎしは七八年前のことなるべし。當時は年もまだ若くて、聲はマリブランの如くなりきとぞ。されど今はしも薄落ちたり。こはかゝる伎もて名を馳せし人の常なり。暫くは日の天に中するが如き位にありて、世の人の讃歎の聲に心惑ひ、おのが伎の時々刻々降りゆくを曉らず、若し此時に當り早く謀をなさゞるときは、公衆先づ其演奏の前に殊なるところあるを覺ゆべし。かゝるなりはひする女子の習として、財を獲ること多しといへども、隨ひて得れば隨ひて散じ、暮年の計をおもはねば、その落魄もいと速なり。君のこの女優を見給ひぬといふは、羅馬にての事にやありけん。われ。然り。其頃面を見ること二三度なりき。紳士。さらば變化の甚しきを覺え給ふならん。人の噂には、四五年前に重き病に罹りてより、聲はたとつぶれぬといふ。その人の爲めにはいと笑止なる事ながら、聽衆の過去の美音を喝采せざるをば、奈何ともすべからず。いざ、昔のよしみに拍手し給へ。われも應援すべしとて、先づ激しく掌を打ち鳴しつ。平土間なる客二三人、何とかおもひけん、これに和したるに、叱々と呼びて、この過當の褒美にあらがふもの少からず。女王はこの毀譽を心に介せざる如く、首を昂げて場を下りしに、紳士見送りて、我等はトロヤ人なりきとつぶやきぬ。（原語「フイムス、トロエス」は猶已矣と云はんが如し。）

代りて場に上りしは、此曲の女主人公にして、これに扮せるは二八ばかりの女なりき。色好む男の一瞥して心を動すべき肉おき豊かに、目なざし燃ゆる如くなれば、喝采の聲は屋を撼せり。此時むかしの記念は我胸を衝いて起りぬ。羅馬の市民のアヌンチヤタの爲めに狂せし状はいかなりしぞ。いにしへの帝王の凱旋の儀をまねびつる、アヌンチヤタが車のよそほひはいかなりしぞ。わが崇拜の念はいかなりしぞ。さるを今はこの尋常なる容色にすらけおされ畢んぬ。あはれ、薄倖なるベルナルドオは身病み色衰ふるに及びて君を棄てしか。さらずば、君は始より眞成にベルナルドオを愛せざりしか。君が唇のベルナルドオの額に觸れしをば、われ猶記す。君爭でかベルナルドオを愛せざらん。思ふにかの無情男子は君が色を愛して、君が心を愛せざりしなり。

アヌンチヤタは再び場に上りぬ。老いたるかな、衰へたるかな、只だ是れ屍の脂粉を傅けて行くものゝみ。われは覺えず肌に粟生ぜり、われもアヌンチヤタが色に迷ひし一人なれども、その才の高く情の優しかりしをば、わが戀愛に蔽はれたりし心すら、猶能く認め得たりき。縱令色は衰ふとも、才情はむかしのまゝなるべし。かへす〳〵も惡むべきはベルナルドオが忍びて彼才彼情を棄てつるなる哉。我心緒は此不幸なる女子を憐み、彼無情なる友を憎むが爲めに、亂るゝこと麻の如くなりき。傍なる紳士は、我面色の土の如くなるを見て、いかにし給ひしぞ、不快なるにはあらずやと問ひぬ。此棧敷の餘りに暑き故なるべしと答へつゝ、我は起ちて劇場の外に走り出でぬ。

胸中の苦悶は我を驅りて、狹きエネチアの巷を、縱横に走り過ぎしめしに、ふと立ち留りて頭を擡ぐれば、われは又前の劇場の前に在り。時に一人の老僕ありて、入口に貼りたるけふの名題を剥ぎ取

り、代ふるにあすのをもてせんとす。われは進みて此僕の耳に附き、アヌンチヤタの宿はいづくぞと問ひしに、僕は首を　して我顔打目もり、アヌンチヤタと宣給ふか、そはアウレリアの誤なるべし、けふもアウレリアが部屋をばおとづれ給ひし檀那達いと多かりき、宿に案内しまゐらするは易けれど、歸るには些の隙あるべしと答ふ。われ、否、アヌンチヤタなり、けふ女王の役を勤めし人なりといふに、僕は暫し目を※りて、訝しげに我を見居たるが、さてはあの痩骨を尋ね給ふか、檀那は別に御用ありての事なるべければ、案内しまゐらせん、されどこれも歸らんは一時間の後なるべし、そが上に人に問はるゝことなき女なれば、出でゝ御目に掛かるべきか、覺束なしとつぶやきぬ。好し、さらば一時間の後の事にすべければ、こゝにて我が來んを待てと契り置きて、我は岸邊に往き、舟を雇ひて、何處をあてともなく漕ぎ行かせつ。

　我心緒はいよゝ亂れに亂れぬ。只だ心中に往來する切なる願は、今一たびアヌンチヤタと相見て、今一たびこれに詞をかはさんといふことのみ。嗚呼、アヌンチヤタはまことに不幸なりき。されど我はその不幸を救ひ得べき地位にあらざりしを奈何せん。指す方もなき水上の逍遙ながら、痛苦に逐はるゝ我心は、猶船脚の太だ遲きを覺えぬ。

　一時間の後、舟を初の岸に繫げば、老僕は早く劇場の前に立ちて待てり。引かるゝまゝに、いぶせき巷を縫ひ行きて、遂にとある敗屋の前に出でしとき、僕は星根裏の小き窓に燈の影の微かなるを指ざしたり。僕は先に立ちて暗き梯を登りゆくに、我は詞もあらでその後に隨ひぬ。僕は戸外の鈴索を牽いたり。内より誰ぞやといふは女の聲なり。マルコオ、ルガノと名告ると共に、戸はあきて、我等は暗黒なる一室の中に立てり。聖母を畫けりと覺しき小幅の前に捧げし燈明は既に滅えて、燈心の猶燻るさま、一點の血痕の如し。忽ち頭の上に戸の軋る音して、覺束なき火の光洩れ來しとき、我は側に小き梯あるを認めつ。御尋の女はあれにといふ老僕の手に、些の銀貨を握らすれば、あまたゝびぬかづき謝して、直ちに戸外に出で去りぬ。わが最後の梯を登りゆくとき、一人の女の小き絹の片にて髮を裏み、闊き暗色の上衣を着たるが入口に現れて、あすの名題や變りし、躑き給ふな、マルコオと云ひつゝ迎へぬ。我はつと室内に進みぬ。

　我はアヌンチヤタと相對して立てり。あな、おん身は何人ぞ、何の爲に此には來ましゝと、驚きたる女主人は問ひぬ。我は一聲アヌンチヤタと叫べり。暫し我面を打まもりし主人は、再びあなやといひもあへず、もろ手もて顔を掩ひつ。何人にもあらず、昔の友の一人なり、むかしおん身の惠にて、あまたの樂しき時を過し、あまたの幸福ある日を送りしものなり、何の爲めにか來べき、唯だ今一たび相見んの願ありて來つるのみといふ我聲は恥かしき迄震ひぬ。アヌンチヤタは靜に手を垂れて頭を擧げたり。肉落ちて血色なく、死人の如き面なれど、これのみは年も病もえ奪はざりけん、暗黒にして、渡津海のそこひなきにも譬へつべき瞳は、磁石の鐵を吸ふ如く、我面に注がれたり。アントニオ、かくて御身と相見んとは、つや〳〵思ひ掛けざりき。同じ憂き世の山路なれど、おん身はそを登る人、われはそを降る身なれば、相見て又何をかいふべき。疾く行き給へと口には言へど、つれなき涙は※に餘りて、頰の上に墮ち來りぬ。われ。そは餘りに情なし。われはおん身の今不幸なるを知りぬ。むかし一言の白、一目の介もて、萬人に幸福を與へしおん身なるを。

アヌンチヤタ。幸福は妙齢と美貌とに伴ふものにて、才と情との如きは、その顧みるところにあらざるを奈何せん。われ。おん身は病に臥し給ひきとは實か。アヌンチヤタ。病はいと重く、一とせの久しきにわたりしかど、死せしは我容色と我音聲とのみなりき。公衆は此二つの屍を併せ藏せる我身を棄てたり。醫師はこの死を假死なりとなし、我身は果敢なくもこれを信じたりき。我身は舊に依りて衣食を要するに、平生の蓄をば病の爲めに用ゐ盡しぬれば、彼死を祕して、詐りて猶ほ生きたるものゝ如くし、又脂粉を塗りて場に上ることゝなりぬ。されど流石に人を驚さんことの心苦しくて、わざと燈燭の數少き、薄暗き小劇場に出づるにこそ。おん身の記憶に存じたるアヌンチヤタは早や死して、その遺像は只だかしこの壁にありといひぬ。われは此詞を聞きて、向ひの壁を仰ぎ看しに、一面の大畫幅あり。枠を飾れる黄金の光の、燦然として四邊を射るさま、室内貧窶の摸樣と、全く相反せり。圖するところはヂドに扮したるアヌンチヤタが胸像なりき。氣高く麗しきその面輪、威ありて險しからざる其額際、皆我が平生の夢想するところに異ならず。我視線は覺えずすべりて、壁間の畫より座上の主人に移りぬ。アヌンチヤタは面を掩ひて、世の人の我を忘れし如く、おん身も今は我を忘れて、疾く行き給へといふ。われ。否、われ爭でか行くことを得ん、爭でか此儘に行くことを得ん。おん身は聖母の惠を忘れ給ふか。聖母はおん身を救ひ給はん、我等を救ひ給はん。アヌンチヤタ。おん身は衰運に乘じて人を辱めんとはし給はざるべし。むかし交らひ侍りし時より、おん身の心のさる殘忍なる心ならざるを知る。さらばおん身は何故に、世擧りて我を譽め我に諛ふ時我を棄てゝ去り、今ことさらに我が世に棄てられたる殘軀の色も香もなきを訪ひ給ふぞ。われ。情なき事をな宣給ひそ。我爭でかおん身を棄つべき。我を棄て給ひしは、我を逐ひて風塵の巷に奔らしめ給ひしは、おん身にこそあれ。かく言はゞ、おん身は我を自ら揣らざるものとやし給はん。さらば只だ我を驅逐せしものは我運命なり、我因果なりとやいはん。此詞纔に出でゝ、アヌンチヤタはその猶美しき目を※り、ことばはなくて我面を凝視し、その色を失へる唇はものいはんと欲する如くに動きて又止み、深き息徐ろに洩れて、目は地上に注がるゝことしばらくなりき、アヌンチヤタは忽ち右手を擧げて、緩にその額を撫でたり。一の祕密の神とおのれとのみ知れるありて、此時心頭に浮び來りしにやあらん。アヌンチヤタは再び口を開きぬ。我は君と再會せり。此世にて再會せり。再會していよ〳〵君が情ある人なることを知る。されど薔薇は既に凋れ、白鵠は復た歌はずなりぬ。おもふに君は聖母の恩澤に浴して、我に殊なる好き運命に逢ひ給ふなるべし。今はわれに唯だ一つの願あり。アントニオよ、能くそを※へ給はんかといふ。われ手に接吻して、いかなるおん望にもあれ、身にかなふ事ならばといふに、アヌンチヤタ、さらばこよひの事をば夢とおぼし棄て給ひて、いまより後いついづくにて相見んとも、おん身と我とは識らぬ人となりなんこと、是れわが唯だ一つの願ぞ、さらば、アントニオ、これより善き世界に生れ出でなば、また相見ることもあらんとて、我手を握りぬ。苦痛の重荷に押し据ゑられたる我は、アヌンチヤタが足の下に伏しまろびしに、アヌンチヤタ徐かに扶け起し、すかして戸外に伴ひ出でぬ。我は小兒の如くすかされて、小兒の如く泣きつゝ、又來んを許し給へ、許し給へと繰返しつ。戸は、さらばといふ最後の一こゑに鎖されて、われは空しく暗黒なる廊の中に立てり。街に出づれば、その暗黒は屋内に殊ならざ

りき。神よ。おん身の造り給ふところのものゝ中に、かゝる不幸もありけるよと、獨り泣きつゝ我は叫びぬ。此夜は家に返りて些の眠をだに得ずして止みぬ。

翌日はわれアヌンチヤタが爲めに百千の計畫を成就し、百千の計畫を破壞して、終には身の甲斐なさを歎くのみなりき。嗚呼、われは素とカムパニアの野の棄兒なり。羅馬の貴人は我を霑す雨露に似て、實は我を縛する繩索なりき。恃むところは單だ一の技藝にして、若し意を決して、これによりて身を立てんとせば、成就の望なきにしもあらず。されども技藝の聲價、技藝の光榮は、縱令其極處に詣らんも、昔のアヌンチヤタが境遇の上に出づべくもあらず。而るにそのアヌンチヤタが末路は奈何なりしぞ。假に彩虹の色をやどしつゝ飛泉の水の、末はポンチニの沼澤に沈み去るにも似たらずや。

思慮はたゞ一つところを馳せ　るに似て、一日一夜は過ぎぬ。次の朝には、胸中僅かに今一たび相見んの願を存ずるのみなりき。われは再びさきの狹き巷に入り、晝猶暗き梯を上りぬ。鎖されたる戸をほと〳〵と打叩けば、腰曲りたる老女入口に現れて、貸家見に來たまひしや、檀那がたの御用には立ち難くや候はんといふ。今まで住みし人はと問へば、きのふ立ち退き候ひぬ、何かは知らず、火急なる事ありと覺しくて、いとあわたゞしく見え候ひぬ。われ。行方をば知り給はぬか。老女。旅にとは申しゝが、いづくにかあらん。パヅア、トリエステ、フエルララなどにや候はんと、答へもあへず戸を鎖したり。直ちに劇場に往きて見れば、これも鎖されたり。近隣の人に聞けば、きのふ打留なりきといふ。

アヌンチヤタはいづくにか之きし。ベルナルドオなかりせば、彼人は不幸に陷らで止みしならん。否、彼人のみかは、我も或は生涯の願を遂げ、即興詩人の名を成して、偕老の契を全うせしならんか。嗚呼、絶ゆる期なき恨なるかな。

友なるポツジヨおとづれ來ていふやう。何といふ顏色ぞ。恐しき巽風もぞ吹く。若しその熱き風胸より吹かば、中なる鳥の埃及人の火紅鳥ならぬが、焦がれ死するなるべし。野にゆきては茨のうちなる赤き實を啄み、窓に上りては盆栽の薔薇花に止まりてこそ、鳥は健かにてあるものなれ。わが胸の鳥の樂を血の中に歌ひ籠めて、我におもしろく世を渡らするを見ずや。殊に詩人たらんものは、庭の花をも茨の實をも知り、天上の※氣にも下界の毒霧にも搏つ鳥を畜へでは協はずといふ。我。是の如く詩人を觀んは、卑きに過ぐるには非ずや。友。基督は地獄に下りて極惡の幽鬼をさへ見きと聞く。天の澄めると地の濁れると相觸れてこそ、大事業大制作は成就すべけれ。否、かくてはわれ汝が爲めに說法するにや似たらん。われはさる說法のためにこゝに來しにはあらず。われは市長一家の使節なり。おん身の伺候を懈ること三日なりしは、ロオザに聞きつ。何といふ亡狀ぞや。疾く往きて荊を負ひて罪を謝せよ。但し懈怠の申譯もあらば聽くべし。われ。此二日三日は不快の爲めに門を出ざりき。友。そは拙き申譯なり。他人は知らず、我はそを諾はざるべし。さきの夜樂劇に往きしは何人なりけん。しかも劇場は、かの頻りに艷種の主人公たりしアウレリアが出づる劇場なりしならずや。されどおん身もかゝる路傍の花の爲めに頭を痛めしにはあらじ。兎まれ角まれ、けふの午餉にはおん身を市長の家に伴ひ行かでは、我責務の果し難きを奈何せん。われ。今は包み隱さで告ぐべし。わが暫く市長を訪はざりしは、世のさかしらの厭はしければなり、市長の娘の

美くて、カラブリアに廣き地所を持てるを、わが彼家に出入する目的物なるやうに言ひ做すものあればなり。友。其噂は珍らしからず。カラブリアの地所は知らず、マリアが美しきは人も我も認むるところにて、おん身がその崇拝者の一人なるをば、われとても疑はざるものを。われ。崇拝とは過ぎたり。むかし我が愛せし盲の子に姿貌の似たればこそ、われはマリアに心を牽かれしなれ。友。マリアが目も拿破里なるをぢの治療にて、始て開きしものと聞けば、盲ひたる子に似たりといはんも、その由なきにあらねど、我には別に解釋あり。戀は固より盲なるものなり。その戀の神なるアモオルをこそ、むかしおん身は見つるならめ。今おん身の心のマリアに惹かるゝは、戀の神の所爲なれば、人の噂は遠からず事實となりて現るゝならん。われ。否、マリアはさて置き、何人をも我は終身娶らざるべし。友。そは又輒くは信じ難き豫言なり、おん身にふさはしからで我にふさはしかるべき豫言なり。好し、さらばわれ君と誓はん。おん身若し我に先ちて妻を持たば、婚禮の日に三鞭酒二瓶を飲ませ給へ。われ。尤も好し、その酒をば君こそ我に飲ましめ給はめ。

友は我を拉いて市長の許に至りぬ。市長とロオザとは戯言まじりに我無情を譴め、おとなしきマリアは局外に立ちて主客の爭をまもり居たり。ロオザが杯を擧げて、我健康を祝せんとする時、友は急に遮りて、否々、凡そ婦人たるものは、決してアントニオが健康を祝すべからず、そは此男終身娶らずと誓ひぬればなりといふ。市長。そは「アバテ」の天才より産まれし思想中の最も惡しきものなり。されどそを吹聽せんも氣の毒なり。友。吾意見は御主人とは異なり。かゝる惡しき思想をば梟木に懸けて、その腦裏に根を張らざるに乘じて、枯らし盡さゞるべからずといひぬ。佳※美酒は我前に陳ぜられて、我をしてアヌンチヤタの或は飢渇に苦むべきを想はしめぬ。辭して出づるとき、ロオザは我に日ごとにおとづれて、シルヰオ・ペリコの集を朗讀すべきことを契らしめき。

わが日ごとに市長の家に往くこと、はや一月となりぬ。此間我は絶てアヌンチヤタが消息を聞くこと能はざりき。ある夕例の如く市長がりおとづれしにマリアは思ふところありげにて、顔には深き憂の痕を印したり。朗讀畢りて、ロオザ席を起ちて去りぬ。我とマリアとの陪席者なくて對坐するはこれを始とす。我は冥々の裡に、一の凶音の來り迫るを覺えながら、強ひて口を開きて、ペリコの政客たる生活の其詩に及ぼしゝ影響を説き出しつ。マリアは忽ち容を改めて、「アバテ」の君と呼び掛けたり。その聲調は、始て我をしてさきよりの月旦評の毫もマリアが耳に入らざりしを悟らしめき。

「アバテ」の君、我はおん身に語るべきことあり、此會談は我が瀕死の人と結びし約束の履行なり、日ごろ疎からぬおん身に聞かせまつることながら、これを語る苦しさをば察し給へといふ。その面は色を失ひて、唇は打顫へり。我が、あな、何事のおはせしぞと驚き問ふ時、マリアは兜兒の中より、一封の書を取出て、さて語を續けて云ふやう。不可思議なる神の御手は、我を延きておん身の生涯の祕密の裡に立ち入らしめ給ひぬ。されど心安くおもひ給へ。われは沈默を死者に誓ひしが故に、ロオザにだに何事をも語らざりき。祕密の何物なるかは、此封を開かば明ならん。これを我手に受けてより、はや二日を過ぎぬ。今おん身にわたしまゐらせて、我は約を果し侍りぬといふ。われ、その死者とは何人ぞ、此書は何人の手より出でしぞと問ふに、マリア、そは御身の祕密なるものをとて、起ちて一間を出でぬ。

家に歸りて封を啓けば、内より先づ二三枚の紙出でたり。先づ取上げたる一枚は我手して鉛筆もてしるせる詩句なりき。紙の下端には墨汁もて十字三つを劃したるさま、何とやらん碑銘にまぎらはしくおぼゆ。此詩句は、わが初めてアヌンチヤタを見つるとき、觀棚より舞臺に投げしものなり。さては此一封をマリアに托しきといふはアヌンチヤタなりしか。死せしはアヌンチヤタなりしか。

紙の間には別に重封の書ありて、アントニオ様へとうは書せり。遽しく裂きて中なる書をとりいだすに、いと長き消息の、前半は墨濃く筆のはこびも慥なれど、後半は震ふ筆もて微かに覺束なくしるされたるを見る。其文に曰く。

文して戀しく懷かしきアントニオの君に　申上※。今宵はゆくりなくも、おん目に掛り候ひぬ、再びおん目にかゝり候ひぬ。こは久しき程の願にて、又此願のかなはん折をいと恐ろしくおもひしも、久しき程の事にて候。譬へば死をば幸ひ齎すものぞと知りつゝも、死の到來すべき瞬間をば、限なく恐ろしくおもふが如くなるべく候。この文認め候は、君に見えてより數時間の後に候へども、君のこれを讀ませ給はんは、數月の後なるべきか、或は又月を踰えざるべきかとも存ぜられ候。世の人の言に、われとわが姿に出で逢ひしものは、遠からずして死すと申候へば、わが常の心の願にて、我心と同じものになり居たる君に逢ひまゐらせたるは、我死期の近づきたるしるしなるべくやなど思ひつゞけ※。いかなれば我心は君をえ忘れず、いかなれば君は我心と化し給ひて、幸ある時も、禍に逢へる時も、君は我心を離れ給はざりけん。今より思ひ　らし候へば、そは君が世に棄てられたるヌンチヤタを棄て給はぬ唯一の恩人にましませばならんと存※。されど君の今に至りて猶我身を棄て給はざる御恩は、決して故なき人の上に施し給ひしには候はずと存※。君の此文を見給はん時は、私は世に亡き人なるべければ、今は憚ることなく申上候はん。君は我戀人にておはしまし候ひぬ。我戀人は、昔世の人にもてはやされし日より、今またく世の人に棄て果てられたる日まで、君より外には絶て無かりしを、聖母は、現世にて君と我との一つにならんを許し給はで、二人を遠ざけ給ひしにて候。君の我身を愛し給ふをば、彼の不幸なる日の夕に、彈丸のベルナルドオ」は底本では「ベルナドオ」」を傷けし時、君が打明け給ひしに先だちて、私は疾く曉り居り候ひぬ。さるを君と我とを遠ざくべき大いなる不幸の、忽ち目前に現れたるを見て、我胸は塞がり我舌は結ばれ、私は面を手負の衣に隱しゝ隙に、君は見えずなり給ひぬ。ベルナルドオの痍は命を隕すに及ばざりしかば、私は其治不治生不生の君が身の上なるべきをおもひて、須臾もベルナルドオの側を離れ候はざりき。憶ふに、此時のわが振舞は君に疑はれまゐらせしことのもとにや候ふべき。私は久しく君の行方を知らず、人に問へども能く答ふるもの候はざりき。數日の後、怪しきおうな尋ね來て、一ひらの紙を我手にわたすを見れば、まがふ方なき君の手跡にて、拿破里に往くと認めあり、御名をさへ書添へ給へれば、おうなの云ふに任せて、旅行券と路用の金とをわたし候ひぬ。旅行券はベルナルドオに仔細を語りて、をぢなる議官に求めさせしものに候、ベルナルドオは事のむづかしきを知りながら、我言を納れて、強ひてをぢ君を説き動しゝ趣に候。幾もあらぬに、ベルナルドオが痍は名殘なく癒え候ひぬ。彼人も君の御上をば、いたく氣遣居たれば必ず惡しき人と御思ひ做しなさるまじく候。ベルナルドオ

は痍の痊え(いえ)し後、我身を愛する由聞え候ひしかど、私はその僞ならぬを覺(さと)りながら、君をおもふ心よりうべなひ候はざりき。ベルナルドオは羅馬を去り候ひぬ。私は直ちに拿破里をさして旅立候ひしに、君も知らせ給ひし友なるおうなの俄に病み臥(こや)しゝ爲め、モラ、ヂ、ガエタに留まること一月ばかりに候ひき。かくて拿破里に着きて聞けば、私の着せし前日の夜、チエンチイといふ少年の即興詩人ありて、舞臺に出でたりと申噂に候。こは必ず君なるべしとおもひて、人に問ひ糺(ただ)し候へば、果してまがふかたなき我戀人にておはしましき。友なるおうなは消息して君を招き候ひぬ。こなたの名をばわざとしるさで、旅店の名をのみしるしゝは、情ある君の何人の文なるをば推し給ふべしと信じ居たるが故に候ひき。おうなは再び文をおくり候ひぬ。されど君は來給はざりき。使の人の文をば讀み給ひぬといふに、君は來給はざりき。剩(あまつさ)へ君は遽(にはか)に物におそるゝ如きさまして、羅馬に還り給ひぬと聞き候ひぬ。當時君が振舞をば、何とか判じ候ふべき。私は君の誠ありげなる戀のいち早くさめ果てしに驚き候ひしのみ。私とても、世の人のめでくつがへるが儘に、多少驕慢の心をも生じ居たる事とて、思ひ切られぬ君を思ひ切りて、獨り胸をのみ傷(いた)め候ひぬ。さる程に友なるおうなみまかり、その同胞(はらから)も續きてあらずなり、私は形影相弔(てう)すとも申すべき身となり候ひぬ。されど年猶少く色未だ衰へずして、身には習ひおぼえし技藝あれば、舞臺に上るごとに、萬人の視線一身に萃(あつ)まり、喝采の聲我心を醉はしめて、しばし心の憂さを忘れ候ひぬ。是れまことのアヌンチヤタが最終の一年に候ひき。私はボロニアに赴(おもむ)く旅路にて、ふと病に染まり候ひぬ。初こそは唯だかりそめの事とおもひ候ひつれ、君に棄てられまつりてよりの、人知れぬ苦痛は、我が病に抗すべき力を奪ひて、一とせが程は頭をだにえ擡(もた)げず候ひき。こゝに君に棄てられぬと書きしをば、許させ給へ。私はその頃、君の猶我身を忘れ給はで、世の人の皆我身を顧みざるに至りて、今一たび我手に接吻し給ふべきをば、夢にだに思得候はざりしなり。二とせの間、劇場にて貯へし金をば、藥餌の料に費(つひや)し盡し候ひぬ。病は※えぬれども、聲潰れたれば、身を助くべき藝もあらず、貧しきが上に貧しき境(きやう)界(がい)に陷いり、空しく七年の月日を過して、料(はか)らずも君にめぐりあひ候ひぬ。君はこよひの舞臺にて、むかし羅馬の通衢(ちまた)を驅(か)るに凱旋の車をもてせしアヌンチヤタがいかに賤客に嘲(あざけ)られ、口笛吹きて叱責せられたるかを見そなはし給ひしなるべし。私は運命の蹙(せば)まりしと共に、胸狹くなりしを自ら覺え居候。扨(さて)見苦しき假住ひに御尋下され候時、我目を覆ひし面紗(エール)の忽ち落つるが如く、君の初より眞心もて我を愛し給ひしことを悟り候ひぬ。汝こそは我を風塵中に逐ひ出しつれとは、君の御詞なりしかど、私のいかに君を慕ひまゐらせ、いかに君の方(かた)へ手をさし伸べ居たりしをば、君のしろしめさゞりしを奈何(いかに)かせん。私は再び君に見(まみ)ゆることを得て、君の温なる唇を我手背に受け候ひぬ。今や戸外に送りいだしまゐらせて、私は再び屋根裏の一室に獨坐し居り候。この室をば直ちに立退き申すべく、此エネチアをも直ちに立去り申すべく候。アントニオの君よ。願はくは我が爲めに徒(いたづ)らに歎き悲み給ふな。私は世には棄てられ候へども、聖母(マドンナ)は私を護り給ふこと、君を護り給ふに同じかるべく候。アントニオの君よ、さきには我を思ひ棄て給へと申候へども、未錬ともおぼさばおぼせ、猶親しかりし人のみまかりしを思ひ給ふが如く、我を思ひ給はんことのみ

は望ましく存※。

涙は讀むに隨ひて流れ、わが心の限の涙と化して融け去るを覺えたり。此より下は、かすかなる薄墨の痕猶新にして、數日前に寫されしものと知らる。

苦を受くる月日も最早些子を餘し候のみと存※。今まで受けつるあらゆる快樂の聖母の御惠なると等しく、今まで受けつるあらゆる苦痛も亦聖母の御惠と存※。死は既に我胸に迫り候。血は我胸より漲り流れ候。いま一回轉して漏刻の水は傾け盡され申すべく候。人の傳へ候ところに依れば、エネチア第一の美人は君がいひなづけの妻となり居候由に候。私の死に臨みての願は、御二人の永く幸福を享け給はんことのみに候、あはれ、此數行の文字を托すべき人は、その人ならで又誰か有るべき。その人の私の請を容れて、こゝに來給ふべきをば、何故か知らねど、牢く信じ居※。生死の境に浮沈し居る此身の、一杯の清き水を求むべき手は、その人の手ならではと存※。さらば〳〵、アントニオの君よ。私の此土に在りての最終の祈祷、彼土に往きての最初の祈祷は、君が御上と、私の徒らに願ひてえ果さず、その人の幸ありて成し遂げ給ふなる、君が偕老の契の上とに在るのみなることを、御承知下され度存※。今更繰言めき候へども、聖母の我等二人を一つにし給はざりしは、其故なからずやは。私は世人にもてはやされ讃め稱へられて、慢心を增長し居候ひぬれば、君にして當時私を娶り給ひなば、君の生涯は或は幸福を完うし給ふこと能はざりしにあらずやと存※。さらば〳〵、アントニオの君よ。過ぎ去りしは苦痛、現然せるは安樂にして末期は今と存※。アントニオの君よ。又マリアの君よ。私の爲めに祈祷し給へかし。

アヌンチヤタ。

悲歎の極には聲なく涙なし。我は茫然として涙に濡れたる遺書を瞠視すること久しかりき。暫しありて、猶封中より落ち散りたりし一ひら二ひらの紙を取り上げ見れば、一はわが拿破里に往くとしるして、フルヰアのおうなに渡しゝ筆の蹟なり。又一はベルナルドオがアヌンチヤタに與へし文にして、負傷の爲めに床に臥したりし程の、懇なる看護の恩を謝し、今はよしなき望を絶ちて餘所の軍役に服せんとおもへば、最早羅馬にて相見ることはあらじと書せり。嗚呼、おもひの外の事どもなるかな。アヌンチヤタは初より我を戀ひたりしなり。我が拿破里に往くことを得しは、アヌンチヤタの惠なりしなり。拿破里の旅店より書を寄せて、相見んことを求めしはアヌンチヤタにしてサンタにはあらざりしなり。その恩情窮なきアヌンチヤタは今や亡き人となりしなり。さるにてもアヌンチヤタはマリアを病床に招き寄せて、いかなる事を物語りし。既にマリアをわがいひなづけの妻といへば、巷説は早くアヌンチヤタの病床に聞え居りて、マリアさへ其口より、さがなき人の言草を聞きつるなるべし。再びマリアの面を見んは影護き限なれども、アヌンチヤタの爲めにも我が爲めにも天使に等しきマリアに、一ことの謝辭を述べずして止まんやうなし。

舟を倩ひて市長の家に往きしに、ロオザとマリアとは一と間の中にありて手仕事に餘念なかりき。我はしばし相對して物語しつれど、心に言はんと欲する事の、口に言ひ難ければ、問はるゝことあるごとに、あらぬ答をのみしたりき。ロオザは忽ち我手を把りて口を開きて云ふやう。おん身は深き憂に沈み居給ふとおぼし。われ等の君がまことの友たるを知り給はゞ、打開けて物語し給へと云ふ。われ。

さなり。君は何事をも知り給ふならん。ロオザ。否われは未だ何事をも知らず。マリアこそは聞きつることもあらめ。（マリアは鼻じろみて、その詞を遮らんとしたり。）われ。おん身二人には、われ又何事をか隠し候ふべき。初よりの事のもとすゑを打開けんも我が心やりなれば、煩はしけれど聞き給へとて、われは昔語をぞ始めける。よるべなき孤なりし生立より、羅馬にてアヌンチヤタと相識り、友なりけるベルナルドオを傷けて、拿破里に逃れ去りし慘劇まで、涙と共に語り出でしに、可憐なるマリアの掌を組合せて、我面を仰ぎ見るさま、我記憶の中に殘れるフラミニアが姿に髣髴たり。われはマリアが面前にありて、ララが事、琅※洞の事のみは、語ることを憚りたれば、直ちにエネチアにての再會の段に移りて、アヌンチヤタの末路を敍し畢りぬ。ロオザ。おん身の上に、さる深き關繫あるべきをば、初め少しも知らざりき。さきの日尼寺の病室より、識らぬ女の文とゞきて、今生死の際に在るものなるが、マリアに逢ひて申し殘したき事ありといへば、舟にてかしこに伴ひゆき、われは尼達の許に留まりて、マリアを病人の室に遣りぬ。マリア。かくてその人に逢ひ侍りぬ。記念の一封をばさきに渡しまゐらせつ。我。アヌンチヤタはその時何とか申し候ひし。マリア。人知れずこれをアントニオに渡し給へといひぬ。おん身の上をば、妹の兄の上を語るらんやうに語りぬ。爾時アヌンチヤタが唇は血に染まり居たり。死は遽に襲ひ至りて、アヌンチヤタはわが面をまもりつゝときれ侍りと、語りもあへず、マリアは泣き伏したり。われは詞はあらで、マリアの手を握りつ。

われは寺院に往きてアヌンチヤタが爲めに祈祷し、又その墓に尋ね詣でつ。此地の塋域は、高き石垣もて水面より築き起されたるさま、いにしへのノアが舟の洪水の上に泛べる如し。草むらの中に黒き十字架あまた立てるあたりに歩み寄れば、わが尋ぬる墓こそあれ。只是一片の石に、アヌンチヤタと彫り付けたり。一基の十字架の上に、緑の色の猶鮮なる月桂の環を懸けたるは、ロオザとマリアとの手向なるべし。われは墓前に跪きて、亡人の悌をしのび、更に頭を回して情あるロオザとマリアとに謝したり。

流離

その頃フアビアニ公子の書状届きしに、文中公子のわがエネチアに留まること四月の久しきに至るを怪み、強ひてにはあらねど、我にミラノ若くはジエノワに遊ばんことを勸めたる一節あり。われつら〳〵念ふやう。わが猶此地に留まれるは、そも〳〵何の故ぞや。此地にはげに兄弟に等しきポツジヨあり、姉妹に等しきロオザ、マリアあれど、是等の交は永遠なるべきものにあらず。中にも女友二人の如きは、相見るごとに我が悲哀の記憶を喚び醒すことを免れず。われは悲哀を懷いてエネチアに來ぬ。而してエネチアは更に我に悲哀を與へしなり。われは遽にエネチアを去らんと欲する心を生じて、そを告げんために、市長の家をおとづれたり。

月光始めて渠水に落つるころほひ、我は二女と市長の家の廣間なる、水に枕める出窓ある處に坐し居たり。マリアはすでに一たび燈火を呼びしかど、ロオザがこの月の明きにといふまゝに、主客三人は猶月光の中に相對せり。マリアはロオザに促されて、穴居洞の歌を歌ひぬ。聲と情との調和好き此一曲は、清く軟かなる少女の喉に上りて、聞くものをして積水千丈の底なる美の窟宅を想見せしむ。

ロオザ。この曲には音節より外、別に一種の玲瓏たる精神ありとはおぼさずや。われ。洵に宣給ふごとし。若し精神といふもの形體を離れて現ぜば、應に此詩の如くなるべし。マリア。生れながらに目しひなる子の世界の美を想ふも亦是の如し。ロオザ。さらば目開きての後に、實世界に對せば、初の空想の非なることを知るならん。マリア。實世界は空想の如く美ならず。されど又空想より美なるものなきにあらず。話頭は直ちにマリアが初め盲目なりし事に入りぬ。こはポツジヨが早く我に語りしところなれども、今はわれ二女の口より此物語を聞きつ。ロオザは弟の手術を讃め、マリアも亦その恩惠を稱へたり。マリアの云ふやう。目しひなりし時の心の取像ばかり奇しきは莫し。先づ身におぼゆるは日の暖さ、手に觸るゝは神社の圓柱の大いなる、霸王樹の葉の闊き、耳に聞くはさま／〃＼の人の馨音などなり。一の官能の闕くるものは、その有るところの官能もて無きところのものを補ふ。人の天青し、海青し、菫の花青しといふを聽きて、われは菫の花の香を聞き、そのめでたさを推し擴めて、天のめでたかるべきをも海のめでたかるべきをも思ひ遣りぬ。視根の光明闇きときは、意根の光明却りて明なるものにやといふ。これを聞く我は、ララが髪に挿みし菫の花束と、ペスツム祠の圓柱とを憶ひ起すことを禁ずること能はざりき。話頭は轉じて自然の美に入り、ロオザは拿被里の山水の景の慕はしさを説き出せり。われはこの好機會を得て、エネチアを去る意を洩しつ。そは思ひも掛けぬ事かなとロオザ訝れば、さては最早再び此地には來給ふまじきかとマリア氣遣ふさまなり。否々、ミラノまで往かば、又此地を經て羅馬に還らんとこそ思ひ候へと我は答へつれど、實はまだこゝを立ちていづ方に往かんとも思ひ定めざりしなり。

わがエネチアに別るゝ涙を見せしは、アヌンチヤタが墓とマリアが居間とのみなりき。墓に詣でゝは、石上に殘れる輪飾の一葉を摘みて、夾袋の中に藏めつ。われは此石の下に、唯だ一團の塵を留むるのみなるを知る、アヌンチヤタが魂の聖母の御許に在り、その影の我胸中に在りて、此石の下なる塵のわが執着すべき價あるものにあらざるを知る。されどわれは猶低徊して此方數尺の地を去ること能はざりき。市長の家に往きては一家の人々とポツジヨとの餞宴を受けたり。市長は三鞭酒の盃を擧げて別を告げ、ポツジヨはめぐる車の云々といふ旅の曲と、自由なる自然に遊ぶ云々といふ鳥の歌とを唱ひぬ。ロオザは、君若し妻を娶り給はゞ、偕に我家に來給へ、我は君が物語の中なる彼亡人を愛する如く、君の伴ひ來給はん其人をも愛せんといひ、マリアは唯だ、健かに樂しげにて、又我家をおとづれ給へといひぬ。

ポツジヨは例の「ゴンドラ」の舟にて、フジナまで送らんとて、我と共に立出づれば、ロオザとマリアとは出窓に立ちて、紛※を打振りぬ。別に臨みてポツジヨは聲高く笑ひつゝ、許嫁の女極まらば、彼約束を忘るなといひぬ。われは、けふさる戲言いふことかはと戒めつゝも、心の中にその笑顏の涙を掩ふ假面なるをおもひて、竊に友の情誼に感じぬ。

車は情なくして走り、一堆の緑を成せるブレンタの側を過ぎ、垂楊の列と美しき別業とを見、又遠山の黛の如きを望みて、夕暮にパヅアに着きぬ。聖アントニウス寺の七穹窿は、恰も好し月光に耀けり。柱列の間には行人絡繹として、そのさまいと樂しげなれども、われは獨り心の無聊に堪へざりき。

白晝となりてより、我無聊は愈　甚だしければ、又車を驅りてこゝ

を立ち、一の平原に入りぬ。緑草の鬱茂せるさまはポンチニイの大澤に譲らず。瀑布の如くなる大柳樹は古塚を掩ひ、所々に聖母の像を安じたる贅卓を見る。像の古りたるは色褪せて、これを圍める彩畫ある板壁さへ、半ば朽ちて地に委ねたれど、中には聖母兒の丹粉猶鮮かなるもなきにあらず。御者はその古きに逢ひては顧みだにせねど、その新なるを見るごとに、必ず脱帽して過ぐ。われはその何の心なるを知らずして、唯　聖母の貴きすら、色褪せては人に崇められゝことなきを歎じたり。

　ヰチエンツアを過ぎぬれど、パラヂオ（中興時代の名ある畫師）が美術も光明を我胸の闇に投ずること能はざりき。エロナは始て稍我心を動したり。石級のコリゼエオに似たるありて、幸に兵燹を免れ、人をして小羅馬に入る感あらしむ。柱列の間なる廣き處は、今税關となり、演戲場の中央には、板を列ね幕を張りて、假に舞臺を補理ひ、旅役者の興行に供せり。夜に入りて我は試に往きて看つ。エロナの市人の石榻に坐せるさまは、猶古のごとくにて、演ずる所の曲をば、「ラ、ジエネレントオラ」と題せり。役者の群は、エネチアにて見しアヌンチヤタが組なりき。アウレリアはこよひも此樂曲の主人公に扮したり。一張の「コントルバス」に氣壓さるゝ若干の管絃なれど、聽衆は喝采の聲を惜まざりき。趨りて場を出づれば、月光遍く照して一塵動かず、古の劇場の石壁石柱は※然として、今の破れ小屋のあなたに存じ、廣大なる黒影を地上に印せり。

　我はカプレツチイ第を訪ひぬ。昔カプレツチイ、モンテキイの二豪族相爭ひて、少年少女の熱情を遮り斷ちしに、死は能くその合ふべからざるものを合せ得たり。シエエクスピイアがものしつる「ロメオ、エンド、ジユリエツト」の曲即ち是なり。此第はロメオが初てジユリエツトに來り見えて共に舞ひし所にして、今は一の旅館となりぬ。われはロメオの夜な〳〵通ひけん石の階を踐みて、曾て盛に聲樂を張りてエロナの名流をつどへしことある大いなる舞臺に上りぬ。闊き窓の下鋪板に達するまでに切り開かれたる、丹青目を眩したりけん壁畫の今猶微かに遺れるなど、昔の豪華の跡は思はるれど、壁の下には石灰の桶いくつともなく並べ据ゑられ、鋪板には芻秣、藁などちりぼひ、片隅には見苦しき馬具と農具との積み累ねられたるを見る。まことに榮枯盛衰のはかなきこと、夢まぼろしはものかは。さればこの假の世を、フラミニアの厭ひしも、アヌンチヤタの去りぬるも、なかなかに慰む方ありとやいふべき。

　月の末にミラノに着きぬ。新に交を求めん心なければ、人の情の紹介幾通かありしを、一としてその宛名の家にとゞくることなかりき。一夜「ラ、スカラ」座に入りて樂曲を聽きたり。帷を垂れたる六層の觀棚も、積あまりに大いにして客常に少ければ、却りて我をして一種の寂寥と沈鬱とを覺えしめき。奏する所の曲は「タツソオ」にして、主なる女優はドニチエツチイといふものなりき。一折畢るごとに、客の喝采してあまたゝび幕の外に呼び出すを、愛らしき笑がほして謝し居たり。わが厭世の眼は、この笑の底におそろしき未來の苦惱の潛めるを見て、あはれ此美人目前に死せよ、さらば世間もこれが爲めに泣くことなか〳〵に少かるべく、美人も世を恨むことおのづから淺からんとおもひぬ。「バレツトオ」の舞には玉の如き稚き娘達打連れて踊りぬ。われはその美しさを見るにつけて、血を嗚くおもひをなしつゝ、悄然として場を出でたり。

　ミラノの客舍の無聊は日にけにまさり行きて、市長の家族も、親友と稱せしポツジヨも我書に答ふることなかりき。われは或ときは

蔭多き衢をそゞろありきし、或ときは一室に枯坐して新に戯曲の稿を起しつ。曲の主人公はレオナルドオ・ダ・ヰンチなりき。レオナルドオの住みしは此地なり。その不朽の名畫晩餐式はこゝに胚胎せしなり。その戀人の尼寺の垣内に隱れて、生涯相見ざりしは、わがフラミニアに於ける情と古今同揆なりとやいはまし。

われは日ごとにミラノの大寺院に往きぬ。此寺はカルララの大理石もて、人の力の削り成しし山ともいふべく、月あかき夜に仰ぎ見れば、皎潔雪を欺く上半の屋蓋は、高く碧空に聳えて、幾多の簷角幾多の塔尖より石人の形の現れたるさま、この世に有るべきものともおもはれず。畫その堂内に入れば、採光の程度ほゞ羅馬の「サン、ピエトロ」寺に似て、五色の窓硝子より微かに洩るゝ日光は、一種の深祕世界を幻出し、人をして唯一の神こゝに在すかと觀ぜしむ。

ミラノに來てより一月の後、我は始て此寺の屋上に登りぬ。日は石面を射て白光身を繞り、ここの塔かしこの龕を見めぐらせば、宛然立ちて一の大逵に在るごとし。許多の聖者獻身者の像にして、下より望み見るべからざるものは、新に我目前に露呈し來れり。われは絶頂なる救世主の巨像の下に到りぬ。ミラノ全都の人烟は螺紋の如く我脚底に畫かれたり。北には暗黒なるアルピイの山聳え、南には稍低き藍色のアペンニノ横はりて、此間を填むるものは、唯だ緑なる郊原のみ。譬へばカムパニアの野を變じて一の花卉多き園囿となしたらんが如し。われは眦を決して東のかたヱネチアを望みたるに、一群の飛鳥ありて、列を成してかなたへ飛び行くさま、一片の帛の風に翻弄せらるゝに似たり。われはマリアを憶ひ、ロオザを憶ひ、ポツジヨを憶へり。昔幼かりし時、母とマリウチアとに伴はれて、ネミの湖に往きしかへるさ、アンジエリカが我に物語りし事こそあれ。その物語は今我空想に浮び來ぬ。オレワアノにテレザといふ少女ありき。戀人なるジユウゼツペが山を踰えて北の國に往きしより、戀慕の念止むことなく、日を經るに從ひて痩せ衰へぬ。フルヰアの老媼はテレザの髪とその藏め居たりしジユウゼツペの髪とを銅銚に投じて、奇しき藥艸と共に煮ること數日なりき。ジユウゼツペは他郷に在りしが、我毛髪の彼銚中に入ると齊しく、今まで忘れ居つるテレザの慕はしくなりて、醒めては現に其聲を聞き、寢ねては夢に其姿を視、そぞろに旅のやどりを立出でゝ、おうなが銚の下に歸りぬといふ。ヱネチアには我髪を烹る銚あるにあらねど、わがこれを憶ふ情は、恰も幻術の力の左右するところとなれるが如くなりき。われ若し山國の産ならば、此情はやがて世に謂ふ思郷病なるべし。（歐洲人は思郷病は山國の民多くこれを患ふとなせり。）されど又ヱネチアのわが故郷ならぬを奈何せむ。われは悵然として此寺の屋上より降りぬ。

客舍に歸れば、卓上に一封の書あるを見る。こはポツジヨが許より來れるなり。これを讀むに、袂を分ちてより第二の書を作る云々と書せり。さらば友の初の一書は我手に入るに及ばずして失はれしなるべし。ヱネチアには何の變りたる事もあらねど、マリアは病に臥したり。その病のさま一時は性命をさへ危くすべくおもはれぬれど、今は早や恢復に近し。猶戸外には出でずとなり。末文には、例の戯言多く物して、まだミラノの少女に擒にせられずや、三鞭酒をな忘れそなど云へり。われは讀み畢りて、ポツジヨが滑稽の天性にして、世の人のそを假面と看做すことの謬れるを信ぜんとせり。さればこそ同じ無稽の巷説は、わがマリアを敬することロオザを敬すると殊ならざるを見ながら、謬りて我をもてマリアに戀するものと

なすなれ。

　われは消遣の爲めに市の外廓より出でゝ、武具の辻（ピアツツア、ダルミイ）を過ぎ、拿破崙の凱旋塔の下に至りぬ。世のいはゆるセムピオオネの門（ポルタ、セムピオオネ）とは是なり。塔は猶未だ其工事を終らず、板がこひを繞らして、これに格子戸を裝ひたり。戸より入りて見れば、新に大理石もて彫り成せる大いなる馬二頭地上に据ゑられ、青艸はほしいまゝに長じて趺石を掩はんと欲す。四邊には既に刻める柱頭あり、粗ごなししたる石塊あり。許多の工人は織るが如くに來往せり。

　時に一の旅人ありて我を距ること數歩の處に立ち、手簿を把りて導者の言を記せり、年の頃は三十ばかりなるべし。胸には拿破里の勳章二つを懸けたり。此旅人の迫持の石柱を仰ぎ見るに及びて、我はそのベルナルドオなるを識りぬ。彼方も亦直ちに我を認め得つとおぼしく、何の猶豫ふさまもなく、我側に歩み寄りて我胸を抱き、めづらしきかな、アントニオ、われ等の相別れし夕は賑やかなりき、われ等は祝砲をさへ放ちたり、されど想ふに我等の友情は舊の如くなるべしといひぬ。我は肌の粟を生ずる心地しつゝ、纔に口を開きて、さてはベルナルドオなりしよ、圖らざりき、おん身と伊太利の北のはてなる、アルピイ山の麓にて相見んとはと答へつ。

　我等は共に歩みて新劇場の邊に往き、轉じて市の廓に入りぬ。ベルナルドオは道すがら語りていふやう。汝は此地を指してアルピイ山の麓といへり。われはまことのアルピイの巓に登りて世界の四極を見たり。曩に拿破里に在りし時、獨逸の士官等の、瑞西の山水を説くを聞き、一たび往いて觀んことを願ふこと漸く切なるに、汽船もて達し易きジエノワを距ること遠くもあらぬを知れば、意を決して往くことゝしつ。シヤムニイの谿をも渡りぬ。モンブランの頂にも、ユングフラウの頂にも登りぬ。現にユングフラウは「ベルラ、ラガツツア」（美少女）なれど、かくまで冷かなる女子は復た有るべからず。これよりはジエノワに往きて、約束せし妻とその父母とを訪はんとす。もはや眞面目なる一家のあるじとならんも遠からぬ程なるべし。汝若し我が昔日の生涯を語らず、彼の馴るゝ小鳥の事、愛らしき歌妓の事などを祕せんと誓はゞ、われは汝を伴ひてジエノワに往くべし。いかに、三日の後に我と共に發足せずやといひぬ。われ。否々、我は明日此地を立たんとす。ベルナルドオ。そは何處へ往くにか。われ。エネチアに往くなり。ベルナルドオ。汝が漫遊の日程は、よも變更を容さぬにはあらざるべし。枉げて我言に從はずや。われはベルナルドオにかく説き勸められて、反復しておのれのエネチアに往かざるべからざるを辯じ、果は自らこの漫然口を衝いて發せし語の、實にその故あるが如きを覺ゆるに至りぬ。

　われは客舍に返りて、不可思議なる力に役せらるゝものゝ如く、倉皇我行李を整へ、あるじに明朝の發※を告げたり。此夜は臥床に入れども、胸打ち騷ぎて熱を病むものゝ如く、眠をなさゞること久しかりき。翌朝ベルナルドオを訪ひて、我が爲めに善くその未來の妻に傳へんことを頼み聞え、忙はしく車を驅りてエネチアに向ひぬ、二月前に去りしエネチアに。

心疾身病

　車はフジナに到りぬ。われは又泥深き海、衣色の石垣、「マルクス」寺の塔を望むことを得たり。怪むべし、われは足一たびエネチ

アの地を踏むと齊しく、吾心の劇變せるを覺えき。今までエネチアへ、エネチアへと呼びし意欲は俄に迹を※めて、一種の言ふべからざる羞慚の情生じ、人の汝は何故に復た來れると問はゞ、辭の答ふべきなからんと氣遣ふやうになりぬ。

われは直ちに舊寓に入りて、衣服を改め、身の疲れたるをも顧みで、市長の家に往きぬ。舟の苔を被れる屋壁と高き窓とに近づくとき、怪しき映象は我胸に浮びぬ。そはわれ若しマリアが結婚の席に往きあはゞいかにといふことなりき。われは此念の頭を擡げ來るを見て、又急にこれを抑へ、否、われは求婚の爲めに往くならねば、そも亦妨なしと云ひぬ。されど我心は遂に全く平なること能はざりき。

門を叩けば僕出で迎へて、あるじはおん身來まさば、案内することを須ゐざれと宣給ひぬといふ。そのさま吾が至るを期したるに似たり。廣間には幌を卸して、閾として物音を聞かず。われは、是れデスデモナが悲歎せし處なるべし、されどオテルロの苦痛はこれより甚しかりしならんとおもひぬ。わが此時恰も此念をなしゝも、亦頗るあやしき事なり。既にして導かれてロオザが房に入るに、こゝも幌を垂れて日光を遮りたれば、外より入るものはその暗きに驚かんとす。わがミラノにて覺えし奇しき情、我を驅りてエネチアへ來させし奇しき情は忽又起りて、その幻術に似たる力は一層の強さを加へ、我手足は震慄せり。われは手もて壁を支へて、僅に地に倒れざることを得たり。

主人は温顔もて我を迎へ、我身を回抱して、再見の喜を述べたり。われは二婦人の何處に在るを問ひぬ。彼等は親族と共にパヅアに往きたり、二三日の後ならでは歸り來ざるべしといふ。その面色その態度を察するに、何とやらん言を構へて我を欺く如くなり。されどわれは又此人の平生を顧みて、わが疑の邪推なるべきをおもへり。主人は我を留めて晩餐を供せり。卓に就きたる間、我は限なき寂寞を感じ、又主人の面の爽かならざるを覺えぬ。われはおそる〳〵その不興の因由を問ひしに、主人頭を掉りて、否、益なき訴訟の事ありて、些の不安を感ずるに過ぎず、ポツジヨは久しくおとづれず、おん身さへ健康すぐれ給はざる如し、兎も角も此一盃を傾け給へといひつゝ、我前なる杯に葡萄酒を注がんとせしに、忽ちその手を駐めて、おん身は心地惡しきにはあらずやと叫びぬ。そは我面色の土の如く變じたればなるべし。われは室内の物の旋風の如く動搖するを覺えて、そのまゝはたと地に僵れぬ。

此より我は半醒半睡の間に在ること幾日なるを知らず。市長は時として我臥床の傍に坐して、われに心を安んじて全快を待たんことを勸め、ロオザの遠からず來りて病を瞻るべきを告げたり。或日家の内騒がしく、人の到着しつと覺しきさまなりしに、忽ちロオザは吾前に來ぬ。その面には憂の色を帶びたり。その日の暮つかた、われは家内の又さきにも増して物騒がしきを覺え、側なる奴婢に問はんとするに、一人として我に答ふるものなし。階下の室には人多くゆききする足音頻に、屋外の大渠には小舟の梶音賑はしかりき。われは暫し目蕩みしに、ふとマリアの死せることを知り得たり。さきにはポツジヨ我にマリアの病を告げて、その病は※えぬと云へり。されど病は再發して、マリアは既に死し、家人は我に祕して、こよひそを葬るなり。われは明かにロオザの祈祷の聲を聞き、マリアの菫花もて飾れる棺は明かに心目の前にあらはれぬ。忽ち我は病の既に去りて力の既に復せるを感じ、蹶然として臥床より起ち、人の我

側に在らざるに乗じて、壁に懸けたる外套を纏ひ、岸邊なる小舟を招きて、「デイ、フラアリイ」の寺に往かんことを命じつ。こは市長が累世の墓ある處にして、われは曾て一たび其窟墓を窺ひしことありき。夜は暗くして、「アヱ、マリア」の鐘と共に閉されたる門の前には人影早や絶えたり。われは扉をほと〳〵と敲きしに、寺僮は我が爲めに門を開きつ。そは曾てわが市長に伴はれて來ぬる時、我にチチヤノとカノワとの墓を指し教へしことあれば、猶我面を見知り居たりしなり。寺僮は我心を計り得て、君は遺骸を見に來給ひしならん、今は猶贊卓の前に置かれたれど、あすは龕に藏めらるべしとて、燭を點して我を導き、鑰匙取り出でゝ側なる小き戸を開きつ。寺僮と我との足音は、穹窿の間に寂しき反響を喚起せり。寺僮の柩はかしこにと指して、立ち留まるがまゝに、我はひとり長廊を進めり。聖母の御影の前に、一燈微かに燃え、カノワが棺のめぐりなる石人は朧氣なる輪廓を畫けり。贊卓に近づけば、卓前に三つの燈の點ぜられたるを見る。董花のかほり高き邊、覆はざる柩の裏に、堆き花瓣の紫に埋もれたる屍こそあれ。長なる黒髪を額に絹ねて、これにも一束の董花を挿めり。是れ瞑目せるマリアなりき。我が夢寐の間に忘るゝことなかりしララなりき。われは一聲、ララ、など我を棄てゝ去れると叫び、千行の涙を屍の上に灑ぎ、又聲ふりしぼりて、逝け、わが心の妻よ、われは誓ひて復た此世の女子を娶らじと呼び、我指に嵌めたりし環を抽きて、そを屍の指に遷し、頭を俯して屍の額に接吻しつ。爾時我血は氷の如く冷えて、五體戰ひをのゝき、夢とも現とも分かぬ間に、屍の指はしかと我手を握り屍の唇は徐かに開きつ。われは毛髪倒に竪ちて、卓と柩との皆獨樂の如く旋轉するを覺え、身邊忽ち常闇となりて、頭の内には只だ奇しく妙なる音樂の響きを聞きつ。

忽ち温なる掌の我額を摩するを覺えて、再び目を開きしに、燈は明かに小き卓の上を照し、われは我枕邊の椅子に坐し、手を我頭に加へたるものゝ、ロオザなるを認め得たり。又一人の我臥床の下に蹲まりて、もろ手もて顔を掩へるあり。ロオザの我に一匙の藥水を薦めつゝ熱は去れりと云ふ時、蹲れる人は徐かに起ちて室を出でんとす。われ。ララよ、暫し待ち給へ。われは夢におん身の死せしを見き。ロオザ。そは熱のなしゝ夢なるべし。われ。否、我夢は夢にして夢に非ず。若しこれをしも夢といはゞ、人世はやがて夢なるべし。マリアよ。われはおん身のララなるを知る。昔はおん身とペスツムに相見、カプリに相見き。今この短き生涯にありて、幸にまた相見ながら、爭でか名告りあはで止むべき。我はおん身を愛す。語り畢りて手をさし伸ばせば、マリアは跪きて我手を握り、我手背に接吻したり。

數日の後、我はマリアと柑子の花香しき出窓の前に對坐して、この可憐なる少女の清淨なる口の、その清淨なる情を語るを聞きつ。少女の語りけらく。わが幼かりし時は、唯だ日の暖きを知り、董花の香しきを知るのみなりき。或時「チンガニイ」族のおうなありて、我目の必ず開く時あるべきを告げしが、その時期はいつなるべきか、絶て知るよしあらざりき。ペスツムの古祠の下にて、おん身の唇の暖きこと、日の暖きが如くなるを覺えしタ、彼おうな夢に見えて、汝のやしなひ親なるアンジエロとともに、カプリの島なる窟に往け、アンジエロは富貴を獲べく、汝はトビアスの如く、（舊約全書を見よ）光明を獲べしと云ひぬ、醒めて後アンジエロに語れば、これも同じ夜に同じ夢を見き。アンジエロは我を伴ひて島に渡りしに、天

使はおん身に似たる聲して我名を呼び、我に藥艸を與へき。歸りて之を煮んとする時、ロオザが兄なる人我等の住める草寮に憩ひて、我目の開くべきを見窮め、我を拿破里に率て往きぬ。手術は功を奏せり。ロオザが兄なる醫師は、我を養ひて子となし、希臘にてみまかりし子の名を取りて、我をマリアと呼びぬ。ある日アンジエロは、忽ち醫師のもとに來て、われは命の久しからざるべきを知りぬ、我が貯へし金を讓らん人ララならではあらざるべし、先づこれをあづけまゐらせんとて、金あまた取出て、逗留すること數日にして眠るが如くみまかりぬ。われはさきの夜の席にて、おん身の舟人の不幸を歌ひ給ふを聞き、おん身の聲を聞き知りて、直ちにおん身の脚下に跪きぬ。アヌンチヤタが末期の詞の我に希望の光明を與へしと、おん身のつれなき旅立の我を病に臥さしめしとは、おん身自ら推し給へといひぬ。

われはマリアと贊卓の前に手を握りぬ。おほよそ市長の家にゆきかふものは、皆歡喜の聲を發しつれど、其聲の最も大いなるはポツジヨなりき。越ゆること二日にして、我等はロオザと倶に田舎の別墅に移りぬ。こはアンジエロが遺産もて買ひしものなりき。ポツジヨは一書を我別墅に寄せて、飄然としてエネチアを去りぬ。その書には、唯だ左の數句あるのみなりき。曰く、我は汝と賭して贏ちたり、されど實に贏ちしは我に非ざりきと。憐むべし、ポツジヨが意中の人は即亦我意中の人なりしなり。

フアビアニ公子とフランチエスカ夫人とは、わが好き妻を得しを喜び、かの腹黒きハツバス・ダアダアさへ皺ある面に笑を湛へて、我新婚を祝したり。わが昔の知人の僅に生き殘れるは、西班牙磴の下なるペツポのをぢのみにて、その「ボン、ジヨオルノ」（好日）の語は猶久しく行人の耳に響くなるべし。

琅玕洞

千八百三十四年三月六日の事なりき。旅人あまたカプリ島なるパガアニイが客舍の一室に集ひぬ。中にカラブリア産の一美人ありて、群客の目を駭せり。その美しき黒き瞳はこれに右手を借したる丈夫の面に注げり。是れララと我となり。吾等は夫婦たること既に三年、今エネチアに至る途上、再び此島に遊びて、昔日奇遇の蹟を問はんとするなり。室の一隅には、又一老婦のもろ手を幼女の肩に掛けたるあり。容貌魁偉なる一外人この幼女を愛する餘りに、覺束なげなる伊太利語もてその名を問ふに、幼女は遽に答ふべくもあらねば、老婦代りてアヌンチヤタと答へつ。こはララが生みし子に附けし名にて、そを外人に告げたるはロオザなり。われ進みて之と語を交へて、その※馬人なるを知りぬ。嗚呼、是れ畫工フエデリゴと彫匠トオルワルトゼンとの鄉人なり。フエデリゴは今故鄉に在り、トオルワルトゼンは猶羅馬に留れりと聞く。現に後者が技術上の命脈は斯土に在れば、その久しくこゝに居るもまた宜なるかな。

我等は群客と共に岸に下りて舟に上りぬ。舟はおの〳〵二客を艫と艫とに載せて、漕手は中央に坐せり。舟の行くこと箭の如く、ララと我との乘りたるは眞先に進みぬ。カプリ島の級狀をなせる葡萄圃と橄欖樹とは忽ち跡を沒して、我等は矗立せる岩壁の天に聳ゆるを見る。緑波は石に觸れて碎け、紅花を開ける水草を洗へり。

忽ち岩壁に一小罅隙あるを見る。その大さは舟を行るに堪へざるものゝ如し。我は覺えず聲を放ちて魔穴と呼びしに、舟人打ち微笑

みて、そは昔の名なり、三とせ前の事なりしが、獨逸の畫工二人ありて泅ぎて穴の内に入り、始てその景色の美を語りぬ、その畫工はフリイスとコオピツシユとの二人なりきと云ひぬ。

舟は石穴の口に到りぬ。舟人は※を棄てゝ、手もて水をかき、われ等は身を舟中に横へしに、ララは屏息して緊しく我手を握りつ。暫しありて、舟は大穹窿の内に入りぬ。穴は海面を抜くこと一伊尺に過ぎねど、下は百伊尺の深さにて海底に達し、その門閾の幅も亦略ぼ百伊尺ありとぞいふなる。さればその日光は積水の底より入りて、洞窟の内を照し、窟内の萬象は皆一種の碧色を帶び、艫の水を打ちて飛沫を見るごとに、紅薔薇の花瓣を散らす如くなるなれ。ララは合掌して思を凝らせり。その思ふところは必ずや我と同じく、曾て二人のこゝに會せしことを憶ひ起すに外ならざるべし。彼アンジエロの獲つる金は、むかし人の魔穴を怖れて、敢て近づくことなかりし時、海賊の匿しおきつるものなるべし。

巖穴の一點の光明は忽ち失せて、第二の舟は窟内に入り來りぬ。そのさま水底より浮び出づるが如くなりき。第三、第四の舟は相繼いで至りぬ。凡そこゝに集へる人々は、その奉ずる所の教の新舊を問はず、一人として此自然の奇觀に逢ひて、天にいます神父の功徳を稱へざるものなし。

舟人は俄に潮滿ち來と叫びて、忙はしく艪を搖かし始めつ。そは滿潮の巖穴を塞ぐを恐れてなりき。遊人の舟は相銜みて洞窟より出で、我等は前に渺茫たる大海を望み、後に琅※洞の石門の漸く細りゆくを見たり。

（明治二十五年十一月―三十四年二月）

青空文庫情報

底本：「定本限定版　現代日本文學全集　13　森鴎外集（二）」筑摩書房
　　1967（昭和42）年11月20日発行
入力：三州生桑
校正：松永正敏
2005年8月25日作成
2008年9月17日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

即興詩人
IMPROVISATOREN

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

著者　　ハンス・クリスチアン・アンデルセン　Hans Christian Andersen
URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/